

戦女神～転生せし凶腕 の魔神

暁の魔

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

いつもと同じように、学校の通学バスに乗っていたオリ主。しかしその日だけはいつもと違い、気が付いたら目の前に土下座中の女性。

チートな力を貰った彼は、異世界でなにをするのだろうか。

※にじファンから移転してきた作品です。にじファンからの人も始めましての人も、よろしくお願いします。

見事なまでにテンプレチートなので、そういったものが嫌いな方はブラウザバックしてください。

移転した際に少しだけ設定を変えた所があるので、文も少しだけ変わっています。大

きな違いではありませんので、そこは気にしないでください。

目次

| | | | |
|-------------|-----|---------------|-----|
| 作品の世界観 | 1 | 現神と厄介事 | 117 |
| 遥かなる過去編 | | 特訓……になるのか？ | 131 |
| プロローグ | 9 | 二回目の別れと出会い | 144 |
| 行き成り急展開 | 15 | 使徒と故郷、そして予想外 | |
| 古神と現神と……死神 | 27 | 156 | |
| 三神戦争での死合・前編 | 40 | 深凌の楔魔と解放戦争・初戦 | |
| 三神戦争での死合・後編 | 50 | 166 | |
| いろいろな意味で衝撃！ | 62 | 深凌の楔魔、とある一日 | 179 |
| 重い事実 | 76 | 凶腕と墮天使と輪廻神 | 192 |
| 告白と返答 | 90 | 決戦……の直前 | 205 |
| 約束と人間の反応 | 104 | 凶腕と姫神と約束と契約 | 218 |
| | | 戦力強化、むしろ増加 | 231 |
| | | 戦女神ZERO編 | |

| | |
|--------------|-----|
| ノヒアの惨状 | 243 |
| 星月が舞う夜の出来事 | 258 |
| 女神姉妹との再会 | 273 |
| 機工文明の遺産が眠る神殿 | 286 |
| 進出 | 297 |
| 魔神と魔神の激突 | 311 |
| マクルに浸る狂気 | 325 |
| 息抜きの観測 | 336 |
| 騒動前の俗事 | 346 |
| 戦女神の生誕とこれから | 359 |
| マクルの壊滅 | 370 |
| 神殺しの戦地図 | 386 |

| | |
|------------|-----|
| イソラ王国の終わり | 397 |
| 緊迫の会談 | 408 |
| 決闘。そして…… | 422 |
| 渡る為の話し合い | 433 |
| 120年を経て | 442 |
| 冥き途にて | 455 |
| 女神、初の対峙 | 466 |
| 決戦前 | 476 |
| 狭間の宮殿・起 | 486 |
| 狭間の宮殿・承 | 497 |
| 狭間の宮殿・転 | 514 |
| 狭間の宮殿・結 | 528 |
| 戦女神VERITA編 | |

作品の世界観

【デイルリフィーナ】

古代魔法語で「二つの回廊の終わり」を意味する、「戦女神」「幻燐の姫將軍」シリーズや、他の作品での世界そのものを指す。ここに出てくる“二つの回廊”とは、現神の世界と古神の世界のことである。

太古に人間が創り出した女神（機工女神）によって世界が融合し始め、後の三神戦争に勝利した現神が支配者となり、人間族や亜人間達を導いた。

【ネイーステリナ】

古代魔法語で「現神の世界」という意味。

三神戦争後に新世界（デイルリフィーナ）が創生される以前に、現神達によって支配していたとされる世界のこと。現神勢力やエルフ族からは単に「旧大陸」とも呼ばれていた。

ネイーステリナは完全に現神の意向で創生されるため、エルフの神ルリエンの勢力は森で占められるなど、はっきりと分かれていた。

【イアスーステリナ】

古代魔法語で「古神の世界」もしくは「先史文明期」という意味。

三神戦争後に新世界（デイルリフイーナ）が創生される以前に、古神達によつて支配していたとされる世界。人間族を支配していたはずの神々は既に影響力が薄れ、当初は人間族の意思が大きく反映されていた鋼鉄の土地であり、稀に遺物が発見されることから「先史文明期」という言葉が広く知られている

【先史文明期・女神の微笑】

そもそも、神々の最終戦争である三神戦争を引き起こした原因は人間族にあった。

「戦女神」シリーズ等に登場する人間族は、魔術と神への信仰に頼る中世的な社会構造をしているが、先史文明期までは、天空高くまで船が浮かぶような技術発達があつた時代だと言われている。今では現神を信仰している人間族にとつては既に御伽話としてしか伝わっていない内容となっているが、信仰を忘れ「奇跡」と言う名の機工女神を崇めていた時代が存在した。

【現神】

元々はネイーステリナを支配していた神々の通称。

エルフヤトロウルなどの亜人間と呼ばれる者を創り出した神々。信仰によつて力を得るため、信仰が少なければ必然的に劣つてゆく。三神戦争に勝利して人間族を支配し

ているので、今では人間族にも信仰されている。

舞台である「ラウルバーシユ大陸」には地方神でもない限り直接関わることができないなど、一部制限がある模様。「神骨の大陸」と言われる大陸にいる……らしい。

主に「神」というのは、現神のことを指している。

【古神】

元々はイアスステリナを支配していた神々の通称。

人間族が信仰していた神々のことで、人間や天使、悪魔を創ったとされる、天使曰く「父」もこれに分類される。他にはオリンポスやギリシャの神も該当する。

かつて人間族が神々への信仰を忘れた為に、現神と同じく信仰によつて力を得る神々は弱体化しており、更には戦争中に信仰対象を古神から現神へと変えたため、力が出せずに敗北。殺されたり、封印されたりと、散々な目に合っている。

敗戦したのは人間族が裏切ったからだと考える者も多く、事柄から逃れた古神や、その子孫の多くは人間族を憎んでいる。

現在では、一般的には古神は邪神だと伝えられている。それでもなお交流を取ろうとする者が偶にいますが、「邪神の使い」「異端者」認定され、追われたり殺されたりする。

【機工女神】

人間族が創り出した、「豊穰」を司る機械の女神の通称。先史文明期に存在した。

どんな理由があろうとも、生き物を殺すことができない。どんな機械であろうと融合でき、どんな物であつても、「物」同士で融合させることができるという能力を持つている。この能力により、イアスⅡステリナは当時自然が少なく、ネイⅡステリナという自然が溢れる世界を見つけた女神は、ネイⅡステリナとイアスⅡステリナを融合させ、戦争が起きてしまった。

機工女神に似たもので、「機工戦姫」と言われる鎧がある。

【三神戦争】

人間と神、また本来は相容れない二つの世界が融合したことによって起きた神々の戦争のこと。人間を支配する世界の古神と、エルフや獣人達を護ってきた世界の現神、そして世界をよりよい方向へ導こうとした機工女神達による三つ巴の戦いとなった。最終的に勝利を収めたのは現神勢力。この戦争後に、現神が人間族を支配する時代に移行する。

【ラウルバーシユ大陸】

二つの回廊の終わり（デイルリファイナ）にて形成された二番目に大きな大陸。光に属する現神の影響が最も大きい土地で、三神戦争に敗れた人間族の末裔が現神らの保護を受けて移り住んでいる。

未知の存在である創造神（「父」）に「運命を切り開くことが出来る力」を、唯一与え

られているとされる種族だけあって、現在の大陸においても人間族は最も繁栄している。

人間族の成長ぶりに警戒する現神勢力があるものの、人間族の信仰力は他の種族を凌ぎ、現神の活動に不可欠な存在であるため、黙認することもやむを得ないというのが現状。

それでも人間族が占有する領土は全体の15%に過ぎない。

【神骨の大陸】

二つの回廊の終わり（デイル||リフイーナ）にて形成された最大の大陸といわれる。

三神戦争に敗北した古神や人間族が立ち入ることが許されない土地となっている。

存在のほとんどが謎に包まれており、神大陸や神界などと呼ばれている。

【神殺し】

「戦女神」シリーズの主人公、セリカ・シリフィルの通称。

アストライアという古神に属する女神の身体を持っている。これは神殺しの結果としてなのだが、古神側からは同胞を殺した人物として憎むべき存在であり、現神側からは邪神の肉体を得た呪われた者として敵視されるので、常に両方の勢力から狙われる立場。

【神格・神格者・神格位】

人間、もしくははその類の存在が永久的な命と超常能力を手にした者達を指す言葉で、神に近い存在となった者達のことを意味する。

長きに渡る経験を得て超人的な能力を有することで神格を手に入れることもあるのだが、一般には神々より授かった超常能力の代償として、その神の覇権における先駆者として国家を創造、もしくは信徒を増やす使命を背負わされる。

セリカ・シリフィルも神格者だが、「神殺し」によつて神格位を手に入れるのは極めて特殊な例と言える。

【使徒】

神、もしくは同等の力を有する神格者が能力の一部を分け与え、その目的を補佐させる者。人間が選ばれた場合は恒久的な寿命と超常能力を身に付けることが可能になる。ただし常に神、もしくはは神格者とは主従関係にあたる為に、主が倒れると使徒達にも精神的な強い衝撃を受ける事になり、場合によつては廃人になる恐れもある。

また、神や神格者と関係した者の事が使徒と呼ばれるのに対して、魔術によつて創造・支配された者は使い魔と呼び分ける以外には、両者は基本的に同等の存在と見なせる。

【魔神】

魔族に属する、人間族にとつての神格者。

神格者と同等の力を持つとされており、その強さはピンキリ。上位の魔族とそれほど

変わらない者がいれば、そんな魔神を部下にするほどに強い魔神もいるし、大陸中を移動する迷惑な「はぐれ魔神」などもいる。魔王となつて領地を持つ者も。

「戦女神」シリーズではポンポン出てきて重要度が無いに等しいが、種族としては最強の一角。他の作品では滅多に出てこないが、出てきた場合は他のボスを軽く凌駕する強さで登場する。

「ソロモン72柱」の称を持つ者が、有名どころにいる。

【ソロモン72柱・ソロモンの魔神】

かつてたった一人で72もの魔神を支配したとされる人間に従っていた魔神達の通称。

どいつもこいつも癖があり、強弱はあるが、全員が上位の魔神で古神に分類される。

かつてソロモンに従っていたことに、誇りを持っている者が多い。

「はぐれ魔神」となった者、迷宮の奥に潜んでいる者、国の領主になった者、現神から黙認された仕事を務める者など、今では個々で動いている。

【天使】

かつて創造神に創られ、神々（光に属する古神）を絶対の存在として従っていた者達。

中には要らぬ欲望を持ち、墮天して悪魔になる者も多数いたが、それは創造神が天使を創る際に、「光を照らす為の闇の存在」として、墮ちる可能性を入れたため。

魔神と同じく強さはピンキリで、九つの位階に分けられる。

下位天使である「天使」「大天使」「権天使」。

中位天使である「能天使」「力天使」「主天使」。

上位天使である「座天使」「智天使」「熾天使」の九つになる。

そしてこれは作者の完全な独自解釈だが、

「下位天使の強さ」|| 下級悪魔から中級悪魔「中位天使の強さ」|| 上級悪魔から魔神級

「上位天使の強さ」|| ソロモンの魔神などの上位魔神

だと、勝手に思っている。

遙かなる過去編

プロローグ

ドカツ！キキー！！ドガン！！

はい、俺死にました。

「つまり、そちらの手違いで俺は死んだと？」

「本つつつ当に申し訳ございません！！」

俺の名前は玲也。桐生・玲也きりゆう・れいやだ。

今俺の前には死神（自称）がいる。さつきからずっと「ごめんなさい」と繰り返して

いて、正直気持ち悪い。

なんでも寿命の管理をしていたら、突然くしゃみをしてしまったらしい。そのせいで俺の【命の蠟燭】とかいう物の火が消え、高校の通学バスが事故つたらしい。何故か他の人は全員無事らしく、死んだのは俺一人なのだとか。

……なんかムカツク。

「まあ、謝罪はさつきから耳にタコができるくらい聞いたから良いとして。俺はどうすれば？このまま成仏すればいいの？」

『いいえー本来なら死なない筈の年齢で死んでしまったので、上位の神の命にて特別処置として異世界へ転生してもらうことが先ほど決定致しました』

いつそんなこと決めたんだよ、本人関係なく話進めんなよオイ。というより異世界つてどこだ？

「死神さん、異世界つてどこ？」

『はい！ここは……えくと……あ、戦女神の世界ですね。あと私の名前はシエーラです』

「なんで戦m『最近上位の神がそのゲームにハマっているからです』……ソウデスカ」

ジーザス!! 神は死んだ!! ……いや、死んだのは俺だったな。というかハマっている？ 最近の神様の趣味はエロゲーなのか？ それより何だよその死亡フラグ満載の

世界。

「なあ、戦女神つて現神やら古神とかいるけどさ、そこんところどうなの？ 神関係とかで問題は起きないのか？」

『実際にいたらそれこそ大問題ですけど、あんなのは所詮ゲームのキャラクターですよ、ゲームの。だから問題ありません。……古神に該当する方は実際に多々おりますけど、全然違いますし』

それならいいや。選択された世界が最悪だけど。

つーかやつぱいるのかよ、古神。

『それと一つだけ言っておきますが、そこは完全な戦女神の世界ではありません』
「ん？ どういうことだ？」

『並行世界。即ちパラレルワールドです。簡単に言えば、【戦女神】という世界に限りなく近い世界というわけです』

「限りなく近いということは、原作とは違うこともあるってこと？」

俺のこの言葉に、シエーラは大きく頷く。

『そうです。大きな違いがあるとは思えませんが、少しの差異はあるはずですよ』
なるほど、まあなんとかなるだろう。

『では話を戻して、と。とりあえず謝罪変わりに特典として、身体能力はセリカつて人の10倍くらいにしますね』

「……君、馬鹿だろ？　馬鹿なんだから馬鹿なんですな三段活用！」

神殺しならぬ女殺しフラクメイカを持つ上条さんこそが神だ。B Y作者

ん？　なんか変な電波が……。まあそれは置いとこう。

やったことがあるから分かるが、あいつの10倍なんてしたら強いどころじゃない。あの世界の神を敵に回しても問題なく立ち回れるだろう。

『それと魔力は……ルナックリアって子の10倍位でいいか。それに魔術と物理攻撃の抵抗力をキャラクター中最高つと。あ、やつば最後の以外やめよつと。全能力を、それぞれメイド天使の10倍。よし、これで勝つる』

「……」

「よし」じゃねえよ。それに勝つのはお前じゃなくて俺だよ。

それにしても10倍だと？　奴らは主人公より潜在能力が高いんだぞ？　それこそ一人で魔神を一撃で屠れる程に。それを10倍とは。

『他に五個、希望の能力を付けてあげます』

「五個……」

身体能力と魔力は勝手に与えられたので、後は俺の固有能力を決めるだけらしい。

転生系オリ主の二次創作だと、大抵は漫画なりゲームなりの別作品の能力が良く選ばれるな。だが他作品の能力を選ぶより、オリジナル能力を考えた方がいいか？

「付加できない能力とかある？」

『へ？ いいえ、特にありませんよ？ ほとんどの願いが可能です』

「そう」

おお、これはラッキーだ。あんな世界ならそれ相応の能力が必要だからな。

「二つ目は戦闘に関する技術、だな」

まずはこれだろう。これがなければ、早い段階でまたしてもここに来ることになるかもしれないからな。それは嫌だ。

「二つ目は戦女神に出てくる全部の魔術が使えるようになること。次に、魔神として生まれること」

人間として生まれ、何かある度に神に祈りをささげるのは面倒くさい。それに俺は無神論者だし、大体の日本人はそうだろう。……目の前に神がいるけど。

「あとは…：そうだな。それぞれが黒と白の、第3と第4の腕をくれ。……これは、一つの願いの枠で収まるのか？」

「ええ、それなら大丈夫です。それであれば問題ありません」

左手はインド辺りで、『悪魔の手』と呼ばれている。だから左側は黒い手で、右手は『天使の手』だから、右側には白色の異なる腕を頼んだ。腕が4つあったら便利じゃね？

まあ色に関しては、ただ単に二つとも俺の好きな色だからってのもあるけどね。

「それはよかった。じゃあ最後に……空間を操る能力だ」

『はあい、それでちょうど五つですね。ちよつと失礼します』

シエーラはそう言つて、俺の頭に手を置いてくる。そこから光が灯り、少しずつ消えて行く。

え？　なんか簡単に言っているけど、マジいいのかこれ？　強すぎないか？　特に最後。

『これでいいです。それでは第二の人生、精々死なない程度に頑張ってください。時代と場所はランダムです。……ついでに容姿も私好みにしました（ボソ）』

——パチツ——

「は？　おい、ちよつとまて……」

シエーラが指を鳴らした途端に俺の意識は薄れて行き、完全に消え去った。

あいつ、最後になんて言った？

—行き成り急展開—

俺がこの世界で誕生してから、約500年もの時間が経過した。

いきなり飛ばしすぎだけど、その間ずっと同じことしかやっていなかったから、おもしろくもなんともない。

何をしていたのかって？ 修行です。まあ修行といっても、群がってくる雑魚共と戦うだけなんだけど。いくらチートがあるからといって、戦ってみたら経験が足りないせいで死にました。なんて結末にはなりたくない。

いや、それはそれでいいかもしれない。あの死神、俺をとんでもない所に送りやがって。今度会ったら文句言っつてやる。でもそのためには死ななくちゃいけないんだよなあ。

「でも、いくらなんでも神の墓場はねーだろ」

そう。俺の意識が覚醒して周りを見渡せば、一面の荒野だった。最初の10年くらいは特に考えなく修行しながら彷徨っていたんだが、ふと気が付いたんだ。「紫色の地面

と空、ここって神の墓場じゃね？」って。いやはや、気が付くのが遅すぎるだろうと、あの日は非常に落ち込んだ。

シエーラはどうやらちゃんと俺を魔神にしてくれたらしく、戦闘能力も半端じゃなかった。だけど神の墓場であれば、神の力を軽減させられてもつと弱いはずなんだ。他の魔神や神格者なら。

しかし俺は全く弱ってない。だから無意識に違うと思いつ込んでいたのだろう。でも VERITA に出てきたザハーニウの言うことが本当であれば、神の墓場で生まれた者はその影響を受けないらしい。俺はまさにそれだ。

そんなこんなで、俺はずつと放浪している。

でも暇だ。話せる相手はいねーし、人影を見つけたと思つたら死体だし、生きているのは魔獣だけだし、それも襲ってくるしき。とはいっても即返り討ちだけどな。

そうそう。この前川の近くを通つたんだが、そこに自分の姿が映つたときは驚いた。何せ、顔が前世(?)と違つていたからだ。今の俺は、「姫狩りダンジョンマイスター」や【峰深き瀬にたゆたう唄】に登場する、『漂着した異界の姫』という美女だった。

知らない人のために補足すると、腰まである長い紫色の髪の毛が特徴な長身の女性だ。俺の目は緑色だが、原作で何色だったのかは覚えてない。

……別に考えなくてもいいか。だけどなんで女顔なんだよ。

話が変わるが、俺はとりあえずここから出たい。けど、そのためには「戦女神ZER0」にて出てくる狭間の宮殿から、魔神アムドシアスとゾノ・ジが落ちてくる瞬間を狙うしかない。もしくは、VERTAでセリカとルナークリアが転移させられた際に協力する。のどちらかだ。

ただ、前者はそれが何時になるかわからないから却下。あの死神が場所どころか時代すらもランダムにしたせいで、今がどの時期なのか見当がつかない。万が一原作が終わっていたらどうすればいいんだっつーの。

しかも後者の場合は、その二人が俺を信用してくれるかが問題だ。彼らは神殺しとマーズテリア神官。魔神の俺を信用するなど、よっぽどのがない限りないだろう。だから了承がたい。

となればどうするか……。いつそのこと、どこにでも転移ができるような魔術でもつかえれば良いのになあ。

……………ん？

「あああああああああ!!! 俺の馬鹿野郎オオオオオオ!!!」

空間を操る能力貰ってんじやんかよ、俺!

よし、早速使うぞ。さっさとこの地からおさらばするんだ。

「……………」

前方に闇のような黒い穴をイメージして具現化させる。すると、アニメなどで見たことのあるような「闇」が出現した。なぜ闇をイメージしたのかというと、想像しやすいからだ。

結構簡単にできてよかつたと思う。これならば、これから気楽に転移ができる。特に愛着があるわけじゃないが、ここは一応500年間も過ごした故郷だ。たまには帰ってくるのもいいだろう。

「行ってきます」

後ろを向いてそう言い、目の前の黒い穴へ入る。

行き先はラウルバーシユ大陸。「戦女神」や、「幻燐の姫將軍」の舞台だ。

ラウルバーシユ大陸ということ以外は頭にいれず、俺は闇から外に出た。すると

「フンツ！」

という掛け声と共に、二つの大きな鎌が上から襲ってきた。俺は咄嗟に、前からよく使っていた二つの刀を使い、それを受け止めた。神の墓場でも不意打ちは当たり前だったので、反射神経が敏感になっていたのだ。やはり修行しておいてよかつたと思う。つか、いきなりバトルですか？ 展開速すぎね？

二つの大きな剣を、X字型にしてそのまま振る。結果それは交差斬りとなり、鎌をはじくことになった。それと同時に周囲から複数の、それも敵意や殺意を持った魔の気

配。うわ、めんど。

俺は焦らずに再び攻撃。

「はあー！」

自分の両足を軸にして、独楽のように回転して敵を斬る。これによって、周囲に満ちていた気配は弱まった。

話がしたいので、殺すのはよくないと思って手加減したから一体とて死んでいない。次いで来るのは無数の魔力の塊と、先ほどの鎌の斬撃。それを見た俺は、目前に魔力を結集させた。

「捻じ曲がれー！」

その言葉で、一瞬にして俺の目の前の空間が曲がる。空間自体が歪曲し、無数の魔弾と斬撃、その他諸々の攻撃を防ぐ。

攻撃を防ぎながら雷の速度、すなわち光速で動いて魔弾を撃ってくる人物の後ろに回り込み、身の丈程もある刀の刃を首に付きつけた。

「……はい、これで終わり。攻撃を止めろ」

後ろから声が聞こえて驚いたらしく、その人物は固まった。止まったではなく、固まった。他の奴らも同じだ。

首に剣を付きつけられている人物以外は、俺を見て忌々しげに睨んできた。つていう

か少し前にいるあの骸骨、あれ、ネルガルじゃね？ それじゃあ、まさかこいつは……
「二つ聞きたいことがある。……お前の名は何だ？」

S i d e .
???

戦争の準備をしていたら、突然に魔力の動きを感じた。霧散していた魔力が、一か所に集まっていく。それも、今まで私が感じたことがないほどの膨大な魔力が。

一か所に集まった魔力は奈落を思わせるほどの黒い球体となり、佇んだ。この場にいる魔族や魔獣、冥界監察軍・軍団長のネルガル、そして我。つまり全員がそこに注目していた。

その深淵から出てきたのは、頭から足までの全てを黒い布で包んだ人型のナニカだった。その雰囲気、我は思わず恐怖にのまれそうになった。

だがそれも一瞬。姿勢を整えて、攻撃される前にしてしまおうと思った。指示を出そうとするが、そこはさすが百戦錬磨のネルガル。既に自慢の双鎌、キル・ドレパノンを振りかざしていた。

決まった。これは、この場にいるもの全員の総意だった。ネルガルは我ら古神にも匹敵する力の持ち主。現れると同時に繰り出される不意打ちは、受け止めることができ

も完全に防ぐことは不可能だ。それこそ現神の第一級神並みの力量がなければ。

そして再び走る恐怖。

奴は見事に、かつて刀と呼ばれていた二つの物体……双剣で受け止めていた。しかもそれだけではなく、ネルガルの武器をはじいた。さらに、ネルガルに後れを取るまいと進撃して行つた我の部下すらも、一撃で伸ばしてしまった。

突然現れた侵入者。こいつは間違ひなく第一級神と同等、もしくはそれ以上の力の持ち主だ。本気で戦つても勝てるかどうかは定かではない。だが、勝たなくてはならない。なぜなら我は、魔界王子なのだから。

勇気を奮い起こし、出せる全ての力を使って魔弾を放つ。残っている配下の者共も一斉に攻撃していく。

当たる。そうは思つても、これで勝てるとは考えなかつた。先ほどはそう油断していたからあのような事態になつたのだ。もう二度はしまい。

だが、それすらも甘かつた。彼奴は我々の決死の攻撃を、全て防いでいたのだ。

駄目なのかと思つたが、諦めるという言葉はありえない。それは皆同じらしく、心なしか攻撃の威力が上がっている。そして……

「はい、これで終わり。攻撃を止めろ」

という声が後ろから聞こえ、首に刃が構えられた。

気配を探れば、そいつは先ほどまで目の前にいたやつと同じだった。速すぎる、いつの間に後ろへ移った？

絶望感が自分を襲い、ふと、『魔王に戦いを挑み負けていった人間は、このような心境だったのかもしれない』と思った。もしそうなのだとしたら、正直同情する。これは……酷い。

こやつは現神の刺客か？ いやしかしそれにしても闇の波動が大きすぎるし多すぎる。王子である我や、あの『真なる龍』、もしくは『強欲』と謳われた墮天使以上だとなれば、暗黒神か機工女神か？

そう考えていたが、

「一つ聞きたいことがある。……お前の名は何だ？」

と名を聞かれた。それは、ほぼ確信している声色だった。特に偽名を使う理由もないので、正直に答えるとする。

「我が名はベルゼブブだ」

名乗った途端、刃が花のように散った。即座に後ろを向けば、何も持っていない黒衣を着た者がいる。

「そうか、やはり魔界の王子か。これは失礼をした」

そう言ったときり何もしてこない。なんだ、我を滅ぼすために来たのではないのか？こ

やつは一体どんな目的でここに来たのだ？

「……………一つ聞きたい。侵入者よ、貴様は現神の暗黒神、もしくは機工女神か？」

S i d e ・ 玲也

「一つ聞きたい。侵入者よ、貴様は現神の暗黒神、もしくは機工女神か？」

暗黒神か機工女神って……………俺、そんなに高位な生物じゃないし、それに女じゃないし。

「違う、俺はただの魔神だ」

「魔神だ?!」

俺の言葉にネルガルが過剰に反応する。そういえばこいつも魔神だったつけ？ たしか原作の設定では、古神ベルゼブブにベルゼビュート宮殿を任されていたんだよな？ 「ただの魔神がそこまで強いわけがないだろう。いつごろ生を受けたのだ？」

疑惑の目でベルゼブブが聞いてくる。まあ、あれだけ圧倒したらそうなるわな。何せ古神と、古神と同等の力をもつ古き魔神。そしてそいつらの配下を、俺はたった一人で打ち負かした。これは現神でも難しいだろうな。

「俺は生まれてから500年しか経っていないぞ？」

「500?! そんな若造に我らは負けたのか?!」

驚愕の面々。嘆きや己に対する怒りなどの声が聞こえてくる。でも500で若いって……俺は元人間だから三桁は長寿すぎるんだが、やはり感じ方は違うんだな。

「ところで、ここはどこなんだ？ 考えなく転移したから、場所がわからないんだ」

「は？ 貴様、ベルゼブブ公がここにいと知って来たのではないのか？」

「いや。そもそも俺は神の墓場出身者だから、何が起きているかなんて知らない。地名すらわからないから、適当に転移したんだ」

「な!」

再び驚愕する一同。なんかさつきからそれしか見えない気がする。

「神の墓場だと？ そのような場所で魔神が生まれるとは……いや、ならばこれほどの力を持っているのにも関わらず、貴様のことを今まで誰も知らなかったこと、そしてこの場所を知らぬということにも納得がいく。あの地に落ちて帰って来た者は皆無だからな」

流星はベルゼブブ。王子なだけあって、頭の回転が速い。どうやら周りも驚いてはい

るが、一応納得してくれたみたいだ。地名がわからないってのは嘘だけだな。

「そういうことだ。それであんたは七つの大罪が一柱、暴食のベルゼブブか？」

「そうだ。しかし随分と博識なのだな、何故そのことを知っている？」

「この前、はぐれ魔神と化しているアスタロトとかいう魔神に会ってな。襲ってきたから返り討ちにしたんだ。その時に聞いた」

いやほんと、あれはマジでビビった。原作のゲームでもそうだけどき、何で神の墓場にはぐれ魔神がでるんだらうね？ でも俺的にはラテンニールに会いたかったよ。

ま、一応使い魔にしたけど。だってあいつソロモン72柱だし。

「そうか……あやつめ、姿を見せぬと思つたら神の墓場なんぞにおつたのか」

なんかブツクサ言ってるけど、聞きたいことがあるから聞いてみるか。

「なあ、それで俺はどうすればいいんだ？ それに侵入してしまったことは謝るが、ここがどこなのか教えてもらえるとありがたい」

「ああ、そうであつたな。まずこの地についてだが、ここは我が宮殿だ。我以外の者はベルゼビュート宮殿と呼称している。大陸の内海上に浮上している」

うん、ここは予想通り。

「そして貴様についてだが……我と同盟を組まぬか？」

おや、これは予想以上だ。見逃してくれればそれでもいいと思つていたんだがな。

「同盟の内容は、『住む場所を与える代わりに力を貸し、互いに助け合う』というものだ。最近是人間の信仰がなくなってきたな、現神の勢力が増大していてこちらは劣勢しているのだ。だから戦力はあればあるほど欲しい。ネルガル、お前もそれでいいな？」

「もちろんでございませす、ベルゼブブ公」

頭を垂れるネルガル。骸骨が頭を下げるって結構面白いな。

「単刀直入に言えば、俺の力をお前に使わせろ。住む場所は提供してやるってことだよな？ それなら別にいいよ、こちらとしても暇つぶしになるしな」

「そうかそうか。ならば貴様の……いや、御主の名は何という？ 御主の名だけ知らぬというのはいさか不公平だし、同盟者の名くらい知っておきたい」

そういうえば名乗ってなかつたな。でも玲也は前の世界の名前だから使いたくないな

……

だったら……

「ゼアノス。それが俺の名前だ」

—古神と現神と……死神—

ベルゼブブと同盟を結んでから、さらに100年の歳月が経った。この期間、とてつもなく面倒だった。というのも、ベルゼブブが七つの大罪仲間であるルシファー、レヴィアタン、サタン、ベルフェゴール、そしてアスモデウスに俺を紹介したのが始まりだった。

みんなバトルジャンキーだったらしく、それからというもののルシファーと模擬戦して、レヴィアタンと模擬戦して、サタンと模擬戦して、ベルフェゴールと模擬戦して、ベルゼブブと模擬戦して、さらにアスモデウスとも模擬戦をしていた。

……あれ、おかしいな。模擬戦しかしてなくね？ まあ全部勝ったからいいけど。「ゼアノス様、大丈夫ですか？ ……凄いですね、ルシファー様に勝つだけでなく、他の魔王様すら倒してしまうなんて」

「そうですね。古神の中でも、特に強大な魔王様であるこの方々と休みなく連続で、それも一対一で戦って生き残るなど、現神といえども不可能でしょう。たとえそれが黄の太

陽神、アークリオンだとしても」

アークリオンとは、光側に属している神々の王。つまり最も権威のある主神だ。

「つまりそれは、ゼアノス様がアークリオンよりも強いということを示しているわけだな、パイモン？」

「ええ。そういうことになりますね、ラーシエナさん」

気が付いたのであろうか？ 今俺のことを話しているのは、将来ブレアードに招喚され、姫神フェミリンスと共に封印されてしまう深凌の楔魔、魔神ラーシエナと魔神パイモンである。

ルシファーが来た時に、忠実な部下だと紹介してくれたのが始まりだ。

様を付けて俺を呼んでいるのは、彼女らの目の前で、主である魔王ルシファーを倒したら、尊敬の目で見られたためである。

「大丈夫だ。ありがとな、ラーシエナにパイモン。お前らも、しっかりとルシファーを覚えてやってくれよ？」

「はい、もちろんです。しかし我々ごときが、あの方の支えになれるでしょうか？」

「なれるさ、お前らにはそれほどの器がある。そうでなければ、ルシファーがお前らをわざわざ連れてくるわけがないだろ？」

そう言って、ラーシエナの頭を撫でる。ラーシエナの身長は、成人と呼ぶにはまだ低

く、子供と呼ぶには大きいくらいだった。

魔神にも子供の時代つてあるんだな、と思った瞬間でもある。

それとは別に、ラーシエナやパイモンはとてつもない年齢であることもわかった。何セルシファアと共に墮天したというのだから、軽く千年は超えているのではないだろうか。千年は生きているのに子供つて、なんだろうね？ 怖いから詳しく聞く気はないが。

「あ、頭を撫でないでください!!」

「ん？ 嫌だったか？」

なんか拒否られたので撫でるのをやめて、近くでへばっている七柱の古神のもとへ行くことにした。

「え、あ………はあ」

「……後悔するのでしたら、言わなければよかったのでは？」

「しようがないだろう。恥ずかしかったのだ」

なんか原作よりもあいつらの仲がいい気がするけど、何かあったのか？ ラーシエナが落ち込んでるところを、パイモンが呆れながら慰めているといった感じだが。……ま、いつか。

「大丈夫か？ 七つの大罪共」

「……誰がバカだ、誰が」

「お前らだよ、戦時中なのに俺に挑みに来てるお前ら」

そう。今現在は古神と現神、そして機工女神の間では戦争が起きている。

——大昔より機械などを与えて人間を支配してきた古神——

——魔法を教えることを条件に信仰を移させようとする現神——

——人類がより良い生活を送るために造られた機工女神——

この三種の神が、覇権を巡って戦争をしているのだ。これは恐らく、後に三神戦争と呼ばれるものだろう。そんな非常時に、古神の中でもトップの実力を持つこいつらが戦場になくていいのか？

「なに、問題はない。今は我々の精鋭が攻勢に出ている。余程のことがない限り、我らに負けない」

「だが最近ほ、何故だか古神の力が弱まってきているんだろ？ お前らを含めて」

「そうなのだ、最近ほ我も少しずつ弱くなってきておる。……どうだ凶腕きょうわんのゼアノスよ、今晚こそ我とすごさぬか？ お主の精気を貰えれば、我も大分回復するのだが」

「お前を抱く気はもうないよ、アスモデウス。やるんだつたらお前の部下とでもやっていろ」

前に一度、一度だけアスモデウスと夜を過ごしたことがあった。紫色の長い髪と青い

瞳が似合うとてつもない美人で、これほど美しい女性は見ることがないくらいであった。そして、つい誘いに乗ってしまったのだ。

だがもう二度とすることはないだろう。こいつは色欲を司る魔王だ。最強のステータスを持つ俺でも、そちらはあまり関係なかったらしい。剣や魔術での戦闘では圧勝だが、夜の戦闘は引き分けで、翌日に精力が足りなくなるのだ。睡魔族の最上位種といえるのかもしれない。

他の魔王から言わせれば、引き分けられるだけでも規格外らしいが。

それ以降毎日誘いを受けているが、一回も了承したことはない。俺は負けず嫌いなので、一回乗ってしまえばまた前回と同じになる。それは嫌だ。精力がないのは、結構つらいものがある。

ちなみに凶腕というのは俺の二つ名で、いつの間にかそう呼ばれていた。

……厨二か？

「何を言っておるか。あ奴らでは我が満足せぬ。というよりもお主以外では皆すぐに死んでしまうだろうが」

「ならばお前が我慢しろ」

「ねえねえ、なら私としない？」

俺らの会話に乗り込んできたのは、アスモデウスと同じく七つの大罪が一柱の魔王。

嫉妬を司る女魔神、レヴィアタンだ。

彼女もまた美しく、肩まである青い髪と黄色い目をした美少女だ。断じて美女ではない。美少女、もしくは美幼女だ。見た目が精々小学生程度の大きさしかない。それなのに数千年、もしくは万年は生きているというのだから恐ろしい（見た目的な意味で）。

「んー？ 何か失礼なこと考えなかつた？」

「考えてない。それにお前とはやる気にすらならん」

「あー！ そんなに酷いこと言うなー！」

精神的にも見た目通りなところがまたメンドクサイ。とはいっても、これでも魔王だ。それ相応の実力はある。それこそ、そこらの魔神では比べものにならないほどに。

……それにしても

「はあ、これでもし現神勢力が攻めて来たら、対抗できるのって俺しかいなくないか？」
七柱のバカは、喋ることはできるが戦いはできない状態。彼らの配下はどこかに配置されているために此処にはいない。ラーシエナとパイモンも訓練していたために疲れて戦えない。

「そうだろうな、だが大丈夫であろう。確かに今は我ら全員が戦えぬが、このようなタイミングで来るなんてことは……」
「ゼアノス殿！ 現神の軍勢が攻めてきましたぞ！」……
「そうやってきたのはネルガル。最初は呼び捨てにされていたのだが、10年くらい

経ってから敬われるようになった。それからは殿と付けて呼ばれている。

「……………」

「で、俺に出撃しろと?」

無言でこちらを見てくる古神×7に、呆れた声で言う俺。『問題ない』と言われたと同時に攻めてきたとなれば、呆れても文句は言われないうらう。

……皆同時に頷くな、重なって気持ち悪い。

「まあいい、他ならぬお前らの頼みだ。やってやる。ネルガル、ここの守衛はまかせた」
「承りました」

恭しく頭を下げるネルガルを尻目に、俺は外に出ようとする。そこへ、この世界で初めてというべき友人である古神が、俺を呼んだ。

「ゼアノス」

「なんだ?」

「……………絶対には勝て!」

七柱全員がハモって言った。かなり驚いたが、顔に出さないようにして言葉を返す。

「俺が負けるかよ」



ベルゼビュート宮殿から外に出てみれば、そこは現神の配下、そして現神であろう強大な存在がいた。その姿は、人型の上半身と猛禽類の下半身と翼を持つ男だ。

「……俺は魔神ゼアノス。古神や他の魔神からは凶腕と呼ばれている。お前は？」

「我は狩人の神マーズテリア！ 等級は持ち得ていない！」

自己紹介をすると、律儀にも返してきた。それにしても、マーズテリアって第一級神だった気がするんだが……気のせいかな？

「そうか、ではマーズテリア。どうせお前はここを落とすに來たんだろ？ それならまず俺を倒してからにしろ」

「もちろんそのつもりだ。行くぞ！」

掛け声と共に剣を振り下ろしてくる。とりあえず、いつも使っている二つの刀で応戦。

豪傑のような見た目に反して、ヒット&アウェイの戦法で攻撃してくる。斬ろうとこちらから近づけば、光の魔術、それも神罰クラスのをぶっ放してくる。等級を得ていないとか言っていたが、威力や戦術は二級神以上だ。全力の魔王と同等かそれ以上の力を持っている。

それに加えて神格者やマーズテリアの部下、天使や信徒が遠距離から地味に攻撃して

くるためにやりづらい。でもまあ。

「七つの大罪全員を一度に相手にしたのと比べれば、問題ないっ!!」

常時普通の左腕に巻きつけることで隠している第三の腕。それを突如出現させ、剣を振り下ろすと同時にマーズテリアが避けた方へ突き出す!

「グッ!」

見事にそれは命中。マーズテリアの腹に風穴を開けた。

それをくらった本人（本神?）はもちろん、彼が連れてきた者達も、突然のことに驚愕している。神格者だと思える人物が飛んで来ようとしたが、俺が一睨みすれば殺気に圧されて下がっていった。

「……それが、凶腕と呼ばれし所以か……」
ゆえん

「そういうことだ。この勝負は俺の勝ちだな、マーズテリア」

「ふふ、それはどうだろうな?」

「あん? 何を言って……」

俺の言葉はそこで途切れる。はるか後方で非常に大きい爆発音がしたためだ。振り向いて爆発した場所を見る。そこは……

「何故……ベルゼビュート宮殿が……?」

ベルゼビュート宮殿だった。

俺が100年ほど過ごした、『家』とも言える場所。バカだったが一緒にいて楽しいと思えた『家族』がいる場所。

呆けていると、宮殿から五つの強大な力が出てきた。最初はルシファア達かと思つたが、感じる威圧は光の現神のもの。特に一番前にいる厳格な老人、それが最も強い波動を発していた。

「マ、マーズテリア!？」

人型の上半身と狼や熊の四肢に猛禽類の翼を持つ男の現神が、竜巻のような雲を纏つて突っ込んでくる。その手には巨大な朱い槍があり、邪魔をするなら突き刺そうとしている。

それをヒョイと避け、1+5で合計六柱となった現神と対峙する。

一柱目は黄の太陽神と言われ、主神ともされるアークリオン。

二柱目は大地の女神にしてアークリオンの妻、アーフア・ネイ。

三柱目はアークリオンの息子にして赤の太陽神、アークパリス。

四柱目はアークリオンの娘で青の太陽女神、パルシ・ネイ。

五柱目は嵐の神とされるバリハルト。

最後に、先ほどまで戦っていたマーズテリア。

これで合っているだろう。むしろそれ以外の神ならば、これほどの威圧感は出せない。

い。何しろマーズテリア以外が全員一級神だ。間違えるわけがない。

「大丈夫かマーズテリア!？」

「一応は……」

「まさか、魔王以外に貴男に勝てる魔神がいるなんて……はい、傷は治したわ。完治は出来なかったから、後でイーリユンに再度治してもらいなさい」

「わかりました。ありがとうございます、アーファ・ネイ様」

バリハルトがマーズテリアの心配をし、アーファ・ネイが簡単な治療をしている間、俺は他の現神を見ていた。向こうも向こうで思うことがあつたらしく、ジツとこちらを窺っている。

と、そこへマーズテリアが話しかけていった。

「皆様、お怪我はございませんか？ それと、成果の程は？」

「流石に魔王だ、無傷とはいかぬかった。二体ほど墮天使に逃げられてしまったが、七柱の魔王と古神並みの力を持つ魔神を滅することには成功した」

墮天使というのは、恐らくラーシエナとパイモンのことだろう。よかった、どうやら逃げることに成功したらしい。いや、案外ルシファアが無理矢理逃がしたのかもな。

でも、ネルガルがやられたというのは意外だった。あいつは原作でも出てきたはずなのだが……ヤバいな、もうそこらへんをあまり思い出せなくなってきた。

「魔神よ、そなたの名はなんという？」

「……狭間の魔神、凶腕のゼアノスだ」

「そうか……ゼアノスよ、そなたの力は危険だ。故に、我ら全員で相手をしよう。恨むなら、力を付け過ぎた……魔神に生まれた自身を恨むがよい」

アークリオンの言葉が終わると同時に、その場にいる現神勢が詠唱を開始した。さすがに一気を受けるのはマズすぎるので離れようとして……できなかつた。

いつのまにか俺の真下に六人の神格者がおり、それぞれが部下や天使と共に、結界を作っていた。

くっそ、マズイ、逃げられねえ！

「「「受ける、神罰!!!」」」

その六つの声が響いた時、その場に六つの光の柱が上空に現れた。それは一つとなり、遙か上から凄まじい勢いで落下してくる。

俺はそれを受け、そして……

『あ、ヤッホー！ 元気？ ちょっと用があって呼んじやつたけど都合悪くなかった？

もし悪いのなら後でもいいんだけど「今でいいです!! ありがとうございます!!」うわ
! な、なに!?!」

死神に助けられた。殺された相手に命を助けられるとは……皮肉な。

—三神戦争での死合・前編—

「ふうん、そんなにやばかったの？」

「ああ、本当に死ぬかと思った。助けてくれてありがとう」

「いいのいいの！ 気にしないでよ、こっちも用事があって呼んだんだしき！」

「そっか……なんか喋り方がかなりフレンドリーになってないか？」

「だって、敬語って面倒くさくない？」

「ん、理解した」

光の攻撃を受けそうになった俺は、すんでのところで死神・シエーラに呼ばれ、運よく助かった。あと一瞬でも遅ければ、俺は冥き途に招待されていただろう。

「ところで、何で突然呼んだわけ？ 助かったから礼は言うけど」

「それなんだけどもね、少し君の『手』と『腕』を見せてくれない？ なんか、知らない内に能力が付いているみたいなんだよね」

「え、そうなの？」

知らない間に能力が付いたと言われても、正直。パツと来ない。なので素直に見せる。

「えーつと……うわ、『触れたモノの因果律を変えられる能力』だつてさ」

何それ怖い。

「まあ大丈夫だよ。向こうには呪術とか禁術とかまであるんだから。何をした、とか聞かれても簡単に誤魔化せるよ」

「……何か釈然としないけど、いつか。じゃあさ、話を変えるけど、突然呼んだつてことはあの戦場から俺は消えたつてことだろ？ あの世界に帰つてたら、俺は死んだことになつてるのか？」

「いいや、時間も止まつてるから、君を呼んだ時と同じ時間に帰ることになる。つまり、神罰とかいう攻撃を受ける直前だね」

「あくそうか、つまりまずはあの攻撃を受けて生き残ることが最初の試練か」

「そういうことだね。さてさて、これでホントにお終い！ 貴方が死んでしまったときにまたお会いするでしょう！ それ以外では多分会いまっせん！ つまりこれ以降は特典などはありませんので期待しないでください。それではくくくガンパツ!!」

最後の最後までテンションの高い死神・シエーラが、拳を力強く空へ穿つ。すると俺の視界が変化していき……

頭上に巨大な光の柱が迫ってきていた。

だが俺は慌てることなく、黒い腕・恐腕（今命名）と、新しく貰った白い腕・狂腕（同じく今命名）の形状を変化させ、俺自身を包み込むような球状にした。これは因果律を変えられるため、どんな形にでも自由自在に変化させられるようになったからできることだ。

——ちなみにこの二つの腕の名前は、“凶腕”と同じ読み繋がりで名づけた。“恐”の方は適当だが、“狂”は生前によくやっていたゲーム、『大〇闘ス〇ツシユ〇ラザー〇X』の、ある条件を満たすことで戦えるボス、『クレイ〇ーハ〇ド』から。二つ合わせての名前は双腕、もしくは双手。普通の腕や手の場合は両手か両腕と、区別して呼んでい

る——
直後この身に降り注がれる衝撃。異常なほど光の魔力と神力が籠ったその一撃は、しかし直接俺にダメージを与えるには至らなかった。これも因果を変えたからだ。

神罰は、殺傷性が非常に高い。それこそ遊星以上の威力がある。だがその分、長時間継続しない。それに命中したものを見境なく滅ぼすために、長い間攻撃し続ける意味がないからだ。

攻撃が止み、周囲からは歓声が上がっていた。現神に匹敵する魔神を倒したと、喜びの声を上げている。それが俺にまで聞こえてきた。

ここにいる現神は、マーズテリア以外の全員が一級神だ。だがそのマーズテリアも、

一級神と同等の力を持っている。そんな神が六柱もいて負けるわけがない。そう思っているのだろう。その本人達も含めて。

その中のトップ、アークリオンが微笑んでいる。配下である者達に向かつて。

だがその微笑は、横目で捉えた攻撃した場所にある灰色の球体、すなわち俺を見て、驚愕の色に染まっていった。

一級神とそれに並ぶ神の六柱分の神罰を受けて尚、形を保っているその物体は、彼らにとつては信じ難いものであることが理解できる。

アークリオン以外の神々が俺に気が付いた頃に、俺は姿を表に晒した。

「ふ〜ん。流石に凄いな、お前らの力。七つの大罪の魔王達の合体技よりも強い」

—魔王達は七柱でお前らは六柱なのに、それでもお前らの方が強いとは吃驚だよ—
俺がそう付け加えて言った途端に、驚愕の顔から恐怖の顔に変わる。天空からの巨大な光の柱は、真下にある内海を裂き、内海の面積を大きく広げるほどの威力を持っている。アークリオンといえども、そんなものに当たっては消滅してしまう程の力。にも拘わらず、俺は生きていた。それも、ほぼ無傷に近い体で。

意外なことに、最初に覚醒したのはバリハルトだ。

「貴様……どのようにして生き延びたのだ？ 我らの神罰をまともに受けて、無事で見られるなどありえぬ」

「あり得るから俺はこうして生きてる。とは言っても、この双腕のおかげだな」

双腕の先端を、鋭利な刃物状から手の形へと形状を変化させる。

双手の手の平には魔力の塊を。両手には愛用の双剣を。

もうすでに、敵側から攻撃は放たれている。俺はそれを剣で斬り、もしくは腕で払って無効化していった。

「こっちは俺一人で相手は……いち、に、さん、よん……無数にいるから数えられねえな。めんどくさ」

現神の六柱だけならなんとなるかもしれないが、天使や神格者がいるせいで戦いにくい。そういったら光露系の神聖魔術を主体に攻めてきている。避けなくともあまり問題ないが、余分に体力を消耗したくないので避けたりしている。だがそれでもウザったいのは変わらない。

と、ここで名案と呼べるかわからないが、ちよつとした案を思いついた。自分の魔力を用いて分身のようなものを創り、それを雑魚に相手取らせればいいのだ。

「よし。出でよ、我が眷属よー」

その言葉と共に、二体……いや、二柱の魔神が出現する。それぞれ白色と黒色だ。

その姿は俺と非常に酷似している。ただし黒い方は獣のように四つ這いで動いて剣を持ってないし、白い方は二つの剣を浮かしているので、何も持っていない。

「あいつらの方は任せた！」

「はっ！」

「グルル、ガウツ！」

どっちがどう返事したのかは考えるまでもないだろう。

高速で飛んで行った二柱は、弾幕のように繰り出される魔術を器用に回避しながら反撃していく。白い方は浮かばせている二振りの剣で。黒い方は拳や足による打撃で次々と撃墜させ、神聖魔術や暗黒魔術も使って効率よく戦っている。

そして俺は今現在、先程神罰をぶっ放してくれた光の神々と対峙している。

「さて、これでやっとお前らとまともに殺り合えるな？」

「たった一人にここまで戦局を覆されるとは……まさに最強の魔神だな……それだけの力を持つそなたに、手加減など無用！ 全力でいかせてもらおうぞ！」

アークリオンが叫び、魔力で作られた光弾を撃ってくる。俺は難なくそれを空中にはじいた。その後それは爆発し、まるで花火のように咲き誇った。

「開戦の、いや違うな。再戦の狼煙にしては豪華だな。そら、お返しだ！」

双腕からそれぞれ魔力を練り合わせて一つにする、この俺、ゼアノス専用の純粹魔術。

大隕石召喚の上位版。

「明暗の星群！」

放った魔力弾が現神らの上に飛び、そこでぶつかり合う。

「ふん、一体どこを狙って……」

バリハルトが莫迦にしたように告げてくるが、その途中で気が付いたアーファ・ネイが周囲に結界を張った。これはかなり硬度が高い。即席でこんなに凄い結界を作れるとは、流石は神だ。仲間だったらしいサポーターになるが、敵ならとてつもなく厄介だ。

「アーファ・ネイ様!? 何を!」

「皆に告ぎます! 衝撃に備えてください!!」

結界に気が付いたマーズテリアが質問するが、余裕のないアーファ・ネイは答えずにそう言った。その態度に何か感じたのか、全員が守りの型に構える。

直後、結界に俺の魔術が直撃した。

俺の放った魔術【明暗の星群】は、ぶつかり合うと混ざり合いながら爆散し、爆散したことで魔力の欠片が最初に降り注ぐ。今降っているのがそれだ。

そして次に、混ざって一つと化した巨大な魔力が落ちてくる。というものだ。

FFFD出演のウボアー皇帝の『いんせき』だと考えてくれればいい。

ん? これの威力? さっき俺が受けた神罰×6と同じくらいだと思うよ? 理由

はわからないんだけど、凶腕の能力が発言した際に全体的にステータスが上がったらしくて、さらに強くなっちゃったんだよ。ただでさえチートだったのに。

と、俺はここで耳を塞ぐ。もちろん両手ではなく双手でだ。これ、自由に動くんでめっちゃ便利です。重宝します。

そして巨大魔力の塊が結界に衝突、そして鳴り響く爆音。その余波で暴風が起き、事前に構えていない者は吹き飛ばされそうになっていた。

煙が舞っている場所に目を凝らしてよく見てみると、ボロボロ血塗れになっている六柱の神がいた。

……ボロボロと血塗れって同じか？

おっと、どうでもいいことは置いといて、どうやらあの結界では守りきれなかった様子。俺としても、即席で作ったもので守られても困るんだけどね。

何か喋ってるが、殺し合いの最中に話し合いなんて余裕だな、おい。

その隙を見逃さずに、俺は一直線に飛ぶ。目標は……大地の女神、アーフア・ネイ！

S i d e ・ マーズテリア

私はアーフア・ネイ様の言に従い、理由は不明であったが衝撃に耐えられるよう構えた。そしてそれはすぐに、嫌でも理解することとなった。

先の神罰の意趣返しのももりなのか、それは天から落ちてきた。あれはおそらく、先

程あの魔神が放った魔力の塊だろう。

衝撃はしばらく続き、アーファ・ネイ様が発生させし結界も限界が近づいてきた。それを知り、我らは少しでも足しになるよう魔力を張り巡らせた。

なんとか耐えきり、内心ホツとしていた。それは我以外のお方も同様であった。しかしそれすらも、甘い幻想に過ぎなかった。純粋魔術の中でも高威力を誇る大隕石召喚、それをも凌駕する大きさの魔力の塊。そんなものが迫ってきていた。すぐ頭上に。

幸運だったことに、結界はまだ維持できていたので、持ち得る魔力と神力を用いて結界を強化した。その後、今までの比ではないほどの衝撃がこの身を襲った。結界も少しは耐えたが破壊され、我らに命中してしまった。

「はあ、はあ、はあ……皆、大丈夫ですか？」

アーファ・ネイ様が生死の確認のために声を掛けてくださった。返事をしなければ。

「わ……我は大丈夫でございます」

「我也だ……くっ！ 油断した！」

バリハルト様もご無事だったようで、体制を整えておられた。直後に他の方々も立ち上がり、ご無事であったことが確認できた。

「何者なのだ……あの魔神は……我ら第一級神全員と、それと同等の力量のマーズテリア。しめて最高戦力の六柱とその神格者と信徒がおるのに、それ以上の力を持ち得てい

るとは」

「兄上の言う通りだ。一体、あの魔神はどこまで強いというのだ……」

アークパリス様とパリス・ネイ様が、全身を傷だらけにしていた。御二方だけでなく、我やバリハルト様、アーファ・ネイ様とアークリオン様ですら傷を負っていた。

「ふう、イーリユン程ではありませんが……」

そんな中、アーファ・ネイ様が皆に治癒魔術を掛けようとしておられる。その時だった。

目に見えぬような速さで、何かがアーファ・ネイ様の場所に飛んで来たのは。

気が付けば、アーファ・ネイ様は先の場合におられなかった。目の前で消えたことに動揺するが、冷静になってふと横を見た。するとそこには……

「まずは、一柱」

魔神ゼアノスの異形な二つの『手』に掴まれているお姿があった。

ゼアノスはその二つの『手』でアーファ・ネイ様を包んだ。そして『手』を離れた時には、もうそこにアーファ・ネイ様のお姿はなかった。

S i d e o u t

—三神戦争での死合・後編—

隙だらけのアーファ・ネイを両手で捕らえたのは、何も殺すためではない。巨大化させた両手内に収めることで、外からは見えないようにしたただけだ。

では何故捕まえたのかというと、一々防御されたり回復されたりすると面倒だから、異空間に送り込むためだ。

あ、異空間ってのは空間操作で行ける空間のことだ。【歪の回廊】って名前を付けた。「貴様っ！ よくもー！」

「よくも母様をー！」

歪の回廊に閉じ込めたのは、彼らからすれば突然消えたように見えたはずだ。だからなのだろうが、アーファ・ネイの子供であるアークパリスとパリス・ネイが斬りかかってくる。傷のせいなのか速度が遅い。とはいえそれが狙い目だったのだが、こうも簡単にいくとおもしろくない。

俺は光速で動いて一気に近づき、両手でその二柱の神の顔を掴む。

「遅く」

掴まれたのを自覚したのか、ジタバタと抵抗しているが意味はない。

神罰を受けた時と同じように双腕で自身を包む。その際、掴んでいる彼らもその球体に入るように包んだ。そしてそのまま、異空間に送り込んだ。

「さて、あと半分だな」

双腕を球状から元に戻し、俺が先程創った眷属たちが戦っていた場を見れば、他には誰もいなかった。俺の分身であるその二柱の魔神によって、殲滅させられたようだ。

とりあえず、俺はバリハルトが大嫌いなので、

「やれ」

「グハアー！」

その眷属×2で奴の胸に穴を開けてもらった。

バリハルトが死んで原作がここで終わったらどうしようかと思っただけど、どうやら神核は破壊できなかったようで、瀕死だが一応生きているらしい。……チツ！

そのまま2柱の体を歪の回廊へと変化させ、異空間に閉じ込めることも忘れない。

「これでは、あんたらだけだな。どうする？ 降参するなら今の内だぞ」

「……私の妻と子供の仇に、降参なんぞすると思うてか!？」

「その通りだ！ たとえ我より強くとも、決して最後まで諦めはしないっ！」

アークリオンとマーズテリアが激昂して声を張り上げる。次いで来るのは神聖魔術。

それを回避しながら、歪の回廊と化していた2柱を消す。それによって、供給していた魔力が俺の中に戻った。

「また魔力が上がりおったぞ！」

「く、どれだけの力を持つているというのだ!？」

魔力が戻ったことを、魔力が上がったと勘違いしているがまあいい。

こちららも暗黒魔術などを放ちながら近づいていく。今度は魔術ではなく、必殺で戦おうと思ったからだ。

原作のセリカなら、「必殺・飛燕」というスキルを使っていた。俺はそれにちなんで、自分に合う技を、ここ数百年の間に考えていたのだ。

それを今、この実戦で出すことにした。その戦闘スキルは、「必殺・破撃」。俺の固有技も入ってるけどな。

ということで記念すべき第一弾、「ブラッシュユ」。直線に進む鎌鼬かまいたちを飛ばす技だ。

飛ぶ斬撃が、マーズテリアへ向かう。持っている剣で防御しようとするが、傷だらけの体で受け止めるには無理があつたようで、衝撃に耐えられずにそのまま吹き飛ばす。

その隙を逃すはずがなく、俺は恐腕で異空間へ送り込もうとした。

「そうはさせぬ! 【断罪の神威】！」

が、アークリオンによる神聖魔術が命中し、恐腕が半分ほど消し飛ばす。

「アークリオン様、ありがとうございます」

「礼は後にまた聞く。今はあの魔神をどうするかだ。恐ろしき腕の片方を消滅させることに成功したが、勝てるかどうか……」

俺の片『腕』を消せれたと思ってるな……残念ながら魔力を込めれば簡単に再生するんだが、まあ勘違いさせておこう。その方が後々おもしろそうだ。

「おー、流石は主神だ。油断したよ。……でも、やっぱ甘いね」

俺の狂腕はもうそこにあるんだよ？

ここは空中だから、白い色は見えにくい。だからお前らは、後ろにあるソレに気が付かなかった。それが敗因だ。

「!!」

マーズテリアが、後ろに何かがあるのによく察して詠唱に入る。だが、遅い。狂腕の捕獲準備は整っている。

「しまった!」

アークリオンが後悔の音を上げるが、あとはもう彼一柱しかない。『腕』に掴まれ、マーズテリアはすでに異空間の中だ。

怒りの感情を隠そうともせず、こちらを向く。

「……やってくれたな。おかげで残るは我のみだ。そなたは、真に魔の神だ」

「だから初めに言っただろ、『狭間の魔神』だと」

「そなたが現神であれば、最年少とはいえども主神の位を任せられたのがな」

「そんなありえない If の話なんかするなよ。俺は魔神だ、現神じゃない。……でだ、降伏する気とかないか？」

「降伏なんぞしようものならば、そなたに殺された皆に顔向けできぬ。ゆえに、そのようなことはせぬ！」

力強く言い切る。だがしかし

「いや、あいつら誰も死んじやいない。異空間に閉じ込めているだけだ」

「な、なんだと？」

驚きの顔をしているアークリオン。かなりのレアものだな。てか俺って今日だけでかなりの数のレアものが見れたんじやね？

「……嘘ではなからうな？」

「本当だ。こんなわかりやすい嘘なんか言うか。……それで、こいつらは助けてやる。それを交換条件に取引しないか？ なに、お前らに不利なことは言わない」

「……にわかには信じられぬが、何だ？」

「一つ、この戦争は現神の勝利でも構わない。……機工女神に勝てればの話だがな。二つ、俺とその仲間を神殿等の討伐対象にしないことだ。個人的な問題やただの干渉なら

別にいいが、現神絡みで俺を殺そうとするものは殺し返す。三つ、そのための、殺し返しても良いという許可を俺に譲渡すること。……これだけだ、簡単だろ？ これらをしない限り、俺は基本、現神勢力には手を出さない」

「……それで、そなたにどのような得がある？ この戦争で現神をそなたが殺せば、必然的に古神の勝利となろう。だのに、何故我らの勝利で構わないと？」

「あんな、俺は古神の仲間ではなく魔神だ。今回俺がしたのは、古神とも呼ばれている魔王の、仲間の頼みだったからだ。正直、戦争の勝敗にはあまり興味がない。どこが勝とうが、俺ら魔神は追われ続ける。だったら最も良心的な現神を残して取引、もしくは同盟を組んだ方が追われずに済むだろうが」

本音を言えば、この場で原作は壊したくないということだ。ネルガルが滅されたようだからここは変わってしまったが、しばらくは変えたくない。そうしなければ、セリカとアストライアの出会いもなくなってしまふ。少なくとも、二人が出会うまでは変えたくない。

……その先？ んなもん知らんがな。自由気儘に動くつもりだ。

「理由としては確かに理解はできる……が、納得がいかん。されど、ここで全てを滅ぼされるのは我も望まぬ。……いいだろう、その取引を受けよう」

「今の話、全部他の奴らにも伝えろよ？ あれは全ての現神を対象としているから、気が

付いたら一柱死んでたつてことにもなりかねないぞ？」

「わかっておる。我もそれを守り、他の神にも守るように伝えることを約束し、契約しよう」

そう言つて手を差し出して来る。握手か？

見る限り魔力や神力が込められていないから問題はなさそうだが、随分とスムーズに進んだな……修正力でも働いたのか？ それとも俺が本気でそれを守ると思ったのか？ もちろん守るが、敵をこうも簡単に信じるとも思えない。

……………ま、いつか。

俺も手を出して握手をする。手を離しあつてすぐに恐腕を再生させる。

お？ アークリオンがまた驚いてる。

「……………消失してはいなかったのだな」

「消えはしたさ、だがこれは俺の一部だ。俺が生きている限りは再生し続けるぞ」

「そうであつたか……………どちらにしろ、我らに勝ち目はなかったのか……………」

遠い目をしている爺さんはほつといて、歪の回廊を六つ展開させる。全員バラバラの異空間に転移させたので、一度に還すのは無理だからだ。

ほどなくして、傷が比較的浅い二柱、パルシ・ネイとアークパリスがでてきた。

「……………現世か!？」

「ということとは、父様が勝ったのだな!? ……っ!? 貴様は!?!」

異空間に閉じ込められていたその兄妹は、脱出できたことを喜び、勝利を確信した。でもって俺の姿を見つけて攻撃態勢。

……早速取引に反しそうだな。

「おい、あれは殺してもいいのか?」

「説明してないのだからこうなるのは必然であろう。待つておれ」

俺の冗談を真面目に返し、二柱へ説明しに行くアークリオン。

もちろん彼らだけでなく、他の現神も異空間から還ってくるので、そのたびに説明をしに行ってる姿は、どっからどう見ても主神には見えない。それを聞いて納得がいかなそうにしている他の現神も、とても神にはみえない。見た目からして、孫とそれを落ち着かせようとしている爺さんだ。

全員に説明が終えたようで、こちらに戻ってくるアークリオン。過半数は納得していなさそうな顔をしている。特にバリハルトがそうだ。

それに反して、マーズテリアとアーフア・ネイはどこか納得しているようだ。後で分かった話だが、マーズテリアは「戦って負けたのだから、勝った相手の言うことを聞くのは道理だ」という理由。アーフア・ネイは「殺されてもおかしくないあの状況で、殺されないだけでも感謝したい」とのこと。同じ神でも器が違うなと思った瞬間だ。

「アークリオンともう一度取引の内容を確認し合い、再度握手。アークリオンも「以上に死ぬものが少なくなる方が良い」と、最善ではないが最悪ではないので、俺にそこまで悪い印象はないようだった。

最後に、ベルゼビュート宮殿は俺が住むから破壊するなど言っておくのを忘れない。後方で何やら嵐の神が煩かったが、無視して宮殿へと向かう。現神もここにいる意味がないので、早々に帰還していった。



宮殿に着くと、そこはもうおれの知っている場所ではなくなっていた。生き物——とはいっても魔族だが——の気配はほとんどないし、至る所に戦いの傷跡が残っている。

宮殿の最奥、玉座の間にたどり着いた。ここは、俺が初めて神の墓場以外で足を着いた場所。友というべき家族ができた場所。その友とバカをした場所であった。

感慨にひたっていると、足元からキラキラと粒子のようなものが湧いてきた。どうやら無害らしいが、それは俺を中心にぐるぐると回り続けている。

両手を前に出すと、その物体が集まりだして一つの形となった。それは

「……神核、か？」

心臓のような形で、時折脈打っていて気持ち悪いがこれは確かに神核だ。よくよく感じ取ってみれば、ここにいたであろう七つの大罪の魔王達の魔力が感じられる。

つまりこれは、七柱の古神の融合体といっても過言ではない生命体ということになる。

将来どのような姿になるのか、どれだけ強くなるのか、魔王であった頃の記憶があるのか、あつたらあつたで全員の記憶が混ざった記憶なのか、などなど疑問は尽きない。だがそれよりも、形が違えども友が生きているということに、喜びが隠せない。

しばらく嬉し泣きをしていると、宮殿全体がガクンと揺れた。そしてズズズ、という音と共に、宮殿の欠片がポロポロと海に落ちてゆく音もする。

崩れてるといわけではないようだが、少しずつ落ちて行つてるような……

そこで思い出す。

「そういえば、オウスト内海に沈むんだっけ？ これ」

最近 は原作の知識が薄れていっているので、そのことをすっかり忘れていた。しかし、もつと後に落ちると思つてたんだが、気のせいかな？ それとも攻撃を受けすぎて浮遊する力を失つたのか？

……っーか

「これって、俺も一緒に沈むってオチか？」

それは勘弁願いたい。気が付いたらネルガルの代わりに俺がパイモンに起こされることになってしまう。そんなカッコ悪いマネできるか。というかそれだと原作に入れないねえ。

とりあえず、いつ浮上してもわかるようにする感知魔術。そしていつでもここに来れるようにするための転移陣を張っておく。

こうすれば原作を完璧に忘れてしまっても、おのずとわかるだろう。ここことは絶対に忘れないだろうし。

……いろいろ考えたが、俺と一緒に宮殿と沈んでもいいかもと思った。別にマゾに目覚めたわけではない。流れに身を任せるってのもいいかもと思っただけだ。

一緒に沈んだとしてもここで眠りにつくわけじゃないし、むしろずっとここにいることの方が確率的には低いだろう。

海水が入ってきたら、俺は恐らく流されて内海に出る。そこからは潮の流れに乗ってどこかに漂流してそこで生活する。

……ヤバイ。結構スリルがあって面白そう。

というわけで俺は今玉座に座っている。もうすぐで海水が浸水してくるが慌てない。このくらいで死にはしないだろう。

ここで寝て、起きたらどこにいるのだろうか？ はは、楽しみで寝れねえ。600年は

生きてんのに、まるで遠足に行く前日の小学生みたいな心境だ。

……………規模は桁外れだけだな。

さて、無駄なことを考えるのは止めてとっとと寝よう。そろそろ水が来るだろう。それでは次に目が覚めるその時まで

「お休み……………」

——いろいろな意味で衝撃！——

気が付くと、目の前に空があつた。どうやら起きたらしいが、ここは……

「知らない天井だ」

「っ!? 気が付いたの!? よかつたあ」

な、なんだなんだ!?! 今のは誰だ!?! っっていうかここはどこだ!?! 記憶が確かなら俺は宮殿の中で寝て、海に流されてるはずなのに……。

あく、もしかして俺って海上でずっと寝てて、それに気が付いた誰かが引き上げてくれたってやつ? んでもって現在進行形で看病してくれてるわけ?

「もう、海を見てたら貴女が流れてくるんだもの。とても驚いたわよ?」

「あ、そうなの? ありがとう」

長い赤い髪の毛の女性が(それしかみえない)、ちよつと離れた場所からそう言うってくる。やっぱり助けてくれたらしい。

それよりも、さっきの『あなた』にちよつと変な感じがしたんだが……まさか……い

あれ？ どっかで見たことある顔だけど、どこでだ？ ……んく思い出せない。

「あ、あの。ちよつとアイ「お姉様は黙っててください！」……はい…」

弱っ！ 会話からして姉か？ 姉さん激弱っ!! もうチヨイ粘ってよ！ 主に俺のためにはぎ！

「聞いている!!? どうやったらそんなに長い髪を枝分かれなく維持できるの!!?」

「……………」

「しかも男でこの顔？ ……私と同じくらいかな？ ……ねえお姉様、どっちが綺麗？」

「あのね、さつきから言おうと思ってたんだけど……………」

「うん、どっちが綺麗か教えてくれるんでしょ？」

「そうじゃなくて、その……………」

「? どうしたの？」

「彼女……………じゃなくて、彼の首絞めてるわよ、あなた」

「へ? ……」

「……………」

「あ」



「ごめんなさい」

「本当に、妹がごめんなさいね、ゼアノス」

「うん、大丈夫。助けてくれたから問題ない」

あの後、俺は首を絞めていた女性の姉らしい人物によって助けられた。一応自己紹介は済ませてある。相手方の名前はまだ聞いてないけど。

それにしても焦った……現神に勝ったのにその後直ぐに死にかけるとか、しかも恩人に殺されかけるとか。ないわ。

あ、あとあの魔王達の神核も無事だ。だって異空間に入れて仕舞ってあるから。

全く成長していなかったが、これからちよくちよく見ることにしよう。

「ほんとにごめんね?」

俺の首を絞めていた人は、気が付くなりずっと謝ってる。本来はちゃんとした性格らしいが、あのときは極度のパニックになったらしい。

俺としても、この顔で男とか言われたら、俺ではない場合はパニックになるかもしれない。そう考えると、あまり動揺してなかった現神達はおかしいのか? ……おかしいんだな。うん、決定。

「謝罪はいいからさ、名前教えてくれない?」

「あ、そういうえば君の名前は聞いたけど、私達のは言ってなかったね。それじゃ、まずは私。この娘の姉の、サティア。サティア・セイルーンよ。よろしく」

「私は妹のセシリア。セシリア・セイルーン。よろしくね」
につこりと笑ってくる二人。

……言わせてもらおう。なんでき。

やつと思い出せたよ、彼女のこと。ずっと引つかかってたんだよ。

「サティアとセシリア、でいいのかな？ 改めてゼアノスだ。こちらこそよろしくな」
俺も笑顔で挨拶をして、二人と握手する。

……最近握手した回数が多いな。

それにしてもこの二人、とても可愛い。セリカがサティアのことを好きになる理由がよくわかる。実際に見るととても破壊力だ。性格もいいし。

こんな彼女らを殺そうとする現神の気持ちがさっぱりわからん。

あれからいろいろと話をして、あれから結構な日数が経っていたことがわかった。戦争は終わり、現神が勝利したらしい。ただし一つの伝説……という名の、公然の事実も残ったらしい。

それは、『最強の魔神・凶腕』というものだ。その内容は、

『普通の両腕に加え、それとは別の異形な黒と白の『腕』を肩から生やした魔神で、第一

級の現神全員と同時に戦い、そして打ち勝った者』

だ。あとこの一級神には、マーズテリアも入っている。あの戦争の後に昇格(?)したらしい。

それと、どうやら名前は広まっていないらしい。というのも、これには理由がある。多くの古神や魔神の間では、凶腕は英雄として扱われているのだとか。だからその英雄と共に現神に仕返しするのを、最低限留めるようにしたのでとか。

そうなると、一つ疑問が残る。仕返しされるのを留めたいなら、何故負けたことを公表したのか? と。だがそれは簡単に答えが出る。それは、俺との取引のためだ。

討伐対象にしないと誓わせたのに、その内容を神格者や信徒が知らなければ、それは大惨事の引き金となる。かといって名前を広めたら、その名を騙る偽物が現れるかもしれない。それではどちらにしろ攻撃できない。すなわち他の魔神が倒しづらくなる。

それで、凶腕という特徴だけを広めたのだとか。まあこれならマネできるやつもいまいだろう。その凶腕の特徴を知る限り広めたらしいから。

まず黒色と白色で変幻自在、消滅しても再生可能な腕。等々。確かにこんなことができるのは、世界広しといえども俺だけだろう。

いやはや、めんどくさいことをさせてしまったな、現神達には。とはいっても、反省なんぞ丸つきりしとらんが。

それにしても、10年とは驚いた。ん？ 何の年数だった？ 三神戦争が終わつてからの年数です。つまり俺は10年間ずっと、時に浮きながら、時に沈みながら、時に流されながら寝ていたということだ。

……よく起きなかつたな、俺。

「私達からしたら、何で10年前以降のことを全く知らないのか気になるのだけだ。ね、セシリア」

「そうね。ゼアノス、この10年間何してたの？」

「……海に流されたことは覚えてるけど、それ以降の記憶がない」

嘘ではありません。一個も嘘は吐いてません、言葉が足りないだけです。なににな、そっちの方が殊更悪い？ 気が付かなければ問題モーマンタイないです。

……気が付かなければ大丈夫って、嘘と同じだね。ごめんなさい。

そんな俺の心境なぞ知らず、

「そうなの？ じゃあ漂流して頭でもぶつけて、一部記憶が抜けてるのかな？」

「そうかもしれないわね……家とか、どこにあるかわかる？」

「……海に沈んだ」

「あ……いいえ、嫌なこと思い出させちゃってごめんなさい」

頭を下げてくれる二人。

止めてください、とてつもない罪悪感に見舞われるから。その、シユン、とした表情止めて。貴女方は何にも悪くないから。むしろ悪いのは俺だから！ 嘘は吐いてないけど悪いのは俺だからその顔は止めて！

「いいよ、もう過ぎたことだし」

「……強いんだね」

そう言つて笑顔を見せてくれるセシリア。……その笑顔は俺にとって眩しすぎです。もはや女神と言つてもいい。

……慈悲の女神でしたね、そういえば。

「とりあえず、助けてくれてありがとう」

「いいのよ、困ったときはお互い様だから」

「お互い様か。なら、なんか頼みとかないか？ 命を助けられた分、恩返しするが？ とはいっても、俺はこれから旅をするつもりだから、家のことは手伝えないけど」

その言葉に最初は渋つていた二人だが、なんとか説得できた。内容？ 割愛させていただきます。でも結構二人から好かれたというのはわかった。

……好かれたというのは恋愛の意味じゃないよ？

「そう……じゃあ一つお願いするわね」

そう言ったのはセシリア。俺は頷くことで肯定する。

「お互いが生きている間に、もし私がピンチに陥っていたら、その時に助けたくない？
もちろん、できる限りでいいから」

セシリアが言った、『お互いが生きている間』というのは、俺のことを人間だと思つて
いるからだろう。人間の寿命は、神からみれば短すぎる。

「わかった、セシリアはそれだな？ サティアは？」

「そうね……じゃあ、私も同じ内容でいいわ。危なくなったら助けられれば」
「わかった。出来る限り頑張るよ」

これは一種の決意表明だ。出来るだけ助けてやりたいからな。

「あとさ、しばらくはここにいていいかな？」

「もちろん！ むしろ大歓迎よ。ね、お姉さま？」

「ええ、いつも私達だけだから、お客さんがいた方がいいわ」

さつきと同じように笑う二人。やはり、二人だけだというのは、どちらも古神だから
だろう。昔は信仰されていたのに、今では邪神扱い。それでも人間のために行動をして
いるが、万が一ばれれば討伐されることになる。……たった10年でよくそんなに変
わったもんだ。

そんなことで、二人は人間と共に行動するなんてできない。人間が一方的に年を取つ
てしまうからだ。

「それじゃ、さつきも言ったけど改めてよろしく! 旅に出るまでは家事とか手伝うよ。……できるかわからないけど」

「できるかわからないって、不安ね……。よし、だったら私が教えてあげる。ちゃんと一人でも生活できるようにしてあげるから、しっかりと覚えてね?」

「はは、お手柔らかにお願いするよ」

「それは貴方の出来次第よ。でも、今日は何もしなくていいわ。起きたばかりで疲れてるでしょうから、寝ておきなさいよ」

「もう大丈夫だよ、特に心配することなんてないよ」

「もし途中で倒れたらどうするの。大丈夫でも、少なくとも明日までは動いちゃダメ」

本当に平気なんだけどなあ、寝ただけなんだし。でもやっぱり心配してくれてるんだから、言うことを聞いた方が良いか?」

「はあ、わかった。大人しくするよ」

なんだろう。現神×6に勝てたのに、これでは俺がまるで子供みたいだ。あれか、慈悲の力でも働いてんのか?」

「そうそう、それでいいのよ。丁度夜だしね」

そういえば、周囲が暗かった気がする。ずっと話してたから気が付かなかった。

「そっか、どちらにしろやることがないのか。わかった、セシリア、サティア、お休み」

「ええ、お休みなさい」

「お休み、明日はがんばってね」

そう言ってから、二人は退室していった。

そういうばこはどこらへんだろう。オウスト内海近くというのはわかったが、それ以外がまったくわからない。まあ明日にでも聞けばいいか。

そうまとめ、俺は寝ることにした。

……10年も寝てたくせにまた寝るとか、どれだけだし。



俺が寝てしばらくした頃。誰かが、部屋に入ってきた。……誰だ？

「ん……誰だ？」

「あ、起きちゃった？ ごめん。私、セシリアよ」

セシリア？ 一体何の用だ？

「どうかしたのか？」

「うん。ちよつと聞きたいことがあるんだ」

「なに？ 正直、俺は眠いからまともな返答ができるかわからないよ？」

「それでもいいの。むしろ、寝てる貴方に聞いてもらって、答えてもらうつもりはなかったから、そっちの方がいいかも。……あのね、人間は何で争いをやめないんだと思う?」

これは……

「何故それを俺に聞く?」

「ううん、ちよつと気になっちゃって、私ではわからなかったの。お姉様もわからなかったから、次は貴方に聞いてみようと思つたの」

「そつか……そうだな、何故人間は争い続けるのか、それが人間だからだ」

「え?」

「わからないって顔をしてるな。まあ俺は元人間だが今は魔神だ。だからあの時と比べれば、少しはわかるようになってきた。」

人間のことを一番理解しているのは人間ではないってことが。

自分は所詮自分に過ぎない。だから人間が一番理解しているのは自分という人間だけだ。だから元人間の人外が見れば、それがわかるようになってくる。

「人間は数多の生き物の中でも、トップクラスに欲が強い。欲の中にも色々あるが、多くの人間が最も望むのは、『異性』と『金』だ。それを両方とも簡単に得られるのが、高い権力を持つ地位だ。その地位がもつと欲しいから、他国へ侵出する。侵出された国は自国を守るために戦う。つまりは、心のせいだな」

そこで一旦区切る。セシリアが何か考えてるような仕草をしているからだ。「続けていいか？」と聞くと、頷いて答えた。

「他の理由に、『あの国では神を信仰していないから異教徒だ。いずれ災いを呼ぶからそのまゝに消そう』とかいうよくわからん理由もあるがな。そう思えば、神が原因つてことも、なくはない」

そこまで言つて見てみると、セシリアは悲しそうな表情をしていた。

……言い過ぎたかもな。

「すまん。だがこれは俺の考えだ。正しいかどうかはわからん。だがこれはいえる。『人間は争う生き物』だ。ま、これの酷くなつたバージョンが魔神だな。……一部を除いて」

「いいえ、正しいか間違つてるかはともかく、答えてくれてありがとう。……今は、貴方の答えが聞けて満足してるわ。起こしちやつてごめんね？」

「だからそれはいいつて。……とはいつても聞かなそうだな……よし、なら家事を教えてくれる際に、厳しくしないでくれ。それが交換条件でどうだ？」

途端にポカンとする顔。うわ、メツチャ可愛い。

「クスッ、何よそれ。いいわ、ならうんと優しくしてあげるわよ。私に惚れちゃうくらいに」

「はは、そう? もしそうなら楽しそうだ。それじゃ今日はこちらでお開きだな」

「そうね。……ゼアノス、お休み」

「ああ、お休み」

部屋を出ていくセシリア。今日初めて会ったのに、随分とフレンドリーに接してくれたものだ。姉妹揃って警戒心がないのか?

……くそつ、物語ではあの姉妹が不幸のどん底に堕ちてしまうはずだが、肝心な中身が思い出せない。

……最善でなくとも、最悪だけは起こさせない。絶対に。

—重い事実—

サティアとセシリアに出会ってから、約1年の月日が流れた。

そんな今日この頃、俺は今までにないほど頭を働かしている。

どんなことで悩んでるのかって？ それはな、目が覚めたら

「うくん、ゼアノス……えへへ」

セシリアが俺のベットで寝ていた。しかも、俺の腕を抱いて。

何だ？ 何が原因でこうなった？ ここら1年、特に気に入られるようなことしたか

？

思いつくのは……

——ご飯と一緒に作ったり、お互いの下着以外の服を洗濯したり、共同で掃除したり、共にご飯を食べたり、サティアから「まるで新婚みたい」と言われたり——

……………

うおおおおお！ あった！ 思いつきりあった！ なんぞこれ!?

いつからこうなった!? 気が付いたらなっていたからわかんなかったぞ!

なにこの生活。サティアの言う通りの『新婚』そのものじゃねえか! あれか!? 知らないうちにフラグ建つてたんか!? 嬉しいけど複雑だ!!

「ゼアノス。起きt……tゆっくり〜」

「『ゆっくり』じゃなくて助けてください。起き上がれません」

逃げないでくれサティアよ! くそ、こんなの俺のキャラじゃねえのに。

つておい、ストップ! ウエイト! 部屋から出ないでセシリアを起こして!

「しようがないなあ」

やれやれ、といった感じで近づいてくるサティア。最初は違かったのに、俺が来てしばらくしてから結構お茶目になった。もしかしたら元からそうだったのかもしれないが。

それにしても、ふう、やっと助かる。

「私のことを『義姉^{ねえ}さん』って呼べたらいいわよ?」

前言撤回、助かりません。

セリカよ、お前の将来の恋人は性格が最悪だ。悪いことは言わない、物語が変わってもいいから違う女性と死ぬまで過ごせ。それが幸せへの道筋だ。

サティア行き、という切符は買ってはダメだ。その切符は地獄への一本道しかない。

何故だ。1年前にも思ったが、現神に勝って何故この二人に勝てないんだ!?

「……失礼なこと考えられてる気がする」

「何言ってるんだよ」

外見呆れ顔、内心汗がドバドバ状態です。はい。

「ならいいけど、呼べないなら助けてあげな〜い」

微笑みながらそう言ってくる。その顔がとても綺麗で、反発できなくなる。そういう点では得だよなあ。

「わかった、呼ばない。自分で起き上がるからいい」

「そう? 残念」

全く残念ではなさそうな顔だ。むしろどことなく嬉しそうな……何だろう?

それにしてもセシリア、こんなことをするってことは、彼女は俺に好意を抱いてくれるのか? そうだとしたら嬉しいけど、俺の見た目は女だぞ? もしそうなら、俺のどこに惚れるんだ?

いや、ただ単に間違えて入ってきただけかもしれないし……だがそれだとさっきの寝言の説明がつかん。

俺がうんうんと唸っていてセシリアが起き、悲鳴が上がって俺の頬に紅葉ができたというのは公然の秘密だ。秘密したら秘密だ。

「ごめんなさい」

「いいよ、別に気にしてないから」

「クスクス」

上から順にセシリア、俺、サティアだ。

1年前もこんなことがあつたような既視感デジャヴがあるが、それは置いてこう。

あの悲鳴でサティアがまたここに来て、混乱していたセシリアを放つといて、何があつたのかを話した。

その途中でセシリアが混乱から覚め、説明し終わっていない内に謝ってきて今に至る。とは言っても説明するまでもないが。

「なあ、何で俺の横で寝てたんだ？」

「え?! い、いやただ部屋を間違えちゃっただけよ! 寝ぼけていたからわからなかったの!」

「そうなのか、んじゃ次からは気をつけろよ。俺、もうすぐここを出るからさ」

前に言った通り、少し経ったら俺はここを出て旅をするはずだった。今までに何回か出ようとしたが、その度に『もう少しだけいて』と姉妹にお願いされ、結局1年もここ

に滞在してしまい、あと10日以内に出ることを決めたのだ。これもいつも通りに渡られたが、決定は絶対に覆さなかった。残りはあと5日だ。

「……………うん」

「寂しくなるね、ゼアノスがいなくなると思うと」

「悪い。でも、もう決めたんだ。大丈夫、生きてればまた会えるさ」

俺はこのあと、できるだけ原作を思い出してその地へ行くつもりだからな。何年先になるかわからないけど、会えないなんてことはないだろ。

だからそう言ったのだが、

「そう……………だね、また会えるよね」

赤毛の姉妹が見せる表情は、どちらも悲痛で満ちていた。

S i d e ・ セシリア

私とお姉様はゼアノスに隠していることがある。言っても大丈夫かもしれないが、もし駄目だったらと思うと言えないことを隠している。

それは、私達が俗に言う古神だということだ。

私のセシリアという名前も、お姉様のサティアという名前も偽名だ。もちろん、セイ

ルーンというファミリーネームも嘘だ。

私達の本名は、アイドスとアストライア。

アイドスは私の、アストライアはお姉様の名前。かつては慈悲の女神、正義の大女神と呼ばれた古神だ。

争いを止めない人間達に、少しでも争いをやめてほしくて私達は来た。それでも、争いは終わらなかった。

三神戦争が終わり、追われる立場になっても諦めなかった。

そんな日々を過ごしていたある日、オウスト内海の南方の陸地に家を建てて暮らし始めて、7日ほど経ったその日、美しい人が海から流れてきた。

その人こそ、私達が嘘をついている人物であり、いつのまにか私の最愛の人となっていた、ゼアノスだった。

初めは女性だと思ってた。紫色の長い髪は艶があるし、なにより顔も女顔で、そこらにいる女性よりもよっぽど綺麗だ。というか、海に浸かってたのにサラサラなままというのはどういう原理だろう？

彼は、彼を拾ったその日の夜に目を覚ました。そしてその後すぐに、彼が男であることが分かった。混乱して思わず殺しかけてしまったのは、笑えない冗談だった。『命を助けたその日に助けた本人が殺してしまった』なんて結末にならなくてよかったけど、気絶は

させてしまった。

その後、いろいろあつて彼はしばらく我が家に住むこととなった。

家事を教えてほしいということで、様々なことを教えた。彼は飲み込みが速く、一つ教えれば他もできるようになっていて、あまり教えられることがなかった。

彼の目が覚めたその日の内の深夜。私は何を思ったのか、彼に相談していた。出会つて1時間も経っていない相手に、何をしているんだらうと自問自答をしていたが、今ならわかる。多分、あの日からすでに私は彼に惹かれていたんだ。

それから一緒に家事をした。お姉様に言われるまで気が付かなかつたけど、まるで新婚の夫婦のように、互いに支え合つて生活していた。

こんな楽しい時は初めてだった。だから忘れていた、彼が旅に出るということを。

「そろそろ旅に出ようかな」と彼が口にしたのは、出会つてから半年程経過した日だった。その言葉に、私とお姉様は思わず動きが止まつてしまった。こんな温かい日常なんて今までになかつたから、どうしてもそれを手放したくなかつた。そしてそれ以上に、彼と一緒にいたいと思う気持ちもあつた。

その日はなんとか押し留めたが、それから何回か言うようになった。

彼が旅に出ると言い、私達がそれを止める。それが何回も続き、出会つてからももうすぐで1年になるその日、彼は言った。

「10日以内にここを出ていく。これは絶対に覆さない」と。

その言葉通り、彼は何を言っても聞き入れなかった。

私達は姉妹で話し合った。どうすればいいかと。

そして4日目に、お姉様があることに気付いた。

『私達は古神。彼とは種族はもちろん、寿命が違う。だからどちらにしろ、一緒にいることはできない』ということに。

そんな現実を思い知り、私は思わず泣いた。こんなに泣くのは初めてだったが、とにかく泣いた。私の中で、彼は途方もなく大きな存在になっていたみたいだ。

少しでも一緒にいたくて、でもその想いは叶わない。そんな思考がグルグルと頭の中を巡り、気が付けば私は彼の部屋に入っていた。

寝入っている彼の表情に警戒はなく、見た目麗しい美女そのものだ。

女性の顔をしている男を好きになるなんて、私はそっちの気もあるのかな。と苦笑して彼の顔に触れると、もっと触っていたくなかった。もっと彼の温もりが欲しくなった。

私が横に並んでも、彼は何も反応しなかった。

いつもそうだ。ドギマギするのはいつも私……達の方。お姉様だって、彼に『義姉さん』と呼ばせたがるけど、彼が呼ばないと言うと嬉しそうにしている。あの人も、彼に気があるからだろう。

私達に平等に接し、全く同じ笑顔を見せる。私達のどちらかに特別な表情を見せることなんてない。だから私達姉妹は、お互いに嫉妬している。どちらかに見せる笑顔が出る度に。

少しでも近づきたくて、彼の手を取る。本当に、女の人みたいな細い手だ。だけどこんなに近くににいるのに、とても遠い彼はあと5日経てば、どこかに旅立ってしまう。

また会えたとしても、彼は年を取って、私はこの姿のまま。その時、彼はどんな反応をするんだろう？

怖がるだろうか、それとも敵だと認識されるのだろうか。

「そんなの、いや……だよ」

いっそのこと、自分が古神だと言えればどんなに楽か。戦争が始まる前なら言えただろうが、今となっては言えない。古神は、人類の敵だから。

どうすればいいんだろう。どうすれば、彼は私を好いてくれるんだろう。愛して、くれるのだろうか？

——彼を使徒にできれば、永久に私のモノ——

「ッ!? だ、だめ。それだけは、絶対に……」

頭によぎったその考えを否定する。人の使徒化は、お互いの了承を経てするもの。無理矢理にするものではない。彼と離れるのは嫌だが、嫌われるのはもつと嫌だ。私は、彼に仕えて欲しいわけじゃない。ただ一緒にいたいだけ。

……こここのところ、たまにふと邪な考えがよぎることがあるけど、何でだろう？

……それは後で考えるとして、今は彼のことだ。

決意を固めることができたなら、明日。できなくても、彼が出て行ってしまうその日に言つてしまおう。私達が、古神だということを。

彼が私を信じてくれることを信じよう。

私が古神でも、彼は笑つてくれると信じよう。

でも、それにはやっぱり勇気が必要だから、

「今日だけは、いい、よね？ ……勇気を、私に頂戴？」

手を離して腕を取る。彼の腕は、手と同じように小さい。私の腕を絡めて、顔を近づける。そして……



気が付けば、朝になっていた。

自分から隣に行ったのに、恥ずかしくて変な言い訳をしてしまった。それだけならまだしも、思いつきり引つ叩いてしまった。彼は許してくれたけど、心は憂鬱だ。

「はあ」

「アイドス、どうかしたの？」

振り向けば、そこにいたのはお姉様、アストラライア。

「ううん。少し、鬱になっていただけ」

「……あれはやりすぎだと、私も思うわ」

「そうよね……」

「でも、随分と大胆なことをするのね」

ニコニコと、いつものような顔でそういうお姉様。いつもなら安心して見られるけど、今日はそういう目で見られない。だって、目が笑ってないもの。

「……言いたいことがあるなら、ちゃんと行ってよ」

「……………」

私のそんな言葉に、笑顔の仮面が取れて、嫉妬で歪んだ表情が現れた。けれど、すぐにその顔はなくなった。

「言いたいことなんてないの。ただ、不器用に素直な貴女が羨ましかっただけ……」

それは本心だということにはわかった。でも、なんでお姉様は彼に何もしないんだろう

?

いつも、私達を煽るだけで、自分は何もしないで……

「そう……ねえお姉様。私、今日ね、彼に教える。私達が、人間じゃなくて古神だつて。そのために、彼から勇気をもらったの」

「だから、あんな所で寝てたのね?」

「うん、そうだよ。……お姉様、何でお姉様は、私達を煽るだけで何もしないの? 彼のこと、好きなんですよ?」

「……確かにそうね。私は彼が好きよ? 多分、これが初恋というものなのだろうけど。でもね、なんだか彼は私よりも、貴女のことを見てる気がして、身を引くことにしたの」
その言葉に、私は驚く。私からしたら、彼は私達のことを同じように見てると思つてたからだ。でも、もしそうなら……

「でも、それならお姉様はどうするの? 彼のこと、諦めるの?」

「それしかないと思う。彼、私のことを恋愛対象として見てない気がして。……ただの女の勘なんだけどね」

そう言つて笑うお姉様。でも、その笑いにいつもと同じ元気さはない。

「……ねえアイドス。彼は、ゼアノスは私たちのことを聞いても、笑つてくれるのかな?」

「笑つてくれるつて、信じよう？　まず私達が信じないと、相手は応えてくれないよ？」

これで、私達姉妹の会話は終わった。

二人でゼアノスの部屋の前に行き、扉をノックする。

「ん？　どうかしたのか？」

中から聞こえてくるのは、私が大好きな人の声。

「ちよつと大切な話があるの。中に入ってもいい？」

「ん、いいぞ」

お姉様と顔を合わせ、頷いてから入る。

ゼアノスはベッドに腰掛けており、私達の声色で真剣なのを察してくれたらしく、あまり見られないとても真面目な顔をしている。

「で、どうしたんだ？　二人揃つて」

「あのね、私達、貴方に隠していたことがあるの」

「ずつと貴方に嘘を吐いてたの、ごめん」

二人で頭を下げる。本当に、心の底から申し訳ないと思つてるから。

「頭を上げろよ。それだけ知られたくなかつたんだろ？　だつたら構わないさ、それがどんな内容でもな。それで、どんな隠し事なんだ？　あ、ただ言うのには勇気があるだろうし、勇気を出すのに頑張つたんだろ？　待つてやるから、ゆっくりでいいぞ」

……その笑顔が、その優しさが、とても嬉しい。

そんなに優しくして、気が利く貴方だから、私は好きになれたのかもしれない。

「ううん、大丈夫だよ。ね、お姉様？」

「うん、大丈夫」

「そっか。なら聞こうか」

今までに、ここまで緊張したことはなかったかもしれない。

深呼吸して、彼の目を見て言葉を紡ぐ。

今までずっと黙っていたけど、やっと言える。

「私達は……古神なの」

言えた。これで、どんな反応をするんだろう？

彼は一瞬ポカンとした顔になって、そして……

—告白と返答—

S i d e ・ ア ス ト ラ イ ア

私達は、今までゼアノスに隠し事をしていた。それは、私達が古神だということだ。知っている人は古神の名前も知ってるから、必然的に偽名を名乗ることになり、例外なく彼にもその偽名を教えていた。

私、アストライアはサティアという名前で、妹のアイドスはセシリアと名乗っていた。でも、それも今日でお終い。アイドスが今日、私達の正体を話すと決めたから。

「私達は……古神なの」

言った。言ってしまった。

雰囲気でわかる。アイドスも私と同じくらい緊張していたことが。

ゼアノスは一瞬ポカンとした顔になって、そして……

「クックック、ハーツハツハツハツハ！」

大笑いした。

え？ な、なに？

「アツハツハツハ！ ヤッバイ、はら、腹痛え！ ハツハツハ！」

ベッドを転がりながら、叩きながら笑っているゼアノス。何がそんなに面白いのかわからないけど、ここまで笑ってる姿を見るのは初めてだ。

「あの、ゼアノス？ どうしたの？」

アイドスが心配そうに聞いた。

確かにあんなふうに笑っているのを見れば、心配になってくる。

でも折角の告白を、拒絶ではないのは嬉しいけど、そんな笑いで済まされるのはなかなか複雑……。

「ああ、悪いな。だけど何だ、お前らそんなこと気にしてたのか？」

「そ、そんなことって……」

一大決心で言ったのに、それが『そんなこと』？

「お前らが古神だったなんて、初めて会った時に気付いたよ。現在進行形で神気を隠されてなかったからな」

絶句した。

ばれないように今まで必死に隠してきたのに、それが初対面の時点で気が付いていたなんて。アイドスも私と同じようで、目を見開いている。

確かに、完璧に神気を隠すことなんて不可能。それでも私達は、——彼が我が家に来てからは特に——必死に隠してきた。それなのに、この人は気が付いた。

「なら、私達の名前のことも……？」

震えた声で、アイドスが問いかける。

私もそれを聞こうとしていた。『古神だとわかったのなら、名前が偽物だということにも気が付いたの?』と。

案の定、彼の答えは予想通りだった。

「ああ、わかってたさ。お前らが偽名を使ってたことぐらいな。そうだろ? アストラエアにアイドス?」

二度目の絶句。

正体がばれたことだけならまだしも、本当の名前まで知ってるなんて……

「な、何で私達の本名を知ってるの?」

「前に一度、お前から姉がいることを聞いた。赤毛で三姉妹の古神なんてのは、少なくとも俺はお前らしか知らん。だからわかった。長女はレア、次女はアストラエア、三女がアイドス。だろ? 何か間違ってるか?」

アイドスの当たり前の問いに、いとも簡単にゼアノスは語る。私もその条件にあてはまるのは、私達しか知らない。でも……

「私達が古神だとわかってたのに、怖くなかったの？ もう、古神は邪神だなんて言われているのに、何でここから出て行かなかったの？」

「忘れてるらしいから言うが、俺は10年前……いや、11年前以降のことは知らないんだからさ、怖がる要素がない」

そうだった。彼は、海に流されてここに着いたんだった。すっかり忘れてた。

そう思つて謝ろうとしたが、次の彼の言葉を聞いてそれどころではなくなつた。

「何より、ルシファー達も怖くなかつたから、古神が怖いなんて思えねえよ。あいつらとは仲良かったしな」

「ズーめんなき………え？」

「る……ルシファー!?!」

「……」

な、なに？ その『しまった』って顔は？

S i d e ・ ゼアノス

まずい、非常にまずい！ 思わず熾天魔王のことを言つちまつた！

あいつらも古神だったからついでに口が滑つちまつた！

「……えーと、ゼアノス？ 貴方、何者？」

そうだよなあ、そうくるよなあ。この姉妹は俺のことを人間だと思ってるんだから、あいつのことを知ってる、しかも仲が良いなんてのはありえないだろう。というか、考えられないよな。

「あゝ、言うつもりはなかったんだが、お前らは俺がすでに知ってた事とはいえ、秘密を教えてください。だから俺も、今まで言わなかったことを言おうと思う。……まず一つ。俺は人間じゃない、魔神だ」

「……そう。だから、私達のことを知っても怖がらなかつたのね？ ということは、自分に自信があるってこと？」

「それはそのまま二つ目の秘密に繋がる。……そうだ、俺は自分の力にかなりの自信がある。何せ俺は」

——ビュン——

という音と共に、両肩からそれぞれ『腕』を出現させる。

「……これだからな」

凶腕。それは黒と白の腕を生やす魔神を示す言葉。普通の両腕以外にも『腕』を持つ者はいるだろうが、黒と白、という独特な色合いを持つ者はいない。

いるとするならば、それこそ本物だけだ。

万が一、その色を持つ『腕』を生やした男が目の前になるとなれば、其の者が本物だと気付ける。もしわからない者がいたのなら、そいつは余程頭が残念なことになっているのだろう。

そしてこの姉妹は『残念な頭の持ち主』ではなかったのだ、俺の正体に気付いたようだ。

「そ、それじゃ……貴方があの、凶腕なの？」

『あの』がどれを指しているのかわからないが、六柱の現神と同時に戦って勝ったのは俺だ」

とはいえ、そんな厨二的な二つ名を持つとる奴なんざ、俺以外にはいないだろうけどね。

「待つて。ということとは、家が海に沈んだっていうのは嘘だったの？」

「嘘ではないぞ？俺の家はベルゼビュート宮殿だったんだが、見事に墜落しやがったからな。今では空中から海の底だ。ちなみに俺はそこで、次に起きたら何処にいて、どんな時代になってるかなと思つて宮殿内で寝てたんだ。で、起きたらこの家だったってこと」

「……ある意味、嘘よりも性質が悪いわね。それにしても、まさか貴方があの英雄だったなんて、世界つてわからないことだらけなのね」

アイドスは結構普通に接してきたな……少しは驚いたりするかと思っただが
……………

このアストライアみたいに。

「え、え？ ゼアノスがあの凶腕？ ということは私、英雄と一緒に住んでたの？ あれ
？」

はいそうです一緒に住んでました。だから戻ってきてください。トリップしないで
ください。

彼女が元に戻るまでアイドスと何気ない話をしていたが、アストライアが元に戻った
のはそれから10分後のことだった。

「お姉様、落ち着いた？」

「落ち着いたけど、何でアイドスはそんなに冷静でいられたの？」

「最初は私も驚いたわよ。でも、ゼアノスならおかしくないって、なんか納得しちやっ
たの。色々無理不届だったし」

「ひでえ」

理不尽って、そこまで言わなくても……。

ただ教えてくれたことが全部お前より上手になっただけじゃないか。……ん？ こ

れ結構酷い？ 逆の立場なら……おおう、俺、立ち直れる自信がねえ。

「納得できちやうわね」

お前もか、アストライア。

「ふふふ。私よりも、アイドスの方がよっぽどゼアノスのことを理解してるわよね。……ねえ、ゼアノス。貴方は魔神なのよね？ だったら、ここで一緒にずっと暮らさない？ 私達は全員、寿命が果てしないんだから、ね？」

「……………」

やっぱり、そうくるか。

なんとなく予想してたけど、俺はその申し出を受ける気はないんだ……悪い。

「すまんがそれは辞退する。俺は世界を回ってみたいんだ。今の世界がどんな形なのか、知ってみたい」

「でも！」「待ってお姉様」…アイドス？」

反論しようとしたアストライアを止めたのは、以外なことにアイドスだった。まあ以外も何も、ここには俺とアストライアを除けばアイドスしかいないわけだから、誰が言ったのかは簡単にわかる。

「どうして止めるの？ 貴女も私と同じように、彼がいなくなったら悲しいし、寂しいでしょ。」

「うん。とても悲しいし、寂しいわ。「なら!」……でもね、お姉様。私は、彼のやりた
いことを優先させてあげたいの。それこそ、いつかはまた会えるんだから。だから
……」

「……貴女は本当に、ゼアノスが好きなのね」

「うん。……ゼアノス、聞いてたでしょ? 私は、貴方が好き。でも返事はまだ言わない
で。これの返事は、貴方の旅が終わって、その後私に会えた時。その時に、返事を頂戴
?」

眩しい笑顔で、アイトスはそう言ってきた。

前世を含め、こんな真正面から告白されたことなんて無い。だから、俺はこの返答に
困った。

正直なことを言えば、俺も彼女に惹かれている。まだ恋愛的な意味での『好き』には
なっていないが、それでも彼女が俺に好きだと言ってくれて、とても嬉しかった。

「わかった。俺もなんて言ったらいいのか、まだわかってないからそうしてくれると助
かる。だけど、再会できるまでには考えておくよ。それまで、待ってて」

「うん、もちろん!」

さっきの笑顔とはまた違った笑顔。それを見て、俺もつられて笑う。だがその直後に
彼女が言った言葉で、俺は硬直してしまった。

「それじゃあ、私だけじゃなくて、お姉様のことも考えておいてくれない?」

「ちよ、ちよつとアイドス!」

「……………は?」

今何つった? お姉様のこと? お姉様って誰のこと?

言つた人Ⅱアイドス。お姉様Ⅱアイドスの姉。アイドスの姉Ⅱアストライア。お姉様のことも考えておいてくれない? Ⅱアストライアのことも考えてくれない?

これを現状で整理して推理すると、アイドスはつまりこう言いたいわけだ。

『アストライアもゼアノスのことが好きだから、再開する前までに、その答えを出しておいてくれない?』

と。

いやいや何の冗談ですかそれは?

アストライアが俺を好き? そんなことありえんでしょう。ねえアストライアさ……何故に君は私の服を摘まんのですか?

「えつと、そうなの?」

「……………」 — コクリ —

無言で頷いて肯定を示すアストライア。

困つた、非常に困つた。俺は大分原作知識が薄れてきているが、彼女が主人公の恋人

だったということは覚えている。だからこそまずい。このままでは崩壊どころではない。……最低だが、ここはこうしよう。

「アストライア。悪いけど、お前には今すぐ返答できる。……すまん」

「っ！」

「え!!? な、何で!!？」

傷ついたような、それでいてわかっていたような雰囲気のアストライアと、心底困惑しているアイドス。

「ゼアノスー！ 何でお姉様は駄目なの!!? 何で!!? お姉様、貴方のこと本当に好きなんだよ!!? なのに、なのに!!」

混乱して、色々な感情がごちゃ混ぜになってしまっているアイドスを止めたのは、さつきとは打って変わってアストライアだった。

「……だから、さつきも言ったじゃないの、アイドス。彼は、私のことをそういう目では見てないって」

「た、確かにそう言ってたけど……」

「気づいてたのか？」

「うん。貴方の私を見る目と、アイドスを見る目が違ったもの。アイドスには、女性相応に向ける視線。私には、それこそ家族に向けるような視線だったから、なんとなくわ

かっつた」

そうだったのか……俺は彼女のことを、そう言う風に見てたのか……自分でも気が付かなかつた。恐らく、将来セリカの恋人になると識^知つていたから、こうなつてしまつたんだらう。

「あくあ。私の初恋、実らなかつたなあ。でも、きつぱり言つてくれてありがと。うじうじと言われるよりも、よつぽどまじだよ。……で、でも、その分……アイドスにはいい返事、をしなさい、よ？ 私を、振つたんだから、ね？」

後半は涙顔でそう言ってくる。そんな顔を見ると、罪悪感が湧いてくる。

俺があんなことを、宮殿で海に流されるようなことをしなければ、俺は彼女らとは会わず、こんな辛い思いをさせずに済んだかもしれない。

「お姉様……」

「だ、大丈夫。大丈夫だよ、アイドス。ちよつと、悲しかったただけだから。……でも、でも……」

そこまで言うと、アストラライアは俺に抱きついてきた。彼女が俺の腰辺りに腕を回して、離れないようにしている状態だ。

「ごめん、もう少しこうしてて」

「……ああ」

このように5分そうしていると、急にアストライアが質問してきた。

「……ゼアノス。貴方は、キス、したことある?」

「ん? どうしたんだ急に……キスはしたこと……ないな」

ベルゼビユート宮殿で、アスモデウスと性の交わりをしたことはあるが、それだけはやらなかった。あいつは強請^{ねだ}つたが、俺がいつも拒否していたからだ。

拒否した理由は特にないが、何故かあいつとだけはやりたくなかった。

「そっか、実はね、私もまだ未経験なんだ。だから貴方のファーストキス、私に出来ない? 私もあげるから。……せめて初めてのキスは、初恋の人にしたいの」

いい? と、アストライアはアイドスにも聞く。アイドスは渋々といった感じでだが、頷いた。そして次に、俺にも聞いてくる。

「わかった。だがいいんだな? 未来の恋人じゃなくて、この俺で。それと、キスだけで。それ以上は何を言われても絶対にやらないからな?」

「それで構わないわ。本当はそれ以上もしてほしかったけど、もう望まない。キスしてくれたら、貴方のことは諦めるわ」

「……わかった」

そこまで言って、俺たちは目を閉じ、互いの唇を合わせる。

薄っすらと目を開けると、そこには涙を流した女神が見えた。

「……」

「……」

「……」

俺、アストライア、アイドスの三者の沈黙が、妙に心地悪い。唇を離すと、名残惜しそうな目でこちらを向いてくる。

だがここはあえてもうしない。彼女はこれで諦めると言ったのだから、これ以上をやる気はない。

と、何やら気になってアストライアの後方を見れば、赤い髪の毛を逆立てているアイドスがいた。

—約束と人間の反応—

アストライアとキスし終わった後は大変だった。アイドスが、「お姉様にやったんだから私にも！」と言って、返事云々は関係なく、彼女ともすることになった。

俺としても、こんな綺麗な人とするのには抵抗はない。だから今キスをしようとしているのだが、それがいけなかったらしい。アイドスは姉とは違い、ディープな方をしてきたからだ。

「…んん、ちそうさまでした」

クスクスと、そして妖艶に笑いながらそう言ってくるアイドス。その後ろで、何やらとてつもないオーラを放っている赤毛の女神がいた。

「ぜ、ゼアノス。私にも、もう一回だけお願いしてもいい？」

「だめ」

アストライアの懇願を、俺とアイドスが同時に否定した。

上目で語りかけてくるが、絶対に了承しない。彼女はあれで諦めると言ったのだから

ら、諦めてもらわなくては非常に困る。主に原作的な意味で。

「お姉様、諦めるって言ったんだから、もうキスとかしちやダメだよ?」

「う、うう。私には慈悲の『じ』すらないの? アイドス、貴女は慈悲の女神でしょ?」

「これは慈悲とかじゃなくて、当たり前のことを言ってるの」

恨めし気に妹を睨むアストライア。睨むと言っても全然怖くなく、アイドスも結構余裕の表情をしている。

……何度見てもよく似ているが、やはり違いがある。最初は気付けなかったのに、1年も共に生活していたからか、今ではその違いがよくわかる。

「どうしたの? こつちをじつと見てるけど」

「いや、姉妹揃って綺麗だなと思ってな」

「そう? ありがとう」

しばらくの間、このような他愛もない会話を続けていたら、ふと気が付けば夜になっていた。おかしいな。話し始めたのは昼頃だった気がするんだが、いつの間に夕方を過ぎていたんだ?

「もう夜なのね……。なんだか貴方がここに來てからというもの、一日がとても早く感じるわ。アイドス、そう思わない?」

「うん、確かにお姉様の言う通りね」

俺と同じく、夜になったことに気付いたアストライアがアイドスに聞く。アイドスはそれに笑いながら肯定する。

そこに俺も、「楽しい時間って過ぎるのが速すぎるよなあ」と呟くと、どうやら姉妹に聞こえていたらしく、頷いた。

「ゼアノス、あと五日以内に出るんでしょう？　いつにするの？」

脈絡なくアイドスがそう聞いてくる。アストライアも気になっていたらしく、俺のことを見ている。

「そうだな……今日はこんなことがあったし、区切りをよくするために明日にでも行くかな」

「そう、なんだ……なんとなく予想してたけど、やっぱり辛いなあ」

それはさつきまでの微笑みとは違い、辛さを押し込んでる顔だった。

いつかまた会える。そう思っているにも、実際に会えるかどうかはわからない。俺達が今いるのは、それだけ広い大陸だから。

それがわかっていているからか、彼女らの表情は幾分か暗い。だがそれでも、アストライアは気丈に振る舞ってこう言った。

「いつか、貴方よりもいい人を見つかる。その時に、後悔しないでね？」

……これは未来予知か？

「ははは、少しは後悔するかもな。でもお前はやっぱり俺とは釣り合わない。……そうだな、意外に人間と結ばれるかもな、お前」

「ええ、それはないわよ。でも、もしそうだったら面白そうね」

俺の言葉にアイドスが否定的な言葉を発する。

だが、これは予知ではなく確定したことだ。

「ふふ、そうね。もしそうだったら、面白いかもしれないね」

またしても笑顔が戻る。

やっぱ、この二人は笑ってる顔が綺麗だ。

翌日、俺は朝早くから遠出も支度をしていた。支度とはいっても、せいぜい使ってた部屋を片付けるくらいだが。

俺の私物と呼べる物は一応あるが、それは旅には不要なので置きっぱなしにするつもりだ。それと、再開を祈つてのプレゼント。赤毛女神姉妹に一つずつ渡すものがある。

「ゼアノス、朝だよ……って、もう起きてたのね。……うわ、随分と綺麗に片づけたのね」

「まあな、『立つ鳥跡を濁さず』ってやつだ」

「あ、それ知ってる！ 人間のことわざでしょ？」

「正解」

いつもとあまり変わらない会話をして、いつもと同じように朝食を食べ終わる。ここで俺を含めた全員が揃うので、今の内にプレゼントを渡そうと思った。

「アストライア。ほれ、これやる」

「え？ なにを……うわあ、可愛い帽子……」

突拍子もなく投げたので取り損なったが、彼女にあげた物は帽子だ。「戦女神ZER
O」で、アストライアが着用しているのと全く同じデザインの帽子である。

「それは俺が作ってみたんだが、なんとなくお前に似合う気がしてな。再会を願っての
プレゼントだ」

「そうなんだ……ありがとう」

ギユウつと、とても嬉しそうに帽子に抱きついた。そんな姿はまさに見た目相応の女の子で、いつものような雰囲気ではなかった。

彼女は普段大人のように振る舞っているが、少しでも子供っぽくしても罰は当たらないだろうと思う、この帽子を作ってみたんだが、どうやらうまくいったようだ。

「……ん？」

「……………」 — じいじいじいじい —

「……」

後ろを見てみると、『私、不機嫌です!』と顔に書いてある赤毛の女神。

……わかりやすい娘だな、いやマジで。

「ほれ、お前にはこれだ」

「……………」 — パアアアアア! —

俺があるものを渡すと、さつきまでの顔がめまぐるしく変容し、一瞬で笑顔になった。ちなみに、俺が何を上げたかというのと、

「えつと、何? これ。指輪?」

そう、指輪である。

彼女はどうかやら、人間の知識に疎いらしい。俺はそういう意味で送ったんだが、わからないならしょうがないか。

「ねえ、何で指輪なの?」

「……それはな、人間の慣習を真似してみたんだよ」

「人間の慣習?」

「そ。今ではどうか知らないが、昔の人間はな? 伴侶になつて欲しい異性に指輪をプレゼントして、プロポーズするっていうのがあったんだ」

全員がそういうわけじゃないが、と付け加えるのも忘れない。

「…そ、それじゃ、私に指輪をくれたってことは……？」

「ああ。いつかは不明だが、未来で再会できて、まだお前の気持ちが変わってなかったら、俺のパートナーになってほしい。いいか？」

「も、もちろん！」

その言葉と同時に出るのは、先程の笑顔以上に眩しい笑顔。

俺も彼女だったら、毎日を楽しく過ごせそうな気がした。

俺達はその後も二人の世界（命名アストライア）に入っていたようで、やたらと不機嫌な女神が一柱いたことを追記しておく。

そしてとうとう来た、旅立ちの時間。

朝食を食べてプレゼントも渡し終えたので、もう出ることにしたのだ。

目の前にいる姉妹は涙目だが、俺も悲しい。だが俺は決めた。この日に外の世界を回ることを。

「それじゃあね。いつになるかわからないけど、また会おうね？」

「さようなら、私の初恋の人。でも、また会いましょう」

俺は、そう言って笑いながら泣いている二人の手を握り、こう言った。

「この手を離せば、しばらくはお前らと会えない。でも俺は笑顔で別れたい。だからい
うよ、また会おう」

その言葉を聞き、すぐに笑顔になる二人。

最後にもう一度「またね」と言い合い、手を離れたと同時に闇の回廊を展開する。闇の回廊のことは事前に話してあるので、変な誤解をされることはないだろう。

どこに行くかはランダムにしてあるので、どこに行くかはわからない。とはいっても、ラウルバーシユ大陸なのは間違いない。そこ以外にはいく気がないからな。



俺があの家を出てから、すでに3年の年月が経っていた。ん？ 飛んだ？ 一体何が飛んだんだ？ 俺は何も知らんぞ。

どうやらここはオウスト内海の北方にある、レスペレント地方という場所らしい。ここに来てすぐに魔族に聞いたから間違いない。ちなみに俺が3年前にいたあの場所は、オウスト内海の南方にあるケレース地方だ。

どうやって聞き出したかだつて？ 簡単さ、常に『腕』を出しておけば、ちよつと話しかけただけで色々な情報が手に入る。というよりも勝手に話してくるからいらぬ情報も入ってくる。これはいらぬ、必要ない。

一回だけ、俺が凶腕の偽物だと決めつけて攻撃してきた馬鹿がいたが、右の『腕』を、

つまり恐腕の裏拳の一撃で消滅させたことがある。

しかもそれがこちら一帯のボスの存在の魔神だったらしく、それをたつた一撃で消し去ったもんだから、俺が噂の凶腕だということは瞬く間に広がっていき、逆らう者はいなくなつた。というわけだ。

だが一つだけ誤算があつた。少し考えれば当たり前の話だが、俺の伝説は人間にも伝わっている。しかも魔族や古神側からしたら俺は英雄だが、人間達、光の陣営側からしてみれば俺は完全な恐怖の対象だ。

だから俺が町に入ると、こちらを怯えた目で見てくるんだよ。非常に居心地が悪いです。

今も俺は町……というよりも都を歩いている。名前は知らないが、近くに城があることから、どうやらここは王都のようだ。耳を澄ませば、「何でこんな辺境の地に来るんだよ」とか、「誰でもいいからあいつを追つ払つてよ」だとか、「あれ女だろ、男とか信じねえぞ。つか襲うぞゴルア！」等が聞こえてくる。

まず一人目。それはランダムで決めたから、何でと聞かれても『たまたま』としか言えん。許せ。

二人目。誰でもいいならお前が来い。勇気があるやつは嫌いじゃない。

三人目は死ぬ。あ、すまん。もう俺が埋めたんだつたな。

特にやることもなく適当に歩いていっているのだが、人間にとつては多大なストレスだろう。何せ俺は、自分らが信仰している神に勝利した存在だ。恐れないわけがない。

ふと、一人の女が俺と目が合ったが、顔を青くして視線を逸らした。

そこで俺の悪戯心に火が付く。

光速でその女のところへ行き、目の前、つまり逸らした方向に現れる。

「何で目を逸らした？」

「っ!？」

これ以上ないくらいに顔を青くして後ずさる。それを見て、さらに火が付く。

「おいおい、今度は下がるのか？ 傷つくなあ、おい」

嘘 فقط。

じりじりと後ろに下がる女を、追いかけるように同等のスピードで歩み寄っていく。

そしてついに限界がきて、その女はもう下がれなくなつた。後ろに壁があるからだ。

「!？」

「行き止まり、だな」

彼女は、まるでそれが死刑宣告のように聞き入れる。目を見れば、そこには恐怖と諦めの感情しかない。周りも似たようなもので、誰も助けにこようとしない。

まあ俺は危害を加える気は全くないが、そんなことは知らない人間は、自分が巻き込

まれたくないから遠まわしに見てるだけ。「助けてあげなさいよ」「な、何で俺が」等の言葉だらけ。誰も自分から助けに来ようとはしない。

と、そこに一つの気配。俺の真後ろから、俺に気が付かれないように、ゆつくりと近づいてきている。もう気が付いてるけど。

俺の目の前にいる女の目にも、さつきとは違う色。希望や焦りなどが入っていた。理由はいうまでもないだろう。

すぐ後ろまで来て、そして――

――グサ――

俺の腹から、尖った鋼が、つまり剣先が飛び出た。

この女はもちろん、介入しようとしなかった村人が歓声をあげる。どうやら俺を殺せたと思ってるようだが、俺は魔神。魔神には神核があるので、それを壊さない限りは死なない。そんなことも知らないのだろうか？

とりあえず、どんな人物が俺を刺したのかと興味が湧いたので、左の『腕』、狂腕で後ろにいるであろう人間を掴みあげる。その時の悲鳴で、周囲はまた絶望したような顔に変わる。

……これ、見てて結構おもしれえ。性格が悪い？ 多分魔神になったからだろう。

「で、どんな奴が……って、子供？」

掴んだのは、まだ10程度の女の子だった。ただかなり高そうな服装で、装飾品なども多数身につけていることから、かなり高貴な出だということがわかる。

「く、離しなさい魔族！ 殺したと思ったのに、何故生きていますか!？」

随分と威勢がいいな、おい。

「俺は魔神だからな。魔神には神核というものがあり、それを壊さない限りは死なん」

「くう！ やはり化け物ですか!」

「なら現神も化け物だな。あいつらも神核を壊さないと死なないし」

「神を馬鹿にするとは!!」

いつ殺されてもおかしくない状況でこの態度。かなり勇気があるな……

「なあお前、この人間を助けたいか?」

「当たり前です!」

「ならお前の名前を教えろ。そうすれば、お前も含めて何も手出しはしない」

少し考える仕草をする少女。

名前を聞こうと思ったのはほんの気紛れだが、手出しする気は元々ない。

「……です」

「ん? 聞こえんぞ」

「ですから! 私の名前はフェミリスです!!」

.....
——はあああああああああ!?

このことに、声を出さずに驚いたことは自慢できるはずだ。
何故かって？ まあ近いうちにわかるだろ。

—現神と厄介事—

俺を殺そうとした女の子は、将来現神となる女、フェミリンスだった。

とはいっても、まだ戦争が経ってから14年しか経っていない。つまりこの娘は、あれの先祖だということだ。

まあそれなら、俺を殺そうとする理由もわかる。原作でも、姫神と呼ばれたフェミリンスは魔族嫌いでも有名だったからな。こいつもそうなんだろう。

確か姫神フェミリンスは元々、女神の血統である王家の娘だった。それで魔に襲われる毎日に嘆き、常に神に祈りをささげていた。そして現神から神格位を授かり、自身も神となった。だったかな？

……もうほとんど原作知識残ってないから、全部そうかはわからないけど。

いや、女神の血統だからこそ、さつき俺が現神を馬鹿にしたのが許せなかったのか？
「なるほど、この国のお姫様か」

「わ、私を知っているのですか!？」

「ああ、よく知っている。魔族、魔物嫌いでは有名だからな、お前さんは」

「……嫌いだからというだけではありません。民が苦境の際に助けるのは、王族として当前のことです！ それに私の先祖は、三神戦争以前からおられる現神の血統なので、から、魔神を討つのは義務です！」

威勢が良いだけでなく、国民思いで有言実行。この町に来てからそういう人間は一切いなかったが、どうやらこの娘はとても勇猛らしい。さすがは現神の系譜。

しかし現神の血筋なら、俺に攻撃しちや駄目なんじゃね？ 凶腕ってわかっているのなら尚更。まあ神殿絡みでもなし、個人だけだったから、特に気にしないけどな。

「そうか。それと、約束だ。名前を覚えてくれた代わりに、俺は何もせずに立ち去ろう」
そう言ってフェミリンスを解放して、追い詰めていた女も逃がすと、何やら呆けたような顔になった。

「どうした？ そんな馬鹿面して」

「ば、馬鹿づら……いいえ。まさか噂に名高い狭間の魔神、凶腕が約束を守るとは、と思っていたのです」

「何だ、守らない方がよかったか？」

「それは違います。単純に、魔神が人間との約束を守ったことに驚嘆しているだけです。噂では、かの魔神は悪逆非道だとされていましたから」

どこからそんな噂が立つんだ？ 俺はちゃんと現神を全員生かしたのに、何で？ やっぱり噂には尾ひれが付くものなのか？

「そういうことか。だがな、俺は基本、相手が何もしなければ何もしないぞ。やられたらやり返す。ただそれだけだ」

「そうですか、ならばその言葉は信じましょう。本人を信ずるかどうかはともかくとして。それともう一つ。私は名乗ったのだから、貴女も名乗ってはとうですか？ 凶腕」

俺自身はともかく言葉は信じる、か。面白い、大した器だ。それに、一回は見逃されたとはいえ殺されかけたのに、それでもまだ改めないこの態度。素晴らしいな。

「ただどまた『あなた』の部分に違和感があるような……」

「クツクツク、面白い人間だな。俺の名前はゼアノスだ。ちなみに男だぞ」

「そう、ゼアノスですか。そしておと……？ 男!?」

素早く「双手」でフェミリンスの口を塞ぐ。この次にどうなるか、簡単に想像できるからだ。

「ん~~~~~~~~つ!!」

口を開ければ、「ええええええええええー!!」となつているだろう。あの赤毛女神姉妹と同じように。

「んんっ、んん!」

おっと、どうやら叫び終わったようだ。

「あ、ありがとうございます。その、塞いでもらわなければ、大声を発しているところでした。ですが本当に男のですか?」

「……男だ。……それにしても、自分に非があると認め、さらに魔神相手に礼を言う魔族嫌いの王族、か。とてつもない変わり者だな、お前は。お前のような高貴な出の者は、自分はずいと思っている馬鹿が多いから謝るといふ選択肢がない。それに、魔族嫌いがよく魔神に礼を言えるな」

「そういう貴方こそ、得もしない約束を守り、人を弄りはしても助け、なおかつ礼を受け止める。そのような魔神も、聞いたことがありませんよ。どうやら、貴方は他の魔の者とは違うようですね。案外、仲よくできそうです」

は? 『仲よくできそうです?』?

……ははは、これ本当にあのフェミリンスの先祖か? 現神のフェミリンスは原作で非常にむかついたのだがな。つつい笑ってしまった。

「そうか、仲よく、か。これまた面白い。いいだろう、仲のいい者とは争わないのが道理だ。だから今後、俺はお前の敵にはなっても、戦わないことを誓おう」

「それは嬉しいですね。貴方と戦になれば、無様に負けることは目に見えています。欲を言えば、私の子孫にも手出し無用。及び危機であれば助けて下さるような、寛容な心

を見せてもらいたいですね」

「……随分と厚かましいなお前は。だが現神勢と同じく、そちらが俺に攻撃しない限り、俺からはお前の一族に一切手を出さないことにする。それでいいだろう？」

「はい、それで構いません」

ちなみに、フェミリンスはまだ14歳らしい。本人に聞いた。よくもまあその年齢であんなしつかりと物事を言えるよな。俺なら絶対に無理だったぞ。その年だと。

いくら先祖とはいえ、フェミリンスがいるだけはあり、この町はそろいもそろって魔族嫌いだ。だからあんなに俺は非難されたんだな。……いや、他の町でも凶腕を出してれば怖がれるか。

フェミリンスとまた会う約束をしてから別れ、色々立ち聞き——盗み聞きともいう——をしている内にわかったことだが、ここはどうやら早い時期に現神への信仰を始めた場所で、他の地域ではそうでもないらしい。この王が女神の血統だというが、恐らくその原因だろう。

それにしても、ここにいと怖がれるか恐れられるか怯えられるか泣かれるかのどれかだ。……全部意味的に同じだな……何か虚しい。

このような理由で宿に泊まることなどできない。一回入ったら怯えられて話にならなかった。周りの客もそれぞれ部屋に帰っちゃったし。

それにあの店主、すんごい顔してたな……。人間はあんな顔もできるもんなんだな。

というわけで、3年前にここへ来た時から、森の中での野宿になっていた。神の墓場にいた頃は、いつもそうだったので問題ない。むしろ木々が大量にあるので、寝る場所の確保がとて楽だ。何せあの場所は、石に似た材質の物質がほとんどで、木のようなものはあまり見あたらなかったから。

それに今更だが、魔神が人間の施設に泊まるというのは、些かおかしいとつい最近になって気が付いた。

そして今、俺は大変面倒くさいことになっている。

フェミリンスと別れた翌日、それが今日だ。だがその一晚のせいで、非常にめんどいことになっている。

さて、まずは回想してみようか。

〳〳回想開始〳〳

夜。今の時間帯はそれ一言に限る。

3年前に周囲の木を伐採し、丁度良い形に切り、そこらへんにあった綿（のようなも

の)を詰めて、簡易ベッドを作った。かなりふかふかだ。

偶然近くを飛んでいた巨鳥を狩り、羽を拵つて纏め、他の獣の毛皮も合わせて毛布にした。これもなかなかいい出来だ。あの場所の鳥はやたらとゴツゴツしていたので、毛布にしても役割を果たさなかった。それと比べるとかなりいい。

「さて、寝るか」

いつもと同じように木製のベッドに入り、いつものように眠る。

だが、今日はいつもととは違っていた。

この森の動物や魔獣は、俺のことを本能的に恐れて近づいてこない。例え何匹で来ようとも、負けるのが目に見えているからだ。

なのに今日は足音がする。足音がするくらいなら特に気にしないのだが、その音はこつちに向かつてきている。

「……………」

とにかく、近くまで来たのでそのまま寝ている振りをする。

すると、すぐ近くから話し声が聞こえてきた。

「この付近で間違いないのだな？」

「はっ！ 私は1年前にあの町で凶腕を見つけ、ずっと観察しておりました。奴の動向、その時間、住処などを。そしてつい先日、そちらに連絡をしたその日に見つけたのでこ

ざいます！ あの狭間の魔神の寢床を！ それがこの近くなのは間違いないのですが……」

「ふむ、見つからんな」

寄つて来たのは、明らかに誰かの神格位を持っている神格者と、その部下だ。

見てもいないのに何故わかったのかというと、そいつから感じる神気は現神のもの。しかし現神にしてはその量が少ない。となれば、神格位を授かった神格者だろうということだ。

しかしこいつら、俺とアークリオン達との取引、もとい同盟のことを知らないのか？ 雰囲気的にはどうも戦いたがってるようにしか思えないんだが……。

おっと、どうやら見つかったようだ。

「っ!? み、見つめました」

俺が起きるのを恐れたのか、小声になった信徒。もう起きてるのにな。

「……うむ。この『腕』、間違いなくあの凶腕であろう」

「しかし本当によろしかつたのでしようか。教えにおいては、我々があの凶腕相手に敵対行動を取つてはならぬと。それどころか、あらゆる殺生が禁じられています……」

殺生厳禁で……こいつら、癒しの女神イーリユンの信徒か？ こんな早い時期なのにもういるのかよ、そんな奴ら。三神戦争が終わつてからあまりまだ時間経つてないの

に、神格位もらつてるとか早すぎだろ。

つーかあいつの教えって、『如何なる場合も傷つけず、傷ついたものには積極的な救済を』じゃなかったか？ 何でこんなに敵意丸出しなんだよ。

「……確かに主神アークリオンはこやつと同盟を結び、手を出してはならぬと仰った。そしてイーリyun様も殺生を許してはいない。しかし、見逃すわけにはいかぬ。このような巨大な魔が存在する限り争いは続き、世界は死にゆく。そのようなことを起こさぬためにも、我らがイーリyun様に代わり、世界を救済するのだ」

ああ、そういうことね。

つまり俺が強すぎて世界が死んでいくから、その世界を救うために病原菌オレを退治しよう。こういうことだろ？

だけどこいつ気付いてんのか？ これで俺に戦いを挑んであいつらが負ければ、イーリyunは死ぬことになるんだがな。

「さて、それでは裁きを下そう。いくらかの魔神とはいえ、寝ているならば何もできまい」

そいつはそのまま俺に近づき、光を纏った剣を取り出した。

……殺生を禁じてるのに何で剣なんか持つてるのかね？

そして剣を頭上に持ち上げ、周りの信徒も神聖魔術の準備に入る。

……殺生を禁じ（ry

剣と魔術が、同時に俺に襲いかかる。俺は特に焦ることなく、素早くベッドから出て魔術を『手』で防ぎ、振り下ろされた剣は、俺の剣で難なく斬つて破壊し、そのまま名も知らぬ神格者を斬り伏せた。

これはまさに、一秒にも満たない時間だった。

俺は戦闘になると、意識しないしていると光速で動いている。光の速さは伊達ではない。

光は毎秒299,792,458 m の速さで動くという。そんなスピードで動けば普通なら体がバラバラになってしまうが、俺は普通ではないのでそこはあえて無視。

ともかく、そんな速度を神格者とはいえ人間が捉えられるはずがない。実際、神々も対応できなかったわけだし。

突然起こつた出来事に、周りは未だに反応できていない。当たり前だが。「さてと。これはイーリユンからの宣戦布告と思えばいいのかな、人間？」

俺の言葉にハツとしたのか神格者が俺にまたしても振り下ろすが、その前に俺が剣で体突き刺す。ここでやつと周囲は俺が起きていることに気付いた。

「グフツ！ 違う、これは我らの、独断だ……イーリユン様は、関係ない……カフツ……だから、イーリユン様、には……何も……」

口から血を流しながらそう言っている。大した根性だ。

「それがそうはいかない。俺はアークリオンから『現神勢力が俺に手出ししたら、その神を殺してもいい』と許可を貰っているのは知ってるな? ……個人なら問題なかったんだが、神殿の戦士や神官総掛かりじゃ、関係ないという言葉は信用できん」

「なっ!!? それでは、イーリユン様は……」

「お前らのせいで死ぬんじゃね?」

淡々と俺が告げると、あからさまに顔色が悪くなる。血が抜けてただでさえ青い顔が、さらに青くなっていく。まあ信徒のせいで神が死ぬって、重大責任どころじゃないもんな。

周囲がこれ以上騒がしくなる前に、殺気を放って何人かを気絶させる。今もまだ意識を保っているのは、あと5人。さて、どうしようか。

と考えていると、すぐ傍に一条の光が舞い降り、消えていった。光のあったそこから、いかにも優しそうな雰囲気を持つ美女が立っていた。

緑色の髪、甲殻類のような部位を持つその姿。これらを見て、それが誰なのかがすぐにわかった。これほど特徴的なのは、彼女しかいまい。

「その神気は……癒しの女神、イーリユンか。初めましてだな」

「……はい、お初御目にかかります。狭間の魔神、ゼアノス」

その女性は、今俺が殺そうとしている者が信仰している現神だ。

「で、何故ここに来た？ まさかわざわざ殺されに来たのではあるまいに」

「いいえ、そのまさかです。殺されに来ました」

「……………はっ？」

「いやいやいやいやいやいや、何言ってるのよ彼女。まさかこの女神、M
?」

……………ごめんなさい。

「『殺されに来た』、ねえ。意味はわかるが意図がわからんぞ」

「簡単なことです。私の命を捧げる代わりに、この者達の命を救ってほしいのです。私は無駄な死を好みません。私のみで皆を助けられるのなら、安いものです」

「い、いけませぬぞ神よ！ 我らの愚行のせいで、貴方様の命を散らすなど、恐れ多いことを！」

血をドバドバと腹から流しながらも、こんなに流暢に話せるとは……………こんな根性のあの仲間 or 部下が欲しいな……………どこかにいないかな。

「……………結局、どつちを殺していいんだ？ 俺としては、両方殺してもいいんだが」

俺、身内には甘いけどその他には厳しいぞ？ 覚えとけ。

「お願いします、ゼアノスよ」

女神はそう言うと同時に頭を下げる。……何この女神、なんか凄いい。

「彼らが同盟を破りし罰ならば、我が身で受けます。ですからどうか、この子らを見逃してください。気が済まぬというのであれば、私は辱められても構いません」

これは驚いた。信仰もまだ浅いであろう人間のために、ここまでできる神がいるとは。

意思がある5人は何かを訴えているが、それでもなお頭を下げ続けている。

……決めた。

「……頭を上げろ。その姿勢に敬意を表して、もう何もしない」

「っ!? 本当ですか!?!」

「本当だ。……俺はな、種族関係なく、差別をしない者を尊敬する。お前は現神であるにも拘らず、そして原因にも拘わらずに人間を助けようとした。それも、自分の体を犠牲にしようとしてまで。だからお前に見習って、傷つけるのを止めることとする。……あくまで今だけだが。それにお前は、魔族や亜人にも分け隔てなく治療している。それには感謝しなければいけないしな」

原因は俺でもあるけど、そこは同盟を破ったそちらが悪いということ。それに俺が言ったことは全部本当だ。尊敬したし、感謝もしているからな。

くく回想終了くく

この後、神格者や信徒からも謝罪され、治療に更に力を入れることを俺の前で誓い、去っていった。正直、あれは暑苦しかった。あの演説はないわ。

で、それをどこで聞きつけたのやら、厄介事の種が目の前にいる。

そいつは前に、名無しで俺に手紙を書いていた。……渡してくれた人間が非常に怯えていたのが印象的だった。

内容を掻い摘んで説明すれば、『手を出した勢力を許す程に寛容なのであれば、是非とも魔術を教えてほしい。それとも、まさかそのようなことができないほど、矮小な魔神なのか?』

と言われていたのである。

それに興味を持ってしまったことが俺の敗因だろう

昨日の演説よりもないわ。何で、よりもよって……

「それでは早速教えてください、ゼアノス。時間は待つてはくれませんよ」
現神の系譜、フェミリンスに教えなければならぬんだ!!!

—特訓……になるのか?—

「それで、今日はどのような魔術を教えてくださいですか!？」

「……落ち着け。今日はあれだ、強化魔術を教えてください」

「おお、ありがとうございます! それで戦略の幅が広がります!」

「どういたしまして」

何故だ、何故こうなったんだ? あの曰俺は断るつもりだったのに、いつのまにか純粹魔術を教えてしまっていた。しかも継続しているというこの事実。……何故!?

「え〜つと、基礎中の基礎は何という名前の術でしたか? 私、忘れてしまって……」

「【戦士の付術】だ。それによって、対象の腕力を多少向上させることができる。個人によつて差はあるがな」

……だから何故俺は教えてるんだ?

くつ、つい質問に答えてしまう!

「そうでした、どうもありがとうございます。それともう一つお願いします。何もせず、

そこから動かないでください」

何だ？ 動くなつて、何するつもりだ？

「いきます。……【イオールーン】！」

「は？」

——ズガアン！——

「いてえよ馬鹿」

「……私としては、痛いと言っておきながら無傷なのがかなりショックです」

無傷で当り前だろう。伊達に最強だと言われていない。むしろあれで俺が真面目に痛がったら神様は涙目だ。もちろんさつき言った『いてえ』つてのは嘘だ。あのくらい、痛いわけがない。ノリで言ったただけだ。

「いきなり魔術ぶつ放してくるとか、お前本当に姫様か？ しかも、もう覚えたのかよ、

それ。早えなおい」

「それは、家で何度も練習しましたから」

今俺らがいるのは、俺のベッドがある森の近くだ。そこに空地のような場所があったので、そこを利用して魔術を教えている。

フェミリンスはこのことを親と話をして、家でも特別処置として作られたスペースで練習ができのどうか。

当たり前のことだが、当初は両親に猛反対されていたらしい。どうやって説得したのかは不明だ。

一回だけ、監視目的だと思うが人間が近くで見てる時があった。それは予想通り、子を心配する親から仕向けられた人間だった。俺に見つかると同時に猛烈に、それこそ引くくらい謝ってきたが、仕事だからお前に非はない。と言って帰らせたら、感激していた。あの反応は笑えたのだが、世間一般に俺はどう思われているんだ？

「え？ ゼアノスがですか？ そうですね……残虐非道で、逆らえば死が確定。機嫌が悪い時に目が合えば運が良くて半殺し、悪ければまたしても死が確定。人間が主食。住んでいる近くの町村から生贄を求めるとね。等ですね。実際、私も最初はそう思い込んでいましたから。……事実とは全く違うようですが」

フェミリンスに聞いたら、このような答えが返ってきた。涙が出そうになった。

そうだな、俺はそんなことでは殺さない。敵対した者しか殺さないし、人間なんか食べない。それに生贄なんか口に出したこともない。やろうとも思わない。

噂に尾ひれが付くどころか、腕や足が生えて別の生物になっている。

「……かなりの誤差があるな。……これは現神の謀略か、それともただの勘違いか……」
「恐らく後者だと思えますよ。いくら強いとはいえ、魔族にすぎない魔神が神を討ったのですから、人がそれを恐れるのは至極当然です」

こういう噂は内容が軟化しないから嫌なんだ。これから1000年後にも同じ内容のままだったら軽く鬱になるぞ？

「私も当初はそう思っていましたからね。両親からも、これに関することが理由で反対されました。……ただ単に魔族に教わり行くことを心配されただけかもしれないかもしれませんが」

「そのどちらともだろ。魔族に教わりに行くということだけでも、普通の人間からしたら失神ものだ。それに加えて相手がこの俺だからな。むしろ反対しなかったら俺はそいつの頭を疑う」

「……………ん？ ちよつと待ってください。それだと、まるで私がおかしい人みたいじゃないですか。魔族に教わるためにここに来、それも自分で言い出したということは賛成しているということになります。その二つをしている私はおかしいというのですか？」

「気づいてなかったのか？ とてつもない変わり者だぞ、お前」

「そ、そんな……………」

両手両膝を地面につけて落ち込んだ。丁度 orz ↑こんな感じだ。

それから、無駄話は止めて特訓を再開。途中で休憩をいれてまた特訓。

特訓とはいっても、内容は魔術を教えてそれを使うといった簡単なものだ。時代が時代であれば、魔術これは神殿へ行くなりして学ぶものだろう。

「にしても、魔神は血や肉の快楽を求めると聞きましたか……貴方も随分変わり者ですね。それとも、今のも信じるに及ばない噂なのですか？」

「いやそれは本当だ。個人差はあるが魔神はもちろん、基本魔族は快楽を好む。俺もそうだぞ。ただ俺は、それが人間よりも少し強い程度なだけだ。他の魔族だったら、前は今頃食われたかもしれない、性的な意味で」

途中までは凜としていた態度で聞いていたが、最後の一言で体をブルブルと震わせた。

「どうやら、そういう『もしも』を想像してしまつたらしい。

「……貴方が貴方でよかつたと、心底思います」

「それは光栄だね」

取りあえず、頭をクシャクシャと撫でる。

そのせいで髪が崩れて怒られたが、前世で妹がいた俺にとって、この娘は新しい妹みたいなものだ。

もう600年以上たっているが、そのことは覚えてる。俺は妹の頭を、よくこのように撫でていたのだ。覚えてるとはいつても、顔はぼやけてて思い出せない。その動作しか思い出せないが……。

とにかく、そういう理由で半ば癖になつてしまつているので、やめるつもりは毛頭な

い。

……また怒られた。

☆

そのようなことが数年続き、フェミリンスは少女から女性へと変わっていった。とはいっても、俺からすれば彼女は未だに妹のようなものだがな。

……何故そんなことを言うのかって？　なぜなら、とても困ることになったからだ。それは、

「……フェミリンス、お前今年で幾つになった？」

「突然どうしたのですか？　私は今年で……18になりますね。でも、何故ですか？」

「いや、王族だったら、もう既に婚約者がいるはずだろう。そいつの所にいかなくていいのか？」

「……忘れてしまったのですか？　言っただけです、私は貴方に惚れました。ですから貴方以外の男性と共に生きる気にはなりません。……私は、ゼアノスと一緒に生きたいです」

これだ。

何故か、いつのまにか男女間での好意を持たれていたのだ。

「……あのな、何でそこで俺なんだ？俺はお前の嫌いな魔族だぞ」

「知らないのなら教えてあげます。女というのは、少なからず強い男に、綺麗なものに惹かれる生き物なんです。貴方は、とても強い……文字通り、神以上に。そして神の如き美しさ。これ以上を兼ね備えた人物など、この世に存在していません。一度でも貴方を知れば、他の者はどうしても小さく見えてしまうんです。種族なんて、関係ありません」
想像以上だなこれは。嬉しいは嬉しいのだが、これはない。初めて会った時は現神の信徒と言つてもよかつたのに、これは……。

それと勘違いしないように追加すると、フェミリンスは俺のことを知ればと言つてい
るが、こいつとは一切そういうことはしてないからな？そこ等辺は勘違いしないでくれ
よ？

「種族は関係ない、ねえ。……だがお前は王族だ。だからお前は、同じ高貴な出の人間と
結ばれなければならない。それが人間の義務なんだろう？」

「……何故私は王族なのでしょう。そうでなければ、貴方と共に生きられたかもしれま
せんのに」

微妙な「ロミオとジュリエット」だなこれ。あれと違う点は、俺が王族ではないこと
と、俺がフェミリンスに恋愛感情を持っていないことだな。

「それが運命ってやつだな、諦めろ。……というか普通は逆じゃね？ 位置関係」

「逆、逆……逆？ そうです、逆ならば問題ではないじゃないですか！ ゼアノス！ 私を攫ってください！ そうすれば私は王族では……痛っ」

言ってる途中で殴ってやったよ、そりやもうガツンと。

全く、一国の姫様が何言ってるかね？

「阿呆、んなことするか馬鹿者。殴るぞ？」

「既に殴られました……それに、せめて阿呆か馬鹿のどちらかにしてください」

「阿呆で馬鹿だからそう言ったんだよ」

「ううう。何もしてくれないのでしたら、辱められたと嘘の報告を父上にしますよ？」

「とても斬新な脅しだな、それ。だがいいぞ、言えば？ お前の家族は俺のことを全く信

用してないからな、対策は充分だろうさ。それに、そうすれば俺とは絶対に会えなくな

るな。軟禁されるんじゃない？」

「……そうでした」

やつぱりこいつは阿呆で馬鹿だな。というか俺もそのままにしとしけばよかった。

そうすりゃこれも終わりだったじゃん。

んー、どうすれば……うん、これだ。

「……決めた」

「? 何をですか?」

「またしても突然だが、今日で魔術の特訓は終わりだ。明日から俺は内海の下方に行くことにする。元々はそこにいたからな、そこからさらに南下してみることにした」

「え!? 何ですかそれは!? 聞いてませんよ!」

「今決めたからな。さて、今日で最後だから復習するぞ。早くしないと何もできないまま終わることになるぞ。それでいいのか?」

「こいつのためにも、俺のためにも、そうした方が良いでしょう。結構酷いかもしれないが、彼女は人間だからこれが得策だ。」

「……わかりました。納得はしてませんが、何もできずに終わるのは嫌です。今日は何をすればいいですか?」

「なあに、簡単さ。今までに覚えた魔術をフルに使って、俺に攻撃しろ。いつも特訓後にやってることだが、今日は違う。俺も攻撃するからな。もちろん手加減はしてやる」

「……私、今日で死ぬのですか?」

「失礼な、俺が可愛い弟子を殺すとても?」

「可能性は0ではありません」

「失敬な奴だな、死なねえよ、多分。そんじや行くぞ」

言い終えると同時に、最弱の火炎魔術、「火弾」を放つ。手加減はもちろんしてし、

火力も大幅に下げている。ただし、当たれば火傷は免れない。

「つー！ いきなりですか!?! といいか『多分』ってなんですか!?! 死ぬかもしれないってことですか!?!」

彼女は今のセリフを約一秒で言い切った。素晴らしい。

そして彼女も、言い切ると同時に「レイールーン」を放ってきた。

二つの魔術はぶつかりあつて相殺し、周囲に煙が立ち昇る。俺はそこで、さらに火炎魔術の一つ、「火炎噴射」を放出。迸る火柱が一行に突き進み、直線状にあるものを燃やして行く。

視界が悪いので相手側が見えないが、魔力の流れで位置を特定する。この方法は教えがあるので、視界が悪くとも、彼女なら大丈夫だろう。人の流れを読むように、魔術の魔力の流れを読めばいい。

魔術は魔力そのものだから、知覚するのは人体以上にしやすいはずだ。

そう考えてあの火炎魔術を使ったのだが、大丈夫か？

「はあっー！」

煙から出て、気合の声と共に発してきたのは、純粹魔術「ケルトールーン」。

先ほど俺の「火弾」を相殺した「レイールーン」は貫通型で、この「ケルトールーン」は拡散型だ。

だから敵が複数の時は「ケルト」。単体の時は「レイ」をつかうのがいい。もっとも、どちらの場合でも更に相性のいい純粹魔術はあるのだが、彼女はまだそれは使えない。話はそれだが、今の判断はかなり良かった。あれは自分に向かつてくる火柱を、避けるのではなく爆発によって吹き飛ばしたのだ。

「……中々やるね、今のは良かったよ。咄嗟に思いついたのか?」

「いいえ、前から考えていたんです。今の所、私の最も強い魔術は今の二つのみです。ですから、あれを効率よく使用する方法を前もって考えていたんです。実際に使用したのは今回が初めてでしたが、褒めてもらいたい恐怖です」

……俺に教わることなく、効率よく魔術をどのように使うかを考えられるようになったのか。成長したな。

「さっらに行きますー!」

神聖魔術、【槌の光霰】。

広範囲に光の打撃をあたえる魔術だ。

それは、俺を含めた周囲を巻き込んで爆発していく。もちろん俺にまともなダメージがはいるはずもなく、突っ立ったままだ。

そこからさらに【レイ||ルーン】が炸裂するが、俺の暗黒魔術【狂気の槍】の手加減バージョンで相殺。

魔術で俺の目を錯乱させてから俺に近づいて、短剣で斬り込もうとしているフェミリンス。だが俺にはその動きが見えていたので、首元に剣を振る。

結果、あと少しでも俺が手を動かせば、彼女の首は胴体と別れるような態勢になった。

「チエックメイトつてね」

「はあ、傷一つ付けられませんでした」

「そんなのは現神でも難しいぞ」

フェミリンスの一言に苦笑する。魔術と剣術を少し覚えた程度の人間が、手加減してるとはいえ神以上の力を持つ俺に傷を負わせるなど、自分から当たりに行かない限りありえない。

「……ゼアノスが反則的に強いというのはわかっていますが、やはり納得できませんね。それと、何故明日に出て行ってしまおうのですか？」

「何となく、だ」

「……貴方は本当に気紛れ屋ですね。そこは正に魔神の特徴でしょう。貴方ほど気紛れな人間は、多分いませんよ。今までも散々、それに巻き込まれましたからね」

やれやれ、と首を振っているフェミリンス。

最近のこいつは俺を子供のように扱ってくる。そこがムカつく。だが確かに俺は子供っぽいところがあるから、年頃の娘からしたらそこが母性をくすぐられるのかもしれない

ない。

「明日、いつごろ出ていくのですか?」

「朝は多分いつもの場所にいる。おそらく昼になってすぐ、だろうな」

「わかりました。その際はお見送りをしますので、待っていてくださいね?その時に伝えたいこともあるので」

「……できるだけ待つてるよ。それで、この後はどうするんだ?　なんか話すか?」

そう言うと、頷いて肯定した。

他愛なく中身がない会話。何気ない一言に笑い、怒る。そのときの俺の心境は、前に赤毛の女神姉妹と別れる時と、よく似ていた。

——二回目の別れと出会い——

フェミリンスがいるこの地域から別れるこの日の朝。俺は久しぶりに、彼女と出会ったあの町へ行くことにした。大体4年振りだろうか？

「ま、また来たぞ！」

「まだこの近くにいたのか……」

「神よ、我らをお守りください」

俺が町に入った途端に聞こえる声や悲鳴。ちなみに『腕』は出したままだ。そうでもない、俺のことを女だと勘違いした人間の男にナンパされるからだ。

悲しいことに慣れてしまったが、された直後に『腕』を出して怯えさせるといふのも飽きたので、どうせなら最初から出していようと思った。

果物類を売っている店が視界に入ったので、買おうとしてその店に近づく。何かを食べようと思ってたので丁度いい。

金はもちろん払う。この町付近に盗賊がいたので、そいつらの金品を奪ってフェミリ

ンスに渡し、お礼として受け取ったものだ。

礼は何が良いかと聞かれて、金が欲しいと答えた時は大変だった。人間から何かを買う際はしつかりと『買う』と言ったら、「魔神がちゃんとお金を払うなんて」と大笑いされた。代わりに、その日の特訓の厳しさが跳ね上がったわけだが。

「あ、あの、何か御用ですか？」

「……この値段はどれほどだ？」

「は、はい？」

「値段はいくらかと聞いている。金ならあるから安心しろ」

茫然とする店番と周囲の人間。ま、こうなるよな、魔神が金を払って物を買うなんてことをすれば。

フェミリンスとは反応が違うが、驚く内容は同じだろう。

リングゴのような果実を買い、食べながら歩いて町を出る。その際に聞こえたのは安堵の溜息や声。それに反応して振り返ると、一気に緊張が走る。

「1000年だ」

俺の発した言葉に、疑問符を頭上に掲げる人々。逆の立場なら、おれもあのようになっているだろう。これだけでは意味不明だ。

「最低でも1000年間、俺はここに来ない。ここら一带は飽きた。良かったな、お前ら

の恐怖の対象がいなくなるぞ？」

再び背を向けて町外へ出ると、先程の安堵や緊張が一気に消滅した。そして俺が完全に森の中に入ると、人間の耳でも聞こえたであろう大歓声。……うるせえ。

つか信じたのか？ 本当にしばらくは来ないけど、魔神の言葉を信じたのか？

……まあいいか。

正午、太陽が真上に昇ったこの時間。いつもの場所に行くと、予想通りというべきか、フェミリンスがいた。

「……来るの早えな」

「もちろんです。絶対に見送ると決めましたから、遅れないように朝から待っていたんです。朝とはいっても、1時間程前ですが」

——ほとんど朝ではありませんね。——

そう言って苦笑するフェミリンス。その姿は見てて可愛いのが、さすがに彼女を連れて行つてはいけない。ただでさえ原作が崩れかけているというのに、これ以上は壊したくない。

……始まった後は壊しまくる予定だけど。

「そして、見送ると同時に伝えたいことがあるのです」

「そういえば昨日もそんなこと言ってたな。何だ？」

「……私は貴方が好きです。それは未来永劫、変わることはありません。私が他の男性と結婚しようとも、私は貴方を想い続けます。例えヨボヨボのお婆ちゃんになってしまっても、それこそ死んでしまってもずっとです。覚悟しておいてください」

死んだ後もって、それは結構怖いな。悪霊になって出てきたりするのは勘弁だぞ？
だが、

「男としては嬉しい、とだけ言っておく」

「そうですか？ ならよかったです。……もう、行ってしまうのですよね？」

俺は頷いて肯定。あえて声には出さずに、やめる気はないぞ、と伝える。

聞こえてくるのは、溜息。

「わかりました、諦めます。どうやらいつもとは違って、言っても聞いてくれなさそうですし」

「……お前が死んだ後も、俺はお前の子孫には手は出さない。むしろ、できるだけ助けてやるさ。……できるだけ、だがな」

「はい、お願いします。貴方の可能な範囲でいいので、助けてあげてください。例えその子らが、貴方に危害を加えても」

「……そうだな。俺もお前の、弟子の子孫らを殺すのは抵抗あるし、そうしよう」

「……初めて、弟子だと言ってくれましたね。ありがとうございます。貴方から教わったことは、全て後世に受け継がせてもらいます」

「ああ、そうしろ。……それじゃ、もう出発するか。達者でな」

俺は後ろを向いて歩きます。フェミリンスも言いたいことは言い切ったのか、『凜っ！』としていて、初めて会った頃と何も変わっていないかった。

あえて言うならば、身長はもちろんのこと、その身に内包する魔力だろう。特訓のおかげか、当初と比べて膨大になっている。

「今まで、ありがとうございます！」



フェミリンスの謝礼の言葉を背中受けて取ってから、千年程経過した。……いや、もつと経っているかもしれない。それこそ千ではなく、二千年は経ったかもしれないが、数えてないのでわからない。

そんな長い時の中で、俺は自分の着ているコートの色を少し変えた。

今までは黒一色だったが、今では白地に黒い茨模様が描かれているもので、結構気に入っている。

凶腕として活動しているときはこれを。ただのゼアノスとして動く時は、以前の黒だけのものを着ることにした。ちよつとした区別だな。

そして俺が今どこにいるかなのだが、実はとある人物（？）に呼ばれて……

「で、俺に何の用だ？ わざわざこんな所へ来てくれ、なんて正気の沙汰と思えないぞ？ 現神のお前が魔神である俺に頼み事をするというのはな」

何やら近くで戦いが起きたので、南方へ下り、山脈近くの村の宿で寝ていたら、夢の中で「頼みを聞いてほしい」と言ってきたのだ。

……どうやって俺の夢に出てきたのかは不明だが、恐らく青い月が満月だったことが関係してると思う。

さて、今のでわかる人はわかったと思うが、俺を呼んだのは処女神とも青の月女神とも言われているリユーシオンだ。今俺はディジュネール地方（大陸中原の最も南）にあるリブフィール山脈の山頂、その月昌石の目の前にいる。ここはあいつの加護を受けられる場所だからだ。

途中で亜人間族に襲われるかと思ったが、誰も攻撃してこなかった。むしろ何も見かけなかったのが不思議だ。

思い返していると、儂い光が集まっていき、一つの形になっていった。

「わざわざこのような地に足を運んでくださり、感謝の言葉ありません。凶腕のゼア

ノス」

そう言って頭を下げたのは、美しき現の女神が一柱、リューシオン。とはいってもすっかりとした姿ではなく、映像のようにぶれている。彼女は本体ではないのだ。

彼女が俺のことを凶腕だと何故知っているかと言うと、アークリオンは光の現神のほぼ全員に俺の容姿等を伝えていたかららしい。

「……現神はこの大陸では姿を維持することができない、だったか？」

「その通りです。戦争時ならばともかく、現在は不可能です」

どんな理由なのかは知らないが、そういうことらしい。何故だろうな？

「んで、その現神様が何の用だ？」

「貴方も気が付いているはずですよ。この近辺で再び戦争が起きています。……それも、

古神と現神の間で」

「まあ気付いてはいるが……戦争ねえ、俺に頼みつつのはそれに関係するんだよな？」

「はい。その古神は、全部で七柱いるのです」

リューシオンの説明によれば、戦争で出ている古神は、

蒼玄のレア

黒炎のエルテノ

白冥のエンプレス

冥幽のラヴェイーヌ

紅雪のレシエンテ

黄墟のイオ

極光のランジェリー

だということだ。

……どこかで聞いた名だな。

「そしてその中の、黄墟のイオ。彼女は……私の姉神なのです」

「……なら、何故そいつは現神勢力にいない？ お前の姉ならば現神だろう」

「正確に言えば違います。私達は、現神と古神の間で生まれたのです。そして現神は私達を現神だと、古神は私達を古神だと言っていました。その結果、私は現神としてここにいますが、姉様は……」

「古神になった……というわけか」

「はい……と力無く頷いてきた。

ということとは、こいつの頼みつてのも簡単に想像がつく。

「お前は俺に、そのイオとやらをどうしてほしいんだ？」

「……やはり、わかってしまいますよね。……お願いします。姉様を、どうか助けてください。彼女達は今、負けて封印されかけているのです。謝礼はかならず致します」

「助けろと言ったってな……」

しかしレアアってどこかで……って、アストラライアの姉か！　ということはこれ、七魔神戦争か！　やっと思いい出せたぞ！

「お受けしてくださいますか？」

「……助けてやってもいいが、条件がある」

俺は説明する。凶腕としての、とある計画のことを。

「……という訳だから、その時にお前の力を少し借りる。いいな？」

「……わかりました。貴方が何をしようとしているのかは分かりませんが……姉様を、よろしくお願います。そして重ね重ね、ありがとうございます」

く只今移動中く

「おいおい。100年前来たときは、ここ普通の陸地だったろ。何で海になつてんだよ」
昔はこうではなかったのに、まさか戦争でここまで地形が変化するとは……原作知識がなければ信じられない状況だ。ここまですごいとお伽噺にしたくなるよな。こんな力を持った魔神がここにいるなんて、人間なら誰も信じたくなーよ。

すぐ近くで争っている気配がするが、数がおかしい。どちらかはわからんが、片方が

圧倒的に不利な状況だ。多分、七魔神の方だろうなと、見つけた。

黄色い長い髪の女が光弾で攻撃されているが……あれイオじゃね？

「しょうがない。せいやつ!!」

咄嗟に、イオの目の前まで「狂腕」を伸ばす。それだけではなく、一気に近づいてイオを抱き上げる。こうすれば、衝撃が来ても問題ないだろ。

—ズガン!—

俺の『腕』に光弾が当たる音と衝撃があるが、想像した威力よりも大したものではなかった。その衝撃で強風が生まれるが、それは俺とイオの髪をなびかせるだけで終わった。

「久しぶりだな、アークリオン。何年振りだ?」

「……千を超えたことは確かだな」

「私^{わたくし}は一体……へ? きよ、凶腕様ですか!」

どうやら攻撃したのは、主神アークリオンだったらしい。会うのは三神戦争以来だから本当に久々だな。……他にも神が二柱いるな。

ついでに抱えているイオが気づいたらしく、慌てた様子でそう言うってくる。顔が真っ赤になって可愛い。やっぱり美人は絵になるな。

「ゼアノスよ、そなたは何をしにこの地へ赴いたのだ? まさか我々と戦争をしには

あるまい」

「当たり前だ。理由なんぞ、今見たからわかるだろ。こいつを助けるためだ」

「では何故その古神を助けたのか、そこをお教えくれませんか？ 凶腕殿？」

「その前にあんたは誰だ？ アークリオンは知ってるが、お前とその後ろは知らん」

「……そうですわね。私はリイ・バナルシア。風の女神と呼ばれている身です。こちらは雨の神、レイディンですわ」

あゝ、そういうえば七魔神戦争に出てたのってその三柱だったか？

……全く覚えとらん。

「レイディンとやらは知らないが……お前は知ってるな。確かバリハルトの妹神だったか？ 兄は嵐で妹は風かよ。……で、理由だったか？ これも簡単だ、俺好みの可愛い娘が死にそうだったから助けた。そんだけだ」

「か、可愛いなんて……」

「……古神を『可愛い』などと仰るのは、前にも後にも貴方だけでしようね」

呆れ顔の現神×3と、また顔が赤くなってる古神。

ちなみに嘘は言っていない。彼女は結構好みだ。

「そういうわけで、この娘は貰ってく。文句は聞かないので、じゃあな」

言葉が終わると同時に歪の回廊で逃げる。これ以上関るのも面倒だし。

何か声が聞こえたような気がするが気のせいだろう。イオはもちろん俺が抱えたまままだ。さて、これからについて話でもしますか。

……そういえば雨の神とやら、全く話さなかつたな。

―使徒と故郷、そして予想外―

イオを助けた後、俺は遠くの村まで移動して宿屋で休んでいる。この時代でも冒険者は沢山いるため、イオが傷を負っていることに関して聞く者がいなかったのは幸いだ。

「凶腕様。危ういところを助けていただき、本当にありがとうございます。あのままでいたら、わたくしは封印されておりました」

そう言ってくるのは、テンプルの向かい側に座っている女神、イオ。俺が男だということはすでに教えてある。もちろんうるさかった。

そして思った通り、他の六柱の古神は既に封印されていたらしい。個人的にはアストライアとアイドスの姉神であるレアも助けたかったが、間に合わなかったようだ。

「氣にするな、特に見返りを求めて助けたわけじゃない」

将来リユージオンから報酬を受け取る予定だから、とは言わない。こいつも複雑になるだろうし、わざわざ面倒になるようなことはしなくていいだろう。

「ですが、それではわたくしが納得できません。何か申してください。可能であれば、どんなことでも致しますから」

「そうは言ってもな……」

彼女にできることなら俺にもできることだろうし、謝礼はもう受け取っているも同然。だがそれは言えないからこの娘は納得できない。そうなるか……こうするか。

「わかった。なら、お前にしかできないことを頼もう」

「はい。どのようなことでしょう？」

それには答えず、俺は身を乗り出してイオの顎に俺の左手を添える。

恥ずかしいらしく目を背けるが、右手で頬を抑えて無理にでも目を合わせる。

「報酬はお前自身だ。俺はお前が欲しい。俺の使徒に、俺のものになれ」

……俺、こんなキャラじゃなかったはずなんだけどなあ。魔神に慣れ過ぎたのかね？

こんなことも普通に言えるようになってしまったよ。

とはいっても今は客がないし、営業者もいないからこそできるんだがな。もしいたとしたら、とてもこんなことはできない。

「……………はい」

数分間黙って見つめ合っていると、消えそうな声でイオはそう答えた。

目がトロンとしていて、頬に添えた俺の右手に自分の左手を重ねている。

「凶腕様、わたくしは「ゼアノスだ」…え？」

「俺の名前は 凶腕ではない。ゼアノスだ」

「!! ……はい、ゼアノス様。わたくしは今日この日から、貴方様のものです。どうぞ、お好きに使ってくださいませ」

イオは胸に手を当てててそう宣言し、何故かしやがんだ。どうするのか見ていると、俺の足を掴み、そして……

「ちゅ……レロ……」

「っ!?!」

接吻して、舐めた。

これには俺も、さすがに驚きを隠せない。

「な、何を!?!」

「わたくしはゼアノス様の『モノ』だと、身体で表現させて頂きました。……お望みであれば、その、夜の方も……」

照れながらの仕草が非常に可愛いが、それは置いてこう。

こいつはこんなキャラだったのか!? 崩壊しすぎだろ!? それともこれも素なのか!? もしそうなら大歓迎だぞコラ!!

失礼。少々取り乱してしまった、申し訳ない。

少し。そう、す・こ・しだけ混乱してしまつたが、取り敢えずは落ち着いた。あの後もちよつとした雑談をして、これからの方針を決めた。その候補はこれだ。

1・イオの仲間である七魔神（封印されてるのは六魔神）を救出する。

2・適当に歩き回り、見つけられたら魔神を封印から解く。

3・なるがまま、流されて行動する。簡単に言えば、考えなしに動く。

この三つだが、まず1番目は無理。封印されてる場所なんて知らない。というか覚えでない。どこら辺なのかも全く記憶にないし、イオも知らないと言うので打つ手なし。

2番目が最も現実的。3番目だとはぐれ魔神と何も変わらないので却下。

……でも2と3つてあまり変わらない気がする。

「レアはいいつらの姉だから、会つてみたいという気持ちはあるんだがなあ」

「……ゼアノス様は、レアの妹神を知っているのですか？」

「ああ。一年という短い期間だったが、一緒に生活していたほどの仲だ」

「……そうですか」

言葉が重いな……俺なんかマズイこと言つたか？

「どうかしたのか？ 機嫌が悪そうだが……」

「いいえ、なんでもありません。お氣になさる程のことではございませんので」

「そうか、ならいいけど……まあいい。取り敢えず、イオのが癒えたらここを出よう。時間あまり掛からないだろ、だからゆっくり休め」

「はい、そうさせていただきます。ですが……」

「ああ、俺も部屋に戻る。だから付いてこい」

「は、はい！」

……ほんと、キャラ崩壊しすぎだろ。

七魔神戦争から、またしても数千年の時が経った。イオは俺と夜を共にし、今では俺の使徒となっている。……使徒化する前から使徒らしかったけど。

イオは、霊体の魔物を行使する力を持っている。それどころか、死んだ者の魂を現世で具現させることもできる。前者はともかく、後者は大して害はない。例外もあるけど。

将来にはその力を、何かに役立ててもらおうかとも思っている。まだ思いつかないけど。

それで急な話だが、俺は今、神の墓場へ一旦帰ろうと思っている。に何故神の墓場へ行こうと思ったのかというと、ここより北方、レスペレントという地方に現神がいるら

しい。レスペレントは、かつて俺が言ったことのある場所だ。

しかもその現神は大の人間好きらしく、魔族が虐げられているという。ということ
は、そろそろ原作で最も重要な、解放戦争の幕開けだ。その戦争が始まる前に、同郷の
魔神、ザハーニウに会っておこうと思っただからだ。

……最近は何事ばつかな気がする。

「というわけで、イオ。悪いがしばらくの間、俺は故郷に一旦戻る。少しの間別行動だ」
「どういうわけですか!? いえ、そもそもわたたくしは貴方様と一緒に……」

「いや。その間に、現世の情勢を詳しく調べておいてほしい。俺が行くところは、少し異
質で情報が全く手に入らなそうだからな」

「そうですか……了解しました」

「すまないな」

だがこれでいい。古神である彼女を、あそこへ連れ行くわけにもいかないから。

「お早めにお帰り下さい。お待ちしています」

「ああ、もちろん。頼んだ」

☆

俺は空間の歪みで神の墓場まで転移して、当ても無く彷徨っている。

会いに行くのはいいが、問題はどこにいるのかと言うことだ。大陸ほどではないしろ、ここは広い。相手も移動するだろうから、探すとなると面倒だ。ただ、神の墓場には基本そういつた知的生命体は極僅かだというのが幸いだ。

まったく、地上に出る前にザハーニウに会っておくべきだった。

……ちつとめんどくなってきた。どっかで休もうかな

そう思い、近くの小山に座ろうとして……見つけた。

巨人族と同じくらいの大巨体を持つ魔神、ザハーニウ。俺が小山だと思ったものがこいつだった。いやはや、一言言わせてもらおう。

「紛^{まぎ}らわしいぞコラ、山かと思っただじゃねえか」

「突然にして妙な言いがかりだな……」

ザハーニウはそう言っつて、こちらを振り向く。

……これは、なかなかの魔力。この巨体に相応しいほどの量だ。

「まさか俺以外にも魔神がいるとはな。……俺の名はゼアノス。お前は？」

お前の存在を初めて知ったと言わんばかりに、俺は自己紹介をする。もちろん『腕』は隠して、黒いコートを着ている。白地に黒いイバラ模様の方は、凶腕として行動するときに着ることにした。

それとこいつのことは原作知識により知ってるが、ほとんど覚えてないので都合がいい。

「……儂はザハーニウだ。ゼアノス、そのような魔神がいるとはな……儂も驚いている。しかし、その魔力は一体……隠蔽いんぺいしているのか？」

ん？ 俺が常時付けているリミッターに気が付いたのか？

……やっぱこいつはかなりの実力者だ。そうでなければ、これには気が付けないだろう。

「……一体何の事だかわからんな。気のせいじゃないか？ 俺は中位程度の力しかない、しがない魔神だ」

「御主が中位の魔神ならば、現世の魔の者は皆人間にも劣るであろうに。……一つ聞きたい。どのようにしてここに、神の墓場に来たのだ？」

「来たも何も、俺はここ出身者だ。……恐らくお前と同じだと思うが」

「……そうか。確かに儂も御主と同じだ」

うーん、会話が續かない。こいつ、かなり無愛想だ。

取り敢えず何か話題を作ろうとしたところで、不可思議な現象が起きた。ザハーニウを中心に、円形の魔法陣が出現したのだ。

「ん？ おい、何かしたか？」

「……いや、儂は何もしておらぬ。これは召喚の陣だな」

「召喚ということは……お前、誰かに召喚されてるってことか？」

「どうやらそのようだ。この儂を召喚するとは、余程の技能と魔力を持つ者と思える」

ということとは始まるのか。原作に最も関係のある戦争が。現神と人間による戦争が。

まあとにかく、その前にザハーニウに会えてよかった。ギリギリだったようだからな。

向こうへ呼ばれたのか、完璧に姿が見えなくなった。ここにいっても意味がないので、地上に戻ろうと歪の回廊を使おうとして、違和感に気付く。

ふと足元を見てみると

「……………オイ、俺もか？」

さつきと同じ魔法陣があった。どうやら俺も召喚されるらしい。

……………なんでき。

一瞬だけ何も見えなくなり、次に見えた光景は、まず目の前にザハーニウ。……目が合った。うん、驚くな。俺も充分驚いてるから。

そして……懐かしいな。パイモンとラーシエナがいる。

そして他の見知らぬ魔神×六柱と、人間なのに人間に見えない人間。魔人ブレアード。大魔術師とも呼ばれているな。しかしまだどこもなく人間の面影がある。

魔神のほとんどは混乱しているようだ。そりゃいきなり呼ばれるだけならともかく、十柱もの魔神を同時に召喚するなんぞ、人間にしてはやりすぎだ。混乱する気持ちもわかる。だが、これだけは自信を持つて言える。一番混乱しているのは、間違いなく俺だ。……俺はこれからどうすればいいんだよ!?

— 深凌の楔魔と解放戦争・初戦 —

将来原作にも関わる超重要人物、大魔術師ブレアード。そんな人間が、俺の目の前にいる。というよりそいつに召喚された。

ブレアードは召喚した俺らを一通り見定めた後、名前を聞いては勝手に序列を決めていった。どうやら俺以外が決まったようで、全員が俺に注目している。

「最後に貴様だ。名は何とこののだ？」

「……………ゼアノスだ。よろしく」

「!？」

名乗った途端、過剰に反応する魔神が二柱いた。パイモンとラーシエナだ。

「……………そうか……………貴様の序列は十位だ、覚えておくがいい」

「俺は最下位というわけか？」

「……………」

俺の眩きには答えず、ブレアードは去っていく。

視線の端に懐かしの二柱が見えたので、色々な意味を含めて笑っておいた。すぐに顔を逸らしたけどね、俺が。

だってさつきからずつとこっちを見てくるから、少し鬱陶しい。

それにしても十位か。原作だと確か……ヨブフとかいう魔神だったはずだけど、この世界だと俺なんだな。そいつの代わりか？

「くつくつく、貴様は十位となつてしまったようだな？ ゼアノスとやら」

俺にそう話しかけてきたのは、序列九位のデИАーネ。

振じれた角を生やした、薄い茶色の髪の毛の綺麗な魔神だ。背中からは、蝙蝠のような灰色の翼が生えている。

「デИАーネ、といったか？ そう言うアンタも、九位と俺とあまり変わらないな。どうやらあの魔術師は実力を測るほどの力はないらしい。アンタはとて、九位という序列には当て嵌まらないだろうな。もっと上のはずだ」

「……ほお、初対面の私の力がわかるのか？」

いいえ、出鱈目です。

それとちよつとした原作知識かな？ それに精々七位程度だけど。

「少しはな。……ここにいる全員、あの魔術師よりは強いってこともわかる。そして、アンタは特に力を隠している節がある」

ま、一番隠してるのは俺だけだ。そして次は、恐らくパイモンだ。ルシファアの部下で、ソロモンの魔神であるあいつが、こんなに弱いはずがない。

「そこまでわかるか……ふん、気に入ったぞ。ゼアノスよ、これが終わったなら我の下に来い。良く扱ってやる」

「残念ながら、俺はできれば誰かに仕えることはしたくない。経験もこれだけで充分だ。丁重に断らせてもらう」

その言葉を最後に、踵を返して俺は適当な場所へ移動する。

後ろから視線を二つ感じるが……気にしなくていいか。

「残念だな。気が変わったらいつでも来るがいい」

ディアアーネもそう言い残してどこかへ飛んで行った。

ブレアードが言うには、戦が始まるまではこの構造を覚えておけとのこと。どうやらここは、かなり大規模な迷宮らしい。

各々がそれぞれしたいことをしていると、俺に付いてくる者がいた。

第五位になった魔神、エヴリーヌ。二つに束ねた美しい銀色の長髪を持つている。だが見た目はまだ幼少しか見えない。恐らく見た目同様、精神的にも幼いのだろう。

「エヴリーヌ、といったか……どうかしたのか？」

「あ、エヴリーヌの名前、もう覚えたんだ。お兄ちゃん凄いな」

「……お兄ちゃん？」

「うん、お兄ちゃん」

……俺にシスコン及びロリコン属性は無い。だがこれは新鮮だ。

「そうか、兄か……これからよろしくな、エヴリーヌ」

「うん。ありがとう、お兄ちゃん」

頭を撫でてそう言うのと、はにかむような笑顔で答えた。

何このカワイイ生物。本当に魔神か？ ……とても純粹な、それこそ子供のような性

格だ。というか俺が男だとよくわかつたな。

一通り喋つてからエヴリーヌが去り、改めて近くにいる気配に話しかける。さつきからじーつとした視線を感じ続けていたので、止めてほしいと思つたのも事実だ。

「それで、さつきから俺に何の用だ？ 序列三位ラーシエナ、序列六位パイモン」

すると闇から現れるようにして、二柱の魔神……堕天使が舞い降りた。

黒を基準とした鎧に、髪を束ねた長い黒髪の女魔神、ラーシエナ。

緑色の長い髪に山羊のような角。白い簡素な服を着ている魔神、パイモン。

どちらも魔王ルシファアの部下であり、ベルゼビュート宮殿を最後に会っていない懐かしの顔だ。

「その喋り方、服装、先程のエヴリーヌへの対応、そして、何よりもその顔。全てが、あの御方と同じ……やはり貴方は……」

対応？ ……ああ、そういえばあの時、ラーシエナの頭を撫でてたっけ。

『あの御方』やらと同じ？ 誰だ？ ……凶腕か？」

「……やはり、そうでしたか。お久しぶりです、ゼアノス様」

パイモンがそう言うて跪き、ラーシエナもそれに続いて跪く。だがこれを誰かに見られたら面倒なので、すぐさまやめるように言い、また後で話す約束をして別れた。

次の日。またしても適当に歩き回っていると、昨日と同じ二柱の魔神がいた。どうやら待ち伏せしていたらしい。

「どうした、何か用か？」

「……ゼアノス様、これからはどうなさるおつもりですか？」

「これから？ ……そうだな。本来なら拒むが、ブレアードに従ってみるのも悪くない。人間がどのように神に挑むのか、非常に興味がある」

「このまま黙って従うおつもりですか!? ただの人間に!!」

「ただの人間。その人間が神を倒そうとしているんだ。そう思つてると足元を掬われるぞ？」 人間は、創造神が創った可能性の塊だからな。……お前らの前の主、ルシファーもそう言うて興味を示していなかったか？」

元人間の俺が言うのもあれだが、人間は底知れない。その人間が今こうして、大きな力を持つ十柱もの魔神の召喚に成功しているのだから。

ルシファアも、主神に抗いながらも人間に興味を示していたはずだ。最も愚かで、最も可能性のある、神の最高傑作である人間に。

「……ええ、そのように申しておりました」

「だろ？ ……それと、パイモン。聞きたいことがある。その内お前の所に行くから、待ってる」

「はい。どのような話なのか、楽しみにしています」

誰よりも厳格で優しいラーシエナと、誰よりも純粹に仕えるパイモン。

ルシファアはこいつらを信用のおける自慢の部下だと言っていたが、俺も同意だ。こいつらが自らの意思で下にくれば、これ以上はないほどに仕えてくれるだろう。

「楽しい内容ではないが……それとお前ら、俺のことは秘密にしとけよ？」

二つの肯定の声を聞き、とある人物に会うために再び歩いた。

適当に歩き回ってるが、それはあいつらを探すことも兼ねている。

「ああ、やつと見つけた」

「……む？ お前は確か……ゼアノス、だったか？」

「その通り。序列十位のゼアノスだ。アンタは……序列四位だったよな？ グラザ……だったか？」

「確かにそうだが、お前はやたらと序列を気にするのだな。昨日もディアーネとやらを

呼ぶ際に、態々わざわざ番号を言っていたが」

「なに、ただの確認だ。間違いでもして痲癩を買うことにでもなつたら堪らないからな。俺はそうでもないが、プライドの高い奴ほど気にする」

「なるほど……ならば俺のことはグラザと呼べ。別段気にしないのでな」

「俺の言いたいことがすぐにわかったようで嬉しいよ」

今の所話をしたのは、ザハーニウをいれて六柱の魔神だ。残りはあと三柱、序列二位カフラマリア。序列七位カファル。序列八位ゼフィラだ。

とはいってもカファルは魔獣の姿をしているので、何を言いたいのか理解しにくそうだから最後。カフラマリアは……無口で何も反応しなさそうだからまた今度。となると残るは……

「序列八位のゼフィラがどこにいるか知ってるか？ 一応仲間となるのだから挨拶でも思つたんだが、どこにいるのかわからないんだ」

「変わった奴だな……それならば、先程この道の奥に向かったのを見たぞ」

「そうか、礼を言う」

グラザは数少ない男の魔神だ。ブレアードが召喚した魔神は、俺を入れて男が三柱しかない。俺、グラザ、ザハーニウだ。

それとグラザとは今後仲よくなる予定だ。彼は原作にかなり関係のある魔神だった

と記憶にあるからな。……逆に言えばそれしか覚えてないが。

その後はゼフィラとも話し合い、カフラマリアとも会話をした。

意外なことに、カフラマリアは無口ではなかった。原作だと何も喋らなかつたからそう思ったのだが、結構話せる奴だった。だが大きいマントで身を覆っているの、どのような顔なのかよくわからないのが残念だ。

それにゼフィラ、あいつは露出しすぎだと思った。

肌を全く隠していない、服と呼べるのかどうかも疑わしい物を着ている。……着ているといえるかどうか微妙だ。

山羊のような角のある赤いツインテールで、背中には悪魔のような翼があり、ズボンも脛^{すね}辺りまでしかないという軽装だ。流星に下着のような物は着けているが、小さすぎてあまり意味がない。

……少し思うのだが、山羊のような角が生えてる魔神多くないか？

それとカフアルーだが、カフアルーは炎の両翼を持つ大きな馬の魔神だ。話しかけてみたら、意思の相通ができたので仲良くなった。

ちなみに俺が男だと言ったら、エヴリーヌ以外の全員に驚かれた。そしてディアーネに食べられた。性的に。

フエミリンス戦争。もしくは解放戦争という名前が付いたのが、今俺が体験している戦争だ。今俺は、第一回戦の前衛で補助を優先して行動している。攻撃よりもそちらの方が得意だと、仲間内では周知の事実（嘘）になっているので、疑問に思う者はいない。……ラーシエナとパイモンを除いて。

とにかく、俺は模擬戦などでも攻撃をあまりせず、補助や治癒をしていたので、本当の俺を知っている二柱以外は俺をそう認知するようになった。最初は何故こんなのが魔神なのかと怪しまれそうだったが、肉弾戦では中位の魔神程度で実戦したので、そんな疑いも今では無くなった。

「グラザ！ ほれ、【覚醒の付術】だ！」
「フツ、礼を言っておくぞ！」

グラザに【覚醒の付術】を掛けると、腕力と脚力を上がったことで突っ込んでいった。いやはや、相変わらず元気だねえ。

俺らが敵対しているのは、戦争の名前でわかる通り現神、女神の姫神フエミリンスだ。何千年も昔に、俺が魔術を教えた人間と同じ名前の現神。系譜を調べてみると、予想通りあいつの子孫だった。あいつの子孫が神格を貰い、神にまでなったらしい。

あいつからは「子孫が敵対しても守ってくれ」って言われてるし……どうしよう。「邪魔だっつーの」

斬り掛かってくる天使にカウンターをして、再び補助の位置に着く。

それとどうでもいいことだが、深凌しんりょうの楔魔せつまとして行動するときは黒いコートを着用することにした。

それを教える時に、「この黒いコート、もしくはこれと同じ形の白いコート（ブランシユが使用）は凶腕の部下の証だ」と嘯うそぶいておいた。

何故かって？ 将来的に面白そうだったから。

あと、ブランシエってのは三神戦争の時に創った眷属の一人だ。身体が白かったやつ。

もう一人の黒かったやつには、ノワールという名前にした。

それぞれ、白と黒という意味がある。我ながら安直だけど、気にしたら負け。

パイモンはそれを聞いて苦笑していた。ラーシエナは引き攣くわっていたが。

これも、本当に凶腕の部下なのか疑われたが、そこはノワールとブランシユを使って本当だと思ひ込ませた。うん、面白かったとだけ言っておく。

あ、深凌の楔魔ってのは俺ら十柱の魔神の総称だ。いつの間にかそう呼ばれた。

「で、俺は何でこんな場所にいるんだろうな？ デイアーネ、知ってるか？」

俺は補助及び治癒役だ。なのに何で俺は前衛にいる？ いや、ブレアードに命令されたからだけど、何故に前衛？

「我が人間の考えることなんぞわかるか！ ええい、鬱陶しいわ！」

— キル・ディアーネ —

それは暗黒の槍を放つディアーネの必殺技だ。

自分の名前を入れている辺り、余程あの技に自信があるのだろう。現に、何体もの光の眷属を消滅させている。

「……ん？ おいゼアノス、あやつはあそこで何をしているのだ!？」

ディアーネが怒鳴り、その視線を追うと、そこには何百もの天使に囲まれたゼフィラの姿があった。そこはかなり奥にあり、まだ光陣営が多量にいる場所だ。

ディアーネはゼフィラとは犬猿の仲だから、助けは期待できない。他の魔神らも、場所的に間に合わない。

だがそこに、突つ走る一つの影があった。あれは……グラザ！

「独断専行しすぎだぞ!!」

グラザが周りの天使を無視し、ゼフィラを抱きかかえた。いくつかの光がぶつかるが、グラザは躲そうともしない。あいつは結構仲間思いらしい。

俺はディアーネの首を掴み、

「おい、行くぞディアーネ」

「……何故我が命令されている?」

そう呟いたのを無視して天使の集団へ向かう。

そしてグラザに攻撃が当たらぬよう、ブレアードの部下（魔神ではない）も使つて天使たちを迎撃する。

「クツクツク。ゼフィラ、貴様面白いことになっているな」

「ディアーネじゃないけど、確かに面白い。こんなの、滅多に見れないしな」

「な!? ディアーネ! それにゼアノス! 見るな!」

……いつもの喧嘩が始まった。うるせえ。つか助けてやったんだから礼くらい言えや。

あれから色々あったが、取り敢えず一回目の戦いは終わった。これからはさらに俺らがいる場所……つまりは迷宮だが、迷宮をさらに広げるらしい。

次の戦いまではやることはない。

暇を持て余していたので、パイモンに前に話そうとしたことを言おうと思ひ、彼の所へ行こうとした、その時だった。ゼフィラに呼ばれたのは。

「ゼアノス、あの時は言えなかったが助かったぞ、礼を言う」

「ん、どういたしました。……グラザとディアーネには言ったのか？」

「ディアーネには言わぬ。後が面倒になる。だが、その……グラザには……」

前半は納得。あいつには借りなんか作るもんじやない。

それにしてもどうしたんだ？『グラザ』の名前を出すだけで顔が赤くなって、まるで恋する乙女……まさか、

「……グラザに惚れでもしたか？」

「!? ち、違……いや、そうだ……」

おや、案外素直。

「命を助けられたときに、その、抱きしめられてな。それで……」

それで好きになってしまったと。しかし素直すぎて弄り甲斐がない。つまらん。

……ゼフィラが身体をクネクネし始めた。ヤバイ、今までを知ってるから少しキモイ。

……早くパイモンの所へ行こう。

—深凌の楔魔、とある一日—

パイモンに聞きたいことがある俺は、現在進行形であいつを探している……のだが「どこにいなだよあんにやろう」

一向に姿が見えない。ブレアード迷宮（ブレアードが作った迷宮の総称）は段々と広大化しており、探すのも一苦労だ。

「あいつがいそうな場所と言えば……ヴェルニアの楼か？」

ヴェルニアの楼。そこは俺ら深凌の楔魔が最も集まる場所であり、俗に言う本拠地だ。迷宮の最も東に位置している。

その場所は元々、三神戦争の時に取り残された魔族の居住地であり、地獄の一つだった。大迷宮建造の知識を、ブレアードはそこで得たらしい。

ということで俺はいつも通り、空間の歪みで移動する。いるかどうかは定かではないが、行ってみて損はないだろう。

で、案の定いた。

今まで探してた俺の体力返せよ。

「おや、ゼアノス様。どうかしましたか？」

「以前言った通り、お前に聞きたいことがあってな。……ラーシエナはいないようだな」

「ええ、最近はカファルーやエヴリーヌさんと共にいますよ。お呼びしましょうか？」

「そういえば最近一緒にいるのをよく見るな……仲良くなつたのならそれはいいことだ。」

「今度迷宮に行くときは一緒に行かせてもらおうかな。迷宮を広げるのはいいけど、そこらにいる魔獣の数が多くてメンドイんだよ。弱いけど。」

「いや、むしろいい方がいい。あいつがいると騒ぎになりそうだからな」

俺はそう言いながら、異空間からあるものを……『核』を取り出す。

三神戦争のときに見つけた、七大魔王の神核が一つに融合(?)した物だ。あれから数千年経っているのにも関わらず、覚醒する前兆すらないので、パイモンに何か教えてもらおうと思ったのだ。そんなことに詳しくそうだったし。

「それは一体なん……これは、ルシファー様、ですか？」

「惜しいな。これはルシファーを含めた、あの七柱の残滓ざんし。その融合体だ。あの宮殿にあつたんで持ってきたんだが、目覚める気配が全然ないんだ。お前ならその理由がわかるかと思つたんだが……どうだ？」

核をパイモンに渡す。途端に様々な術式が現れては消えていく。どうやら解析などを行っているらしい。俺の頭ではこういうのは理解不能だ。

「……これは推測ですが、七柱、それも強大な力を持つあの方々の一つとなってしまうたことによる、力の暴走のようなものだと思います。七つの力と精神が拮抗し合い、再生を妨げている状態ではないかと」

「……それじゃ、これをまた七つに分離できれば回復するかもしれないってことか？」

「いえ、それは不可能でしょう。拮抗し合っているとはいえ、もはや融合してしまっていることに変わりはありません。一つの生物を七つに分けても、元の方々には戻らないでしょう。非常に惜しいことですが、」

「そうか……」

ちなみに、「何で『腕』で治さないのか？」という質問は受け付けない。作者と小説の都合とだけ教えておく。

ハッ!? 何か電波が……

「相も変わらず、凄いですね、ゼアノス様」

「はは、ありがと。ラーシエナにはまだ秘密にしておいてくれ」

「了解です。……一つお聞きしたいのですが、あの方々を復活させられた暁には、貴方様は何をなさるおつもりですか？」

「今の所は無計画。それはその時になつてから考えるさ。……ああ、それと最後に一つ教える。熾天魔王ルシファーと、地獄魔王サタン。まさかとは思うが、あいつらは……同一の存在か？」

突拍子もない質問だが、これは結構重要な話だ。というか、俺が何千年も前から疑問に思っていた事だ。あいつらの雰囲気似すぎていて、何度も間違えそうになつた。

「……よく、おわかりになりましたね。その通りです。その経緯は私も知りませんが、あの御方は、ルシフェル様は堕ちた際に、二つになりました。片方は我ら堕天使を導く存在に、もう片方は地獄を管理する存在に」

パイモンはそこで一度止め、何かを思い出すような顔をする。

恐らく、墮天した時のことを思い出しているのだろう。

「その内、より傲慢となられたのがルシファー様。より憤怒を起こしやすくなられたのが、サタン様です」

「やはりそうか……姿は似ていなかったが、雰囲気アレだからな。前々からそうじゃないかと思っていたんだが、ありがとう、スッキリした」

これ以上聞きたいことは無いので、このヴェルニアの楼を回ることにする。未だに迷宮の内容が覚えられない。ブレアードめ、これは広すぎだ。

「やはり、貴方様は変わりませぬ。あの時から、何も」

最後にそう言われたが、俺には聞こえていなかった。

ヴェルニアの楼を探索していると、グラザとカフラマリア。そしてゼフィラが一ヶ所に集まっていた。何か話してるのかと思ったが、どうやら違うらしい。

「おのれ貴様ら！ 我のことがわからぬと申すか!？」

「わからぬも何も、貴様のような奴は見たこともないわ!」

何か、ちっこいのとゼフィラが言い争いしているように見える。というか、あの小さいのは一体誰……って、は？

「おお、ゼアノスではないか！ お前なら我が誰かわかるだろう!？」

「ゼアノス……お前は、こいつのことを知っているのか?」

俺に気付いたらしく、小さいのが寄ってくる。

ゼフィラはゼフィラで、グラザがいる時だけ今までと違った感じで話してくる。あの戦争以来ずっとこんな口調だ。それまではあんな不遜な態度だったのに、急に変わったから当初は驚いた。今はもう慣れたけど。

「……………」

「まさか、貴様も我がわからんのか!？」

「いや、どうしたらこうなるのかと思ったただけだ。何があつた? ……ディアーネ」

俺の言葉に、ちっこいの……ディアアーネ以外の顔が驚愕に染まる。

魂が変わらないからディアアーネだとわかったが……普通なら無理だな。こんなに背が違うのでは、わかれと言う方が無茶だ。あまり姿は変わってないけど、わかりにくい。

あ、今更だけど何故か俺には生者の魂が見える。やろうと思えば、死者のも見えると思う。

「な、これが……ディアアーネだと?」

「さすがゼアノス、我と交わっただけのことはある! やはり我の下に来ぬのは惜しいぞー!」

「……で? 何故そんな姿をしているんだ?」

「……だ」

「はいやいでいた先程とは違って意気消沈した雰囲気と言ってくるが、身長だけでなく、声も小さくなってしまい、聞き取れない。」

「全く聞こえん」

あ、グラザ。俺の気持ちを代弁してくれてありがとう。

「だから! 力を使い過ぎてしまったのだ!!」

それだけではよくわからないので、さらに詳しく聞いてみる。

要約してみると、魔力を使っていつもの身体を維持してきたが、使い過ぎて魔力の残

量が空になった。となると維持するための魔力も無くなるため、身体が縮んだ……と。

……うん、かなり魔力減ってるな、こいつ。

「ということは、この姿がお前の本当の姿ということか？」

「ぐぬっ！ そうでは……ない」

微妙な間の後に否定するディアーネ。

しかしそれでは肯定してるのとあまり変わらない気がするが……

「魔力が少なくなっているというのなら、供給すれば直るのか？ もしそうならば供給

してやるぞ？」

「本当か！」

「嘘は吐かん。ただ、寝るのだけは勘弁させてもらうぞ。その姿ではヤル気が起きない」

「なんだと!？」

当たり前だ馬鹿。レヴィアタンもそうだったが、俺をロリコンにする気か？

さすがの俺もそこまで落ちぶれる気はない。

「ぐぬぬ、ではどうしろというのだ？ 元に戻るまでこの姿なのは屈辱的だぞ!？」

「知らんがな。ブレアードにでも頼んだらどうだ？」

そう言つて俺は踵を返す。後ろで何か叫んでくるが知るか。この前勝手に俺を襲つたこと、まだ許しちやいない。あいつの所為で……トラウマが……色欲魔神デウスモデウスにやられた

ことを思い出しちまったんだからな!!

「で、あいつは結局パイモンに直してもらったわけか」

「はっ。どうやら、パイモンの術により魔力を供給したようです」

「相変わらず、パイモンはすごいな。俺はそういうのは専門外だから全くの無知なんだよなあ。知ってても助ける気ゼロだけど。お前はどうか、ラーシエナ。できるか？」

「いいえ、我にもできません。パイモンはかつて、ルシファー様直属の四方の王でありました。確か、西方の王でした。恐らくその際に、他の三柱と共に学んだのかと」

四方の王。それはかつてルシファーの領地の四方を支配していた者達の総称だ。

それはパイモン、オリエンス、アリトン、アマイモンの四柱。

ラーシエナは俺よりも年上だが、パイモンはさらに上だ。なんでパイモンがこんなにも微妙な序列にいるのか、正直謎だ。

「なる、そういうことか。……ところでラーシエナ、ちよつとこつち来い」

「は？……わかりまし……」

近くまで来たラーシエナの頭に手を置き、昔のように撫でる。……この鬨気と魔力。あのころとは違い、かなりの力を身に着けたようだ。

「な、何をするのですか!?!?!」

「はは、お前らはほんとに変わらん。お前も、パイモンも」

「それならば、ゼアノス様も変わりませんよ。そのお顔もですが」

「そこはほっとけ。正直好きじゃねえんだよ」

不貞腐れたように俺がそう言うと、ラーシエナが笑った。そんなにおかしいか？

「そうだったのですか?」

「そ。……アイドスやアストラライアにも間違えられたし」

「……それは女の名前ですよね?」

ん? 何か不機嫌のような……

「ああ。仲良くなった古神の姉妹だ。俺が凶腕だと知っても、態度を変えずに接してくれた良い奴らだよ」

「……そうですか」

何だろう。拍車が掛かってさらに悪化してる気がする。こいつの地雷でも踏んだか

?

「それはそうと、お前、どれだけ強くなった? 今度見てやる。パイモンと一緒に、それ

とも個人ですか、どっちがいい?」

「本当ですか! それでは、一対一でお願いします!」

「おう。ああ、それともう一つ。その丁寧語やめろ。聞いてて痒くなる。他の奴らと同じように様付けも無しだ」

「で、ですが貴方様は」

「言葉」

指摘すると口を閉じた。

どうやらかなりの葛藤が頭の中で繰り広げられているようだ。既に頭から湯気が出てきている。これは時間が掛かりそうだな。

1分。5分。10分。30分。1時間。……

長え、長すぎる。いつまで待てばいいんだ？

「わ、わかり……うう」

やっと了解したのにまたしても言葉が直ってない。しかし今の「うう」は可愛かったな。またやらないかな？ もう一回見てみたい。

「わかった、ゼアノスさ……ゼアノス。……これでいい、か？」

「ああ、今はそれでいい。後は慣れる。そうすりや勝手に言えるようになるさ」

「それまでにかかなりの時間を費やしそうだがな。……うう、やはり違和感が……」

はい、二回目の「うう」いただきました。ごちそうさま。

しかしラーシエナの言う通り、時間が掛かるなごりや。違和感ありまくりだ。

とはいっても、何回か一緒に迷宮に赴けば慣れてくるだろう。そうすれば鍛錬も同時にできるし、都合がよさそうだ。

「おし、んじや今度から迷宮に行くときは俺に声を掛ける。鍛錬とその口調の調整も同時にできるからな」

「はい、わ……………了解した」

……………何？ この必死さは。……………メツチャ可愛いんですけど。持ち帰っていい？

ラーシエナの言葉遣いを直す練習をしていると、ブレアードから直接心話がきた。

心話というのは、テレパシーのようなものだ。

内容は簡単で、要は「儂の所へ来い」というものだった。居場所もわかったので、ラーシエナに一言断ってから闇の回廊で移動する。

「……………来たか」

「呼ばれたからには来るさ。……………ってお前もいたのか、ザハーニウ」

ブレアードの所へ行くと、ザハーニウまでいる。さて、何だろうな？

しかもブレアードが創った合成魔獣までいる。それは俗に言うキマイラ等ではなく、ブレアードが独自に創り上げた魔獣だ。

「貴様は凶腕の部下でもあったな？ 凶腕の支配地であり、魔力の供給に適している場

所を知っているのならば教える」

「それを何に使うのかは知らんが、一つだけ心当たりがある。レスペレントの南にあるオウスト内海。その海中には、かつて魔界王子ベルゼブブが君臨していた宮殿が沈没している。三神戦争の戦時中に沈んだが、やろうと思えば見つけられるだろう。そしてそこは、今では凶腕の宮殿といってもいい。勝手に住み着いていたしな」

わかると思うが、これはベルゼビュート宮殿のことだ。今では俺の家だし、間違いではないだろう。

……ベルゼブブに了解は取ってないけど、いいよな？

「そのような場所にあるのか……ゼアノスよ、貴様はこれからそこへ向かい、私とその宮殿を接続しろ。必要ならば凶腕の許可も取るがよい。さすがに奴を相手にするつもりはない。それと戦力があるならば、こいつらも連れて行け」

あ、魔獣こいつら達はそれでここにいろわけね。

要は、ブレアードと宮殿でパスを繋げればいいんだろ？ そのくらいなら簡単だし、下手な準備もいらぬ。海に潜るのが面倒なだけで。

というか、現神に喧嘩売ってるくせに俺おれとは戦いたくないってか？ 伝承つてのも怖いな、おい。

「別に許可なんぞなくとも大丈夫だろ（だって俺だし）。宮殿を探すのは面倒だが、その

任務はしかと承うけたまわった。……で、ザハーニウは何故ここに？」

「儂は御主とは違い、神の墓場と現世を繋ぐ門となつてゐる。御主の任務が成功したのち、儂が神の墓場への門を開いて新たな魔獣を創るとのことだ」

ああ、だからここにゐるわけね。

「そうか。あとブレアード、そいつら、魔獣共はいらん。もしかしたら、ベルゼブブの残党がまだいるかもしれない。万が一いたら、侵入者と勘違いされてそいつらと戦わなきゃならん可能性もある。それは避けたい」

あの時は気配を探つても見つからなかつたが、もしかしたらいたのかもしれない。死に掛けてたら、気配なんかわからないからな。

「……いいだろう。では行け」

「了解」

かくして、俺は懐かしの宮殿に行くこととなつた。

—凶腕と墮天使と輪廻神—

ブレアードの命令で、俺はベルゼビュート宮殿に来た。それと同時に溺れかけるといってもマヌケなことをしたのは誰にも教えるつもりはない。

いや、水圧が凄かったわ。こりや人間なら死んでたね。海の中だということはおわかってたのに、頭から抜けていた。まずは空中に浮かばせないとな。

「今なら誰も見てねえし、『腕』を使っても問題ないよな……?」
 ということで、

—— モンスターカード、『凶腕のゼアノス』の効果発動!

フィールド魔法『沈没のベルゼビュート宮殿』を破壊して、『浮遊せしベルゼビュート宮殿』をセツト!

さらに『大魔術師ブレアード』に魔法カード、『マジックコネクション』を装備!

これにより、『大魔術師ブレアード』の効果発動!

『大魔術師ブレアード』と『浮遊せしベルゼビュート宮殿』がフィールド状に存在する限

り、『多種の合成魔獣』及び『神の墓場の怪物』を、一ターンにそれぞれ一体ずつ特殊召喚できる！——

よし、任務完了。

ふう、満足満足。

.....

鬱だ。

「はあ。俺、生きる価値が無え……」

「突然何を仰っているのですか？　このような大業を、御一人で成し遂げたというのに」

「……パイモン、何でいるんだ？　それにラーシエナも」

俺が鬱っていると、パイモンとラーシエナが転移してきた。

ブレアードには、宮殿は海中にあると教えたからパイモンが来るのはわかる。浮上させるための魔術とか知ってそうだし。でもラーシエナがいる意味が分からん。

「私はゼアノス様の手伝いをするよう命令されたので来たのですが……必要なさそうで

すね。ラーシエナさんはゼアノス様に用があるそうです、詳しくは聞いていないので知りませんが。……私は先にヴェルニアの楼へ帰還します。ここにも意味がなさそうなので」

一方的にそこまで言うのと、闇に溶けるように消えていった。いつもの転移だ。

……というか、もう少しは俺にも何か喋らせるよ。

「それでお前は何の用だ、ラーシエナ？」

「ここならば、誰にも邪魔されずにゼアノスさま……ゼアノスと一対一で戦えると思つてな。我がどれだけ強くなったのか、早速見てほしい」

ここに来る直前に言つたあのことか。結構気が早いなだな、ラーシエナつて。

つーかやつばあれだな、わざわざ名前を言い直してさ、めっさ可愛いわ。

「そうだな……でもまずその前に、久しぶりなんだからここを散策しようぜ？」

「……そうですな」

「おい、口調」

「いえ。ここにいる間、我は深凌の楔魔としてではなく、貴方様に憧れた一柱の魔神です。ここは我にとつて思い出深い場所ですから、大目に見てはくれませぬか？」

そう言われるとかなり気恥ずかしいんだよなあ。だから様を付けられるのも嫌だったわけだし。でも、そこまで真剣に言われると断りにくい。

「わかった。ただ、これが終わったならその口調は……」

「重々承知しております。ですが」

「慌てるな、わかっているならいい。それにしばらくしたら、軽い模擬戦でもしてやる」

「はっ！ よろしくお願ひします！」

この会話の直後、俺らは隅々までこの宮殿にかつての生き残りがいないか調べた。親しくなった奴らはいなかったが、魔王達の部下らしき魔族を見つけた。

主に上級悪魔のグレーターデーモンや、火を吐く三つ首の蛇であるフレイムヒドラ。人狼という言葉が相応しいヴェアヴォルフ。スウーテーターという種類の褐色の睡魔族や、キマイラの上位種であるグロウ・キマイラなどがいた。

どうやら、宮殿が沈む頃は死ぬ直前だったそうだ。だが海に入って周りからの脅威もなくなり、徐々に体力をつけていったらしい。

俺、結構探したと思うんだけどなあ。あの時はなんで見つからなかったんだろ。

それと他には、どこから来たのか悪霊が大勢いた。

オウスト内海付近には、亡霊が大量に佇たまたんでいる海峡があった。おそらくそこから流れているのだろうが、特に気にしない。俺に逆らう気はなさそうだし。

そして、現在は最深部。すなわち玉座の間に、俺達はいる。

「……懐かしいな。初めてここに来たとき、ベルゼブブと戦ったんだっけ」

「そのようですね。そしてそれから、ルシファー様やサタン様。全ての魔王様方とも戦い、ゼアノス様は勝利。一対七という不利な状況においてもそれは変わらず、勝利を取めました。我は、貴方様のその強さに憧れていました。無論、それは今も変わりありません」

その声に振り向けば、はつきりと、まるで臣下のような態度をとりながら俺にそう言ってくるラーシエナ。その目は相も変わらず綺麗で、嘘偽りのないことがわかる。これは、彼女の本心なのだろう。

「パイモンが言ったことですが、我も同意したことが一つございませぬ。……ゼアノス様。この戦争が終わり次第、どうか、我らが王になつてはいただけませんか？」

「……王？」

「はっ。……今この世は現神により、闇夜の眷属にとつて非常に生きにくいものとなつてしまいました。ですから、それを導く御方が必要なのです」

それは確か、原作でも言つてたな。……イレギュラーである俺がいるせいなのか、王を求める態勢が少しばかり早い気がする。

闇夜の眷属というのは、簡単に言えば魔族のことだ。ただし、他の魔族と比べて理的であつたり、秩序を重んじていたりしているのが特徴だ。

闇夜の眷属を名乗っている者にとっては、魔族という言葉は蔑称にあたるらしい。俺

はその辺を全く気にしないからわからないけど。

「だったらブレアードにでも頼め。あいつならやつてくれるだろう。何せ、今まさにそのことで戦争をしているのだから。それに、俺は王になるつもりはない。……少なくとも今はな」

「あの魔術師より、我はゼアノス様の方が明らかに向いておられると思うのですが……了解しました。気が向いたらお教えください。我等にとって新しく主となる御方は、貴方様以外は考えられませぬので」

「……考えておく」

王、か。

さっき言った通り、今はなるつもりはない。だが、原作が終わった後……もしくは、あの程度進んだあたりなら、なつてもいいかもしれない。俺をこのように慕ってくれる者がいるのなら。

……単に俺が乗せられてるだけか？ いや、パイモンならまだしも、ラーシエナがそんなことをするとは思えないな……。

「はい、今は考えてくださるだけでも僥倖です」

心底ほつとしたような、安心したような顔。俺が完全に断ったわけではないので、脈はあると思つたのだろう。

— 十六夜 // 斬 // —

横一直線を薙ぎ払う、豪快な斬撃。

だが所詮は直線なので、攻撃を防ぐのは簡単だ。剣を盾代わりにして受け止める。

— 十六夜 // 突 // —

防がれたのを見て、瞬時に攻撃手段を変えた。それは良い。だがこの技は、縦一閃を貫き通す精密な突撃技だ。受け止めるまでもなく、横にずれればいいだけ。

— 十六夜 // 破 // —

縦に攻めて来る斬撃を横に避けた俺を見、ラーシエナが次に放ったのは、一点集中で繰り返し斬撃を放つ技だった。一ヶ所に無数の斬撃が放たれる。

手加減のためにリミッターを付けている今の俺では、回避するには間に合わない。かといって受け止められる自信もない。

だが、問題ない。

回避も守りもできないのなら、相殺すればいい

— フルブラッシュ —

かつて三神戦争の際、マーズテリアに向けて放った斬撃とはまた違った技。

具体的に言えば以前のブラッシュよりも、飛距離・威力が増加した技だ。

あの時はリミッターなど付けていなかったもので、今の方が威力は低い。だが、それで

も相殺するには充分だったようだ。

ラーシエナと俺の技がぶつかり合い、その衝撃で軽い余波が生まれる。

「手加減をしているとはいえ、俺の攻撃と同等か……強くなったな」

「それは恐悦至極です。……はあっ！」

無駄な会話は直ぐに終わり、再開される剣劇。

今度は互いに技は使わず、純粋な剣での打ち合い。

俺の柔とラーシエナの剛。場合によっては先程の技のように、俺はこれに剛剣を加えることも出来る。だが今は思いっ切り柔剣の気分だったのでそうした。

ガキン！ キン！ と、金属同士でぶつかった音が響く。それは永遠に続くかと思われるほど綺麗な音だが、それでも終わりは必ず来るものだった。

俺はラーシエナの剣を弾き、首に剣を置く。

「やはり、お強い。我が手も足も出ないとは……自分では、強くなったと思っていたのですが」

「お前は強くなったさ。それに俺らは互いに飛んでないし、魔術も使っていないからな。戦略の幅をもう少し上げとけ。俺が使っていないからといって、お前がそれに合わせる必要はない」

ちなみに、俺がこの模擬戦を止めたのには理由がある。打ち合っていた最中に、気配

を感じたからだ。突然この宮殿に、魔神のような気配が。

「ゼアノス様、これは……？」

「気付いたか？ ああ、これは……はぐれ魔神、だな」

はぐれ魔神。それは秩序など関係なく、自分の思うがままに、まるで獣のように世界を徘徊している魔神達のことだ。

決してド○クエに登場する、溶けかけているメタルっぽいスライムの一種ではない。

そう考えると俺ってつい最近まで、はぐれ化してなかったか？

「まったく、一体どんな馬鹿だ？ こんなところに来るの……は……」

「ゼアノス様？」

この部屋に來たはぐれ魔神を見て、ついつい言葉を失ってしまう俺。

しかたないだろう、だって、こいつは……

「ゼアノス様？ 先程から如何なさいましたか？」

俺を氣遣ってくれるラーシエナ。だが今はそれよりも、目の前にいるこいつ。

肌が青く、銀色っぽい白色の長い髪。目元には貴族が付けてそうな、目を隠す形をした金色の仮面。下半身の大半は触手であり、足が見えないほどに覆っている。

それは神核が破壊されようが、時間が経てば蘇る能力を持つ魔神、ラテンニール。

別名『輪廻神』。何度殺しても蘇るその様から、そう名付けられた。

ある意味、どの神よりも神らしい能力だ。

「俺の……」

長年追い求めていたその魔神が今、俺の目の前に！

はは、この急展開！ 運命の女神がいるのならば祈ってもいいぞ！ それがたとえ現神だろうとな！

「俺の使い魔になれやあああああ!!!」

ラーシエナが困惑しているのも知らず、勢いよく斬りつける。無論、死なない程度に。

瀕死の状態になるように。そして回復させ、またしても斬る。

斬って回復して斬って回復して斬って回復を何度も繰り返す。

「……………ゼア、ノス……………様」

周囲の魔族に命令し、なぶ 廻る。

俺が下がればそいつらが攻撃し、俺が前に出ればそいつらが下がる。

「ふははははははははははは！ 粉碎！ 玉砕!! 大喝采!!」

粉碎と玉砕は今俺がしていることそのもの。大喝采は周囲にいる魔族の声。

約一名の墮天使がポツンと立っているが、それは気にしない。俺のすべき事は、ラテンニールいっを肉体的にも精神的にも負けを認めさせることだ。

現神ですら完全に殺せないことから、精神力は魔神の中でも最上だろう。何度も殺さ

れているのにもかかわらず、人を襲っているのだから。

つまり、殺されることに慣れているということだ（たぶん）。だから、必要以上に力の差を教えなければ意味がない。自分から服従するようにしなければだめだ。

その為に、もつと、もつとだああああ!!

S i d e ・ 第 三 者

それから数時間後。魔族の攻撃が弱いので不参加にし、ゼアノスは一人で廻り続けた。

内海付近に住む村人の話によれば、海の奥からは女の悲鳴のような音が聞こえ、しばらくしてから止み、その後どうなったのかは誰も知らないとのこと。

ゼアノスと一緒にいた女の墮天使は、

「あの御方の、あのような姿は見たくなかった」

と言ったが、それを聞いた墮天使仲間（バイモモン）はより一層、かの者に自らの闇の王になって欲しくなったらしい。

ちなみに、

「あのことは反省してないし、後悔もしていない」（キリッ

というのは、それをやらかした本人の談である。

そしてその後、深凌の楔魔として行動している際、ラーシエナからの敬語が一気に無くなったというのは、割とどうでもいい余談である。

—決戦……の直前—

「……は？ デイアーネ、今なんつった？」

「ゼフィラの馬鹿が封印された、と言ったのだ」

皆さん、おはこんにちばんは。ゼアノスです。

最近ラーシエナが敬語を使わなくなり、嬉しいと同時に悲しくなってきたゼアノスです。

いや、二人きりや一緒にいるのがパイモンだけなら敬語になるんだが、そこから口調を直すのに苦労しなくなったみたいだ。

しっかし、ゼフィラの奴は封印されちゃったのか……ほとんど原作覚えてねえし、そのことも忘れてた。

「何故にあいつが封印されたんだ？」

「お前とラーシエナが任務でどこぞに出かけている際に、またしても戦があつてだな。それ自体は我としても嬉しいのだが、エヴリーヌが独断で攻勢に出たせいで、拠点に

籠っていた奴が逃げられずにやられた、ということだ」

……エヴリーヌ、お前か。

というか第二回戦、もう終わっちゃまったわけ？ 兵力が少ない時に何やってんのさ。

しかし、いやいやスマンスマン。ラテンニールを調きよ……もとい懐柔するのに案外苦労したんだよ。おかげでラーシエナが暇そうでさ、ブランシエを呼んで模擬戦の相手にしてたんだ。あいつも剣で戦うのが主体だからな。

ラテンニールはどうなったかって？ もち俺の使い魔になったよ。輪魔神喚石っていう、使い魔を呼び出す際に必要な召喚石も手に入れたしな。

これからも使い魔は増やすつもりだ。

「んで、そのエヴリーヌは？」

「先ほどラーシエナ、そしてカファールと共に、迷宮を広げに行つたわ。ブレアードめ、今度こそあの忌々しい姫神を倒すらしい。それ関係だろう」

「あいつ自体は無事なわけね。……で、グラザ。お前は何の用だ？」

「ここにいるのは、俺とディーアーネだけではない。さつきからグラザもこの会話に参加している。まだ一回も口を開けてないが。」

「なに、エヴリーヌ等のように、迷宮へ行く気はないかと思つてな。ゼフィラには悪いが、あいつのように封印されるのは御免だ。だから少しでも力を、とな。そこでお前を

誘おうとしたら、ディアーネと途中で会っただけだ」

「ああ、そういうこと。……ゼフィラのこともあるし、気晴らしにもなるから俺は構わな
いけど。そうだ、お前も来ないか？ ディアーネ」

「……ここにいるのも、我以外にいるのはザハーニウ、カフラマリア、パイモンだけ、か。
……いいだろう、お前らと共に行った方が面白そうだ」

一応は決定。

というかこいつらを含め、深凌の楔魔つて個性溢れてるよな。ザハーニウとラーシエ
ナとパイモン。そして俺の四柱は、他所からブレアードに召喚された魔神だ。ところが
他の六柱は、元々はブレアードに創られた魔神だと言うから驚きだ。

どのような方法を使ったのか定かではないが、魔神を創るというその知識と技術。も
しかしたらあいつは、良くも悪くも創造神が唯一人間だけに与えし力、『運命を切り開く
力』を開花させた人間の一人なのかもしれない。

話が逸れたが、同じ人間に創られたにも拘らず、性格が全く違うから面白い。人間で
いう兄弟（姉妹）と、大して変わらないのかもしれない。

……ディアーネとゼフィラは仲が悪すぎだったが。

というところで俺らは今、雷嵐らいらんの闇堂あんどうという大回廊にいる。

ここはブレアード迷宮や、海雪の間かいせつという迷宮に繋がる回廊、そしてヴェルニアの楼を結んでいる大回廊である。

その構造は城のそれに近い。むしろ城の地下だと言われれば、信じられるほどの出来だ。

ここは様々な場所と繋がっているので便利なのだが、面倒なことに、ここでは数多くの魔族が棲み付いている。もちろん俺らの傘下ではない魔族だ。

「……こんな有象無象だろうと、暇潰しにはなる、か」

そんなディアアーネの呟きを置いて、グラザが駆ける。ディアアーネはそれに続き、俺は後ろでサポート。よく見る光景だ。

一番多いのは、俺とラーシエナとパイモンだけだな。

「……だがこれならば、ブレアードの命令を受けていた方が幾分かマシだぞ。つまらぬ」
「文句を垂れるな。ならば直々に言ってい」

おお、ポケーっとしてたらいつの間にか終わってた。

というかディアアーネだけじゃなくてグラザもかなりイラついてない？ どうした？

つて、あーあー、何か戦い始めた。あれ、喧嘩ってことでもいいのか？

……タイミングよくブレアードから心話が来たし。つーかあいつら、心話に気が付いてねえ。どうしよう。

1、今から声に出して教える。

2、戦いを中断させてから教える。

3、俺も戦いに参加する。

3は無いな。というかそれはおかしい。

となると俺の答えは……

……。

「4、知らぬ振りをして俺だけで帰る」

これだな。これしかないだろ。

歪の回廊で転移。あいつらがいつまで戦うのかは知らんが、どちらも原作に出てきた気がするし、大丈夫だろ。

……あれ、どっちも出てたっけ？ 少し不安。

☆

ここは地下100階まである火炎の迷宮、野望の間。ブレアードが二番目によくいる場所でもある。一番いるのはヴェルニアの楼。

「こんな場所に呼び出して、何の用だ？」

「貴様に命じた宮殿と私の接続に関することだ。あの宮殿は目立ち過ぎる故に、いつか必ず姫神に気付かれる。そうなる前にあの宮殿を再び海の中へ戻せ。我との魔力の接続は維持したままでな」

「随分と面倒なことを。……この水晶か？」

玉座のような椅子に座り、淡々と俺に命令してくる。いやはや、誰かに命令されるのは別にどうでもいいが、ここまで高圧的だとさすがにイライラする。

というか、今まで気が付かれていないというのに驚きだ。

水晶とは、その玉座の近くにある柱の上に置かれている物だ。どうやらブレアードは、この水晶を使って宮殿の魔力を供給しているらしい。

「その通りだ。決戦の日は近いが、勝つ確率を上げるためだ。早急にやれ」

「了解だ」

この戦争も、もう少しで終わりを迎える。

一回戦目は敗退し、二回戦目はいい所まで行ったものの、ゼフィラが封印された。そして、今度は第三回戦。

二度あることは三度ある、になるか、三度目の正直になるか。それは誰にもわからない。

……俺は知ってるけど。

で、そんな任務も終わって現在。

「それでは、宮殿はまたしても海中へ？」

「そうだ。ブレアードによれば、姫神フェミリンスに気が付かれる前に対処しておきたかったらしい。その判断は間違っではないと思うが、折角俺が浮上させたのにさ、まったく。……んで、あの馬鹿共は見つかったのか？ ラーシエナ、パイモン」

「……それが、まだ見つかりません。カファルーも配下の魔獣と共に探しているようなのですが、未だ何も発展がありません」

「あはは、私もそれは同じです。一向に見当たりません。人間に倒された、というのは無いと思いますが……本当にどうしたのでしょうかね、グラザさんとディアーネさんは」

グラザとディアーネ。そう、俺があそこに置いて行つた魔神×2が、現在行方不明となっている。もう少し経つたら決戦だというのに、あいつらはあれ以来、姿を見せるどころか気配すらない。

迷子なんてありえないし、まさか今もずっと喧嘩しているのか、とすら思ってしまう。というか何も音沙汰ないので、実際にどうしているのかなんてわからないが。

「はあ……」

「そ、そのゼアノス様。仲の良かった者が同時にいなくなり、落ち込んでしまうのもわかりますが……」

「ん、ああ大丈夫だ。落ち込んではいない。……一応、心配はしているけどな」
ラーシエナの言った通り、俺は特にあいつらとは頗る仲が良かった。

グラザでいえば、男同士ならば初の親友だと言っても過言ではないと思う。ディアーネとも、結構仲がよかつたりする。

「これであいつら、今までずっと殺し合^{ケンカ}いしてた、なんて言いやがったらどうしてくれようか」

「それは……ないと思いますけどね。ディアーネさんとゼフィラさんなら在り得ますが、あの剛毅なグラザさんがそのような行動に出るとは」

「我もパイモンに同意です。グラザは芯のある男。ディアーネが下手に挑発しても、それに乗るとは思えませぬ」

いや、むしろあの時はグラザが挑発したような……あゝ

「そうかもしれないが、一応それも考慮しておいてほしい。あいつらが暴れたとなると被害は甚大だ。戦争にも悪影響になりかねない」

「はっ。了解です」

「かしこまりました」

なんかこうしていると、本当にこいつらが俺の部下みたいになってるよな？ 実際は

違う……はず。

— コツン、コツン —

と、誰かが近づいてくる気配。

敵意はないので、今まで特に気にしてなかったが……

「あ、お兄ちゃん見つけた」

「ん？ エヴリーヌだったのか、どうした？」

トテトテと歩みながらこちらに来たのは、俺の妹分と言ってもいい唯一の魔神、エヴリーヌ。戦いの時と今を比べると、それこそ天と地ほどの差がある。戦ってる時は、そんな歩き方などせず、鋭く、そして素早く縦横無尽に動いて相手を翻弄している。

このトテトテ歩きが見れるのは、俺とラーシエナとパイモン、そしてザハーニウ限定だ。

エヴリーヌから言わせれば、

俺↓お兄ちゃん

ラーシエナ↓呼び捨てだけどお姉ちゃん的存在

パイモン↓もう一人のお兄ちゃん

ザハーニウ↓お爺ちゃん

らしい。

ラーシエナも、エヴリーヌのことを妹のように思っているようだし、互いに良好な関

係と言えるだろう。

ん？ 年齢的に考えると……

祖父Ⅱザハーニウ

長兄Ⅱパイモン

長女Ⅱラーシエナ

次男Ⅱ俺

次女Ⅱエヴリーヌ

になるな、面白い。

……今考えると、俺って年上に様付けで呼ばれてるんだな。

それにしても、見事に全員召喚された魔神だ。ブレアードに創られた魔神が、この中に誰もいない。むしろ召喚された魔神全員がここにいる。あれか、年の差か？

とはいえ、こいつらも被創造種。つまり創られた側だが、生まれてから最低百年は経過しているはずだ。さもなければ、こんなに早く戦いに対応できるわけがない。

「なんか、爺じいが呼んでる。ラーシエナとパイモンお兄ちゃんも」

ちなみに、『爺Ⅱブレアード』である。どうやら見た目からこの渾名が決まったらしい。

同じ文字を使っているが、ザハーニウは『お爺ちゃん』。ブレアードは『爺』。実際に

孫にそう言われたら、祖父にあたる者は相当シヨックを受けるだろう。

哀れ。昔はブレアードも、見た目は好青年だったろうに。……性格？ 知るか。

「ふむ、ブレアードが我らを呼んでいる、と。もしや、またしても戦か？」

「まあ、彼が我々を召集するとなれば、内容は大体そのようなものでしょう」

そして墮天使達も、その呼び方で誰のことなのかわかってしまう。というか深凌の楔魔の皆に通用してしまうから不思議だ。明らかに俺達の方がブレアードよりも年上なのに。

そしてヴェルニアの楼の最奥へ行ってみると、封印されたゼフィラ。行方不明のグラザとディアーネ。そいつらを探しに行ったカファール。この四柱以外が集まった。

「……何で魔神が五分の三しかいないんだよ」

「ゼアノスさん、それはですね「理解してるから言わなくていい」……わかりました」

深凌の楔魔として、ラーシエナが俺に敬語を使わずに話をするように、パイモンは俺のことを『ゼアノスさん』と呼んでいる。理由はラーシエナと同じだ。ただこいつは誰にでも敬語だから、ここまで譲歩してもらった。

「それで、これから農らはどうすれば？」

ザハーニウがブレアードに問う。

「今までと変わりない。迷宮を駆使し、姫神とその下における天使を蹂躪するまで。……いくつか魔神が減つたようだが、それは神の墓場より生まれしこいつらで補充できるだろう。我が迷宮もさらに広大となり、勝てる要素は充分ある。そして終いには、あの力をも我が物に……！」

人間を優遇し、庇護し、溺愛し、魔族を虐げた姫神フェミリンス。そんな女神を嘆いた、時空の女神エリユア。その嘆きの声を聞き、闇夜の眷属を創り上げし者。それが大魔術師、もしくは魔人ブレアードと呼ばれる、今俺の目の前にいる元人間。

憶測に過ぎないが、かつては『闇夜の眷属を救いたい』。恐らくそれだけの思いでいたのだろう。

だが闇の神の力を借り、授かり、貰い、彼は変わっていった。

彼の願いが、『闇夜の眷属を虐げる者への反逆』から『人から神へ』というものに変容したのだ。その、人間には出来過ぎた力に溺れて。

だが俺はそれを非難するつもりはない。哀れむつもりもない。所詮それはそいつの人生なのだから、それを馬鹿にするのは、本人以外はしてはいけない。

たとえ願いが変容しようとも、彼は自分のやり方で、自分の考えでここまで来たのだから、褒めはしても非難はしない。

どんなに卑怯でも、どんなに外道であっても、自分の道を自分で決め、その道を進も

うと努力している奴は好感が持てる。道の先に、誰かの破滅があろうとも。

だから俺は凶腕ではなく、深凌の楔魔としてここにいる。

しかし凶腕としてはフェミリンスとは戦いたくない。『彼女』との約束があるわけだし。

さて、とうとう最終決戦の始まりだ。どうしようか……？

— 凶腕と姫神と約束と契約 —

フェミリンス戦争。もしくは解放戦争と、後の時代に呼ばれるこの戦争の第三回戦。それが丁度今、この世界にて二番目に大きい陸地、ラウルバーシユ大陸の中原北部。詳しくすれば、レスペレント地方にて、その戦争は起こっている。

二つ回廊の終わり、つまりこの世界が始まってから、俺の知る限り神が関わる三回目の戦争だ。

そして俺は、そんな戦争に参加している。前衛で。……何故だ？

「なあ、何で俺はここにいるんだ？ 普通こういうのは下っ端がやるんじゃないのか？」

「それは恐らく、ゼアノスが凶腕様の部下だと言ったためだろう。いざとなれば、あの方が参戦する、とでも思っているのではないか？ ……はあつ！」

「それって、前にパイモンお兄ちゃんが言っていた魔神のこと？ ……うっざいなあ、死んじゃえ！」

ラーシエナとエヴリーヌと俺で、姫神フェミリンスの本拠地であるフェミリンス神殿

に到達し、守護者や天使を相手取っている。

エヴリーヌが死んじやえと言ったのは、そいつらに向けてだ。口が悪いが、うざいというところは俺も同意だ。迷宮と同じくらい、敵の数が多い。

「そうだ。我はもちろん、ザハーニウすら敵ではないほどの力を持つ御方だ。フェミリンス以上に強き複数の現神を相手に、たった御一人で勝ってしまったのだからな」

それからも延々と続く凶腕への褒め言葉。それは止めてほしい、とてつもなく恥ずかしいから。というか俺の、本人の前で話さないでほしい。

「そうなの？ なら、来てもらえばよかったのに……何で呼ばないの？」

「……それは、だな」

エヴリーヌの当たり前の質問に口ごもるラーシエナ。

まあ、エヴリーヌはまだ詳しく知らないみたいだし、教えとくか。

「あんな、それは現神と約束をしているからだ」

「約束？」

「そう、約束。……ある意味契約、かな？ ……ともかく、その契約の内容の一部に、『現神と戦わない』というものがある。フェミリンスも現神だから、凶腕は戦いに参加できないんだ」

「勝てるならそんな約束、しなければいいのに」

はい、ごもつともです。でもそうしないと、この世界物語が終わっちゃうんだよ。大人の事情というやつだ。わかってほしいです、はい。

「あの御方は強かったが、それと同時に優しき魔神でもあった。現神にも慈悲を与えたのだろう。とても良き御方だ」

満足げにそう言っているが、俺から一つ言わせてもらおう。美化しすぎ。違うから。

「そうなんだ……どのくらい優しいの？」

「そうだな……ゼアノスと同じくらいだ。性格もよく似ている」

「へへ。じゃあ、とても優しいんだね」

そりゃ本人ですからね！ というかラーシエナもわかって言ってるだろそれ！



戦争というのは、たった一日で終わるものではない。何年も時間を掛けるのが普通だ。もちろんこの戦争もまた同じ。ブレアードが何年もの時間を掛けて準備し、それをフェミリンスが撃退してきた。つまり、今までは全部負けている。

しかし何度負けても、チェスや将棋と同じように駒が無くなるうとも、『王』が死ななき限り、戦争に終わりはない。もしくはどちらかが負けを認めるだけしか、終わる方法

がない。それが戦争というものだ。

そしてフェミリンスは言うまでもなく、ブレアードも負けを認めていない。いくら駒が死のうが、結局は王が生き残っている方が勝ちなのだから。

何が言いたいのかというと、今はあの会話から結構な日数が経った。それでも毎日俺らは戦いに参加している。

本拠地である神殿に辿り着くのはいいが、敵の数が数なのでいつも途中で引き返す羽目になる。しかも一体一体の質も高く、天使までいる。その上、最後には神であるフェミリンスがいるわけだ。少しは余裕を持つておかないと、死ぬことになる。

というか、

「いつになったら帰ってくるんだよ、あいつら」

未だにグラザとディアアーネが戻ってこない。つまりそれはカファルーもいないということであり、いくらブレアードが魔獣を創りだしても数には限りがあるし、あいつらと比べると弱い。天と地ほどの差とは言わないが、それに近い差がある。

とにかく、あいつらがないだけで戦略の幅が少なくなる。まあ俺が本気を出せば、戦略も戦術も意味を成さないのだが、フェミリンスとだけは戦いたくない。守ると言う約束をしているのに、戦うというのは論外だ。今まではあいつの部下しか殺してないからギリギリセーフ。……屁理屈？　アーアーキコエナーイ。

「それは私もわかりかねます。そろそろ帰ってきて頂きたいのですが……」
「無いものねだりしても仕方がない、か」

何故今頃になってこのようなことを言ったのかというと、最後の作戦が決まったからだ。

もしこれが失敗すれば、またしても戦争が長引くことになる。

その内容は、前回も今回も神殿に突入できたが、いつもそこで撤退しなければいけないので、逆にこちらに誘い込もうというものだ。

いやほんと、さっさと思いついてほしかったよ。何せあの神殿、崖の上にあるのだ。しかも無駄に高い場所があり、空を飛べない者は行くことすらできない。

「そろそろ、か？」

「はっ。作戦ではエヴリーヌが向かう模様です。……失礼、既に向かったようです」

「あいつだけで大丈夫か？ ……少し心配だな……パイモン！」

俺が呼ぶと、パイモンは理解したように頷き、姿を消した。

あいつの補佐をしてやってほしいと言うつもりだったのだが……言うまでもなかった。相変わらず、頭の回転が速い。おかげで助かる。

「ゼアノス様、良い知らせと悪い知らせがありますが……どちらからお聞きしますか？」
しばらくしてから戻ってきたパイモンの第一声はこれだった。

どっちも聞きたくないと言うのが本音だ。

「……良い方から頼む」

「はい、フェミリンスを誘い込むことに成功しました。現在多数の闇夜の眷属、及びザハーニウがこちらへ引きつけています」

「ザハーニウが？ ……エヴリーヌはどうした」

「それが悪い知らせなのですが……私が付いた頃に、フェミリンス神殿にて封印されてしまったようです。申し訳ございません」

そう言つて頭を下げるパイモン。

俺は「気にするな」と言い、皆と一緒に転移する。これから、ブレアードが姫神フェミリンスの力を奪うために戦おうとしているからだ。

約束があるので、俺は出来る限り戦わない。

姫神の先祖との『約束』と、ブレアードとの『契約』。

この二つを守るには、フェミリンス本人（この場合は本神？）とは戦わず、その部下の天使や守護者のみを相手にする。これが最低ラインだ。

そのことをラーシエナとパイモンに告げる。

するとラーシエナは余計に俺を気心があると美化し、パイモンは苦笑した。まあ、闇の王にはいらぬよな、そんな心は。

その後、静かになって敵の数も少なくなつた。そろそろ終わったかと思ひ、決戦の地としていたヴェルニアの楼最深部に向かう。

そこにはあまりにも予想外のことが起こつていた。

ザハーニウ、ラーシエナ、パイモンが、ボロボロな体と必死の形相で巨大な女を抑えつけている。

ザハーニウも巨大だが、その女はそれすら上回る巨体だ。その名も、姫神フェミリンス。

その顔は初めて見るが、かつての弟子と少し似ている。やはり血筋だろう。

その身体はあまりにも大きいので、それに比例して胸がヤバイ。ゲームで戦つたのを瞬時に思ひ出したが、生で見るとヤバイ。巨乳の域を超えている。超乳というべきか？ 違う、それすら超える言葉が必要だ。

……極乳？

「ゼアノス　そこにいるのなら手伝つてくれ！　限界が近い！」

どうでもいいことを真剣に考えていると、ラーシエナから注意された。

というか、カフラマリアとブレアードはどこ行つた？　それに立場的にはあいつらを

助けるのが当たり前なんだが……どうしよう。

取り敢えず近くに寄ってから考えようとする、突然大きな魔法陣が地面に現れた。

フェミリンスを中心に展開されているそれは、俺をも範囲に入れていた。それと同時に、大きな闇の力がフェミリンスに降り注ぐ。どうやらブレアードは、呪いをかける算段らしい。

「なっ、これは封印の陣!？」

「力を奪えなかつた腹いせに、我らを巻き込む気か!？」

滅多に見られないパイモンの焦った顔と、ラーシエナの怒りに歪む顔。

「というかあいつ、力を奪えずに逃げたんか? いやそれよりも

「あの野郎、俺が範囲に入るまで傍観してやがったな」

俺が来た途端に魔法陣が発生するなんて、タイミングが良すぎる。

「おのれブレアードめ、我らを裏切りおったな」

最後まで悪態をつきながら、ラーシエナが石と化していく。パイモンも顔まで石化しており、ザハーニウも半分近くまで石になっている。

俺? 気合で足に留めているけど何か?

「ブレアード、勝ったのに敗走か」

「力を奪えはしなかつたようだからな、儂らをも封印する魂胆はわからぬが……ゼアノ

ス、いや凶腕よ。頼む、ブレアードを殺してくれな」

確信を持ったその言葉に、俺は驚きの表情になる。何せ、ザハーニウには一切教えていないからだ。殺すなどというのは、凶腕が『やられたらやり返す』で有名だからだろう。「その顔、どうやら正解の様だな……ラーシエナ等の対応で丸わかりだったぞ」

最後にそう言い残し、完全に石化する。

未だ驚きから戻っていなかったが、もう一つの声で覚醒した。

「そうですか、貴方が凶腕……約束を違えるとは、所詮は魔族ですか」

ふと頭上を見上げると、こちらを見下ろすフェミリンス。その持ち得る膨大な魔力のおかげか、半分近くしか石化していない。

「私の先祖の古文に、凶腕のことが載ってありました。いつ助けてもらえるのかと、少しは期待していたのですが……」

「魔族嫌いで有名な女神が期待か。それは随分と先祖を信頼していたんだな。……ええい、鬱陶しい!!」

気合で魔力を周囲に撒き散らす。そして、ズガン！ という音と共に俺の石化が解除され、魔法陣も消え去る。だが魔法陣は効力を失ったわけではなく、フェミリンスの石化は止まらない。

「ふう、さてどうする？ 約束通り、お前を助けてやってもいい。見てわかったと思う

が、解除および解呪なら簡単にできるぞ?」

「……私は、魔族の施しなど受けません」

想像以上に頑固だな、こいつ。

期待していたと言いなながら、助けてもらおう気はないと。

「ですが……」

「うん?」

「ですが、私ではなく、私の子孫を助けてくれませんか?」

「は?」

今この女、何だった?

『助けてくれませんか?』だと? まさか魔族に頼みごとをするとは……。

あいつもそうだったし、やっぱり『血』なのかねえ?

「無駄な勘違いは止めてください。私の先祖と交わした約束を、今度こそ果たしてほしいというだけです。先祖が信じたように、私も一度だけ、信じてみます」

「……俺の力は殺す力だ。守るのは不得意だから、数多くは助けられん」

「では一人でも多く、私の子孫を……その為なら、私自身を利用して……」

そこまで言い、周りと同じく石化した。

それにしても原作と随分違う気がする。あれか? 俺が前に一回介入したからか?

しっかし、どうしようかね、こいつら。
はい、またしても選択肢。

1、原作通りにするため、放置

2、原作ブレイク。解除

3、封印された振りをして、自分自身で石化。

……前と同じく、3はないな。

さてどうしようか……と、うん？

「おいゼアノス、これは何だ？ 何があった？」

「これは一体……？」

心配がして振り向けば、そこには二柱の魔神。グラザとディアーネ。今まで行方不明だった奴らだ。……ただしカファールはいないが。

ここで起こった出来事を、簡潔に話した。もちろん最後の件は秘密くだけりにしているが。

「つまりブレアードは我らを裏切ったのか」

「俺からすりやお前らもブレアードと大差無えよ。今まで何やってた？」

「それは素直に謝る、すまぬ。ディアーネとの喧嘩が周囲に影響して、今まで光勢力に追われていたのだ。相手がフェミリンスではなかったのが悔やまれる」

心底丁寧に謝罪の姿勢を見せるグラザ。それに引き替え、

「これはパイモンだな？ ふっふ、マヌケな面だな、初めて見るぞ。そして……おお、これがフェミリンスか。今まで散々けにしおつて……」

など、反省の欠片もなく観察しているデイアーネ。まあ、普通は魔神が謝罪とかありえないから、あつちの方が正しいと言つちやあ正しい。ムカツクかどうかは別として。

「それで、だ。お前らはこの先どうする？」

カフアルーとカフアラリアの姿が見えないが、どうしたのだろうか。

兎にも角にも、まずは行動。全てはそこからだ。それと選択肢はIを選ぶ。あいつらはしばらく放置だ。とはいえ変なプレイではないから安心してほしい。

「ふんっ、わかりきつたことを聞くな。かつて言ったはずだ、我は我の国を作る。そしていずれは、貴様を家臣として招待してやるとな」

「そういえばそんなことも言つてたか。お前はどうか？ グラザ」

「さあな、己の気の向くまま、と言つた所か。何も決めてはいない。そういうお前はどうかのだ？」

「グラザと同じく、特に決まつてない。ま、デイアーネの所に行くつてのは除外して、ラーシエナ達が元に戻るのを待つ。そしたら考える。それまでは……気ままな旅、だな」

「我の所へは来ぬというのか、貴様」

「行かねえよ」

デイアーネの言葉を軽く流す。彼女から鋭い視線を感じるけど、無視。

思えば、こいつらは深凌の楔魔の中でも特に仲の良い奴らだったな。墮天使組を除けば。

「また会う日がいっつになるかわからないが、いずれまた会おう」

「ああ。その時は互いが敵で無ければいいがな」

「そうなったとすれば、それはそれで面白そうだ。期待しておこう」

返答の声を聞いて満足した俺は、そのまま転移。

しばらくはオウスト内海の南にしようと思ってる。デイアーネとグラザはどうやらレスペレントに、つまりは北に残るようだし、同じ場所に留まる必要はないだろ。それにイオ達と合流しなきゃならんしな。

—戦力強化、むしろ増加—

あれから何年か経ち、俺はオウスト内海のはるか南、アヴァタール地方にいる。今では俺の使徒であるイオと合流している。

この世界には青い月と赤い月、鏡の月がある。

青い月はイオの妹神であり、現神であるリユーシオン。赤い月は獣人族の先祖と言われる、中立神ベルーラが司っている。鏡の月は誰なのか知らない。

そして最近になって、今まで見られなかったもう一つの月が、たまに見られる日がある。

それは、黄色の月。俺が、すなわち凶腕が司っている。

彼女はどうかやら力を取り戻したらしく、助けた頃と比べると魔力が跳ね上がっている。そしてそんな彼女は、かつては闇の月を司っていた。その力と、かつてのリユーシオンとの約束で力を貸してもらい、俺が月を創って空へ上げたというわけだ。

その為に、夜になると黄色い月が現れるようになった。何故黄色なのかという点、黄色い太陽を司っているのが現神の主神、アークリオンだからだ。少し対抗してみた。

そんなイオと、つい最近再開した。魔力を捜したら見つかったのだ。

そして現在何をしているのかというと、とある日、イオが脈絡もなく言ってきたことを試そうとしている。ちなみにイオが言ったのは、

「ゼアノス様は、他の魔神のような複数の部下を必要としないのですか？ 手足は少しでも多い方が得ですから、増やしてはどうでしょうか？」

というものだ。

今の所俺の部下と言えるのは、眷属の2人を初めとして使徒であるイオと使い魔であるラテンニール。そして同じく使い魔のアスタロトだけだ。だが、俺は弱者を自分の部下とするには些ちかか不満がある。

……ブレアードのように、合成魔獣を創るか。

「俺たち人間の底力を思い知れ魔族め！」

そう言って斬りかかって来る人間の言葉を無視し、『腕』で掴む。

魔物や魔獣を創るのはいいが、それには材料が必要になる。だから俺は適当な地に住み、俺を殺そうとしてきた人間を捕まえて材料としている。魔物も襲ってくるので、そういった同じ運命をたどった。

「ぐ、ぐああああああ!!」

悲鳴を上げながら闇に飲み込まれていく人間。その闇で人間や魔物を適当に融合させ、部下を増やしているというわけだ。俺に絶対遵守な魔物をな。

そして下す、いつもの命令。

「ここではない大陸で、何らかの生命体を捕まえてこい」

ただ単純な命令。だがそれだけで、簡単に俺の部下は多くなる。

ここはラウルバーシユ大陸。この世界の中で二番目に大きい大陸。つまりこれは、他の大陸があるということ。この大陸で何でもかんでも材料にしてしまつては、原作に關する人物がいなくなってしまうかもしれないので、このように違う大陸にしている。

俺が直接やっているのは、俺に喧嘩を売つて来たやつらのみ。どちらにしろ殺すので、勿体ないと思つたからだ。

続々と増えてゆく魔物や魔獣。一日経つて約半分を呼んでみると、その数は四桁台だった。これからも増やしてゆく予定なので、まだまだ増えるだろう。

とはいっても、過剰に増やす気はない。精々、一つの大国を相手にできるほどだ。ん、充分に多いって？ なに、大丈夫さ。

呼び出していない残りの半数に、スピードを遅めにして一億の軍団を作れと命令しておいた。一気に増えても俺が困る。一億でも多すぎる気がするが、無視。

そして呼んだ奴を使って合成する、という訳だ。

最初に生み出したのは、キメラなどのメジャーな魔獣。それから、プテテットを暗黒魔術で闇に染めた紫プテテット。圧倒的な力を持つプテテットで、神官騎士が戦っても場合によっては負けるほどだ。これら以外にも他にも色々創ったが、それは割愛。出番が来たらその度に紹介するでしょう。

正義を司るミカエル。慈愛を司るラファエル。忍耐を司るガブリエル。節制を司るアブデエル。純潔を司るメタトロン。知恵を司るウリエル。希望を司るサリエル

【七つの大罪】を抱える魔王と相反する、「七つの美德」を持つ熾天使。ただし神ではないので、神核は持っていない。そこは他の天使と同じだ。

その強さは大罪の七柱と互角で、何度もぶつかり合っているが拮抗し、決着が付くことは、ただの一度も無かった。

さて、何故いきなりこいつらの話をしているのか、疑問に思うことだろう。

何故かというと、俺はこいつらの力が欲しい。合成魔物以外の軍力を揃えるために。だから、そいつらのいる場所を探っている。

多くの天使は三神戦争後、創造神が……天使の言葉を使えば『父』が封印されたので、現神に従う形になった。戦争の勝利者が、敗者の物を奪うのと同じ理由だろう。

そしてそれは、数の少ない熾天使も同じだった。これを裏切り行為だと思う者も、少なくはないと思う。

とはいえ、天使は文字通り『天の使い』。日本語では『御使い』と呼ばれるが、『天』や『御』というのは『神』のこと。対象が変わっても、神に従うのは当然の道理。そう思えば、しょうがないと言えるだろう。

それに、最初は全く聞き入れなかったようだし。

だが、調べによるとその美德の七人は違った。最後まで忠義を貫いて、『父』とは別の場所に、別々に封印されたらしい。

創造神が封印された場所はわからなかったが、そいつらが封印された場所はわかった。

何処なのかというと、オウスト内海を囲むようにして、七カ所に分断されて封印されているのだとか。

それを聞き、俺は直行了た……のが、大体一か月前の出来事。

今では六体の天使を封印から解放し、捕縛することに成功している。あとはミカエルを捕まえれば、アレを作ることができる。

特に目立つわけでもなく、山岳地帯ならどこにでもありそうな洞窟の最深部。そこにミカエルはいるらしい。特別怪しまれるような場所ではなく、あえてこのような所を封

印の場を選んだのだろう。

数多くの瓦礫に隠れてしまっている、巨大な石で造られた扉。

木を隠すなら森の中。石を隠すなら岩の中、ということだろうか？

そんなことを考えながら、イオに封印を解いてもらう。

解く方法なんて俺は知らないの、彼女に頼んでやってもらっている。『腕』を使えば一発なのだが、違う方法があるのならそっちの方がいい。これに頼りすぎると、何もできなくなりそうだし。……今更だけど。

イオが最後の天使を解き放った。俺の後ろには、今までに捕らえた六体の熾天使。皆既に意識は無く、半死状態となっている。

解印されたのは、神^{ミカエル}如き者。神の次に強き者と謳われたところか、天使という中で唯一、名の通りに神と同等の力を持つと言われた者。

もしかすれば、今は信仰無き古神よりも、ミカエルの方が上回っているかもしれない。

神は、信仰が無くなれば弱くなっていく存在だから。

「久しぶりだな、ミカエル。気分はどうだ？」

「……貴様はゼアノス、か。良くも悪くもないと言ったところだ」

「しっかし懐かしいな。最後に会ったのは、お前らがルシファー達にちよつかいして来た時だな。俺が追っ払ったあの日……覚えてるか？」

「ふん……」

今の言葉だけで、理解するのは簡単だろう。

ようするに、あの七柱を倒そうと攻めてきた彼らを、俺が追い払った、という訳だ。

「それで、わざわざ何用だ。私を復活させて、貴様に得があるとは……っ!? あれは！」

「やつと気づいた？ そ、お前の仲間だ。みんな死にかけてるけどな」

「……目的は？」

「話が早くて助かる」

俺の後ろにいる仲間が付いたようで、目が見開いた。すぐに俺の言いたいことがわかったようだ。頭の回転が速いとマジで楽。

「少しは想像できると思うが、俺によつてあいつらは半死状態にある。助けたいと思うのなら、お前の力を寄せ」

そこまで言い、準備していた魔法陣を展開させる。

これは今までの天使を捕縛したものとは違う。捕縛用ではなく、生費用だ。

詳細を説明すると、魔力を媒介にして神核を作り出すものだ。それには膨大の魔力が必要なのだが、神如き者であれば問題ないだろう。

「それは……」

「お前の魔力を媒介にして、神核を作るための魔法陣……とでも言っておこう。まあ、お

前が嫌だと拒んだら、他の六人を使うまでだがな。こいつらを一度に使うより、お前だけで一発で終わらせれば俺の負担も減る」

「だから私を最後に解いたわけか……しかし、何をするつもりだ？ 新たな神でも創る気か？ いくら強いとはいえ、一介の魔神でしかない貴様が」

「それをお前が知る必要はない」

教えた所で意味が無いしな。

「……本当に、彼らは助かるのだな？」

「俺はこういう取引で嘘は吐かない。これはルシファー達に誓って言える」

「……ならば、信じよう。貴様が奴らと仲が良かったのは知っているからな。それに誓うのであれば、本当に嘘はないのだろう」

予想していたよりも簡単に信じてくれたらしい。ちよつと拍子抜け。とは言え俺も『嘘』は言っていないしな、うん。早く済むならそれに越したことはない。

ミカエルが陣の上のままで移動し、俺は即座に詠唱にかかる。覚悟を決めたのか、静かに目を閉じて突っ立っている。ただそれだけの動作でも、背中にある三対六枚の翼が神々しく輝く。その姿には、最も神に近き天使。そんな言葉が似合いそうだ。

「先に言っておくが、痛みはない。一瞬で終わる」

「……………」

もはや話す言葉はないのか、無言。それはそれでいいので、儀式を開始した。

ミカエルの身体は一瞬で分解される。霊的光子変換体である天使は構造が特殊なので、この魔術の式を創るのには苦勞した。

時間を掛けて肉体を核に変化させ、精神と魔力をそれに吸収させるようにする。そうすることによって、完全に純粋な光の神核の出来上がりだ。

さて、次は……

「イオ。六体の天使をここに、バランスよく並べろ」

そう言つて俺は新たな魔法陣を出す。さっきのは円形だが、今度のは六角形だ。

「はい、わかりました」

俺に言われた通りに動いて、几帳面に浮かばせて運んでいる。それぞれが魔法陣の線の上に置かれ、最後の一体が運ばれ終わった。陣の中心に、先程創つた核を置く。すると天使の身体が分解され、六つの肉体と魔力と精神が一つの核に集まり、融合していく。此処で言い訳をするが、俺は助けるなんて言つてない。俺は『助けたいと思うのなら』とは言つたが、『助けてやる』なんて一言も言つてない。

そう、『嘘は吐かない』。俺は確かにそう言つた。だが実際、言わなかつただけで嘘は吐いてない。俺が助けると、あいつが勝手に勘違いしただけだからな。

「ありがとうな、イオ」

「礼を言われるまでのことはしていませんよ?」

「してくれたから礼を言ったんだよ、素直に受け取れ」

「わかりました」

イオに感謝の言葉を告げ、出来上がった神核を拾う。

「ゼアノス様、それは何に使うのですか? ミカエルにも教えていませんでしたが」

「こうするんだよ」

イオからの質問の答えの代わりとして、最近はお番が少ないブランシエとノワールを

呼び出す。メタ? 気にしたら負けだ。

「どうしましたか? 主様」

「何か用?」

「ああ。これを使って、お前らを強化する」

『これ』というのは、さっきの天使達で創った神核と、ずっと前から持っている七柱の魔

王達の神核だ。

「お前ら、これ食え」

有無を言わせない口調で、ずいっと差し出す。

「……へ? あ、あの、主様?」

「あの、こんなグロいのはちよつと……」

『神核』。言葉だけ聞けば神聖な響きがあるが、言うなれば人間の心臓と同じようなもの。見た目もこの二つは特に心臓に似ている。

これを美味そうだと言って食べる奴はいないだろう。いたとしたら頭がおかしい奴か、カニバリズム食人嗜好だけだ。

「遠慮せんと食え！ せいやつ！」

「「がふっ！」」

いつまで待っても食べなさそうなので、両手と両手を使って無理矢理食べさせる。

最も神に近い力を持つ魔王×7と天使×7。それを融合して創った神核を食べれば、莫大な強化を望めるだろう。実際、原作でもアビ……アビ何とかって人間が、先祖のを食っていた気がしたし。

普通ならこんな強化方法は不可能だが、そこは俺の眷属。常識なんか通用しません。

途中経過は書くのがメンドイなので、結果だけぶつちやけることにする。それぞれに変化が起きた。当たり前だけど。

ブランシエの変化は一言で済む。熾天使になった。少なくとも見た目だけは。

ノワールもまた、今まで無かった黒い翼が生えた。しかも六枚。まるで、墮天した熾天使だ。それと、前々から考えていた魔導鎧を与えた。適当に遺跡探索していたら見つけた物だから、性能は知らない。

ま、ノワールとブランシエは見た目も似ているから、黒と白の熾天使と言った感じだろう。片方は墮天状態だけ。

そこで、二人に任務を与えた。

二人とも天使としては最高位なので、ノワールには墮天使の、ブランシエには天使達の頂点に立つように命令した。

原作にも何回か天使が出てきたから、その頂点が俺の眷属なら色々面白そうだ。

熾天使は天使の序列の第一位。深凌の楔魔の序列とは違い、これは絶対的な順位。言うことを聞かない天使は、同列以外ではないだろう。

墮天使にしても、強い者が指揮をとればある程度は従ってくれるだろう。ラーシエナやパイモンのように。だからまずは、その役をノワールにやってもらおう事にする。

そんなこんなで楽しみがさらに増えた俺は、セアール地方という場所で過ごすことにした。理由？ 直感だ。

これからどうなるのやら……楽しみでしようがない。

戦女神ZERO編

一ノヒアの惨状一

俺達がセアール地方に来てから数年。俺はこの地方を離れる気が無かったので、ずっと滞在している。今いる場所の周辺が結構気に入ったからだ。

ブランシエはどうしているのか分からないが、ノワールは今、ディージェネール地方と
いう所で絶賛活動中だ。

ディージェネール地方。確かあそこは、巨人族や多数の魔族がいた場所。ラウルバー
シユ大陸中央のやや南方に位置する亜熱帯湿原領域で強力な種族が多数おり、人間に
とっては、できる限り行きたくない道の地域だ。

……とまあ色々と考えていたわけだが、現実逃避もここまでにしよう。……うー
ん、どうしよう。いやほんと、どうしようかね、これ。……はあ。

「身妖舞！」

今のは飛燕剣という剣舞の、技の一つだ。

俺はさ、出来るだけ目立たない様にと、ボロツボロに崩れかけているこの屋敷

にいるんだよ。もう人がいないし、魔物はあるけど俺たちのことを襲わないし。

……イオはここに住むの反対してたけど。

だからここは結構気に入っていたのに……なのに、何で

「——幾重もの阻みも光の礫に開かれん！ 嵐の神、バリハルトの輝き、今、この地に下らん！」

バリハルトの神官戦士がいるんだよ。

一人は神官衣を着ている女。杖を持っているから、近接戦闘は不得意な援護型だろう。

一人は大柄な体で双剣を持つ男。金色の髪と、チョビ髭が特徴的だ。

最後は優しそうな青年。青い髪をしていて、普通の大きさの……いわゆる中型剣を装備している。

その三人は仲が良く、連携も実に見事だ。人間にしてはかなりの技量。とはいえ、まだまだ未熟だけだな。

しかしあいつら、どこかで見たことあるような……

スライム状の魔物、緑プテットや、狼のようなグレイハウンド。ここにいるのはそんな弱い魔物ばかりだが、数が多い。倒すのもめんどくさそう。しかも地下には火を吐く狼、レブルドルがいる。あいつ中々強いんだよなあ、人間にとっては。あ、女が宝箱

を開けて……ワームという地虫魔物が飛び出してきた。罨ですな、はい残念。

「ゼアノス様。あの人間達、殺さなくても？」

「んー、今はいい。だけどあいつら、どこに向かっているんだ？」

魔物を狩りに来たなら地下の洞窟に行けばいいのに。あそこ、こここのボスっぽい奴がいるぞ？ 人間の女を攫って来てんの、何回も見てるんだが。

「……あいつに気付いてないのか？」

「恐らくはそうでしょう。そうでなければ、もう向かっているはずですよ」

たしか……ラジスラヴァ、とかいったっけ？

数多くのゴウモール（魔術によって改造されたゴブリン）を配下にして、俺がここに来た時に襲ってきた魔獣だ。あの時はリミッターを付けてたからしようがないけど。

俺が魔神の力を解放したら、途端に頭を下げてきた奴でもある。まあ、一介の魔族が魔神に刃向うなんて、勇気を通り越して無謀でしかないからその判断は合っている。

俺としてはどうでもよかったので、ここに住む代わりに襲ってきたことを許したわけだ。

もちろん、あいつがピンチになっても助けるなんてことはしない。

「いやあああああああああ!!」

……。

「今の悲鳴は？」

「人間の女が罨に嵌まって落ちました。どうやらあの洞窟に繋がっている模様です」
また罨かよ。

でもあそこは近くの湖が流れ込んでいる綺麗な場所だ。さつきも言った通り、今は多数の魔物がいて綺麗とは言えないけど。

「面白いことになりそうだな。イオ、あいつらより先に行くぞ」

「はい」

イオが頷くのを見て、歪の回廊を開く。洞窟まで移動してみると、丁度ラジスラヴァが目の前にいた。

「これはこれは魔神様！ どうかしましたか？」

あれ以来、こいつはこのような態度で俺に話しかけてくる。

「特に大きな用事はないが……さつき人間の女がここに来なかったか？」

「ええ、ええ。落ちてきましたぜ、それも極上の女が」

ラジスラヴァは甲殻類のような顔と身体で、巨体だ。顔の中心部に、普通のとは違う黄色い眼があつてかなり気持ち悪い。種族関係なく、多くの女性は嫌悪感が走るだろう。

実際、イオはこいつが嫌いらしい。

「……またですか、盛んですね」

イオが呟く。その視線の先を見てみると、ヤられた後であろう女がいた。

「……で、さつき落ちてきたっていう女は？」

近くにいたゴウモールに聞くと、指で示して教えてくれた。

洞窟の影になるところで気絶して……あ、起きた。

——と、そこにゴウモールが逃げ腰で走ってきた。報告を聞いてみるに、二人の剣士に負けたらしい。

「屋敷に乗り込んできた剣士だあ？ そんな奴らは蹴散らしちまえ」

「ですが……やつら、めちやくちや強ええんですぜ」

「けっ、今ここに来られると面倒だ。おめえら、どうにか足止めしやがれ！」

ラジスラヴァアは顎でしゃくるように追い立てて、暗く囓う。

「くくくくくくくつ……くあーはっはっはっ！」

……この笑い声、キモイ。魔神の俺や古神のイオですら、鳥肌が立つほどに気持ち悪い。

虫唾が走る。

「セリカ、ダルノス……お願い、早く来て……」

夢げに震えながら言葉を紡ぐ声が聞こえた。先ほど起きた女だ。

だがそんなことより、俺はその女が言った名前に驚いた。

【セリカ】

それは、【戦女神】の主人公の名前だ。どうやら、原作の時期に入ったらしい。ヤバイ、やっと、やっとこの時が来た。嬉しすぎる。

俺がずっと見ていることに気が付いたのか、俺の方を向いて驚きを露わにする。俺の見た目は人間だし、しようがないか。

「ああん？　何で人間の雌がここに突っ立ってんだ？」

突然の声に横を見ると、そこには一匹のゴウモール。どうやら俺のことを知らないらしい。つか俺は男だ（忘れてるかもしれないませんが、彼の見たい目は超人な女です）。奥でラジスラヴァが何か言っているが、こいつには聞こえていない。

どうやら俺を襲う気満々のようだ。

「……………ふん」

飛び掛かってきたので、一閃。特別なことは何もしていない。普通に腕を薙いだだけ。

それも『腕』じゃなくて、ただの腕。

それだけで、俺を襲おうとしたゴウモールは砕け散る。

今の俺は『深凌の楔魔』だったころの魔力だが、それでもこんな雑魚とは圧倒的な力の差がある。その力を間近で見たためか、捕らわれていた複数の女が恐怖に陥る。それはさっきの女も例外ではないはずだが、少しでも落ち着かせようとしている。

ラジスラヴァが謝ってきているが、気にしていないので止めさせる。
んでもって、

「その女」

「……な、何？」

「お前の名前は？」

「……カヤ、よ」

ふむ、カヤか。セリカの姉がカヤだったかな？ そういえば。

「そうか。俺はゼアノス。魔神ゼアノスだ」

「魔神……やっぱりね。その膨大な魔力、ただの魔族にしてはおかしいと思ったわ」

俺ってばいつもオープンにしてるしな、魔力。普通に気付くよなそりや。

……ん？ 何でさっきの馬鹿は俺に気が付かなかった？ あれか、馬鹿だからか？

それとも魔力感知が出来ないからか？ まあいい。

「先ほどお前が口走っていた、セリカとダルノス……だったか？ その二人が、さつき報

告にあつた劍士か？」

「……」

無言。

当たり前と言つちや当たり前だ。女だとは言え、仮にも神官戦士。仲間のことを、少しでも喋るやつはいないだろう。

「くつくつく、魔神様。この女、どうやら喋らないようですし、ここは俺に楽しみ時間をくれないっすかね」

ラジスラヴァがそう聞いてくるが、俺としてはどうでもいい。

「……勝手にしろ」

それと同時に、カヤは鎖で縛られ、布切れを口に押し込められた。

……なぜ縛る。縛りプレイか？

俺はイオと共に離れて姿を消し、事の顛末を見よう……とは思はないが、どうなるのか傍観していた。すると、奥から聞こえてくる断末魔、及び劍戟の音。どうやらセリカが来たらしい。

「ふんっ！ 消えろ屑ども！」

「ガハッ！」

「グッ！」

「ゲエエー！」

金髪の男、たぶん名前はダルノス。そいつの二振りの白刃の技が繰り広げられ、反撃を許されるまでもなく地に伏す数多のゴウモール。

青髪の優しそうな青年、セリカはキョロキョロと何かを探している。カヤを探しているのだろう。

丁度その頃、カヤはゴウモールとラジスラヴァにのしかかれようとしている。

— ヒュン —

「ぎゃああああああああつー！」

即座に斬られ、魔物が転がり飛び退く。

ダルノスはセリカの背後に立ち、彼の後ろを守っている。うん、見事だ。

セリカはカヤを拘束していた鎖を断ち切り、口の中の布切れを取る。

「おそい！ 何をぐずぐずしてたのよ！」

助けられたというのに、激昂を飛ばすカヤ。手厳しいな、最近の姉は。

「文句は後で聞く。今は、他の子たちも救わないと。それにあいつ——」

「ああ、やつこさん、やつとこつちに気付いたぞ」

二人の視線の先にいるのは、言うまでもなくラジスラヴァ。

昆虫型の身体をうまく使い、俊敏に動く。

「お前たちか？ 俺様の邪魔をするのは」

「攫った者たちは皆、返して貰う」

「この女は俺のものだ。俺の子供を産ませる。その女も同じだ。ゲゲゲゲゲッ
！」

……その笑い方、キモイ。

というか今あいつ、この女つて言ったよな？ イオもその範疇に入っているなら殺すだけじゃすまないぞコラ。俺は結構独占欲強いんだぞ。

「いやよ、魔物の子供なんて冗談じゃない！」

「そんなことさせるかよ」

カヤの言葉にダルノスが続ける。だが、

「ゲケケケケ、バカか、てめえ」

またしてもキモイ笑い声の後に、ラジスラヴァの邪眼が強烈に光る。

そして光のせいで目が働かない三人に、爪で斬るように振るう。……避けられたが。その三人はそのままラジスラヴァに向かって、構えを取る。

「俺様と殺りあうつてののか？ そんな軟弱な体でよ……ゲッゲッゲッ！ それに俺様はまだ一人じゃねええ!! 出てこい！」 相棒「！」

その言葉に反応し、水の中から水竜が出てきた。水の中に落ちたカヤを、ラジスラ

ヴァの所へ運んだのもこの水竜なのだろう。

相変わらず笑い声はキ（ry）

「ゲーゲゲゲゲッ、いくぜ相棒！ 男どもは好きに喰っちまいな！」

もはや笑い声については何も言うまい。諦めた。

ラジスラヴァの後ろには水竜。前にはゴウモールと、ゴウモールの強化版であるハイゴウモールが武器を構える。

しかしセリカの電撃魔術の「旋刃」と、ダルノスの技である「円舞剣」により、前方にいたゴウモール達は、あつという間に事切れた。

ダルノスはラジスラヴァの鋭い鉤爪によって、中々に大きい傷を負う。しかし、
「ちよつと、大丈夫？」

— 癒しの息吹 —

カヤの治癒魔術により、すぐに回復。しかもそれだけではなく、

— 代謝促進 —

時間が経つに連れ、傷が治っていく補助魔術だ。簡単な負傷ならこれによる自然治癒で、一瞬で治る。

配下を無くしたラジスラヴァが猛攻するも、素早い動きによって避けられ、カヤの魔術を受けて転び、そこに男二人の飛燕剣が放たれる。

水竜もそれを邪魔するかのようになり、噛みついたり湖の水を利用したりして洪水を起こす。

ラジスラヴァがそれを避けるが、その動きのせいで隙だらけ。セリカの飛燕剣、「身妖舞」が命中。水竜もまた、カヤの魔術とダルノスの剣技によつて伏した。

「ギャギャギャギャ……貴様！ 貴様らあああ！ 覚えていやがれええ！」

古典的なセリフを残して、最後の攻撃を受けて吹き飛んだラジスラヴァは水中に沈んでいった。浮き上がる気配はない。というかあいつ、俺のこと忘れてねえ？ 別に助けを求められても助けねえけどさ。

水竜も、床に倒れて止めどもなく血が流れ出す。その流血が、水面を染めている。瘻を繰り返しているのも、もう命は助からないだろう。

彼らもそれを見ていたが、突然カヤが声を上げた。

「女の子たちを避難させよう！ 私たちも早くここを出ないと……！」

そこまで言いかけると、入り口付近から駆け付ける複数の足音が響いた。

また人間が来るのかよ。

彼らは新たに来た神官である、スファイダとカミーヌという男女と話をしている。どうやら、今の戦闘でここがさらに崩れてきて長くは持たないらしい。

俺の新居……orz

「っ！ そうよ！ 皆、大変なの！」

神官らが女の子たちを避難させようとしているときに、カヤが悲鳴のような声を発した。

「どうしたんだ、カヤ？」

セリカが静かに聞くが、カヤは悪い意味で興奮している。

「ここ、さっきの魔獣や水竜だけじゃなくて……魔神もいたの！ さっきまで、ここにいたの！」

どうやら俺のことを、今更ながら思い出したらしい。その告白に、ここにいる全員が息が止まった。

魔神と言えば、人間の騎士団体一個分に相当する力を持つと言われていたので、恐怖の対象ではあるだろう。しかも原作と違って、凶腕という伝説もいるのでさらに恐れられているらしい。なんかごめんさい。

「それが本当なら、早く逃げないと！ その魔神が来る前に、早く！」

カミーヌとかいう女神官がまくしたてるけど、もういるんだよね、俺。姿が見えてないだけで。

動けない娘はスフィードという男神官戦士に運ばれ、意識のある娘は互いに肩を貸し合って歩こうとしている。感動的な光景だ。

原作では大丈夫だったけど、ちよつと力貸してやろうかね。

「その魔神って、俺のことか？」

『っ!?!』

俺が姿を現したことによって、戦闘の構えになる戦士たち。うわーかつこいーねー。ちなみにイオはもう外に行ってる。

んん？ ポソポソと何か言ってるが……あなるほど、逃げる算段か。自己犠牲精神を持つ人が多いですね皆さん。

「その青髪」

「っ！ 俺のことか？」

「そうだ。お前、名前は？」

「……セリカ」

知ってるけどね。一応聞いとかないと。

「そうか……ならばセリカ。お前らは随分と面白いものを俺に見せてくれた。その褒美をやる」

「……見せてくれたって……ということとは、俺たちが戦ってる時もここにいたのか!?!」

「お前鋭いな、その通りだ。もし俺があいつを助けてたら、お前らとあの虫型魔獣は逆の立場だっただろうな」

その言葉に、顔を青くするセリカとその他。

「それで褒美だが……うん、これでいいだろ」

— パチン —

指を鳴らして、この洞窟と屋敷にいる全ての人間を対象に、付近の森へと繋がっている歪の回廊を展開。いつも使っているのとは違う、対象の足元に現れるやつだ。

底なし沼に落ちるような感覚があるので、俺はあまり使わない。でもこれを使うと、使われた側は逃げられないので、こういう時にはよく使う。

「くっそ！ おい！ 褒美じゃねえのかよ！」

どんどん沈みながらダルノスが悪態を言ってくるが、俺はただ手を振るだけ。

一瞬、セリカの視線が俺の後方に向かったのでそちらを見ると、死んだ水竜のすぐ近くに幼い水竜がいた。

視線を戻すとバリハルトの神官戦士が全員いなくなっていたので、俺もここから脱出する。あの幼い水竜は……多分平気だろ。水の中潜って行っただけ。ただ水位が上がっていたし、地面も揺れていたな……大丈夫か？ 何か罪悪感。

外でイオと合流して、近くの街へ赴く。おそらくセリカが住んでいる街と同じ街になるだろうが、家が崩壊してしまったので、とりあえずはその宿で寝ることにした。

もう原作は始まっている。さて、これから俺はどう動こう……？

—星月が舞う夜の出来事—

—星月が舞う夜の出来事—

セリカと会合してから数日が経った。やはりというか、ここはセリカが住んでいる街らしい。マクルという名前だった。

神官戦士に見つからないようにしているわけだが、どうにもそれは性に合わない。その苛立ちを紛らわすために色々と歩き回っていると、セリカとカヤが話をしている場面が見えた。

「そっこだ姉さん、あの神器はどここの神のものなんだ？ 関わりのある神殿を訪ねてはどうだろうか？」

「残念ながら、どの神に縁ある神器かは不明なの」

「……神器？ えーっと、あの屋敷の名前がたしかノヒアだったよな？ じゃあ、その次にあるのは……って、うん？」

ちよつとした違和感を持った俺は、それを解消するためにセリカに詰め寄る。

「神器がどうのこうのって、面白い話をしているな」

「っ!!」

突然現れた俺に驚いたのか、いつもの癖で剣を構えようとするセリカ。だが神殿から出てきたばかりの状態で、武器を持ち込んでいるはずもなく、手ぶらだった。

「落ち着け、何も誰かを殺そうなんて思っちゃいない。話し合いは大事だぜ? バリハルトの戦士、セリカ君?」

「……本当に、話すだけか?」

「ちよ、ちよつとセリカ!?!」

冷静に俺を見極めようとするセリカと、慌て気味のカヤ。姉弟でもここまで違うのか。

「もし俺が戦うだけの脳しかないのなら、お前らはノヒアで既に死んでいる」

「確かにそうだな。……何である時、俺たちを助けた?」

「だから言つたら、面白いものを見せてくれた褒美だつて。どうかお前……」

セリカに更に近づいて、頭を触る。とはいっても撫でるように、ではなく、掴むようにだ。何やら懐かしい気配がするのだが……

「セ、セリカ! 離れて!」

「大丈夫だよ、こいつに敵意はない」

二人の言葉を無視して、さらに強く掴む。

「っ、いたっ!」

「ん? あ、すまん」

どうやら強すぎたようで、涙が出ている。害を与える気は無かったので、ここは素直に謝っておく。

しかしこの気配は……ああ、そうか。アイツか。

「なるほど……納得した」

「何が?」

「何でもない、こちらの話だ。そうそう、お前らにもう一つ面白いことを教えてやる」

「……」

「これは嘘じゃないぞ? ……俺は男だ」

「……は? 男?」

「そう、男。さつきも言ったが嘘じゃない。こんな顔だが、男だ。じゃあな」

驚愕の声が出るのはわかりきっていたので、煩くなる前に転移する。

その後、遠くに移動したのに二人の叫び声が聞こえ、俺まで驚いたのは秘密だ。



……あの時セリカに近づいたのには、とある理由がある。

あいつから懐かしい気配を感じたからだ。触れてやつとわかった。あれはアイドスだ。

遙か昔に出会った古神、アイドス。俺がセアール地方に来たのも、実はアイドスの気配を僅かに感じたからだ。

しかしそれ以上に、今まで以上にセリカからアイドスを感じた。もう原作知識、というか原作の記憶なんぞ「無限の彼方へさあ行くぞ！」的な感じで吹っ飛んだが、これが良くないことだというのはなんとなくわかる。無限の彼方を目指した彼のように、途中で落ちてしまわないよう気を付けなければ。

そして夜である現在、アイドスではなく、その姉であるアストライアの気配。

だから俺は、あの屋敷の地下に通じていた湖、ノヒア湖にいる。イオと一緒に、会いに行くためだ。

空を見れば、様々な星が光っている美しい夜空だった。

その中でも一際目立ち、綺麗に輝いているのは青い月だった。

「青き月、か。……何回も見たけど、何度見ても綺麗な色だな……そうは思わないか？
イオ」

「……そう、ですね。綺麗、だと思えます」

……歯切りが悪いな。どうし……あ、そっか。

「お前の妹の月だろ。そこは素直に褒めておけよ。魔神とはいえ、俺に遠慮なんかいらんぞ」

「な……!?」

「現神リユーション。現神と古神の娘で、姉は古神、妹は現神としている。その姉がお前だったことくらい、知ってるさ」

驚愕に染めていいるイオの顔が、さらに変化する。どうやら本気で俺が知っているとは思わなかったらしい。

「現神だけど、あんな綺麗なものを司っている神で、お前の妹……話ができれば好きになれるだろうな」

もちろんそれだけが理由ではなく、あの立場で俺に頼みごとができるその勇氣もまた高評価できる。

「……ありがとう、ごさいます」

良く見ると、理由はわからないがイオの頬は濡れていた。

あえて何かしようとは思わないので、そのまましばらく待っている。

そろそろ進もうと、歩くのを再開する。獣の声も、虫の羽音も聞こえない。俺とイオ

も声を発していないので、静寂だけが周りを支配した。

しばらく歩き続けると、真正面から聞こえてくる話し声。さらに進んでみると、横になつてゐるセリカが見えた。どうやらあの水竜の子を探していたようだ。

そしてその近くには、赤い髪をした青い瞳の女性がいた。その腕の中に、セリカの探していた水竜の子が見える。

「……運命という言葉、信じる?」

「……俺は、あまり信じない」

「そう……」

互いに見つめ合いながら、言葉を紡いでいる二人。盗み見しているので、俺らには気付いてない様子。

その後セリカが、ようやく腕の中の水竜の子に気が付いた。「この子を探していたの?」という女性の疑問に、セリカは肯定。その返事に、彼女はこう言った。

「だったら、この子は私を呼んだのかもしれない。私と貴方が出会えるように」と。

そしてそのまま、強い確信を持った声で告げる。

「私は……運命を信じるわ」

「……何故?」

「貴方と、会えたから……」

セリカの質問に、彼女は簡単に答えた。

「俺と会えたからって……前は信じてなかったのか？」

「信じたくなかった。人が殺し合うのは運命ではない……人は自ら運命に立ち向かい、運命を切り開く力を持っている。……その力の使い方を知らないだけ」

そう言うと、今度はセリカに聞いた。「貴方はどう思う？」と。

セリカはその答えとして、「自分の力の使い方はわからない。だが、この両手は大切な人を守るためにありたい」と答える。

そして言葉が続けた。

「君は……この力の使い方を知っているのか？」

そう尋ねるが、彼女の返答は少し違ったものだった。

「サティア」

「えっ？」

「私の名前は、サティア・セイルーン」

そう、サティア。セリカと話をしているのは、かつて俺を助けてくれた女神の一人、アストライア。アイドスの姉神だった。

咄嗟にセリカも自己紹介をする。

「あ、俺はセリカだ。バリハルトの戦士、セリカ」

「そう、セリカ、貴方の力の使い方は貴方にしか見つけ出せないわ」

「俺にしか……」

それはそうだ。『運命を切り開く力』は人間だけが持ち得る力。それも扱えるのは極僅かだけ。それは人に教えてもらうものではない。

アストライアはそれを、

「長い旅路の果てで自ら見極めるもの」

という言葉で表現した。まさにその通りかもしれない。その後も二言三言話し、アストライアは……サティアでいいか。サティアはその手を、セリカへと伸ばした。

「一緒に行こう」

「どこへ？」

「どこかへ……いいえ、どこへでも。貴方と共に、どこへでも行くわ。だから連れて行って……貴方の望む場所へ」

「……行こう、どこへでも」

セリカはそのままサティアの手を握り、立ち上がった。

それからその二人は、話し合いを続けている。それこそ夜が明けるまで話すんじゃないかという具合に。

するとセリカが、突然何かを思い出したように声を荒げた。

「そうだ、サティア！　すぐに街に行こう！　マクルの街なら神殿がある分、まだ安全だ！」

「せ、セリカ？　どうしたの？」

サティアの手を取り、いきなり走り出すセリカ。

「この付近に魔神がいるんだ！　ゼアノスっていう魔神が！」

「……………え？」

俺、セリカに名乗ったか？　……………あ、カヤが教えたのか。それなら納得がいく。

というかここ、出ても不自然でもなんでもなくね？　というかむしろ空気呼んで出な
きりやダメだろ。噂をすれば何とやらつてのが典型的テンプレだろ。

つてなわけで、セリカの走る先へ転移。

「……………俺のこと、呼んだか？　セリカ」

セリカは俺が目の前に出てきたので驚き、しかしすぐに構える。

今度はちゃんと剣を持ってきてきているようだ。関心関心。

「つ！！　ゼアノス……………」

「……………あ、あ」

こちらを見て構えるセリカと、俺を見て困惑しているサティア。

サティアが震えているのを恐怖からだど勘違いしたのか、セリカがサティアを庇うように前に出る。

まあ取り敢えず、サティアと顔を合わせて、驚いたように演技する。セリカの顔を見、もう一回サティアを見る。そうすれば、さつきから見えていたとは思わないだろう。

「……ふん」

光速で動いて、サティアの背後に移動。そして

「久しぶりだな、サティア」

「きゃあ！」

セリカに聞こえないくらい小さな声で、そう言う。サティアは突然のことに驚き、悲鳴を漏らす。

「サティア！」

サティアを自分の後ろへ回し、その勢いで俺に斬りかかってくる。

——身妖舞——

範囲は広くないが、飛燕剣の初歩技であり、一瞬で複数回攻撃する技だ。

咄嗟に剣を出して受け止める。

「おっと、危ないな。折角この前は助けちゃったのに。……それに、サティアだっけ？ 君も悲鳴上げるって、ひどくない？」

「あ、その、ごめんなさい」

「サティア、襲われかけたんだから謝る必要はない」

確かに魔神が今の行動を起こしたら普通はそう思うわな。あと、俺がサティアと知り合いつてのは隠しておいた方が良さなあ。言ったらサティアが可哀そうだ。

「襲うつて、そんなつもりはないんだが……まあいい。セリカ、人間であるお前に一つ聞きたいことがあるんだが……聞いてくれるか？ 答えてくれたら、今のお詫びとして俺はここから去るよ」

「……本当か？」

「今まで嘘は吐いてないし、何より俺から敵意を感じるか？」

「……わかった、聞く」

よし。俺としても、さっさとこっからいなくなりたいかったので丁度いい。サティアとはまた今度話せばいいだろう。

しかしセリカ、こう言うのは何だが……甘いな、お前。いつかこの甘さを利用されるぞ。

指を鳴らして、イオをここに呼び出す。やっぱ演出は大事だろ。

「っ!?!」

「あー、彼女は俺の使徒だ。戦わないから構えを解け」

軽く紹介すると、イオは優雅にお辞儀をした。お嬢様という言葉がとても似合いそう
だ。

「さて、俺には古神の友が二柱に魔神の友が九……いや、七柱いるんだが、全員この答え
はわからなかった。だから人間であるお前に聞こうと思う」

魔神は七柱だな……ラーシエナとパイモンはちよつと違うから。

ルシファー達はもういないからノーカン。イオも使徒だから数に入れない。

「随分と恐ろしい交友関係だな」

セリカ、そうは言ってもその中の一柱はお前の後ろにいる女だぞコラ。

……その本人も何苦笑してんだオイ。

「褒め言葉として受け取っておく。さて、それでは聞くが……何で生き物は争うんだ？」

「……は？」

セリカの顔が驚きに染まる。……って待てこら、イオとアストラライア二柱の古神共。

何でお前らまでそんな顔で俺を見るんだよ。

「俺は常々思っているんだが……星は集まれば集まるほどに輝きを増し、美しくなる。
なのに、人も、魔族も、神も、なぜ集まれば集まるほどに、醜く争うのだろうな？ 俺
は、その答えが知りたい」

少しだけ区切り、再度問う。

「セリカ、その答えをお前は知っているか？」

「……」

哑然としているな……ま、普通の反応か。

「……くつく、魔神の俺が言うのはおかしいか？　だが人間に色々な性格があるように、魔神だつて様々だ。戦うのを避ける魔神だっているぞ？　……自分で言うのもなんだが、俺は戦いを避けはしないものの、比較的平和好きな魔神だ。戦いも好きな方だが、命の奪い合いは好きではない。とはいえ別に嫌いでもないがな」

「ちなみにこれは本当だ。殺し合いは好きでも嫌いでもない。たまに本能の所為で嫌いな奴を殺したくなるけど、基本は殺さないよ、俺。馬鹿は殺すけどな。」

……あれ？　そうだよね？　言った手前だけど、ちよつと自信無くなってきたぞ。

それは置いといて、俺の言葉に考えるような仕草をしていたセリカが、言葉を発した。

「お前のような魔族が増えれば、この前のようなことは起きずにすんだのにな……」

「……おい、真剣に考えているところ悪いんだが、俺が嘘を吐いてお前を騙そうとしている、なんてことは考えないのか？」

「確かに最初は疑つたけど、そう言ってくれる相手を信じないわけにはいかない。戦う必要が無いのなら、それが一番だ」

……何この人間、真面目に面白い。流星は主人公というべきか？　いや、それはセリ

力に失礼だな。何より、今ではここはリアルだ。二次元ではない。

「……本気でお前という人間に興味が出た。ほれ、これ受け取れ」

そう言つて、俺の魔力で創つた腕輪を渡す。

「これは？」

「召喚効果を持つ腕輪、【影詠の腕輪】だ。何かあつた時にはそれに魔力を込めろ。俺が何かしら助けてやる」

「なっ!?! ほ、本当か!?!」

「ああ、本当だ。本当に俺の力が必要なときにだけに、それを使え。あ、魔力を込めるだけでなく俺の名前も呼べ。微量な魔力で反応するから」

実はデメリットもあるが、それを今言う必要はないだろう。

えーと、後は……

「一応、神殿の人間には見つからないようにするんだな。お前のような考えを持つ人間は少ない。気を付けとけ」

アストライアを一瞥し、俺とイオの場所に空間の歪みを展開してここから去る。次に会うのは、あいつに呼ばれたらかね? どっちにしてもこれからが楽しみ……つて、あ

「ゼアノス様、どうかいたしましたか?」

セリカからの答え、聞かずに去っちゃまった。
鬱だ or z

—女神姉妹との再会—

セリカやサティアとの再会は、セリカに呼ばれるまでもなかった。

キートという名の村の近くの山に、ブレアードが創った魔獣がいるらしい。そいつを見るためにキート村に行ったら、そこに例の二人がいた。またしても何かを話している。

「あんな幻獣を生み出す魔術師は、すごいな……」

「……そうね。ここまで見事なものを生み出せる術者はそう多くないわ」

「どうやらこの近くで、立派な創造体を見たらしい。ブレアードが創ったやつ以外にも何かいるのか？　（こゝろ）」

「古い文献に、名前は載っていないなかったのか？」

「確か……ブレアード。……そう、ブレアードという魔術師だったと思う」

「……まさかのブレアード。あいつ、そんな立派なもん創ったつけ？」

「へえ、ブレアードか……この世界のどこかで、また何かを生み出しているのかな？」

「そうだと嬉しいわ」

セリカの言葉に、サティアは優しく微笑むが……あいつら、ブレアードがどんな人間か知らないからそんなこと言えるんだよな……。

無理、もう我慢できない。

「ブレアードが創つてると嬉しいって……アツハツハツハツハ！」

「!?」

あゝゝゝ!! 空気読まずに笑っちゃまった……でもこれ以上我慢すんの無理だつーの。

「ゼアノス……俺の行く先々に、何でいるんだ? ……それに、ブレアードを知ってるのか?」

「いいや、お前の行く先々に俺がいるんじゃない。俺が行こうとした場所に、何故かお前がいるんだ。それとブレアード? ああ、知っているとも。あれほど面白い人間は、お前以外には見たこともない。しかし……クツクツク」

ブレアード関係で、嬉しい、ねえ。……初めて聞いた。

「はあ、落ち着いた。……お前ら、ブレアードの創った幻獣を見たのか?」

「……ああ、そうだが……俺って面白いのか?」

「すごく面白い。人間の敵である俺の言葉を真摯に聞く辺り、とても面白い。で、ここに

いるのか？ ブレアードが創ったっていう幻獣は」

俺の質問に、サティアが頷いて答えた。

「ふうん……」

指を口に当てて、口笛を鳴らす。もし俺を知っている奴なら、これで俺の下に来るはずだ。目の前の二人は頭に疑問符が浮かんでいるが……無視。

— バサツ —

羽ばたく音が聞こえ、俺らは三人そろって空を見上げた。

そこには、二羽の岩石のような金色の巨鳥が羽ばたいていた。

「……ラガタ・ムン、か。久々に見るな」

ブレアードが創ったにしては珍しく、雌雄別々の創造体だ。元々は戦闘用のを創ろうとしてたのに、自然に返ってしまったから不良品とされていた魔獣だ。おかげで数が少なかったのだが……こんな所にいるなんてな。あそこからかなり離れてるぞ、ここ。

「……ふうん」

— パチン —

指を鳴らし、ラガタ・ムンに「もう用はない」と言外に伝える。

山へ戻って行ったのを見届け、セリカたちの方へ視線を戻す。聞きそびれていた事を聞くためだ。

「さて、突然だがあの時は聞くのを忘れていたので聞こう。なぜ生き物は争い合うのか。その答え、お前ならわかるか？」

「……それは俺にもわからない。でも、これからその答えを探していきたい。サティアと一緒に。二人でなら、どこへでも行けるから」

そう言えばそんなこと言ってたな、湖の近くで。

「……その答え、いざれ解けたなら俺に教えてほしい。かれこれ1万年、俺はその答えを探している。人間だからこそ、その答えは見つかるかもしれないしな」

「わかった。いつかきつと、お前にも教えてやる」

「……やっぱり、お前は変わってるよ。そうは思わないか、サティア・セイローン？」

「そうかもしれない。でも、それが彼なのよ」

笑いながらそう言う。

だからこそ、彼女と彼は出会えた。セリカがあの水竜を気にしないような男だったら、サティアとは会えなかったのだから。

「そうかい。……ああ、あと一つ言うことがある。」

「何だ？」

「カヤが言った通り、俺は魔神だ。そしてお前は人間。だからいつまでも味方だという訳ではない。いつかはお前の敵になるかもしれない。それを覚えておけ。答えを聞い

ていなくとも、その可能性は充分にある」

「……わかった」

そこまで聞いて、踵を返して転移する。サティアとも話をしたいが、いつもセリカがいてはそれもできない。

魔神としてあいつらの前に出たの、失敗だったかな……。



意外なことに、サティアと会うチャンスはすぐにできた。

セリカは今日、双剣士のダルノスと共に鉄屑の谷という鉱山に行ったらしい。

これは丁度いいと思い、俺は早速サティアの所へ向かった。

……セリカの姉のカヤと一緒にいるとは思わなかったが、俺に気付いたらしいサティアは……アストライアは、わざわざ外に出てきてくれた。

「……改めて、久しぶりだな。元気にしてたか？」

「ええ、本当に久しぶり。見ての通り元気よ」

「それはよかった」

会うのは数千年振りだというのに、互いにそんなに経っていないと思えるような話し

方だった。それくらい自然に話せていた。

「それにお前、俺じゃない良い男が見つかったみたいだな。それもお前の理想と同じ志を持つ、あんないい人間を」

そう言うのと、顔を赤くして微笑した。相変わらず、一つ一つの動作が可愛い。

「でも、貴方も随分と綺麗な娘を使徒にしたみたいだけど？」

「ん？ 今になって嫉妬か？」

「それは……ちよつとは、ね」

「……それはそれで嬉しいが、あいつはイオ。古神で、レアの盟友でもある」

「レアって……お姉様の？」

俺は頷くことよって肯定。

そして、そのレアの事について謝ろうと思った。

「……それと、お前に一つ謝っておくことがある」

「……何？」

「そのレアの事なんだが……現神によって封印された」

「お姉様が!？」

さつきとは打って変わり、顔が青くなっていく。やはり知らなかったか。

「ああ、だけど滅ぼされた訳じゃない。いつかは助ける。俺じゃなくて他の奴が助ける

かもしれんが、それはそれで重畳だろ」

「わかった、お願いするわ。……でも何で貴方がこの街に？」

「アストラリア、恐らくお前と同じ理由だ。……アイドスの気配がした」

「やっぱり……」

慈悲の女神アイドス。あいつは今、どこにいる？ この付近で気配を感じて、セリカからも気配がして……くそ、原作の肝心なところを忘れちゃった。

「それにしてもお前、今でも着けてくれてるんだな、その帽子」

わざと話の内容を変えて、少しでも気分を明るくする。

久しぶりに再会したんだし、暗い雰囲気にはなりたくない。

「もちろん。初恋の人の、初めてのプレゼントを捨てるわけないでしょう？」

「セリカには黙っとけよ、それ。………っ!!」

明るくすることに成功して話し込んでいると、突如感じる魔力の流れ。

これは……セリカか？

「どうかしたの？」

「ああ、どうやらセリカがピンチらしい。行ってくる」

この荒々しい流れ方からして、かなり焦ってる。それも、命の危機にあっているような。

「待つて。……行く前に、最後に聞かせて。貴方がセリカの敵になるかもしれないって、本当のこと？」

「当たり前だ。人間が魔族と仲良く手を握れるわけがない。それも、現神に従う人間と」
それだけが理由ではないが、な。

「なら、いつかは私も敵対することになるかもしれないわね。私は、セリカと一緒に歩
くって決めたから」

「……そうならないことを祈ろう。だが、今はあいつの味方なんでね。それじゃ、行つて
くる。久しぶりに話すことができて楽しかったよ、いつかまた会おう」

「うん、セリカをお願い」

その言葉には笑みを返して、俺はすぐさま転移した。

腕輪に魔力が込められたことを感じ取り、その場まで自動的に転移する。

そこに来て見れば、まさに彼らはピンチだった。

ダルノスは爪のような触手に首元を掴まれ、セリカはそれを斬ろうとしているが、他の
触手が邪魔をして近づけない、という場面だ。

— 追尾弾 —

威力は最弱だが、確実に狙った場所へ当てられる純粹魔術を放つ。それにより、セリ

力たちには一切の被害もなく全ての触手が消滅する。

「よいせつと」

さらに奥から伸びてくる触手からダルノスを守るため、後ろに投げてから剣で斬る。

前方からの攻撃が止まったので後ろを見ると、二人ともかなりボロボロだ。

「なっ!!? あん時の魔神か!?!」

「大丈夫だ、ダルノス。少なくとも今は平気だ」

俺を見てさらに落ち着きをなくすダルノスと、それを落ち着かせようとしているセリカ。

それを見ててもしよがないので、攻撃して来た相手を見る。

それは、“得体の知れないもの”だった。背丈は人間の腰ほどでしかないが、その体から噴き出る腐臭、死臭、動作、身体の構造、気配。そのどれもが人は勿論、魔神の俺すら不快になるものばかりだ。

だが、俺はこいつを知っている。どこかで会ったことがある。一体……?!

「お、おおお怨、怨、怨お……おおお、お……」

俺を新たな標的にしたのか、腕のような触手を掲げて放ってくる。

俺はそれをわざと受けた。

「ゼアノス!!」

「平気だから黙つてろ！」

大声を出したセリカにそう言い、俺を貫いている触手から様々なものを感じ取る。

恐怖、憤怒、憎悪。

それらの感情が流れ、俺の中から引きずり出して目覚めさせようとしてくる。

だが違う。これは“こいつ”の感情ではない。別の者の感情だ。

それがわかっただけでも、一応は良しとして触手をぶった斬る。

セリカ達を追い出したいが、負傷して走れそうにないらしい。空間の歪みは、人間にとっていいものではない。一回程度なら問題ないが、使わないのが一番だ。

ならば……

「イオ、こいつらを外まで援護しろ。回復もついでにやつておけ。そのあとここに戻つてこい」

「了解しました」

イオを呼び出してセリカたちを任せる。

脈絡なく現れたイオを見て二人は驚いたようだが、有無を言わない速さでイオは二人の肩を掴んで転移した。あいつなら無駄なことは言わないだろう。俺のことは、今はまだあまり知られたくない。

完全に見えなくなったので、“得体の知れないもの”をもう一度見る。

………

………

………

あ。

「そうか、思い出した。アイドスだな？」

近くに転がっている死肉や腐肉に覆いかぶさって食らっているが、微かなこの気配と
思い出した原作知識。間違いなくアイドスだ。

そうとわかれば、やることは決まった。

『腕』を出現させ、魔力はリミッター付きのまままで戦闘開始。触手を斬りながら、ただひたすらに彼女のもとへ走る。

辿り着き、『腕』を伸ばして相手を掴む。

ここまですれば、後は簡単。アイドスと邪悪なモノを、二つに分断してしまえばいい。
そう思つて、俺は立ち止った。立ち止まってしまった。

— グサツ！ —

「ガッ………は」

………やばい。バリハルト神殿に見つかからないために力を抑えてたのに、その所為で攻撃を避けられなかった。完全に油断した。

まだこいつは敵なのに、何で俺は目の前で立ち止まってんだよ。クソツ！

『腕』を使えばすぐに元通りだけど……そうしたらアイドスを救う時間が無くなる。

こいつ、今にも逃げようとしてるし。しかも後ろから魔物来てるし。

ああああああ!! もういい!!

幸いにして、ここには空を飛べる魔物はいない。だからキメラや、その進化形態であるグロウキメラを召喚。このレベルならこいつらだけで充分すぎる。

そして、掴んだままの両手で……切り離す！

——バチン！——

その音がすると、二つの色が出た。

片やどこまでも深く濁った色をした、黒。片や美しくなびいている、赤。

赤は、アイドスの髪だった。彼女と初めて会った時に最初に見たもの。

黒はそのアイドスから剥がれ落ちたもの。邪気の塊。先ほどとは違い、さらに黒ずんで見える。

アイドスは、その中にはもういない。今までとは違い、あれは純粹な悪意の塊だ。

つと、やば。さつきやられた怪我、まだ治してねえ。とつとと治療したいんだが……魔術を使用する暇すらない。アイドスは気絶してるつてのに、こいつは相変わらず触手を伸ばして攻撃してきやがる。彼女を背負っているから動きにくいし……ここは撤退

だな。

「ゼアノス様……その女性は？　というよりどうしたのですかその傷は!？」

ああ、丁度いいタイミングでイオが戻って来てくれた。

いつもは冷静で落ち着いた感のあるイオだが、いつもよりも感情の起伏が激しい。

「話は後だ！　悪いが見ての通り体を動かさにくい！　俺たちを転移してくれ！」

「は、はい！　了解いたしました！」

邪悪な塊を置いたまま、逃げた。事情があるとはいえ、凶腕として逃げるのは初めてかもしれない。油断して傷も負っちゃった。

ちよつとした嫌な思い出になりそうだ。

—機工文明の遺産が眠る神殿—

転移で逃げてから少し経ち、イオがようやく落ち着いた。

結構慌てていたのだが、よくそれで転移を失敗しなかったな。

「落ち着いたか？」

「はい……それでゼアノス様、その女性は……？」

「……レアの妹の、アイドスだ」

「その娘が……？」

久しぶりにアイドスを見れて、思わず泣きそうになった。どうやら俺は、自分で思っていた以上にアイドスに惹かれていたらしい。長い間会っていないかったのにな。

落ち着いてから彼女の顔を見たら、まだ目を開けていないがとても安心した。記憶の中の彼女と、何ら変わりなかったからだ。

「そうだ。……それで、ここは？」

転移先はイオに任せたので、ここがどこなのか俺は把握していない。

「ここはあの谷より、僅かに離れた場所です。丁度ここは山脈の間なので、人間には見つからないでしょう」

どうやら氣を使ってくれたらしい。俺としてもアイドスを公の場に晒したくなかったから、ここは感謝しなきゃな。未だに目を覚ましてないから。

今の彼女は肉体を持たない、精神だけの存在。さらに、神の中核というべき核が無い。つまり目を覚まさないということは、精神に何らかの異常があるということだ。今まで邪悪なモノに憑りつかれていたことを考えれば、当たり前かもしれない。

『腕』を使えばすぐに覚醒するのだろうか、彼女には使いたくなかった。この力は、因果を変える力。それによつてたとえ結果が良かったとしても、アイドスを歪ませたくなかった。

「ありがとな、イオ」

「褒めていただき、至極光栄です」

畏まつて頭を下げるイオを見て、本当に氣が利くな、と再度思う。

確かにここならば、人に見つかることは滅多にないだろう。

そこで、何やら変な魔力のうねりを感じた。今まで生きていた中で、一度も感じたことのない質を持つ魔力だ。

ここはオウスト内海とブレニア内海に挟まれている地であり、ブレニア内海の北西部

に位置している。ということは……

この近くには、*「アレ」*の一人がいたような気がする。

そして俺ですら知らない、変わった質の魔力。まさか……

— ルンⅡアウエラ —

純粹魔術の中でも最上位に値する超越爆発魔術、*「ルンⅡアウエラ」*を発動。

それにより、山が崩れていく。消えていく、という表現でもおかしくないのが怖い所だ。

「一体、何を……?」

「後で話す。だからお前も、ここら一帯を壊すのを手伝ってくれ」

イオは頷き、俺にならって魔術を放つ。

魔神ラテンニールを召喚し、こいつにも手伝ってもらおう。人手(この場合は神手か?)は多い方がよいし。

この騒ぎを聞きつけたバリハルト神殿の人間が来るかもしれないが、そうなる前には撤退するつもり。間に合わなかったらどうするのか? 武力最高、これだけ教えとく。

とはいえ、いくら鍛えているとはいえただの人間がここまで来るのに、最低でも一時間は掛かる。……神格者なら別だろうが。

それに準備するのにも時間はかかるだろう。だからその心配も杞憂で済む。何せこんな上位魔術を使っているのだから、目的のものを探するのに一時間も掛かる訳がない。

「ゼアノス様……わたくしも途中から気が付いていましたが、これは、まさか……？」

「ああ、お前の予想通りだろう。やっぱりな」

「……我にハ良くわからヌ」

ラテンニールはポツリと呟く。

ちゃんと話せるのか心配だったけど、話せるようだった。まあ、発音が悪いせいで少し聞き取り難いし、完全に従属しているわけでもない。たまに反抗するし。

「お前にもわかるように、後で話してやるさ。とにかく、今は付いてこい」

「ワかつタ」

アイドスの原作知識と共に、場所が近くであることから思い出した神殿。時間のせいで埋もれていたが、見つけだすことに成功した。

俺が捜していたのは……これだ。

瓦礫に埋もれて見えなかったが、今ではくつきりと見える扉がそこにはあった。

牢屋のごとき暗く沈んだ地下を、俺たちは歩いている。

静寂が周りを支配し、足音が出る度に、一つ一つが異常に響き渡っていく。

魔物も一向に出現する気配もなく、寂しいほどに生物の気配が皆無だ。

未だ目覚めずにいるアイドスだが、俺が背負って運んでいる。胸が押し付けられているのでとても役得です。

念のためにイオとラテンニールに周囲の警戒を任せ、いつ目が覚めてもいいようにしている。だがそれも杞憂に終わり、心配するまでもなく先に進めた。最後まで妨害となるものが一切いなかったからだ。

「……………これ、貰ってもいいよな？」

そして今俺の目線の先にあるのは、魔導鎧。いくつかここに落ちている。

ただどこここにいるであろうアイツに関係あるとはいえ、何で落ちているんだ？ こ

こ、一応現神が管理していたんじゃないのか？

ノワールの強化のためにと、いくつかある魔導鎧をかき集める。ブランシエの強化はどうするのかって？ 魔剣……………というより聖剣をいくつか渡せばいい。というか現神

から渡されたらしい。さすがは熾天使、現神からの期待は大だね。俺の眷属なのに。

今では、様々な地方に行ったり来たりらしい。連絡して来た時に愚痴ってきた。

真面目なあいつが愚痴るとは……………と思っただけど、あいつの根っここの部分は俺と同じ闇

夜の眷属。現神に仕えて嬉しいわけがないよね。それもバリハルトに仕えているらしいし。

何度も閨を共にしないかと誘われた、とも言っていた。

どうかそれ、裁きの女神ヴィリナにばれたらやばくね？ 主にバリハルトが。

ヴィリナはバリハルトの妻で、不義を働いたバリハルトを神の墓場に落とした、なんて言われている鬼嫁らしい。何と恐ろしいことか。

話が脱線してしまったが、つまり、ブランシエはもう強化する必要があまりないんだよ。

ノワールがディージェネール地方にいるのは、前にも言った通りだ。墮天使だけでなく、あそこには悪魔族が大量にいるので、まずはそこで勢力を集めるとのこと。

魔導鎧はそれが成功した際のプレゼントにするつもり。

それと弓矢じゃ弱くて威力に問題があると言っていたので、そのことも考えてある。何故か知らんが、ここには魔導銃まであったので、それを渡す。

暗黒魔術と魔導銃と魔導鎧。完全に遠距離タイプだ。でも鎧を着けていることには変わりないので、遠距離型なのに防御力も高いついていう高性能。しかも元々は体術で戦っていたので、接近戦も問題なし。敵さん涙目だなこりゃ。

あー、でもこれだとノワールを最屑しすぎだな……折角ブランシエも嫌々現神の下で

頑張っているんだから、あいつにも褒美をやらないと。うん、考えておこう。

近距離のブランシエと遠距離のノワール。チームを組ませたらとても強いだろうな。

今度は中距離型でも創ってみるか？ 天使でも墮天使でもなく、その中間の存在、何かないかな？

「……………」

気に入った物を収集していると、急遽ノワールが心話をしてきた。

どうやら合成魔獣が1億を突破したので、もっと創りたいとのこと。だがそれでは元々の数が少なくなってしまうので、狩りの許可が欲しいというものだった。

ちなみにこの『狩り』というのは、人間の材料集めの事だ。

許可？ 出すわけないだろう。これ以上やったら世界の強弱関係が崩れ去るわ!!

……………今更か？

まあいい。いや、良くはないけど……………うん、まあいい。

とにかく、狩りは駄目だけど合成に関しては許可を出した。ノワールとブランシエが頑張っているので、今度褒美をやると教えたら、さらにハイテンションになっていたことを追記しておく。

ずっと神殿の中を歩いていると、やっと最終地点が見えた。辿り着いた最深部。そこはまるで独房のような雰囲気を持っていた。

入り口の傍に篝火かがりびが二つ。あとは何の光もない闇の迷宮の最奥で、中央に鎮座しているおとなしそうな少女がいた。

「やはり、ここにいたのですね」

「俺の推測通り、か」

音も無く眠るように座っているのは、イオと同じ古神七魔神の一柱、ラヴィーヌ。

古神だが、機工女神に分類される真なる女神だ。

「……ゼアノス様、彼女を？」

「頼む」

「はい」

イオは頷き、ラヴィーヌのもとへ駆けて行く。

「起きなさい、冥幽のラヴィーヌ。今が目覚めの刻ときです」

「……」

イオの言葉に反応し、彼女は薄っすらと目を開けていく。ただ、その口からは言葉が全く聞こえなかった。かなり無口だ。

「……」

「おはよう、とでも言っておこうか？ ラヴィーヌ。俺はゼアノスだ」

「ゼア、ノス？ ……おはようございます」

……返してくるとは予想外だった。

俺はラヴィーヌとの面識が全くと言っていいほど皆無だったので、それからはイオが色々と説明していた。主に俺の。

どうでもいいことから恥ずかしい事まで、それこそ出会ってから今までのことを全部記憶しているんじゃない？　と思うほどに語っていた。

長くなりそうなので、ラテンニールを使つてちよつとしたことを試すことにした。

俺は今までもこれからも、リミッターを外すことはあまりない。魔神というだけで敵になるのは限られているが、今の俺なら倒せるという強者もいるはずだ。だからラテンニールの能力を、俺も使えるようにコピーしてみようと思った。

神核が壊されても、蘇ることが出来るといふ能力を。

方法は簡単。ラテンニールの頭に俺の『手』を置いて、俺の頭にも同じように乗せるだけ。あとは勝手に、『腕』を通して俺にラテンニールの能力が入ってくる、ということだ。それで一応、それは完了したのだが……

「……今一、実感がわかない」といふことだ。

かなりいい能力なのだが欠点が一つある。死ななければ発動できないために、ちゃんとコピー出来たのか不安なのだ。俺の『腕』だから、問題はないと思うけど。

「ゼアノス様、よろしいですか？」

ふと聞こえるイオの声。

どうやらラヴィーヌとの話は終わったらしい。

「ああ、構わないが……俺のこと、話したのか？」

「はい。ラヴィーヌには、ゼアノス様が凶腕様であることも教えました。ラヴィーヌの能力はゼアノス様の力になると思いましたので」

「よろしくお願ひします、ゼアノス様」

無表情な顔でお辞儀してきた。機工女神、機械だから表情の変化は乏しいのか？

というか女神が魔神に頭を下げるって……いや、今更か。イオも女神だし。

「ラヴィーヌの能力？ どんなものだ？」

「ラヴィーヌは実質、機工女神なのです。ですから様々な物と融合し、同化、復元させることができます」

そういうえば、そうだったか。忘れていることが多いな……。

「なるほど……今はまだ思いつかんが、必要になったときには頼もう。よろしく」

「はい、よろしくお願ひします」

これで二人目の古神をゲットできた。しかしイオ、何を話したら古神を配下にできるんだよ？ ……いや、ラヴィーヌが周りに流されやすいのか？ 機工女神だから、機械

のように命令されれば実行、なのかね？ ……わからん。

でももしそうだとしたら、万が一俺の下から奪われたら、奪った奴の言うことを聞くようになるのか？ いや、それなら現神は封印なんかしないよな……。

どちらにしろ、俺は独占欲が強い。ラヴィーヌは俺の好みではないが、一度手に入れた女を離す気はない。だから……

「そろそろ外に出るぞ。……イオ、戻ったら少し外れてくれないか？ ラヴィーヌを俺の使徒にする」

「はい。了解しました」

機工女神も女だから、そういうことも出来るらしい。知った時は驚いたものだが、それを知っておいてよかった。

こうして第二使徒を手に入れた俺だが、ラヴィーヌは俺のことをご主人様と呼んでくる。

前世を含めて、そんなことを言われたことは今まで無かったが、結構いいものだったとだけ言っておこう。

—進出—

Side・イオ

ゼアノス様がラヴィーヌを使徒にしてから、数日が経ちました。アイドスという、レアの妹神は未だに目覚めていません。ゼアノス様はずっと、彼女の心を心配そうに見ています。時たま、頭を撫でたり髪に触ったりしておられますが、今までに見たことのないお顔をしておられました。

それを一言で表せば、優しいお顔です。

その表情は、私が使徒となって以来一度も見たこともないほど、慈愛に満ちていました。

胸がズキンと痛む。

わたくしには向けてくださったことのない、ゼアノス様の優しい表情。

優しいお顔だけならば、何度も拝見したことがあります。しかし、あれほどではありませんでした。

わかってはいます。

わたくしは、ゼアノス様の使徒。すなわちこのような感情は、分不相応であることも。そして、わたくしは前に誓いました。『貴方様のものです』と。ですから……

「これからも、お傍にいさせてください」

それがわたくしの、ただ一つの願いです。

S i d e ・ ゼアノス

ラヴィーヌを連れて神殿から帰還してから、数日が経過した。アイドスは未だに、覚醒する予兆すらない。

「ご主人様、その御方は？」

今まで空気を呼んでいたのか、アイドスのことを聞いてこなかったのだ、彼女は。それを、今日ようやく聞く気になったらしい。

「お前も聞いたことがあると思うが、慈悲の女神アイドスだ。お前らの仲間だったレアの、妹神でもある」

ラヴィーヌにそう返すが、基本無表情なのでどう思っているのかさっぱりわからない。イオが言うには、あれで結構驚いているらしい。

閑話休題。

とりあえず、アイドスが目を覚まさない。そのことが心配だ。

「……イオ、ラヴィーナ。彼女が起きるまで、頼んだ」

歪の回廊の先にある異空間に、3人を送る。

イオは渋っていたものの、主である俺の頼みを聞かないわけにもいかず、ラヴィーナと共に面倒を見てもらう事になった。

そして、ノワールに心話を繋げる。

(今度の用事は何? 主様)

(任務だ。それも、今までのとは比較できないほど高い難易度の、な)

(ほんと!? どんな!?)

(お前、確かディージェネールで勢力を集めているんだよな? ついでに国を作つとけ)

(……へ? 国?)

(そう、国だ。それも凶腕の国だ。現神に目を付けられるかもしれないが……それは放つといていいだろう。どうせお前、凶腕の眷属だというネームバリューで勢力集めてんだろ? 丁度いい。場所はディージェネールの北方だ。城つぽいもん造つとけ)

(わかったけど、でもそのどこが高難易度なの? みんな簡単に従うから、簡単だと思
うよ?)

(……あのな。現神の信徒や眷属が、墮天使や魔族の国が新しく建設されるのを黙って見ていると思うか?)

(あ、そうか。わかった、頑張るよ主様! ……あと、忘れていたけどちよつと言いい報告。墮天使は隠れていたのを結構見つけて仲間に来たんだけど、魔族はどうも仲間になりそうにないよ。私が主様の眷属だって、あいつら信じないから)

(そうか……じゃあそいつらは放つとけ。そいつらの気持ちもわかるが、信じないのならば仲間にしても後々面倒なだけだ)

今の俺は使徒がいるとはいえ、はぐれ魔神状態だ。その評価が定着してしまうのは流石に嫌なので、国を造ってそこに住めばいい。そうすれば、アイドスもそこで療養できる。

できれば深凌の楔魔も仲間に入れたいのだが……それはまた今度考えよう。

ラーシエナとパイモンはすぐに従ってくれるだろうが、他の魔神は……特にディアーネとゼフィラは来ないだろう。性格的に。

ノワールとの心話を切り、今度はブランシエに繋げる。

(何用でございましょうか、主様?)

……ブランシエとノワール、何でこんなにも違うんだろ?

(ああ、忙しかったらすまん。いきなりで悪いが、お前の仲間に現神を嫌っている天使は

いないか？ ほら、元々は古神に従っていた天使で、今は仕方なく現神に従っているやつとか。そういうのがいたら、俺の部下にならないか説得してほしいんだが……頼まれてくれるか？)

(今は丁度任務中ではないので、大丈夫です。それと、そう命令なさると以前から予想していた故、既に済んであります。主様が魔神であることも教えました、古神の英雄とされていましてので、説得するどころか是非にと言いつけてくる天使もいたほどでございます)

……もう一度言おう。ブランシエとノワール、何でこんなにも違うんだろ？

というかブランシエ、手際良すぎ。それに天使も何やってんだか。俺って、一応種族的には魔族だから天使の敵なんだけど？ 敵の敵は味方ってやつか？

(……そうか、よくやった。褒美として、何か欲しいものはあるか？)

(そうですね……それならば、主様と同じような『腕』をくださいませんか？)

(あ、それ私も欲しい！)

ノワールがまたしても心話してきた。というか今までの聞いていたのか。

しっかし、褒美に『腕』と来たか……結構予想外。

(ノワール！ 今は私と主様の会話途中で……)

(だって私も欲しいもの！)

うん、俺の『腕』自体はあげられないからな。さて、どうするか……。

(……わかった。今度お前らにやるよ。ただ俺とは違って片腕ずつだけで、しかも劣化版だけどそれでいいか?)

これでいいだろう。流石に俺のと同じ能力を付けるわけにもいかないし。

(うん! 楽しみにしてるね! 今ちようど忙しくて……心話、切るね!)

(相変わらずノワールは……言葉遣いを直せというのにまったく。はい、私もそれで構いません。それではよろしくお願い致します)

各々がそう言って、やっとこの会話が終わった。というかノワール、いきなり心話をぶち切りやがった。そんなに忙しかったのか?

ノワールに造らせる国は、なにも魔族国というわけではない。天使もいるわけだし。

光も闇も受け入れるが、闇の勢力の方が強くなるだろう。光に属する者なんて、それこそブランシエに誘われてくる天使しかいないと思うし。でも、もちろん差別は許さない。

天使の墮天? させないよ? 魔族の作った国にいても、それぐらいでは墮天しない

だろ。原作でも、神殺しの使い魔になった天使がいたほどだし。というか闇夜の眷属の王と性行為をした天使もいたし。

ちなみに人間を入れる気は一切ない。魔族や天使から見れば人間は短命。短命だと

色々面倒なので、人間は入国させない。

つと、この話はこれで終わりにして、そろそろセリカたちの所へ行くとしますか。あれから何日か経ったけど、今は何をしてるんだろうね、彼らは。昨日はステインルーラっていう部族の領域で、あいつらの魔力を感知出来たけど……何をしてんだ？ 異世界に棲む混沌の魔物の気配がしたんだが。

まあいい。とりあえずセリカ、もしくはサティアの魔力を探る。

街にはいない。付近の平原にもいない。森にもいない。山脈にもいない。

「おい、一体どこに……見つけた」

見つからなかったことにちよつとイラついたが、見つかったのでよしとする。あいつらがいる場所は、ブレニア内海。どうやら船で渡っているらしい。向かっているのは……ディージェネール地方。今ノワールが近くにいるんだけど。

あいつらと出会わなければいいが……出会ったら死ぬぞ、実力的に。ヤバ、真面目にどうしよう。

……俺も行くか。あの地方にノワールの勢力とは違う、かなり強い魔力を感じる。ノワールも気が付いているのだろうが、そういうのは放っておくように命令してある。だからその魔力の源には近づかないだろう。俺が確かめに行くとする。

ついでにセリカ達にちよつかいを出しに行こつと。

……別にそれが本当の目的ってわけじゃないからな！

☆

セリカたちのいたセアール地方と、魔族や亜人族の領域であるディージェネール地方。その二つの合間にあるブレニア内海の真中に、俺はいる。空に浮かびながら、姿は見えない様になっている。

バリハルトの戦士が乗っている船が見え、無意識の内に顔が綻ぶ。何か楽しいことが起こると、俺はそうなるらしい。前にノワールから教えてもらった。

曰く、『玩具を渡された子供みたい』だそうだ。すぐに納得できた。

神官戦士達と遊んでやろうと、手に魔力を集めて凝縮させる。球体となったそれに暗黒魔術を加え、自我を持たせて船へ放つ。つまりは、純粋な闇の魔力の塊を放ったわけだ。

結構使えるかもしれないので、以後使う時のために「ダークマター」と名付けた。それを複数個作り、殺さない程度に加減して攻撃させる。

……『ダークマター』とは言っても未元物質でないので、そこそこよろしく。漢字なら、むしろ暗黒物質の方だ。

「な！ 何だこれは!？」

「これは……魔力の塊?」

突然のダークマターの出現に、一向は驚く。その隙に放たれた暗黒魔術で攻撃されて、何人が負傷者が出ているようだ。サティアはいち早く正体に気付いたようだけど、対応しきれていない。

おかしい。こいつらはかなり弱く設定したはずなのだが……かなり多くの数を作っちゃまったのは失敗だったか？

と想っていた時がありました。

「はあああああ!」

「せいっ!」

セリカとダルノスの飛燕剣と、サティアとカヤの神聖魔術が炸裂する。

あれは、文字通り純粹な闇と言つていい。打撃や斬撃はともかく、光の魔術とは相性が悪い。だから神聖魔術が当たると、あつという間に消滅してしまう。サティアがそれ

にいち早く気づき、物理攻撃で怯ませてから魔術でとどめの追撃。そんな戦術で倒している。どうやら俺の心配は杞憂で終わるようだ。襲つといて何言つてやがるとかは言わないでほしい。

ダークマターが殲滅されたのを見て、もう襲うつもりのない俺は、デージェネールへと転移した。それを知らないバリハルトの戦士達は、今まで以上に警戒を強めたらしい。哀れ。

こんなことをして、『現神とのこと忘れてない?』と思う方もいるだろう。うん、実際忘れていたよ。

でも無問題。モーマンタイアイドスがあんなふうになったのは嵐バリハルトの神のせいだから、それを覚えてれば難癖付けられても言い返せる。

それに結局はバレなきやいんだよ! よく言うだろ? 『犯罪はバレなければ罪にならない』つてさ!

注※ 言いません。決して犯罪はしないでください。バレてもバレなくても犯罪は犯罪です。

そして現在、セリカやサティア達が到着した。

「どうやらここに棲む亜人族に、神器浄化の方法を聞きに来たらしい。俺なら一発、『腕』で触つてはい終了、だけどね。」

亜人：……ここら一帯に居るのは、古神の眷属であるナーガ族だ。しかしこの近辺に、それとは全く関係のない強大な魔力の気配がする。ここに来てわかったが、これは魔神だ。ナーガ族の強固な結界を壊そうとしている。

これは一筋縄ではいかない。リミッター付きの今の俺では、戦ったら負けるかもしれない。正直、『腕』を解放するかどうか迷う。

……言っておくが、俺の『腕』はいつも外に出しているからな？ 凶腕じゃない時は、肩から手にかけて巻き付けているだけ。だから普段は刺青イレズミのようになってる。

魔神の存在を感知したが、自分から行くつもりはない。セリカたちを追跡し、面白いことは無いかと、基本的には観察するだけだ。そこ、ストーリーとか言うな。

後を追っていると、リ・クティナという偉そうなナーガ族と話し始めた。すぐになくなつてしまったが。というかダルノス、瞳孔が開きつばなしだ。血走つてもいる。どうかしたのか？

そこからさらに進むと、多数のナーガ族の死体が床に落ちていた。

ここでは何が起きたっけ？ と思いついて出そうとしていると、バリハルトの戦士が近くの部屋から飛び出て、一斉に出口に向かって走り出した。俺は浮かんでいたのでぶつから

なかったが、危なかった。逃げなかった他の戦士は先へと進んでいったが、セリカたちがいない。ダルノスはいたけど。

セリカはどこだと姿を消したまま探すと、すぐに見つかった。俺が察知した魔神と見合っており、その足元には無数のナーガ族の死体。殺された後だな、これは。

セリカとその魔神が少しだけ話をして、戦闘が始まった。とはいっても、戦いとは言えぬ一方的なものだった。

魔神の一撃を受け、それでもセリカは倒れない。魔神はそれに素直に驚き、褒美をとらずという言葉を放つ。セリカは名前を聞き、魔神はそれに答えた。

ハイシエラ、と。そう答えた。

そこで俺は思い出す、ハイシエラの存在を。三神戦争を生き延びた魔神で、原作の全てに登場している。顔が見えなかったので、誰なのかわからなかった。ストーリー構成もほとんど忘れたし。

というかセリカ、そこまでヤバいなら俺を召喚すればいいのに。腕輪、まだ持っているだろ？ まさか忘れているのか？

セリカたちを見続けていると、セリカ等が突然走り出した。ハイシエラから逃げる為だろう。ハイシエラはそれを面白がり、魔力を放ちながら追いかける。

俺がいることも知らずに。

何が言いたいのかって？ 放たれた魔力の塊が、俺に命中したんだよ。それも三回。

しかも無差別に投げているから建物の天井が一部崩落して、俺はその下敷きに。痛い。それに重い。

よく響く笑い声と共に、気配が消えてゆく。

周りに誰もいないことを確認、瓦礫を持ち上げてから『腕』を一瞬だけ解放して瓦礫を破壊。そして深呼吸。

わかっている、あれはわざとではないと。姿を消して気配も消していた俺も悪い。

自分で言うのもあれだが、俺は色々と恐れられているほど強い。その自覚はある。だから人間程度では、俺に傷を付けることなど不可能。

けどな、それは普通の人間だったらの話だ。今の俺は凶腕ではないから、全力の本気状態ではない。

もし『腕』を出し、全力で本気を出そうとすれば、抑えていた魔力が一気に噴き出して、その余波で周囲が吹き飛ぶ。抑えていた魔力を解放するだけで、だ。

しかも常に魔力を放出するようになるので、敵からの攻撃がほとんど効かなくなるといふメリットがある。逆に回復も効きにくくなるというデメリットもあるけど。

でだ。かなり遠回しになったけど、今の俺では魔神の攻撃でも簡単に怪我をするんだよ。

それにハイシエラは、魔神の中でも上位クラス。そいつの魔力弾が当たったんだ。かなり痛い。

結局俺が何を言いたいのかというと、うん、キレた。久々に切れた。八つ当たり？ 知るか。とてつもなく痛かったんだよ！

ハイシエラ、今からそっちに向かってやる。首を洗って待っているがいい！

—魔神と魔神の激突—

俺は今、ハイシエラを追いかけている。意識していなかったとしても、あいつは俺に攻撃を当てた。それだけで、追うのに充分な理由だ。ほぼ八つ当たりだけども。

でも参った、ここ広すぎ。

その所為でハイシエラの魔力を追っても行き止まりにぶち当たるんですけど。壁を壊しながら進んでいるけど、建物全体が壊れないか心配だ。

ずっと迷いながら進んでいくと、巨大な蛇の像がある広場に着いた。だが幸いなことに近くにはハイシエラの気配。ここで待っていれば、いずれ来るだろう。

中心部ではセリカたちがナーガ族と相対しているの、見つからない内に姿を消して隠れる。もちろん魔力と気配も、見つからないように消している。

セリカたちはここに神器の浄化方法を聞きに来ている。あいつはその方法を聞いたのだが、セリカとサティア以外の人間がナーガ族を殺す気満々なので、聞く聞かない以前の問題だった。

ナーガ族は古神の眷属。現神に仕える戦士からしたら、その存在は許されるものでは

ないのだろう。

だがそれでもセリカが必死に説得する。リ・クティナはその心を知るために、戦いを挑んだ。セリカの『殺したくない』という思いが、憶病からくるものなのか、もしくは守るためのものなのか。それを、見極めるために。

結果、セリカたちが勝利した。ナーガ族の操る連接剣という特殊な武器に苦戦したが、それでも彼らは勝った。

セリカが素直に浄化方法を聞こうとすると、カヤが反対意見を出した。仇を討つても足りないほど大勢の仲間が犠牲になったのに、と。

それでもセリカの想いは変わらず、リ・クティナから聞き出した。

汚れた神器、"ウツロノウツワ"。【雨露の器】が本当の名だが、今では邪気によってその本質を変えてしまっている。時代によって言い方は変わるらしいが、ナーガ族の長であるリ・クティナは、【虚ろの器】だと言っていた。あながち間違いではないかもしれない。

異様な邪気が戦士たちを覆っている。その邪気こそ、"ウツワ" が放っているものだ。その所為か、気性が荒くなっている。

その神器は古神のものだと、彼女^{リ・クティナ}は言う。古神が変化したものなのか、魔力を受けた物なのかは知らないらしい。

そしてそれを浄化するには、器と同質の力。すなわち古神の力が必要だ、とも言った。古神の「聖なる裁きの炎」だけが、唯一の方法だと。

カヤがまたしても反対意見を言うが、セリカはその古神の所在を尋ねる。

「リ・クティナよ。古神の所在を教えてはくれないか？」

「それは出来ぬ。古の神は数多の戦いの中で身を隠し、或いは封じられた。姿を現さぬのは故あつてのこと。神の意に反し答えることはできぬ」

当たり前なことだが、彼女はそれを拒否する。しかし彼女は、そのまま言葉を続けた。

「——だが、御主が古神は邪神に非ずと信するならば、いずれの後に姿を現そう」

この言葉を言い終わつたその直後、圧倒的な力を持つ者の声が聞こえた。

「いずれとは……待つておれぬの」

暗い迷宮に響き渡る、悠然とした靴音。

ナーガ族の戦士が一瞬にして殺気を放ち、現れた者の周囲を大きく取り囲む。だが、声の主は全く動じる事無く、むしろ軽い笑みを浮かべながら近づいて来る。

来たのは、ハイシエラだった。

その出現により、何やら言い争いを始める面々。聞き取れるのだが、今の俺には聞こえなかつた。テンションがヤバイ方向で上がっていたからだ。

どんな方法で仕返ししてやろうと考えていると、ほんの少しだけ会話の内容が頭に

入ってきた。

「力あるものならば、我が糧になるべく生み出されたとは思わんか？」

……なんだと？

会話の流れからして、「力あるもの」||【例の神器】。【我】||【ハイシエラ】。そして、その神器は……この原作知識が正しければ、アイドスのものだ。

つまり、ハイシエラはアイドスの核を自分の糧にしようとしている……だと？ ははは。

……ふざけんよこの野郎。女だから野郎じゃないけど。

あいつを使うと言うのなら、仕返しではなく、本格的に殺すぞコラ。

とはいえ、ここで殺しては未来に支障が出る。それにここで俺が凶腕だとバラすつもりもない。となれば……

「……レイ||ルーン」

今の俺で、さつきまで考えてた通りの仕返しで済ましてやろう。だが次はマジで考える。

「勅封の斜宮に眠る力を得ようにも、頑強な結界に阻まれ面白くなく思っておったところよ。ナーガの一族が封じにかかわっているならば、長の首でも捕まえ、解かせようかと……ッ！」

俺の放った純粹魔術は、会話中だったハイシエラめがけて飛んだ。しかし命中はせず、寸前で躲された。

「……話の途中で攻撃してくるとは、随分と嘗めた真似をしてくれる。何奴だ」
【レイールーン】は一直線に魔力を放つので、どこから攻撃されたのかすぐにわかってしまう。まあそれが目的だったんだけど。

ハイシエラだけでなく、バリハルトとナーガの戦士も此方を向く。攻撃する直前に姿は出していたので、俺はすぐに見つかった。ちなみに魔力はまだ隠したまままだ。

あ、セリカたち随分と驚いている。

蛇足になるが、俺は傷を治してない。つまり魔力弾や瓦礫が当たった場所は傷になっただけ。今も頭からダラダラと流血している。

「……我に攻撃を、それも不意打ちなぞするとは、余程命が惜しくないと見える」
さつき俺も、自業自得かもしれないがお前に不意に攻撃されてたからな？

「それで一体我に何用だの、人間」

どうやら魔力を消したままなので、俺のことを人間だと思っっているらしい。

勘違いしてるのならそれで構わないが……いや、やっぱいいや。

「何用だ、だど？ ……俺はさつきからこの迷宮にいたんだがな？ 貴様が無差別に魔力を放ったせいで俺に当たったんだよ。それと、俺は魔神だこのクソ女がアアアアア

!!

言い切ると同時に、魔力を解放。もちろん本気ではなく、深凌の楔魔だった頃と同じくらいの魔力だ。

「くつ、この地に二柱もの魔神が来るとは……」

リ・クティナがそう言うが、知ったことではない。とにかく、ハイシエラを殴つてやらねば気が済まん。そしてそれはどうやら相手方も同じらしい。ナーガやセリカ等の方を見ずに、俺のことを見ている。

「ほう、どうやらそれなりにやるらしい。神器の前に、まずは貴様から私の糧にしてくれる！」

瞬間、俺は双剣を出して駆ける。ハイシエラもそれに反応し、剣を振りまわしてくる。

— 気合突き —

— 玄武の鎌撃 —

今使った気合突きは、名の通り気合というか闘気を込めた強力な突き技だ。対するハイシエラは、剣を大きく振り回すことで発生する、剣圧による斬撃を繰り出してきた。

二つの斬撃はぶつかり合い、相殺する。予想通りだったので駆け続け、相殺した影響で発生した煙へと突っ込む。ハイシエラもこちらへ来たので、勢いはそのままに、大きく斬りつける。

ガキンツッ！ という金属音。互いの剣が交わる度に、そんな鋭い音が鳴り響く。

「思っていた以上に、よくやるだの！」

「それはお互い様だ！」

剣を振り、防ぎ、躲す。魔術を使う暇などない。

「ハアツッ！」

「セイツッ！」

ハイシエラは剣を両手で持ち、振り下ろす。それに反応した俺は、X型に斬りつける。そして再び鳴る金属音。

力は拮抗し合い、どちらも押し負かすことができず、引くつもりもない。

互いに押し合っているの、位置的に自然と顔が見える。相手の顔を窺って見ると、笑っている。それも非常に機嫌が良さそうだ。

「……楽しそうだな、お前」

「当たり前だの。この地でこのような強者と出会えたこと、愉しめずにおれるかっ！」

どうやら強い者、ここで言えば俺と戦えることが嬉しいらしい。生粋の戦闘狂だな。

「そういえば名前を聞いていなかったな。俺はゼアノス、お前は？」

「ハイシエラだの。魔神ゼアノス、その名はしかと覚えたぞっ！」

そして再開される剣劇。たまに蹴りや殴りが入るが、それは大体回避している。

そのように、楽しみながらも戦い続けていたのだが、ふと魔力のうねりを感じた。そちらを見ると、リ・クティナが躍るような腕の動きで印を結んでいる。そしてそれに反応するかのようには、床の魔法陣が微かに光った。何らかの魔術を仕掛ける気だ。

「余所見をするとは、随分と余裕だのっ!」

「しまっ……」

それに気付いていないらしいハイシエラの、凄まじい上段蹴り。見事に腹に命中し、身体が浮いた。そのまま拳の追撃を顔に喰らい、吹き飛ばされた。

「いった……」

壁にぶつかかった背中より、殴られた顔の方が痛いつて……どんな拳だよ。それにさつきからずっと頭からダラダラと出血してるのに顔を殴るつて、鬼畜すぎるだろ。

「なるほど。あやつが何を見たのかと思えば、何やら小細工を施しておったか。笑止……御主らが我らの身体に、指一本でも触れられると思うてか?」

ようやくハイシエラは気付いたようだ。というか、我らの身体つて俺もその中に入っているのか? 我『ら』つて。

「御主らの力は驚異的だ。触れる瞬間に千の肉塊にされよう……だが……触れずとも、この地よりはじき出すことは可能!」

「馬鹿め、詠唱の間があると思つてか!」

リ・クティナの言葉にそう返して、魔術で飛ばされる前に攻撃しようとするハイシエラ。

あ、ちょうどいいな、これ。

「余所見するとは、随分と余裕だな」

「な、御主……っ！」

「そらっ！」

お返しだと言わんばかりに、さっき俺が言われたのと同じ言葉を言ってから、剣を持ったままの右手で殴打する。もちろん顔を。目には目を、歯には歯を……ってな。

ナーガ族は助けられたと思って驚いているが、あいつらを助けたわけじゃない。気を取られている内にやられたから、やり返したただけだ。

「……やってくれる」

「つまらん小細工は後回しだ、あの雑多はどうにでもなる。まずはお前をもう一発ぶん殴る。借りをまだ、返し切っていないのでな」

【最初に喰らった魔力弾】＋【瓦礫分】はまだ返していない。もっと、更に重い一撃をプレセントする予定だ。

「面白い、ならばこれでどうだの！」

— エルⅡアウエラ —

それは、現神をも震撼させたメギドの炎と同等とされる純粹爆發。

そんな魔術を建物の中で使って大丈夫なのか？ という質問は受け付けないのであしからず。ご都合主義って便利だよ、とだけ。

俺はそんな大層な魔術を受けたがるマゾではないので、歪の回廊で移動して回避する。そして反撃。

——アウエラの裁き——

これは高純粹の物質破壊球と言われるほどの魔術だ。とはいえ、「エル＝アウエラ」程の威力はない。上位魔術であることに変わりはないが。

頭上から降るその純粹魔術はハイシエラに見事命中。だからと言って、これで勝てるとは思っていない。凶腕状態ならまだしも、今の俺の力では無理だろう。

「本当にやってくれるだの。ここまで傷を負わされるのは久しぶりだ！ さあ我と共に、より血肉湧き踊る戦いをしようではないかっ!!」

あーらら、より高揚させちまつたらしい。これだから戦闘狂ことうやっの相手は嫌なんだよ。でも、俺もこのまま不完全燃焼は御免だ。その誘いに乗ってや……ん？

……………。

……動けない。

ハイシエラが何かしたのかと思ひ、視線を向ける。ハイシエラも同じ考えだったのか、俺の方に困惑気味の視線を向けてくる。互いの仕掛けで無いことはそれで理解し、次の候補を探して……同時に横を振り向く。

そこには、いつの間に回復したのか知らないが、瀕死状態だったバリハルトとナーガ族の戦士たちが、セリカとサティア、そしてリ・クティナを中心に、魔法陣に魔力を必死に送っていた。床の魔法陣が、光を放ってくる。

この魔法陣は……転移陣か!?

「こんの、空気の読めねえ奴らが……」

「はー！ ははははっ！ これは愉快よ。よもやナーガ族と人間族が手を組むとは！ よからう、見逃してやろうぞ！」

呆れていた俺とは対照的に、ハイシエラは敵対していた者同士が手を組んだことを愉快と言ひ、ご機嫌になった。

だが戦いを中断されたこと自体にはイラついたらしく、溜めた魔力をナーガ族に向けて放つ。運悪く当たってしまった者は瞬く間に石となり、砕けてしまった。

「次に相対し時、御主ら同士で斬り合っておらぬならば、我が刃の露としてくれようぞー

――」

そこまで言い、ハイシエラは俺を見る。

「——そしてゼアノスよ、いずれは決着を付けさせてもらおう。その時こそ、御主を我の糧としてくれる」

そこまで言い切ると、転移の魔術に取り込まれ、急激な光の縮小と共に掻き消えた。俺はまだ気力で持ちこたえてるけど。

「はあああああああああああああああッ!!!」

俺を取り込まんとする光が、更に高速になった。ハイシエラがいなくなったからだろう。

だが速くなったものの、それだけだ。俺を取り込もうとする力自体は弱くなっている。何故だ？

「一方の魔神だけに、魔力を使い過ぎたか……」

聞いてもないのに、リ・クティナが勝手に教えてくれた。どうやらそういうことらしい。見れば他の面々も、苦しげな顔だ。だけど俺としても、どこに飛ぶのかわからない転移魔術に捕まる訳にはいかない。魔力をさらに解放し、より激しく抵抗する。

「まだこのような力が……くっっ！」

つーか、俺のことを知らない奴等が俺を必死に飛ばそうとする理由はわかる。魔神をこの地に残すわけにはいかないし、殺されたくないだろうしな。

「だけどセリカとサティア、貴様らは何故に俺を飛ばそうとする？」

「そういう意味を含めて二人を睨むと、セリカは必死になっていて気付いていない様子。サティアは俺と目が合うと、苦笑した。……余裕だなコラ。」

「はあっ！」

「ちよつとムカついたので一瞬だけ、サティア以外には気付かれないほど短い間、魔力を全開に。それによつて俺を転移させようとした魔術は失敗し、発動を停止した。」

「溜息を吐いて相手側の様子を窺うと、九割が絶望感漂う表情。残りの一割、セリカとサティアの苦笑い。……さらにムカついたし、不完全燃焼もあるので八つ当たりを決行。」

「大丈夫、殺しはしないさ。」

「ハイシエラが放つような魔弾ではなく、針状に尖つた形の魔力の塊。その名も『魔針』。」

「自分以外には見えない場所だが、『腕』と腕の付け根からそれを発生させて数本放つた。」

「急所に当たらなければ、死ぬことはまずない。貫通するので痛みは凄まじいが、早いに治療すれば後遺症も残らないはずだ。余程運が悪くない限り。」

「『魔針』は何人、何体かの戦士に当たる。俺のことを知っている二人は驚く顔をするが、」

今の俺の顔は『不機嫌だ』と告げていることだろう。

その後は何もせず歪の回廊を展開。他の大陸に行つて、ストレス発散でもしようかな。そう思つた俺であつた。

—マクルに浸る狂気—

ナーガ族の棲む地、名はニアクール。

あそこでハイシエラと戦い、途中で邪魔をされたあの日から数日が経過した。現在俺が向かっているのは、セリカが住んでおり、前にも拠点にしていたマクルの街だ。もちろん宿なんかは使つてない。使おうものならすぐにばれる。

この街は何事もなく、暇で平和な時間……とは言い難い雰囲気になっていて、所々から邪気が感じられる。この街にあるバリハルト神殿の戦士たちは、大体がもう邪気に侵されている。汚れた神器……汚れたアイドスの神核が、神殿に置いてあるせいだろう。

セリカから感じたアイドスの気配。あれは、セリカが神殿に封じられていたアイドスの神核を触つたから、その気配が残っていたのだろう。

その神器を盗りたいのは山々なんだが、ここで神殿に侵入すると現神との約束を破ることになる。いや、危害を加えるつもりはないのだが、前の悪戯と違って、これにどんなイチャモンを付けられるかわかつたもんじゃない。

もしそうなくても最悪殺せばいいのだが……止めとこう。戦争が起きそうだ。信仰

が増えて力を増した現神と、戦力が整っていない俺。負けはしないと思うが、勝てるとも限らない。

なので今はいつもと同じく、姿を消して空中にフワフワと浮きながら街を観察している。

そして、今日は変化があつた。どこからともなく、異常なほどに膨大な数の魔物が、街に侵入してきたのだ。他にもステインルーラ人という、蛮族と呼ばれている人種も攻めに来ている。

気付かない者も多々いたが、どんどん進行してくる魔物に襲われていった。次第にバリハルトの神官戦士らが、魔物討伐のために出動してくる。

魔物の目的は考えるまでもなく、神器だろう。

かつてアイドスと隔離させた、*“得体の知れないモノ”*の気配を感じる。あいつの身体には、もうアイドスはいない。なのに何故神核を狙うのか。そんな疑問はあるが、しばらくは様子見といこうか。呼ばれていないので、セリカたちを助ける義務は無いのだし。

たまに、邪気に穢された鳥娘が襲ってきた。空を飛べるので、空中にいる俺を標的にしたのだろう。しかしその目に正気は無く、狂気によって彩られていた。

ともかくこんな雑魚に怪我させられるほど弱くないので、殺気を込めた一睨み。それ

だけで魔物は精気を失い、地面に落ちて朽ちていく。

そして気付く。混乱の坩堝るっぼにある街の一角に、最近戦った魔力の持ち主がいることに。向かってみると、そいつは鮮やかな蒼の髪を靡なびかせて、悠然と構えていた。

その者に、気の触れた魔物が近づく。だが触りもしない内に、たちまち塵と化した。「こやつら……どうにも腑に落ちぬ。あふれる狂気と殺気……だが何かが足りぬ。これは我の求める戦と云えぬ」

そう言っている、俺の視界に入っている者は、魔神ハイシエラ。

「狂気や殺気は憎悪の泉より湧き出るものじゃ。その泉が枯渇している」

ハイシエラはこの魔物どもがお気に召さないらしい。どうにも納得がいかないかのように、肩をすくめた。

「……そして御主、そこで何をしている。傍観とは趣味が悪いぞ」

俺のいる方向を見ていることから、俺がいることは既にわかっていたのだろう。

こいつ相手に隠れても意味ないし、そろそろ降りるか。

「そうか？ 第三者の位置にいと、結構面白いぞ」

「我はそうは思わぬがな」

「あつそ。……それでどうする？ あの時の続きでもするか？」

「……何とも魅力的だが、今は戦を愉しみに来たのではない」

そこまで言い、神殿に目を向けた。こいつの狙いもあの神器か。今のあれは邪悪な力の塊だからな。ハイシエラの求める力そのものだろう。

そう結論付け、溜息を吐こうとしたその時。

不意に、空気が変わった。

「……ハイシエラ」

「わかっておる。……我らの足を止める、か？」

ハイシエラはそれまで抜くそぶりさえ見せなかつた剣を構え、不穏な気配に注意を払う。それに乗じて、俺もまた剣を出した。

聞こえてくるのは、死人のように死肉を食う咀嚼音のような音。しかし、何かが違う。

「精気を食らう妖鬼か、それとも死霊か。面白い、相手をしてくれよう！」

先ほど俺と戦うのは止めたくせに、今度は戦う気満々だ。未知なる敵だからか？

咀嚼が止み、重いものを引きずる音を立てながら影が……冥い影くらが、ゆつくりと姿を現した。何日前か前、アイドスと離れさせた「得体の知れないモノ」。邪気の塊だ。

「ハッ！」

電光一閃の斬撃が影を切り裂く。

それでもアレは死ぬどころか、怯むそぶりさえ見せない。

「ほう、死なぬか……むっ！」

大きくハイシエラが飛びぬくと同時に、彼女が立っていた石畳が微塵に砕け散った。影から何十本もの触手が鋭く放たれたのだ。次々と迫る触手を切り裂きながら、女神は口元を歪める。

魔神の攻撃をともに受けて、それでも死なぬ異質な存在。それに悦んでいるのだろう。

冷静に観察している俺ではあるが、敵は当たり前のように俺にも攻撃してきている。だがそれでもまだ余裕だ。

俺も参戦しようとして武器を構える……が、そこでハイシエラに睨まれた。どうやら、手を出すなど言いたいらしい。一対一で戦いたいようだ。俺は素直に後ろに退く。

「貴様は違うな、憎悪の泉に満ちている……そこが見えぬほど深いぞー」

今まで相手にしてきた魔物とは違い、憎悪を隠すことなく放ってくる邪悪の塊。

その影もまた双眸を爛々と光らせ、狂気と貪欲さをたたえて俺たち二柱の魔神を見据える。でも俺はもう戦わんぞ。

「斬つても死なぬなら——」

ハイシエラは迫りくる触手を切り裂き、空いている左手に魔力を込めた。

「灰燼に帰せ！」

放たれた魔力により街の一角に閃光が迸り、影と周囲の魔物らを巻き添えにしなが

燃え上がった。しかし……

「じぶとこの……」

影の身体も沸騰して一部が蒸発した。打撃は受けている……が、損傷はたちまち再生する。貪欲な眼光は衰えず、さらに輝きが増す。強い渴望を示すように……。

その影の身体から——反撃とばかりに千に及ぶ触手が放たれた。……俺の方にも。

「ちっ……！」

「舌打ちしたいのはこっちだ……」

何故に巻き込まれなければならない。俺が未だにここにいるからか？

剣と魔力で一息に薙ぎ払う。

その隙を突き、一本の影の触手がハイシエラに向かって飛び出し、腕に巻き付いた。

前に俺もあの攻撃を受けたことがある。ハイシエラは今、様々な感情が湧きあがり、

そして脱力していつているはずだ。

「させぬ！」

それに気付いたらしく、即座に斬り捨てた。自分の中に異変があったのだろう。

「わかったぞ、魔物どもに何が欠けているのか。……貴様が喰ろうたな。感情の泉……

“心”を！」

心を喰らい、自分の憎悪を増加させる。それがどれほどの恐ろしい事なのか、想像す

るのは簡単だ。だがそんなものがあるとは、魔神からしても思いたくないだろう。「我を恐れず、吸い尽くさんとする貪欲さ。いい度胸よ。褒美を取らせてやろう。……今度は再生もできぬほどの力を！」

そう言つて、やつは空高く飛翔した。触手がすぐさま後を追い、足を捕らえようとするが届かない。というかジャンプで普通そこまで行くか？ 飛び過ぎだ。

「永劫なる時の牢獄、暗黒と破滅、混沌より死滅を繰り返し、微塵に砕く無に帰せ」とてつもない魔術を使おうとしているのか、詠唱と共に全身に力が張つていく

「——数多の素より、那由多に砕かん！」

一瞬にして闇が訪れ、光が弾けた。

地は震え亀裂が走り、空は水精を招いて雨をもたらし始めた。

「ふんっ。消え失せたか。魔力はともあれ、ただならぬ存在感。魔神と同格……それとも……？」

ハイシエラは鼻で笑うが、わかっているのだろう。『死』んではないということ。「神器を狙えば、また相対するであろうな。いずれ正体も知るであろうが……ふふっ、しばらく見物に回るのも一興か。ゼアノス、御主の趣味も中々に面白そうだ」

「……何やら心境の変化でもあったのか？」

「そうではない。だが直感が告げている。待てば、神器など遥かに上回る力が得られる

かもしれぬ、と。……起きる。後の世に語り継がれ、世界を揺るがす何かか」

「前者のことは知らん。だが……後者に関して同意見だ。必ず、何か起きる」

というよりは、これから何が起きるのか知っている。全てではなく、断片的にしか思
い出せないが、後の世に語り継がれるというのは……「神殺し」の事だろう。

「また会おう。その時こそ、御主を我が糧にしてやる」

「やれるものなら、な」

互いに一瞥し合い、同時に姿を消した。

案外、次に会うのも遠くはないだろうなと思いつながら。



魔物や蛮族が侵攻して暴れまわると言う騒動が、つい先ほど終結した。

街の中から、魔物がいなくなっている。バリハルトの戦士たちが頑張ったのだから
が、俺とハイシエラが殺した魔物の方が多い気がする。俺、途中から参戦したからな。

このままでいても、何も情報が入ってこない。魔物がないので、戦う相手もない。
非常に暇でつまらない時間が過ぎていくのはうんざりなので、少しスリルのあること
を実行することにした。うん、バリハルト神殿に侵入してやる。

姿と気配、魔力を完全に隠せば問題ないだろう。『腕』の能力を惜しみなく使用。減るもんじやないし。

内部に入ると、様々な情報が飛び交っていた。神殿内部に魔神がいるなんて、普通は思わない。だから隠す必要が無いから、うようよしているだけで勝手に知ることが出来る。

しかし、神殿も馬鹿だよ。というかこう言っちゃ悪いけど、現神の信仰者が馬鹿なのか？ 現神はほとんどが馬鹿だけ。

話を聞く限り、神器が盗まれたらしい。結界はちゃんと張っていたが、破壊されたのではなく順序良く解除され、しかも早いうちに結界が張り直されたので、気付かなかつたのだとか。そこは別に馬鹿だとか言う気はない。そう手際よく盗まれては、気付くのも難しいだろう。

だが俺が呆れたのはその次だ。犯人の候補が、怪しい動きをしていたサティアだと言うのだ。神殿側は彼女のことを古神の、すなわち邪神の信徒だと思っ込んでいた。実際はその古神そのものだが、そこは置いておく。

邪神の信徒だから神器を盗み出したと疑われているのだが……理解不能だ。邪神の信徒だと言うなら、どうやって解除したんだよ。

まあそう聞いても多分『誰かを操った』、もしくは『解除方法を知っている』的な事し

か言わないだろうけどさ、何で容疑者に俺やハイシエラといった魔神が入ってないのかね？　そこが最大の疑問。セリカはともかくとして、ダルノスやカヤは襲われかけたというのに。

次に、何で身内を疑わないのかと。“解除”されたつてことは、仲間内の誰かが持ち出したつて可能性もある訳だ。それを考えないつてのは……混乱してるし、しようがないと言えましょうがないのかね？

とにかく、サティアは神殿に追われている。とは言え彼女は古神だから、人間では歯が立たないだろう。神格者がいたとしても、一人だけでは無理だ。信仰が無くなつて弱体化した今でも、神に変わりはないのだから。そういうことで、心配はしていない。

……ああ、そういえばあいつつて、古神だと気付かれない様に自分の力を封印しているんだつたつて？

……大丈夫かな？　……うん、大丈夫だろ。

街は混乱及び一日中続いた戦闘。さらにはハイシエラの放つた魔術のせいで、魔力の流れが不安定だった。だがそれがついさつき、明け方によく安定し始め、神殿はサティアの行方を【遠見の鏡】とかいうもので探っていた。そして浮かんた場所は、蛮神の街道とかいう場所らしい。行ったことが無いので、詳しくは知らない。

適当に歩いていると、セリカが見えた。随分と疲れているように見える。

自分の愛する恋人が疑われていると知ったら、ああなるのも当然かもな。事実、彼女は犯人ではないのだし。

……立場的に、古神の彼女は現神の下僕であるセリカの敵になつてしまふ。でもそれは、セリカにとつて関係ないだろう。まだ知らないから、というのはあるが、彼女が古神だと知つても、愛し続けるだろうと簡単に予想できる。

サティアの居場所を知つたセリカは、単身でその場に向かうことを決意した。最悪、神殿から目を付けられることになる。そんな事がわからないほど、子供ではないだろう。全部わかっているはずだ。

強烈なほどの邪気を放つ「ウツロノウツワ」。それは今、サティアではなく、そのサティアを追う人間の誰かが持つている。人間の集団から「ウツワ」の気配がするのはそのせいだな。

俺がここにいるても、何も良いことが無い。だからセリカに付いていくことにした。消えたままなので、セリカは俺のことに気付いてないが。

……ストーカーとか言うなよ？

—息抜きの観測—

ただいまセリカを追跡中のゼアノスです。

彼が向かっているのは、サティアがいると言われている蛮神の街道。俺はそのセリカの少し後ろを、完璧に隠れながら漂っている。先に向かうってのもありだが、肝心の場所を知らないので先行することができない。

サティアの魔力を探知して転移すればいいんじゃないやね？　と思ったのは、全てが終わった後だった、とだけ教えておこう。

途中、セリカを邪魔している神官戦士がいた。神殿からの『セリカを通すな』と命令されているらしい。

つーかさ、あの馬鹿は俺に言つたよな？ 『セリカと共に行く』と決めた』って。なのにセリカを置いて、一人で解決しようとしてる。

まあ、現神の下僕であるセリカに協力を求めづらいのはわかるが……少しは信じてやってもいいんじゃないかね？　これはサティアが悪いと思う。

とはいえ、ズバツと言いつちまえば、一番悪いのは現神だと俺は思っている。いくら古神が戦争の敗者でも、邪神つて設定にするのはやりすぎだ。だけど現神がいなかったらセリカとサティアは出会わなかったわけだし……ちよつと複雑。

話しが逸れたな。

とにかくその三流臭い戦士……名前はゲーエというらしい。ゲーエは、どうしても通りたいと言うセリカに、『力づくで通って見せろ』と攻撃。思わずセリカはそれを剣で受け止めるが、神殿からの命令を受けた戦士相手に剣を抜いたということで、反逆だと言いはじめた。

そこにいたもう一人の戦士は戸惑い、ゲーエはその戦士に喝を入れる。

セリカがその隙を見逃すはずもなく、一気に間合いを詰め、鳩尾に重い一撃を与えた。上から見ているだけじゃわからないが、優しいセリカの事だ。たぶん刃のない箇所を使ったのだろう。

セリカの一撃を貰ったゲーエは、呻き声をあげ、泡を吐きながら倒れた。

先ほど戸惑った戦士に、セリカが「君はどうする？」と確認を取る。

「……私は何も見ておりません。どこへなりともお行きください。」

「ありがとう」

今セリカを通じたあの戦士、人間としてはいいやつだな。命を受けた戦士として良い

かどうかは別にして。

そのまま奥へとセリカは走っていく。俺もそれを見失わないように追いかける。森の中に入り、そのさきにある橋を進むと山岳に出た。足元がジャラジャラして走り難そうだ。

そしてその途中、何者かが現れた。あれはダルノスだな。雰囲気はかなり変わっている。

ダルノスはほんの少しだけ言葉を交わしたあと、突然セリカを攻撃した。セリカはそれを何とか受けとめる。

サティアは邪教徒と思われるおり、セリカはそのサティアの恋人。神殿にとっては、そしてダルノスにとっては邪教そのものが敵であり、サティアを助けたいとするセリカもまた邪教徒だと認識されてしまったからだ。

セリカは何度も防いでいるが、攻撃しようとはしない。仲間とは戦えないからだろう。だがダルノスにとつて、セリカは敵。容赦なく剣を振るい、セリカは勢いよく宙に舞って谷底へ落ちてしまった。

さすがにこのままでは可哀想なので、流木に引つかかるようにさせる。セリカはそのまま流されていき、なんとか地面に漂着した。

セリカはいつのまにか気を取り戻していたらしく、起き上がって走り出した。俺も感

じるが、「ウツワ」の邪気が渦巻いている。セリカもそれを感知したのだろう。

俺がセリカの行く道を先回りしてみると、神官戦士が徘徊している。ちよつとしたお節介として、魔針を放つて戦闘不能にしておく。

現神との約束？ ……前にも言った。ばれなければ問題ないと！

戦士が道の途中で倒れているのも変なので、見つからないように木の陰に隠しておく。案の定セリカはサテアを心配しているので、気付く暇などあるはずもなく、道を突つ走つて行く。そしていくつかの天幕がある広場へたどり着くと、サテアのセリカを呼ぶ悲鳴が聞こえた。

「サテアー！」

一つの天幕へ走り、入り口の垂れ幕をはね上げる……と同時に漏れ出す、凄まじい邪気。魔神である俺ですらこうなのだから、人間の身では吐き気すら覚えるはずだ。それなのにセリカは天幕の中へ迷わず入っていく。

少しの間喧騒が聞こえた後、セリカとダルノスが外へ出てきた。互いに牽制し合いながら対峙している。

「ウツワ」はお前が持っていたのか」

「何を言う。あの女が盗んだんだ」

「違うわ、私じゃない！」

服を整えながらおぼつかない足元で、サティアは悲痛にそう叫んだ。

「わかつている。俺はサティアを……信じる」

「セリカ……」

セリカの信じるという言葉に、サティアは涙を流す。

俺もあそこまで人を信じる人間なんて、他には知らない。もし俺が当事者だったら、嬉しさと泣いてしまうのは決定的だ。

「ふんっ、邪教徒と姦通して自らの道を見失ったな」

そう言うダルノスからは、半端ないほどの強烈な邪気が漂っている。言うまでもなく、「ウツワ」に穢されたに違いない。

「お前こそ力に振り回されている……ずっと俺を諭してくれた……なのに、どうして！」
「俺の生きる意味はただ一つだ。さあ、決着を付けようじゃないか。今の俺には勝てんがな！」

邪気を孕んだダルノスの気迫が、濁流のようにセリカに押し寄せる。それに加え、仲間であつたダルノスと戦うという事実によりセリカは怯むが、サティアが名前呼んだことによつて決心を固めたようだ。

「サティアを辱めた奴を俺は許さない。ダルノス、お前を止める」

「坊やがよく言った！ では……行くぞ！」

ダルノスがセリカに双剣で斬りつけ、セリカは片手剣で受け止める。互いにバリハルトの戦士であり、同じ剣技、飛燕剣の使い手。実力は拮抗しているが、ダルノスは邪気によって力が上昇している。だがその所為で技の一つ一つに切れがない。セリカはその逆で、力は弱い。が技が洗礼されている。ダルノスに比べてなので、実際には力もあるが。

何度か打ち合っていた二人だが、とうとう決着がついた。セリカが大きくダルノスの胸部を薙ぎ、ダルノスの胸から大量の血が溢れた。その量からして、明らかに致命傷。この勝負は、セリカの勝利だ。

まだ死んでいないのか、セリカと会話を交わしている。少しは正気を取り戻したらしい。邪教徒を憎み過ぎて、それを“ウツワ”に利用されてしまった。そしてその結果がこれだ。なんとも痛まれない。ただ、哀れには思えないところが、俺は魔神なんだなど自覚してしまう。

ダルノスはセリカに、神殿に戻るなど言い放ち、地に伏した。

これ以上の被害を出さないためにも“ウツワ”を神殿に持ち帰ろうとセリカは言うが、サティアは反対する。自分が持つていくと、そう言った。

その言葉にセリカは一瞬だけ怪しむが、サティアを信じたらしい。神殿兵の追っ手から、サティアの手を引いて逃げ出した。

「待つて、＼器＼がっ……」

「ここで君が捕まったら全てが終わってしまおう！」

これではつきりしたが、セリカは神殿を捨てた。神殿よりもサティアを優先したようだ。真実を知るためというのものもあるだろうが……サティアは本当にいい男を見つけたな。

二人は森の中を走り、山岳の橋を渡った。セリカはその橋を斬り、進路を絶つ。そして今度はサティアがセリカの手を取り、奥へと消えた。

魔神の俺が言うのもなんだが、無粋だと思つたので傍観するのはこれまでにした。後でまた会いに行こうとは思うが、今はまだいい。

そしてその翌日。例の二人は、森から出てきてどこかへ向かおうとしている。あいつらが今求めているのは、＼聖なる裁きの炎＼だろう。あの力はここから南方のディージェネール地方にある。地を足で歩いていくのは不可能ではないが、非常に厳しい道なのだ。となると、前のセリカたちのように船で行くしかない。そしてマルクの街へは行くことが出来ない。神殿から逃げたのだから当然だ。そうなると船を用意できるのは……サティアに恩のある、ステインルーラ人だな。

そこで、周囲を警戒している二人の眼前に歪の回廊を展開。転移した。

「愛の逃避行中に失礼」

「……いきなり出てこないで。本当にお願ひ」

呆れながら懇願された。いつもと同じように脈絡なく現れたので、気分を害してしまつたらしい。特に今は追われている身だから、余計に神経を使うのだろう。というか愛の逃避行には突つ込まないんだな。

「だから言つただろ？ “失礼” って」

「……はあ。なんだかゼアノスのことが、わかつてきた気がする」

「まあ、冗談はこれでやめにしておく。それで本題だが、昨日はお疲れ様だな、セリカ」
「……何で知っている？ いや、何を知っているんだ？」

驚いた顔で聞いてきたセリカに、俺は答えた。昨日の一部始終の九割は見ていたことを。

残りの一割は、二人が森の奥へ走つてからのことだ。あれからは見てないから、何をしていたのか知らない。予想は簡単にできるけどな。

「それじゃ、その……見てないのよね？」

「サティアがセリカの手を引いて、森の中へ入つてからは見ていない。だから何をしていたのかは知らん」

その言葉に、ホッと息を吐く二人。これのせいでバレバレだと思つるのは俺だけか？

……んん？

「お前の左手の薬指、結婚指輪か？」

サティアの手に指輪があつたので、俺はそれを指摘した。

「え？ ……知ってるの？」

「ああ、知ってる。俺はその世界の出身者だからな。今では古くなつてしまつた風習の一つ、だつたか？ かつてはそれを付けている人間で溢れかえつていたのでよく覚えてる」

「そう……」

悲しげに、懐かしげにそう呟くサティア。

古神だけに、懐かしくもあり悲しいのだろう。段々と昔の習慣が廃れていくことが。

それから少し話をしようとしたが、切羽詰まつたようなセリカによつて止められた。

まあ、逃げている途中で敵か味方か不明の魔神と出会い、話し続けるつてもアレだよな。そう思つたので、警告しておくことにした。

「最後に一つ言つておく。……ロミオとジュリエットみたくならないよう、注意するんだな」

セリカには意味不明だろうが、サテイアなら……古神であるアストライアなら、たぶんわかるだろう。規模は全くもって異なるが、少し似ている。現神の徒と古神。本来なら愛し合う事は不可能な立ち位置にいる二人。

「絶対に、あのような悲劇は起こさない。私たちは幸せになるわ」

やはり知っていたらしい。神も人間の創作物を読むのかね？

俺はサテイアのその声を背後に、声には出さずに笑い、再び転移してこの場を去った。

—騒動前の俗事—

アストライアに軽く警告してから、俺は転移した。これ以上俺が介入すると、バリハルトが煩そうだからな。……いや、既にもう手遅れか？ 大丈夫……だよな、うん。

さて、俺が転移した先はデージェネル地方。現在、ノワールがいる地域だ。報告によると、ノワールの率いる一隊が魔獣を捕縛しているらしい。なので暇潰しも兼ねて、俺もそこに行つて合流しようと思つたわけだ。

で、久しぶりの再会だから晴れやかな気持ちでいたかつたのだが……

「……これはどうなつている？」

「申し訳ありません、主様」

「ごめんね、主様」

そこで問題が起きていた。流石に墮天使の集団が目立たないわけもなく、現神、もしくはその徒に見つかつてしまったらしい。そしてその退治をするために、ブランシエが率いる天使が派遣されたようだ。現に今、墮天使と天使が互いに殺し合っている。

……面倒な。だが将来俺の部下になる予定の天使はいないようだ。ここに居る天使は、その全てが現神に忠実な者だけだ。

ちなみにそれらのリーダーであるブランシエとノワールはというと、仲よく茶を飲んでいた。今まで俺以外に気付かれなかったのが驚きだ。というか部下が殺し合っているのに何をしているのかと、小一時間問い詰めたい。

「なんであいつらは、お前らが仲よく茶を楽しんでいることに気付いてないんだ？」

「特殊な結界を張っておりまして、今の我々を認識できるのは主様以外にいないかと」
「そうか。にしても……ブランシエ、頼む。何を頼んでいるのか、わかるよな？」

「もちろんです。………者ども、退け！ 凶腕がこの地に現れた！ このままでは全滅する！ 後退しろ！」

うん、正解。その対応の仕方は正解だ。俺からかなり離れてからそう言ったし、俺が顔を隠すのも待つていた。素晴らしい。慣れてないからか三文芝居だけど、真面目な天使なら騙されてくれるだろう。

「ですがブランシエ様、凶腕は自分からは手を出さないとはいはずでは？」

「あの墮天使どもが凶腕の部下だったようだ。だからこそ早く退け！ 報復されるぞ！」

私は少しでも長く生き残れるように時間を稼ぐ！」

「そのような！ でしたら我々も！」

「私だけの方が生き残る確率が高い！ 少しでも生き残りを増やすためだ、皆は去れ！」
そりやお前だけ残った方がいいでしょうよ。俺がお前を殺すはずがねーし、お前だけ残った方が俺らの関係を知られずに済むもんな。

「ですがそれでは……ええいつ！ 行くぞっ！」

「な……」

部下の掛け声に絶句するブランシエ。天使部隊は、なぜか俺と戦うことにしたらしい。何でだ？ 我武者羅にでもなったか？ それとも上司が命を懸けるなら自分も！ とかいうやつか？

「お前たち、なぜ……？」

「何を言っているのですか？ 我ら、死する時は一緒です！」

魔王に挑む勇者とその仲間。ただし勇者は魔王の手下、みたいな構造だな、これ。

……あれ？ これって人間側の勝ち目無くね？

「ねえねえ主様、あいつら馬鹿なの？ 主様に刃向おうなんてさ」

「……ああ、そうなのだろうな」

気付けば、天使が全員攻撃態勢を取っていた。こいつらのこれは独断なのか？ それとも、現神が命令したのか？ 命令したとすればそいつは誰だ？ その現神、殺すぞ。（ブランシエ、もういい。一斉にかかってこさせるように指揮しろ。将来に俺の部下に

なる墮天使がどれほど戦えるのか興味がある。ノワールも、わかったな？)

(了解です！)

(了解だよ！)

心話でそう命じると、戦いが再開した。黒い翼と白い翼が舞う羽音が聞こえ、その翼と同じ色の羽が何枚も落ちてきている。と、そこで気になったことがある。

(ふと気になったんだが、お前らはどっちが強いんだ？)

(それはもちろん私d……)

ハモった。見事にハモリやがった。

「はあああああああああああつ！」

「せいやあああああああつ！」

ハモってから、ものの数秒で戦闘態勢を取り、互いに突進していった。魔導銃と聖剣がぶつかり合い、衝撃波が生まれる。それは近くで戦っていた天使と墮天使が吹き飛ばされるほどの威力だった。互いに指揮なんて忘れて戦い合ってやがる。

「あー、余計なこと言ったか？ ……言ったんだろっうなあ」

それから数時間後、2つの影が空から下りてきた。天空での闘争は終わったらしい。「ブランシエにノワール。どっちが強かった？」

「……悔しいですが、引き分けでした」

「近距離ならブランシエ、遠距離なら私が有利で、勝敗が付かなかったんだ……」

そこは大体予想通りだ。こいつらは同等の力を待たせたから、そうなるだろうと思っていた。それじゃ、この前に約束した『褒美』を上げるとするか。

手をちよいちよいと動かして、二人をこちらに呼ぶ。任務を放棄したことを怒られると思っっているのか、不安そうな顔をしている。それに気付かぬ振りをして、俺は『腕』をそれぞれの頭に乗せた。

「……はい、終わり」

「え？ あれ、罰せられるって思ったのに」

「私もそう思っていたのですが……っ！ ノワール！ あなた、『腕』が！」

「ほ、本当だ！ あ、でもブランシエにも！」

俺が何をしたのかというと、約束していた劣化版の『腕』を二人に上げたのだ。俺のと何が違うのかというと、大きく二つしかない。

①・片腕のみ

②・因果を変える力はない

これだけだ。多少は魔力が上昇するし戦略も増えるだろうから、強くもなっただろう。

ブランシエとノワールも強くなったという良いことがあると、さらにいいことが起こるかもと和気藹々に話す俺たち。だが、現実はそのなにごく甘くなかった。

「……何ですか？ この邪気は」

「少し前まで薄っすらと感じる程度だったのに……これは……」

ディージェネール地方の北方、セアール地方。ブレニア内海を挟んだ先にあるその場所で、多大なる邪気を感じる。かつて感じたものと似ているが、微妙に違う。

「かなり離れているはずなのに……しかし、ここは……バリハルト神殿!」

ブランシエが邪気のありかに気付いたらしい。かなり驚いている。確かにマクルの街にある神殿から、邪気を感じ取れる。だがこれでハッキリした。これは「ウツロノウツワ」の邪気だ。

「さて、あれは随分と目立つが……どうする?」

「もう少し様子を見て、こっちに近づいて来たらその時に考えれば?」

「私もノワールの意見に賛成です。もしかしたらバリハルトが私に何かを命じるかもしれません。そうなれば、あいつが何を企んでいるのかをお教えできます。その時に行動しても、遅くはないかと」

俺の言葉ノワールが意見を出し、ブランシエがそれに賛成した。俺もここら辺のことは既に覚えてないし、それが一番いいだろう。

セアール地方から邪気を感じてからしばらくして、俺たちは話し合っていた。内容は、その邪気をどうするかというもの。というのも、邪気が内海を渡ってこちら側へ来ているからだ。……いや違う。たった今、この地方に到着した。

「それで、主様はどうするの？　もう少し様子を見る？」

「そうだな……この地で何をしたいのかがわからない以上、下手に手を出さない方がいいだろう」

ノワールの言葉に、俺は様子見の意見を出す。俺が覚えている、原作で数少ない場面だから手出しするつもりはない。ここで俺が介入したら「戦女神」が始まらないし。

というか、結局俺は原作通りに事を進めたいだけなんだよな……すまんねアストライア、いつか助けるからそれまで待つて。途中でセリカと何回か戦うことになるかもしれないけど、セリカ共々助けるから今回は見逃してほしい。

ノワールには、このまま仲間集めをしてもらう事にする。俺が来たことで墮天使たちの士気が上がったようだし、順調に増やしてもらおう。

ブランシエも以前と変わりなく、現神に仕えてもらう。……あと千年ほど。それと今

回のことは、「凶腕」がいたのに部下が突撃して死にましたと報告させる。バリハルトも、先に天使が攻撃したと言われれば、俺に文句は言えないだろう。

兎にも角にも、まずはアストライアの所へ行くとする。彼女の結界によって普通ならば宮殿内には入れないが、俺には関係ない。歪の回廊を展開して転移した。

さて、ただいま歪の回廊から出て、宮殿の真上に到着した。アストライアは……ここか。

山の合間にある、不自然なまでに綺麗な建造物。その頂上に、彼女はいた。

「誰!？」

「俺だよ。この付近で邪気を感じて、少し心配になったんでね」

上空から下りて、彼女の目の前に着地する。

「ゼアノス……」

「この邪気を纏っている気配。もう、ほとんど分かってるんだろう?」

「……ええ、邪気を纏う者はこの宮殿の内部に、既に入ってきている。でもここには結界を張っているから、入ってこれるのはゼアノスか、もしくは……セリカだけ」

今の会話を聞いてわかるが、セリカはもうこの下にいる。

そして、何故この宮殿に俺とセリカしか入れないのか。それは、まず俺は結界を無視して転移できるから。そしてセリカは、アストライアが唯一、ここに入ることを許した

存在だから。

「お前がやるのか?」

何を、とは言わない。

アストライアは俺のその質問に、頷いて答えた。

「これは、彼とのことは、私が解決したいの。だってセリカは私にとって、最も愛しい人だから」

「そうか。……強いな」

誰よりも愛する存在と、恐らく殺し合う羽目になる。そんな未来、俺なら願ひ下げだ。だからこそ思った。彼女は強いと。だがその答えは……

「いいえ、私は強くなってる。今まで私はずっと逃げ続けていた。邪に溢れた世界から、己の責務から、妹から。そして、セリカから。だから今度は逃げたくない。運命からも、自分の本^古当^神の姿^だから^{とい}う^事からも、彼の気持ちからも。だって私は、セリカを愛しているから」

こんなものだった。今まで逃げていたから、今度こそ向き合う。その考えも強いと思うのだが、まだ彼女は何もしていない。これから成そうとしている。

「もう少し話していたいけど、これでさよなら、ね。彼の気配が近づいてきている」

俺も感じているが、セリカはあともう少しでここに到達する。その前に離れなくて

は、俺も討伐対象になってしまおう。そうなったら非常に面倒だ。

「……結局、最後は悲劇だったな」

「それはわからない。これが最後だなんて、私は思わないから。それに未来は誰にもわからないのよ？　時間の神、クロノスでも確定した未来を見通すことは出来なかったのだから」

「この悲劇を、喜劇に変えられると？　最後にお前らを待つのは、大概の物語と同じくハッピーエンドだとも？」

俺のその酷な言葉に、アストライアは笑顔でこう答えた。

「だって、私の初恋の人がそうしてくるはずだから」

「……………あつそ。その男はどうせ捻くれ者だから、それまでに色々とありそうだがな」
「私もそう思う。わざと敵対したりして、でもそれはたぶん、私やセリカを助けるのに必要だから、だったりね」

その笑顔で予測するのは止めて欲しい。たしかに俺は将来的にセリカと敵対する予定で満載だが、そのポジティブ的思考で俺の行動を先読みしないでくれ。

「……………さて、本格的に俺は去るぞ」

「そうね。本当にもうすぐまで、彼は来ている」

「また会おう」

再開の約束の言葉を交わし、俺は気配を殺して離れた。

アストライアの所から離れて、まだ一分も経っていない。そんな頃に、セリカは来た。彼自身からも、彼が腰に差している剣からも、おびただしいほどの邪気が漏れている。

セリカとアストライアは対峙し、言葉を交わした。だがそれも長くは続かず、セリカが剣を鞘から抜こうとした。だがその瞬間、セリカが苦しみ始めた。そしてアストライアに、『逃げろ、サティア』と言った。これには俺も驚いた。人間が、一瞬とはいえ膨大で強大な邪気に勝ったのだから。

俺たちには逃げないと豪語していたアストライアだったが、やはり本人に会うと決心が揺るいだらしく、今まで弱気になっていた。だがセリカが邪気に侵されながらも逃げろと言った心の強さを見て、再び決心を固めたようだ。

「ゼアノスにも誓った……私は……もう逃げません。だって、私は……人を……貴方を——愛しているから」

彼女はそう言つて構え、セリカに言い放つた。今まで言っていないことが、真実を。

「我が名は、古の女神アストライア！ かつては夜空に星を眺め、今は地に人を見る者！」

力強く宣い、神気に溢れたその掌を翳した。

「雨露の器と、支配された人の子よ。これより重ねた罪を我が天秤により裁きましよう」の凄まじい神力がその身体より溢れ、周囲へ放出される。

それに圧倒されたであろうセリカは、なぜか悦びで打ち震えていた。

「とうとう正体を現したなアストライア！ ハハハツ、貴様は戦えまい！ 誰よりも争いを嫌い……」私に全てを押しつけた、裏切者よ！」

セリカの身体から、禍々しい邪気が溢れた。アストライアの神力に匹敵するほどの邪気が。それは瞬く間に世界を汚染していった。この山頂も、既にほとんどが覆われてしまっている。

……だが、今の言葉を言ったあれは“セリカ”ではない。おそらく“ウツワ”の意思だ。しかし、『裏切者』とはどういうことだ？

「……私はこれまで一度も、戦いのために己の剣を取ったことはありません。ここに封じて幾千年……ですが、邪に侵されし魂の為に剣を抜きます！ ————星芒せいぼうより出でよ、”天秤リップラックの十字架”！」

アストライアがそう言い放ち、星形の魔法陣から美しい白い剣が現れた。アストライアの持つ力が具現化した神剣だ。その神剣が放つ輝きが、山を覆っていた邪気を顕わにしていく。

「墮ちた邪悪な罪を明かすため、ゼアノスとの約束を守るため、支配されし人を救うため。そして……セリカを護るため！ 私は、最初で最後の戦いに挑む！ 参ります！」
その言葉を最後に、膨大な神気と膨大な邪気を持つ男と女は、同時に斬りかかった。とある一人の男を愛し、その男の為に白く美しい剣を振る女神、アストライア。そしてその女神を愛し、邪悪に染まった黒い剣を振るう人間の男、セリカ・シルフィール。

そんな二人の、殺し合いともいえる戦いを見ながら、俺は思った。

『アストライア星乙女』と『シルフィール嵐の息子』。星と嵐。

星は爛々と天より光を放ち、嵐は荒れてその輝きを妨げる。

愛し合った二人の名がこうなるとは、何とも皮肉だ……と。

—戦女神の生誕とこれから—

アストライアとセリカの戦いは、今もなお続いている。普通ならば人間であるセリカが敵うわけがないのだが、今の彼はアストライアの神気に匹敵する邪気を纏っている。そのおかげで、力が拮抗している。

だが、明らかにそれはおかしい。今のアストライアの力は、イオとほぼ同等に感じられる。何せイオは自分で戦うタイプじゃないし、アストライアも古神の中では弱い部類に入る。第一級神ではあるものの、戦うための神じゃないからだ。

しかし今セリカと戦っている彼女は、そのイオよりも弱く感じる。

俺はこのあと彼女がどうなるのかを知っていた。だから別れの際に、『また会おう』という言葉を選んだ。アストライアは、自分の愛する人間を殺せない。そして、邪気によつて操られた人間セリカは、彼女を討つだろう。無意識だろうが、彼女はかなり手加減してしまっている。

リブラクルースと、ステイルヴァーレの打ち合う音が響く。だがそれも、終わりへ近

づいてきている。アストライアを護っている神力の障壁に、小さな綻びが生じたのだ。「コレデ、最後ダー！」

セリカは既に、ステイルヴァーレに支配されていた。いつもとは違うセリカの口調でそう言つて、魔力が剣先の一点に集まり、アストライアへと突き進んだ。複数の身を護る障壁が壊されるが、それでもアストライアは抵抗せず、その剣を受け入れた。彼女には、セリカを殺すことが出来ないから。

だが、それだけでは終わらなかつた。なんとセリカが持つステイルヴァーレから、焔が溢れだし、一瞬で二人が業火に包まれた。

あいつは『自分で解決したい』と言つた。だからこの先を決めるのはあいつで、俺ではない。だからこそ、俺は何もしない。

業火に包まれている二人は、そのまま会話をしていた。セリカを操る“ウツワ”は剣を手放そうとするが、突然現れた別の魔力によつて妨げられた。バリハルトか、その神殿の人間が邪魔をしているのだろう。

アストライアは、それでも話し掛け続けていた。その声に“ウツワ”は返答し、なぜアストライアのことを裏切者と呼んでいたのがわかつた。アイドスは、アストライアが人間の邪の感情から逃げても、彼女は逃げずに救おうと頑張り続けた。現神をも信じ、手を取り合つて人を救おうとしていた。だがその結果、人の邪の感情に心を侵され、

あのような姿になってしまった、と。逃げたアストライアを、彼女は心の底で恨んでいたらしい。俺と別れた後も続けたアイドスと、逃げたアストライアの悲劇。

……” 得体の知れないモノ” はアイドスと切り離れたが、核である” ウツワ” はそうではなく、アイドスの意思が微かに残っていたということか。邪に侵されて、憎しみの感情が上乘せされてしまったのかもしれない。

2人を纏う炎の質が変わったのを感じ、思考を停止して彼らをもう一度見る。2人は先ほどの炎とは違う、神聖な炎に包まれていた。あれが” 聖なる裁きの炎” だろう。神々しくも猛々しい炎が二人の身を包み、邪気を浄化していく。

俺は無心で、下方で渦巻く聖なる炎を見つめた。裁きの炎は火炎魔術で放つ炎とは違い、神々しさがある。そのまま見ていると、” 声” が聞こえた。心話ではなく、一方的に何かを告げようとする声だ。

(ゼアノス。どうか、セリカを支えてあげて……)

その言葉が言い終わると同時に、裁きの炎に変化が起こった。二人だけを包んでいたそれは、勢いをさらに増して燃え上がった。そして炎が、俺のいる空にまで上昇してきた。

俺はその炎から、逃げるようにして避ける。当たっても意味が無いとは思いますが、これはセリカとアストライア以外が触るのは気が向かないと思ったからだ。



炎は弱まっていき、ついさつき鎮火した。アストライアの放った“聖なる裁きの炎”は上昇しただけでなく、下にある山と宮殿を貫いていた。炎による煙はないが崩れてしまったので、セリカがどこにいるのかわからなくなってしまった。気配を探れたらいいのだが、あちこちに人の気配があるのでわかりにくい。さっきの炎を見てやってきた、バリハルトの神官が大勢来たのだ。

聳え立った炎のせいで見つかりそうだったので、ここに来た。どこかというところ、勅封の斜宮のすぐ北にある内海の上空だ。ここにいればセリカもいずれ来るだろうと思つたので、待っている。探すのは諦めた。

そして少し時が経ち、内海に浮かぶものが見えた。船だ。その船上に、見覚えのある顔が立っていた。『腕』で姿を隠しながら近づけば、ハッキリと見えた。

「あれはアストライア……か？」

そう、アストライアだ。だが服装が違うし、何より魂が違う。あれはアストライアではなく、セリカだ。

原作と同じように、セリカに身体を与えたらしい。俺の知って得ている未来は、見事に当たっていた。正直、外れたほうが良かったと思っている。

そのセリカは今、一人の武装している神官と話をしている。前に一度、俺も見たことがある男の神官。たしか、ラジスラヴァのいた洞窟で会ったやつだ。

話し合いは段々と激しさを増していき、そして、神官が呪文を唱え始めた。

「この呪文は……自分を神に捧げるつもりか！」

俺には現神の呪文はわからない。だから聞き流していたのだが、セリカのその言葉を聞いて、すぐさま陸方面へ逃げた。神へ身体を捧げるなんてことをすれば、非常に強い術が、それこそ神の力が顕現する。本物には程遠いし俺にはほとんど意味が無いが、今は力を封印しているからちよつとまづい。だから逃げる。

セリカ？ 主人公だから放っておいても大丈夫だろ。

陸まで逃げ延びてから、この行動は正解だったことを悟る。途端に天候が怪しくなつていき、嵐と雨が吹き荒れてきた。段々と威力が強まっていき、それが嵐と化すまでに時間はかからなかった。これはバリハルトの力だ。あの神官は、どうやら本当に身体を捧げたようだ

過ぎた信仰は人を狂わせる。しかも、バリハルトは古神を殺すためならそれすら黙認している。ひどい神もいたもんだ。だが生贄を使った術は、非常に強力だ。今起きているこの嵐は、普通の嵐よりも荒々し………かったのだが、少しずつ風雨が弱くなってきた。パズモ・ネメシスというアストライアの使い魔の気配がするので、たぶんセリカが召喚したのだろう。アストライアの身体を持っているなら、パズモを呼べても不思議じゃない。あの子の力なら、止めることは出来なくても、弱めることは可能だ。

ちなみに俺の使い魔は、二柱の魔神だ。

一柱は、輪廻神ラテンニール。遙か昔にベルゼビユード宮殿で痛めつけてゲットしたやつだ。ラヴィーネのいた遺跡以来使ってないけど、久しぶりに出そうかな。暴れられなくて不満だろうし。

それともう一柱は、ソロモンの魔神、アスタロト。神の墓場で俺を襲ってきた奴。

それにしても、セリカはこれから大変だ。現神陣営からは邪神として、一部以外の古神からは同胞殺しとして。そして魔神からは神の身体を求めて、ずっと狙われ続けるのだろう。

俺の使徒のイオとラヴィーネならともかく、事情を知らない他の古神はもちろんのことで、魔神は力を求めて身体を狙う。現神は古神の身体を持つセリカを、邪神として扱って敵対するだろう。すなわち、世界のほとんどがセリカの敵だ。

そして俺自身がこれからどうするのかだが、正直、どうしようか迷っている。数少ない友であるアストライアの頼みを聞きたいという思いもあるし、原作を——だいぶ変わるかもしれないが——楽しみたいという思いもある。

そして何よりも、強者である主人公と戦ってみたいという、魔族としての欲求もかなりある。

一番効率がいいのは、このまま彼の仲間になることだ。そうすればストーリーを楽しむし、アストライアからの頼みをちゃんと成立させることができる。

でも、その考えはかなり悩む。決められたストーリーの中で支え続けるなど、なんとか面白味に欠ける。

二つ目に考えたのは、敵になることだ。そうすることである意味楽しめるし、戦うという事柄をすることにより、誰かに殺されないように育てるということもできる。仲間になって一緒に修行とかをする方法でもいいのだが、それよりもやはり実戦の方が強くなるだろう。……運が悪ければ俺が死ぬけど。

どっちにしても、メリットとデメリットがあるんだよなあ。

ああ、それと話題を変えることになるが、いつのまにかバリハルトの嵐が消えた。

突然現れた巨大な魔力を持つ者……おそらくハイシエラが吹き飛ばしたので、晴れとまではいかないが、雲は徐々になくなってきた。

流石と言うべきか、わざわざ消さなくても時間が経てば消えるのだから短気と言うべきなのか……いや、戦闘狂だからなのか？

何が言いたいのかというと、そんな逃避をしまっただけで、俺は悩んでいるという訳だ。

だがまあ色々と考えた結果、俺は一応セリカの仲間になることにした。何で『一応』なのかというと、凶腕の時は古神を殺されたとして敵になるからだ。いや、普通の時でも、場合によっては敵側になる。何故かって？ 面白そうだから。それ以外に理由はいらない。とはいえ、しばらくは敵にならないだろうがな。少なくとも、深凌の楔魔が復活するまでは。

この案でのデメリットは、信用されなくなるといふ事だな。敵になったり仲間に復帰したりするやつを信じるなんて、少なくとも俺にはできない。

ノワールに心話を使い、ブレニア内海の東にあつてディージェネール地方の北東にある地方、アヴァタール地方を中心にセリカを探せと伝える。ノワールはセリカのことを知らないで、現在のセリカの姿を想像し、その想像を直接心話に乗せて伝えることで教えた。

この方法はあいつが俺の眷属、というか分身であるからこそ出来たことで、他には同

じ分身であるブランシエにしか使えない。

(じゃあこの男を……これ男？ 探せばいいんだね？ 主様！)

(ああ、男だ。出来ればお前はアヴァタールの南の方面を頼む。デージェネールにいたから、多分南の方にいるはずだ)

(了解！)

(それと全く関係のない話だが、以前に国を造れって言ったよな？ 城とかあんのか？)

(もちろん！ とても立派な城を造ったんだよ！ ……途中で何度かブランシエが来て、あーだこーだ命令してきたからさ……はあ)

それはそれは、本当に文字通り“立派”なのが出来ているんだろうな。あいつ非常に生真面目だし。特に俺が関わると。

(そっか、ありがとな。おかげで俺もやりたいことが出来る)

(やりたいこと……？ まあいいや、どうせ後で驚かすって言って、教えてくれなさそうだし。でしよ？)

(よくわかったな、その通りだ。後で教えてやるから、セリカの搜索を頼む)

(了解！)

これで言うべきことは言ったので、心話を止める。ただ何か忘れているような……。

「……アヴァタール。あそこには水の巫女とかいう神がいたはずですが、墮天使が勝手

に行っても良いのでしょうか？ 山脈には竜族もいますが」

「ああ、忘れていたのはそれか」

さつき呼び寄せていたイオの言葉で思い出した。今のアヴァタールには、三つの勢力が存在している。

一つは今出てきた水の巫女。水の精霊が神格化したような存在で、誰も住めなさそうな土地を大都市に変えた地方神だ。領内ならば、水があれば何でもできるとも言われている。本名は知らないし、他の事柄も一切知らない。もしかしたら、「水の巫女」というのが名前なのかもしれないが。

蛇足だが、かつてブレアードと敵対した姫神フェミリンス。

彼女も地方神であるが、水の巫女はそれすら超える力を持っているらしい。

二つ目は空の勇士。こいつの本名も知らない。そもそも原作で名前出たっけ？ 若い竜族の戦士で、大きな力を持っているそうだ。リブリール山脈には昔から竜族がいるが、その中でも若いのが特に強いとの噂だ。

最後は俺も戦ったことのある魔神、ハイシエラ。地の魔神と呼ばれ、こちら一帯では非常に有名だ。だがまあランシエとノワールは、今の俺より強い。俺は今自分にリミッターを付けているから、あいつらのどちらかと戦えば負ける。そしてハイシエラはそんな俺と互角。空の勇士もハイシエラ並らしい。だからノワールなら大丈夫だ。

水の巫女の実力は不明だが、こちらから手出ししなければ問題ないだろう。

「大丈夫でしょうか？」

「まあ大丈夫だろう。水の巫女はともかく、俺の眷属が魔神や竜族に負けるとは思えない」

「……たしかにそうですね」

「だろ？」

軽く笑い、歪の回廊を展開。ブランシェの指揮の下、ノワールが造ったというディージェネール地方の城へ転移した。誰にも教えていない、城の魔改造をするために。

—マクルの壊滅—

Side・ノワール

主様に命令された、女っぽい男を探し始めて数日が経った。なんでも主様の親友の身体らしいけど、見つけたらどうすればいいんだろ。取り敢えず話をすればいいと思うんだけど……

「全つ然、見つからない」

アヴァタール地方。この広い大陸。世界で二番目広いと言われている大陸の、数あるうちの一つにすぎない地方。だから大陸と比べれば、とても小さい土地でしかない。だけれどその比較する大陸自体が馬鹿でかいので、その比較方法は当てにならない。実際は滅茶苦茶広い。この地方の広さはどれくらいなのか？ たぶん日本列島くらいの大きさなんじゃないかな？

……日本ってなに？

まあいいや。突然頭に浮かんできたこの単語はあとで主様に聞いてみよう。

とにかくそれくらい大きい土地なので、南方面を探せと言われても、見つけるには相当な時間が必要だ。ずっと空を飛びながら探してるけど……見つからない。

邪気を見つけろっていう命令なら簡単なのになあ。近くにある山と、私の足元にある森。この二つから邪気の気配がしてたんだよね。今は感じないけど。しかも、ついこの前に北から感じたのと同じ質だよ。このこと、主様から聞いておいた方がいいかな？

(あく主様、ちよつといい？)

(ん、どうした？ 見つかったか？)

(まだ見つかってないんだ、ごめんなさい。でもそれとは別に、とある二か所でちよつとした邪気を感じただけど……どうすればいい？)

(邪気を？)

(うん。ディージェネールの北から感じたのと同じようなやつなん……!?)

(……どうした？)

私が心話の途中で黙ってしまったことを不思議に思ったのか、主様が心配しているよ
うな声でそう言った。それに私はハツとなり、

(私が今いる場所、わかる？ わかるならお願い、すぐにここに来て欲しい)

一方的にそこまで言って、心話を終わらせた。だって、まさかこんな大物と会うなん

て、思つてもみなかつたから。

……でも、あとで『なぜ一方的に主様との心話を終わらせた！』つて怒られるかもしれないなあ。あの生真面目熾天使に。

S i d e ・ ゼアノス

ノワールから心話をしてきたのに、あいつは突然心話を止めた。彼女は敬語などを一切使わないが、決して無礼なやつではない。つまり、心話を続ける余裕がなくなつたのかもかもしれない。

ブランシエとノワールは、本気をだせばとても強い。それこそ神クラス並に。なにせあいつらには、それぞれに『七つの大罪』と『七つの美德』の神核を食わせている。

奴らは神の如き力を持つていた、同種族なら必ず知つている最上位の存在だった。そいつらの核を食わせたのだから、最低でも中級神ほどの強さの持ち主だ。上級神と戦つても、勝てはしなくても善戦するだろう。

むしろあいつらの力を継承したのだから、それくらい強くないと困る。

常時本気だと現神に介入されて面倒になる可能性が大なので、許可なく本気は出すなと言つているから誰も知らないけどな。俺と本人達以外は。

だがそれを抜きにしても、ノワールは弱くない。さつきも言ったが、リミッターを付けている俺より強い。つまり俺と互角だったハイシエラより強い。そんなノワールが俺に、すぐに来てと言った。つまりそれは——

「やはり、お前か」

「初めまして、と言うべきでしょうか。凶腕の魔神よ」

念のためにも思つて顔を隠し、凶腕としてノワールのいる場所に向かったのだが、それは正解だった。俺の予想通りの相手。それは……

「我が来ても驚かないのは、ノワールが私の配下にいると服で判断したからなのかな？
水の巫女よ」

そう、水の巫女だ。アヴァタール地方の三大勢力の一つであり、かつてのフェミリンズと同じ地方神に該当される。とはいえフェミリンズよりも格上だけど。

それと今この場では関係のないことだが、俺は凶腕の時は、一人称を『俺』ではなく『我』にすることにした。少しでも、凶腕の正体が俺だと気付かれないためにだ。

「そうです。凶腕の下にいる者が、その服を着ていること。これは大陸にいるほぼ全ての存在が知っているでしょう」

「そのせいで、私の部下を名乗る不屈き者が増えたがな」

マジで誰だしこれ広めたの。いつの間にか広まっていたから、知ったときは驚いた

ぞ。

特殊な形をした、黒か白のコートを着ている者は凶腕の部下。そんな噂が大陸中に広がってしまっているのだ。

その度に始末させるから俺は苦勞してないが、対応したり命令したりするのが面倒だ。……どこの現神だ？ バリハルトか？ あの糞野郎が原因か？ 俺を疲れさせようって魂胆なのか？

「それよりも、顔を隠さずに見せてはくれませんか？ 凶腕のゼアノス……」

水の巫女が俺の名前を言うと同時に、『腕』を伸ばして『手』で首を掴む。それによって苦しげに顔を歪ませたがそれは一瞬で、真つ直ぐな眼で俺を見つめた。

「……なぜ私の、俺の名前を知っている？」

「貴方はこの地に、アヴァタールへ足を踏み入れたことがあるはずですよ。その折に、水を通じて。……誰にも教えてはおりません」

「そうか」

水の巫女は自分の領内の水を自由に使える。確かそんな能力を持っていたはずだ。原作でもそんなことをしていた気がする。

巫女の言葉を聞き、納得したので首から『手』を離す。ついでもとして水の巫女の要望通りに、被せていたフードを頭からずらした。『誰にも教えてない』って言葉は本当だと

「まあいいだろう。俺らが欲しかった情報だ。簡単な事ならいいぞ」

「……私の国と、同盟を結んでほしいのです」

「……何？」

同盟？ 魔神の、それも凶腕の俺と？

「貴方は現神との契約により、敵対しなければ無害の魔神。ですが貴方の正体を知らぬ者が、*“凶腕ではない貴方”*を討伐しようとするかも知れずは珍しくはないはず。その際、我が国の者が貴方を攻撃してしまっても、見逃してあげて欲しいのです」

なるほど。たしかに俺のことを凶腕だとは考えずに攻撃して来た人間は、過去に何人もいる。もちろんそのあとすぐそいつらはこの世を去ることになったか、合成魔獣の餌や材料になった。

水の巫女の提案した同盟は、そういう被害を止めるため、か。

「私は貴方の正体を誰にも教えません。そして先の情報の対価として、私は貴方との同盟を望みます。この二つでは不足ですか？」

考えているせいで黙った俺を見て、水の巫女がそう聞いてくる。

「いや、それでいい。俺としても、俺が凶腕だと周りに知らされたら困るからな。で？」

その同盟は俺とお前の個人同士での話か？」

「私としては個人ではなく、私の国と貴方の国での同盟を望みます。貴方が国を造って

いることは、知っていますから」

「……………おい、ノワール」

なんで水の巫女が俺の建国を知っているのかと疑問に思い、すぐ答えに辿り着いた。俺が来る少し前まで、水の巫女はノワールと一緒にいた。となると、ノワールが言ってしまったということだろう。そう思って少し威圧を込めて名前を呼ぶと、

「ごめんなさい!! つい自慢しちゃいました!!」

頭を下げる墮天使が俺の真横にいた。やはりそうだったか、はあ。

まあいい。別に知られて困るようなことはないし。

「いいよ、これについては不問にする。それと、国同士での同盟だな？ わかっているだろうが、多少の攻撃なら目を瞑る。だが、あまりにも過激ならばこちらもやり返すぞ」
この言葉に水の巫女は肯定し、話し合いは終わった。最後にセリカがどこにいたのかを教えてもらい、これからどこに行こうとしているのかを聞いた。どうやらマクルの街へ向かっているらしい。

……………そう言えばそんなイベント、あったかもしれない。

「教えてくれたことには礼を言う。いつかまた会うだろうが、その未来でも敵ではないことを願うでしょう」

「それはこちらと同じです。互いに敵ではないことを望みます」

そう言い合ってから、水の巫女を背に俺は飛翔した。セリカを追うために。ふと後ろを振り向くが、すでに水の巫女はいなくなっていた。あいつもあいつで、結構便利な転移方法を持つてるよな。さすがは神だ。

水の巫女と別れた俺達は、セリカを追ってセアール地方へ向かっている。

ノワールはディージェネール地方に帰させた。城の管理や、堕天使や魔族の数を増やすという仕事があるためだ。

歪の回廊を使って移動すれば一瞬なので、瞬時に発動。そして着いた途端、以前に感じていた空気の震えが、いきなり大きくなった。現神の威圧をひしひしと感じる。

この魔力は、バリハルトだ。

「またあいつか……」

セリカがバリハルトの神官だったからなのか、最近はバリハルトの気配をとても多く感じる。干渉しすぎだろ、マーズテリアを見習えつての。一柱の古神を殺すのに何をそんなに張り切ってるのやら。あいつ、古神嫌いにもほどがあるだろ。

……いやむしろそれが普通か。過激すぎる気もするけど。

古神は干渉しなすぎたせいだ、人間は現神へと信仰対象を変えた。三神戦争で古神が負けたのは、それが原因の一つだ。

ディルリフイーナ
 今の世界の創世以前から存在していた古神は、大昔に知識を与えたきり、人の声に耳を貸さなかった。アイドスは自分から人間に歩み寄つたみたいだが、一方的に『争いを止めろ』と言われても、止めるわけがない。争いを止めたら、止めた方は敵対している相手に殺されるだろうし、何よりもメリツトがない。

己に利益がなければ、危険は冒さない。人間とはそういう生き物だ。とはいえそれは当たり前行動だから、否定はしないが。

そんな人間が、何もしてくれない古神と、魔法を教えてください、自分たちの声をちゃんと聞いてくれる現神。信仰するならどちらが良いかと問われれば、間違いなく現神だろう。古神への信仰が薄らいでも、こればかりはしようがない気がする。

普通は思わねえよな。神すら知らなかった世界と繋がって、その世界の神と戦う羽目になるなんてさ。

神の視点から見れば、人間が育つには古神の方が効率がいい。だが楽をしたいという人間の視点で見れば、現神の方が魅力的だ。

だけどここの後って、一体どんなイベントだったっけ？ セリカが神殿に行つて、古神アストライアは邪神じゃないってことを教えようとして、司祭と戦う……んだっけか？ そしてその

次が……思い出せねえ。



俺らは猛スピードで向かい、ついさつき街に着いた。それでわかったのだが、マクルの街は喧騒どころか戦争状態だった。冗談ではなく、マジで。

街ん中なのに非常に多くの魔物がいて、騎士なのか神官戦士なのかよくわからないやつらが戦っている。しかもほぼ裸の、服と呼べるかわからない露出が多い服を着用している民族の戦士もいる。そいつらは魔物と戦っている者もいるし、神官と戦っている者もいる。近くの集落に住み、蛮族と呼ばれているステインルーラ人だ。

「これは酷いな……まあ、今はいい。セリカは……たぶん神殿だろう」

俺は駆けだした。魔物や神官戦士、ステインルーラ人の戦士が襲ってくるが、そんな有象無象の攻撃が当たるわけがなく、俺にしては珍しく無視して突っ走った。いつもならやり返すところだが、今は急いでいるからやらなかった。

ついさつきまで、目の前にあるこの神殿には神気が溢れていた。が、今はそれが収まり、街も少しずつ静かになっていった。まだ殺し合いが見えるが、これももうすぐ終わるだろう。マクルの街は、壊滅の危機に陥ったところではない。この惨状を見れば、壊

滅したと言ってもいい。

神殿の中に入り、セリカの気配を探す。一瞬で見つけられたが、驚いたことに消えてしまった。そして最後にセリカがいたであろう場所から、違う者の気配がする。

これは……誰だ？

「ふふっ……」

とても小さな声だが、そんな微笑が聞こえた。

耳を澄ませながら近づくと、その声をはっきりと聞き取れるようになった。

「ステインルーラの侵攻か……戦いは続くの。戦いが無くなるなどあり得ぬ。指導者を失ったこの都は容易に落ちよう。……御主もそう思わぬか？ ゼアノスよ」

俺自身は隠れていないので、すぐにわかったのだろう。その声の主は、アストライアの声を持っており、アストライアの身体を持っている。だが、アレは彼女ではない。アレは……

「この街の指導者とやらが死んだのなら、お前の言う通りにマクルは滅びるだろうな。ハイシエラ」

ハイシエラだ。地の魔神として恐れられし者。身体や声はアストライアのままだが、服は露出の多い踊り子のようなもの。前からハイシエラが着ていたものと同じだ。

「お前、これからどうするんだ？」

「最早長居は無用。この力の生かせる場所で、思う存分暴れてみようぞ……と思つていたのだがな」

チラリとこちらを見ながら、ニヤリと笑つた。……アストライアの顔には似合わないな、その笑い方は。

「ゼアノスよ、いつぞやの決着をつける気はないか？」

「遠慮させてもらう。さすがに古神の身体を手にしたお前とは戦いたくない」

これは例え俺でなくても、そう言つただろう。基本的に、魔神と古神では強弱がはっきりしている。今のハイシエラにただの魔神が勝負を挑むのは、普通の人間が魔神に勝負を挑むのと同じだ。俺は『ただの魔神』には該当されないが、それはあくまで凶腕の時の話であり、今の俺ではない。

「この身体を一目見ただけで古神だと、よくわかつたな。……御主、もしやこの身体の本来的持ち主のこと、知つておつたのか？」

「ああ、知つてた。俺は存在している者の魂を視ることが出来る。だから古神の魂は、視ればすぐにわかる。人間とは格が違うからな」

本当のことを言うと俺の正体もばれるので、こう言つておく。ちなみにこれ、嘘は一切ないからな。

「そうか……御主、我と共に来ぬか？」

「あ？ いきなり何だ？」

「御主ほどの力の持ち主、敵にしておくとおくと楽しめそうじゃが、惜しい。悪いようにはせぬ。我と共に暴れる気はないかの？」

こちらに手を差し伸べながら、妖艶な笑みをして問うてくる。

……にしてもアストライアの声と身体で、その口調と笑みは似合わない。彼女は清楚って感じだからなあ。

まあそれは置いとこう。ハイシエラのその誘いは非常に魅力的だ。何故って？ これならさ、簡単に原作に加入できるじゃん。

「安心せい、御主を私の糧にするようなことはせぬ」

「……何が目的だ？」

「言ったであろう、敵にしておくには惜しい、と。つまりはそれだけだの。それに、我は御主を気に入った。どうじゃ？ もう一度問うが、我と共に来ぬか？ 言葉を選べば、そうなの、簡易な同盟……じゃな」

気のせいかな？ 俺と同盟を組もうとした奴って結構いるよな……だが原作のど真ん中。

……はは、これはいいな。

「言質は取ったぞ。いいだろう、それはそれで面白そうだ。期限はそうだな……セリカ

が目覚めるまで。これでどうだ？」

「クック、面白い、それで構わぬ。では着いて来い、ゼアノス！」

ハイシエラは片手を天高く掲げて魔獣を呼び寄せると、その背にまたがった。俺にも乗るように言ってきたが、俺は自分で飛べるので断った。

セリカの精神は今、ひどく傷ついている。そしてハイシエラの……いや、アストラライアの身体の奥深くで眠っている。無理に取り出すと、あいつの精神に影響が出かねない。だから、セリカが目覚めるまで傍観する。セリカはいつか己の意思で目覚める。そうなるまで、俺は近くで待つのだ。

そして期が来たら、俺は凶腕としてセリカの前に立つ。それまでに存在を知られるわけにはいかないから、今の状態で戦うが。

紅き月が煌々と輝く夜空に、二つの影が浮かんでいる。その内の一つの影、ハイシエラが、ふいに言葉をこぼした。

「地上を見るがいい。ついに原住民が神殿を占拠したぞ。寸土の争いの果てに、血を垂れ流しての。人間はやはり愚かしい……そう思わぬか」

俺に聞いているように聞こえるが、あいつは俺に言っているのではない。

「聞こえておるのか？ それとも……愛した女に包まれ眠っておるのか」

ハイシエラの内に眠る、セリカへ語っていた。

「まあ、よかろう。最早この地に用はない。御主も、それでよいな？」

「別に構わない。俺がこの街で興味があつたのは、セリカだからな」

振り向いて俺に質問してきたので、そう言い返す。ハイシエラはふつ、と笑い、北ケレース地方へ目を向けた。彼女の興味は、今はその地方に移つたらしい。

北ケレースは、広大なエルフの森と、魔物らがひしめく荒野が広がる、人間にとつては未開の地。ディージェネールと同じような土地だ。俺も行ったことはない。

「新たな時代の幕開けよー」

そして聞こえてくる、目の前の女魔神の声。それはまさに、この世界のこれからの事を指している。そして俺達二柱の魔神は、紅き月に溶けるように舞い上がり、遙かな地へと去って行った。

— 神殺しの戦地図 —

時は流れ、マクルのバリハルト神殿崩壊より五十数年が過ぎた。

人間にとつては未開の地とされるケレース地方。だが広大な土地の多くにはエルフ族の森があり、他にもドワーフや多数の魔族が息づく、亜人間族の領土だ。

その広大な土地の一つに、ドワーフの住む場所がある。

ハイシエラはそのドワーフの、絶壁の操竜子爵タールベの名を持つ王、インドリトが率いる一族と、五十余年もの間、ずっと戦っていた。ハイシエラにとつて、良き好敵手だったようだ。

ちなみに俺はその戦いに参戦していない。ドワーフ王と剣を交えるのが楽しかったらしく、認め合えた仲だとも言っていたので、そこに参戦するのは無粋だと思ったからだ。

そしてある日、その戦いが終結した。ドワーフの国、ターペIIエトフ国は、インドリト王の死によって終わった。すなわち、ハイシエラが勝ったわけだ。

インドリト王に世継ぎはいなかったもので、王国は消滅し、ハイシエラの支配下に入る事になった。これは相手国も同意したらしい。

そして今まで拠点となっていたオメール山は手狭になったので、放棄した。新たな拠点は、この数十年陥落することのなかった城になった。そう、インドリト王の城だ。

カーン、カーンと響き渡る荘厳な鐘の音は、弔いもの。インドリト王の葬儀は遺臣らの手で、丁重に執り行われた。亡国の民は一人残らず嘆きを露わにして、王の死を悼んでいた。

俺はその死した王に会おうと、王の墓に向かう。そこにはハイシエラがいたが、もう一人、そこにはいた。互いに牽制し合い、険悪な空気が流れている。一介の魔物がいたとしたら、瞬く間に絶命するほどだ。

「貴様のように暴れるだけでは、価値あるものが簡単に失われてしまうのだ」

「価値あるもの、とな？ それは果敢なる戦士の命か……我が肌を温める男の精か？」

「ふっ、これだから戦狂いは……貴様は美を愛でる心など、まるで持ち合わせていないようだな。お前もそう思わぬか？ ゼアノスよ」

俺が近づいていることに気が付いていた、ハイシエラと言いつつ合っていた女がこちらを見る。ハイシエラも、既に気が付いているだろう。全く、二人の言い合いに俺を巻き込まないでほしい。とはいえ、まあ……

「美しいものは俺も好きだ。特に次世代以降にも残る代物なら、是非とも俺の部屋に飾りたいものだ」

これは本当だ。昔っから、絵や彫像などは結構好きで部類に入る。骨董品を眺めるのも大好きだった。資金的な問題で、集めたことはないけどな。

「ふ、よくわかつているではないか。ゼアノスならわかるだろうが、ハイシエラ、貴様にはわからぬだろう。王の趣向は実に優れていたものよ」

そう言う彼女は、とても綺麗な指輪を見せつけてくる。

「お、何とも綺麗な装飾がされているな、その指輪は。それに、その石碑もいい」

「うむうむ。やはり貴様とは気が合う。これは、王の形見よ。美しいだろう」

紹介が遅れたが、特に『美』に関しては人一倍うるさいこの女は、アムドシアスという。

ソロモン72柱の一柱で、古神にも分類される古き魔神だ。別称があり、『一角公』とも呼ばれている。

ハイシエラと非常に仲が悪いが、彼女の言う通り、俺とは気が合う。何度か仲間にならないかと誘われたが、彼女の未来を知っているので、断った。俺がハイシエラといのは、単なる気分だ。気紛れにお前の所に行くかもな、と言って。

それからは誘われなくなった。

「それがどうした？ そんなものが戦いの優劣に関わりがあるというのか？」

美術というものに全く関心のないハイシエラは、俺たちの言葉を切つて捨てる。わざとだろうが、嘲笑うかのように言っている。

美を馬鹿にされたことによりアムドシアスが憤慨し、ハイシエラがその激昂に対して冷静に言い返す。会う度に思っていることだが、アムドシアスは永い時を生きている割に、かなり感情的な魔神だ。人間的、と言つてもいい程に。

その後、長いようで短かつた言い争いが終わり、アムドシアスは再度墓へと視線を向け、一通りの弔辞を述べてから去つて行つた。その弔辞の内容の八割がハイシエラの悪口だったが、一応本当のことだったので突つ込まなかつた。

「ヒヒツ、今のがアムドシアス公ですかい。なかなか恐ろしい魔力を持った方ですなあ」
そう言うのは、影に潜んでいた奇抜な格好をした魔族の男だ。名は、シユタイフェ・ギダル。かつてはインドリト王に従っていたが、今はハイシエラの下で参謀として活躍している。

「ふん、身の程を思い知らせてくれる」

「身の程とは言つても、彼女はあのソロモン72柱なんだがな。それとシユタイフェ、報告か？」

「これはこれはゼアノス様、さいです。この国を占領した後の、各地の情報が入つてきま

すぜ。もう何処も彼処も慌ててやがる、ハッハー!!」

「くく、よいぞ。謁見の間で詳しく聞こう」

テンションが高いシユタイフエの報告を聞いて機嫌のよくなったハイシエラが、その参謀を連れて歩き出した。こちらを振り向いて、御主も来い、という意味の籠った視線を向けてきたので、苦笑して追いかけた。

そして謁見の間で、シユタイフエが中心となり、打倒アムドシアスの策を練っていた。アムドシアスは、今俺らのいるターペⅡエトフの北東に拠点を構え、さらに結界も張っている。その周囲を囲んでしまえば外に出られなくなるというので、アムドシアスの前にその周りを攻略する、という流れになった。

やろうと思えばハイシエラがその結界を壊せると言っていたが、彼女曰く、『雌狐めぎつねを巣穴に追い詰めて、驚かしてやるのも一興ではないか』とのこと。

攻略する場所は、全部で三カ所。一つはアムドシアスの拠点のさらに北東にある人間の国、イソラ王国。軍事的には弱小で、とても小さい国らしい。二つ目は、珊瑚森トラスメイという名前の森。エルフの住まう地で、ターペⅡエトフの南東にある。

そして最後が“冥き途”。冥界に至る死者の門がある。読みにくいがこれは『くらきみち』と読む。ハイシエラの友がいるらしい。確か……ナベリウス、だったか? さっきのアムドシアスや深凌の楔魔のパイモンと同じ、ソロモン72柱の一根で、冥界の門

番だったはずだ。

色々話し合い、取り敢えず最初は偵察に行くこととなった。遅すぎるとアムドシアも動くので、早々に動かなければならないとのこと。ハイシエラは、東の冥き途へ行くと言っている。

「そしてゼアノス。御主は動くのか？」

「ん？ ああ、お前がそこに行くなら、俺はイソラに行こうと思ってる」

「ヒヒツ、ハイシエラ様に匹敵する力を持つゼアノス様が直々に？ そのまま陥落させた方が早いんじゃないんですかねえ？」

「何を言っている。それだとハイシエラの楽しみが減るだろう」

「ほう、良くわかつているではないか。御主はそこまで我を優先する男であったかの？ 我的記憶が正しければ、御主は最初、私の敵であったはずじゃ。なのに、なぜ今は私の楽しみを取っておくような真似をする？ 我に惚れたか？」

「最後のそれは無いな。単に、俺はお前から住む場所を与えられている。そのお返しに、俺はお前に戦いを残しているだけだ」

ハイシエラの言葉に呆れながら答える。それにもしこいつに惚れた者がいるとしても、それはハイシエラではなくアストライアに惚れたことになるんじゃないか？ だつてこいつの容姿、アストライアだもの。もちろん内面は別として。

ついでに、俺が国を攻撃しないのには理由がある。俺が他国を攻撃するとしても、その国は必ず現神を信仰している。となれば、俺から攻撃することはできない。という訳だ。



俺が今いるイソラ王国は、オウスト内海に面する小さな国だ。内海に面する国は他にも多々あるが、そのほとんどが海上貿易を行っている。この国も貿易をしているが、比較的規模が小さい。街道が近くにあり、北と南を繋ぐ地でありながら、貿易国としては発展できずにいる。

それは、この地がケレース地方だからという理由が大きい。人の手が回らない未開の地であることと、この地方で暴れまわる魔族や蛮族の影響に他ならない。

俺はシュタイフェを連れてここに来ている。どのようにしてイソラ王国に行くかを告げたら、面白そうだと言って着いてきたのだ。そして、俺はすでに城の中にいる。盾の間という、話し合いをするための部屋に。

「一同、楽に……そなたたちが、魔神からの使者か」

この国の王には、ハイシエラから使者を送ると伝えてある。だから俺とシュタイフェ

に、使者かと問うた。だが、俺は使者ではないんだな。使者とは、文字通り使われる者だ。俺は同盟者であって、使われる立場ではないからな。

「いかにも。しかし厳密には魔神の使者ではありませんぞ」

イソラ国王の言葉に、シュタイフェが答える。だが、俺と違ってお前は使者だろう。

「こちらにおわす御方は、地の魔神ハイシエラ様の同盟者——魔神ゼアノス様です!!」

盾の間に集まった人間たちは凍り付いた。魔神の使いと知らされていたのに、来たのも魔神。ハイシエラ本人ではないが、同盟者ということとはハイシエラと同等の力を持っているというのは、容易に理解できる——否、俺の体から発せられる威圧と魔力により、理解してしまう。

「初めまして、だな。イソラの国王と王女。今こいつが言ったが、俺は魔神ゼアノスだ。ハイシエラもここに来ようとしていたのだがな。あいつは違う場所へ赴いた。だから俺が来たのだ」

「くっ……。くっほっ……。水を……」

突然の出来事に王の喉は渴ききり、何も喋れなくなってしまうたようだ。極度の緊張のせいかな？

「喉が涸れたか？ 案ずるな、長い挨拶をするつもりはない。ハイシエラからの要求を、そのまま伝える。『イソラ王国よ、我が軍門に下れ』……とのことだ」

俺が魔神だと認知されたとき以上に、大きなざわめきが広がっていく。

「ば、馬鹿な……。そ、そんなことを言いには……。わざわざ?」

「むしろこんな宣言。使者ごときに言わせることなぞできないだろう?」

「ぐっ……。ほっ、ほっ!」

緊張と恐怖で喉を引きつらせてしまった王に、侍従たちが介抱に進み出た。そんな王を見かねたのか、王女が進み出て話を引き継いだ。

「もし、要求を拒否すれば……。攻め込んでくると仰るのですか」

「イヒヒっ、察しいいねお姫様。あんたもターペⅡエトフ国が滅んだのを知ってるだろ?」

「……。では、軍門に下った場合、どうなるのですか」

シユタイフェの反応を見て青ざめた表情の王女に、俺は薄く笑った。

「我々に敵対しないこと、我々の要求は全て飲むこと。ただ、それだけだ。俺たちは外面ばかり取り繕った言葉は好まない。魔神アムドシアスがどうなのかは知らないがな」

実際にアムドシアスがイソラに対してどう動くのはわからない。だがここで彼女の名前を出せば、ここににいる人間たちは自分の置かれた状況に気付き、目の前の脅威に冷静さを失う。そうなれば、こちらに有利になる状況を作り出せる。

どこかでくしゃみをしているかもしれない一角公に、勝手に名前を使って悪い。と、

心の中で謝っておく。反省はしないけど。

「もし軍門に下ったとしても……全て貴方の仰るままになるとは限りません。わたくしたちが認めても、民の中には反発して抵抗する者も出て来るでしょう」

「そうだな。では、姫、お前が我らの下へ来るがいい。そうすれば民は嫌でも付き従うだろう」

脅し半分で笑ってみせると、彼女は身体を震わせた。

……今更だけど、俺ってこんな悪役だっけ？ あ、魔神だから絶対に悪だよな、人間側からしてみれば。

「……魔神よ。そなたの意思はわかった。だが事は重要、即答できぬ。家臣らと相談して決めたい……」

「それも良いだろう。返答は、ハイシエラがここに来るまでに決めておけ。あいつが、いつここに来るのかは知らないがな」

「聞きましたか、王様？ ハイシエラ様 came ときが、決断の時ですよ。ゼアノス様の言う通り、それが明日か明後日か、一年後か十年後か百年後かは知らないよ！」

シユタイフェの言葉が終わり、俺は王に背を向けて歩き出した。

「いいですか！ ハイシエラ様 came たら、ですよ！ ヒヒヒっ！」

……ハイシエラ。こいつ、めっちゃうぜえ。嫌いじゃないけど。

城から出て国からも出ようとすると、シュタイフェが聞いてきた。

「この国はどうか、ゼアノス様？ ヒヒッ」

「ハイシエラにとつてはつまらないだろうな。王に覇気は感じないし、他の者共も同様だ。今なら一瞬で終わらせることが出来る」

「でも、料理するなら時間を置かずに、さっさとした方がいいだろうねえ」

その意見に異は無い。他の偵察場所に問題がなければ、ここを優先するかもしれない。そうすれば後が楽だ。おそらくハイシエラは、真つ先にここを攻め入るだろう。

「ま、後の事はハイシエラに任すさ」

最後にイソラ王国を一瞥し、俺たちは去った。ハイシエラに目を付けられたのは不憫だが、それにどう対応するのか。それが今から楽しみだ。

—イソラ王国の終わり—

イソラ王国からターペⅡエトフの城へと帰り、早速シユタイフエにハイシエラへの報告を任せた。

俺が言ってもいいのだが、シユタイフエは参謀だ。あいつに報告させた方が、詳しく知ることが出来るだろう。俺は説明が苦手だからな。

とはいえ何もしないのは暇なので、謁見の間に足を向けた。そこにはハイシエラとシユタイフエがいる。それは見慣れた光景だが、他にも面白い面々がいた。

一人は以前会ったことがある、リ・クテイナ。デিজエネール地方のニアクールという土地に棲む、ナーガ族の長だ。

ニアクールで散々暴れたハイシエラのことを快く思っていないが、俺は誰も殺してはいないので、悪くは思われていない。とはいえ良く思われているわけでもないが。

人間だった時のセリカのことを話しあうこともたまにあり、女神の身体を持ってしまつてからのセリカを一番知っているようなので、その軌跡を聞いたりもした。

二人目はペルル。いつの間にかセリカの使い魔になっていた鳥人で、元々は『お師範様』とかいう人間の使い魔だったらしい。そのお師範様とやらの名前が、アビルース・カツサレだと聞いた時には驚いた。それは原作の九割を忘れてるので、その人物が頭から抜けていたからという理由もあるが、一番の理由はその人間の名字だ。カツサレということは、あのブレアードの子孫ということだ。

この娘もリ・クティナと同じように昔のセリカのことを話したら、心を開いてくれた。全くもつてちよろい鳥娘である。リ・クティナは心を開いてくれたわけではないからな。

そして最後は、リタ・セミフ。その身は霊体の、暗黒槍を操る少女だ。今は壊滅してしまつたマクルの街の近くにある森に住んでいて、悲劇が起こつたがセリカたちによつて助けられたらしい。そしてセリカにその恩を返すため、自らセリカの使い魔になつた、という経緯だ。そんな彼女は話し合うまでもなく、ただ淡々と事実を教えてくれた。リ・クティナとペルルは嫌々ハイシエラに従っているが、リタだけは違つた。本当の主が目覚めるまで、主の体を守り抜くために従っているようだ。本当の

その三人はハイシエラと言葉を交わしていたが、すぐに召喚石に戻つてしまつた。またあとで話し合いたいものだ。



俺の帰還から翌日。驚くことに、もうイソラを攻めに行くらしい。ハイシエラが軍を率いて、北東へと向かった……のが数時間前。既に眼前には、イソラ王国の城壁がある。国の人々は、俺らが近づいていたのを今まで知らなかったらしい。今頃になって、ようやく慌て始めた。

現在の時間は早朝。つまり朝霧が漂っており、さらに極めて統率の取れたハイシエラの軍勢。加えて街道を外れての直進。しまいには、国の警備はそれを報告する前に全滅を強いられた。こんな朝早くに、いくら雑兵とはいえ魔族の群れを相手にするのは、さすがに無理だったようだ。

そんな都合の悪すぎる条件が重なり、王国が魔族の軍勢に気が付いたのは、軍が目視できるまでに近づいてからだった。

「ふふ、ここまでは上手くいったの」

「近々参上するって言っていたのに、人間族というのは間抜けだねえ。後は城壁を超えていけば、あたしらの好物が山ほどあるってことさね！」

「近々参上すると言ったその翌日の早朝に攻めて来るなんぞ、普通は思わねえよ」

やたらとテンションの高いシユタイフェの言葉に、俺は思わず小声で突っ込む。聞こ

えていないようなので誰も反応を示さなかったが、聞こえていたならこう言ってくるだろう。『ハイシエラ様は普通じゃねえさ!』等々。俺も大概普通とは掛け離れているが。そもそも宣戦布告すらせずに侵攻の準備を始めているというだけで、イソラ王国にとつては驚きだろう。だがそれは人間同士での話。こっちは魔族なので、人間の規則に縛られる必要はない。横暴だ、とか言われるかもしれないがな。

……いや。闇夜の眷属からにも、横暴だと言われるかもしれないな。あいつらは規律を重んじる、珍しい魔族の集団だから。

そしてその肝心なハイシエラは、いつの間にか飛龍に跨り、城壁の奥へと消えて行つた。

なので、ここにいるのは俺とシユタイフェの二人だけ。

「ご武運をお祈りしてやすよお〜」

「はっ、思っていないことをよく言えるな。誰に祈るつもりだ? マーズテリアか?」

「まさかそんな訳ないでしょうっ! ハイシエラ様に、ですよっ! ハッハー!」

「うん、わかった。俺から話し掛けておいて悪いが黙ってる。うるせえ」

俺の冗談に対して、本気なのかどうなのかよくわからないテンションでそう言ってくるシユタイフェ。いやほんとマジで煩い。喧しい。ハイシエラへの忠誠心は素直に凄いと云えるが、これだけはキモイ。

よくこんなのを近くに置いておけるよな、今噂の地の魔神様は。

そしてその数日後。ハイシエラは犠牲の一つもなく、国を手に入れた。

飛龍に乗って行き、早々に戦争をするか王女を明け渡すかを選択させたらしい。それも、考える時間を与えずに。

……鬼だ。魔神だけど、鬼だ。鬼畜だ。

「……なんで失礼なことを考えていないかの、ゼアノス？」

「お前の気のせいだ。それで、俺をここに呼び出した理由は？」

今いるここは、ターペーエトフではない。ハイシエラに呼ばれたので、イソラの城へ態々出向いたのだ。これでどうでもいい用事、とかだったら殴り飛ばす。殴り返されるだろうがただでは済まさん。

「そのような目を我に向けるな。くだらぬ事ではない故、我が呼ぶまで待っている」

俺が何かを言うまでもなく、俺の視線で察したらしい。俺のいる部屋から廊下へ行く、ハイシエラとシユタイフェ。同じ場にいるであろうもう一人と話をしている。案の定、そのもう一人の声が全く聞こえない。声が小さいのか？

だが他の二人の声が大きいので、どんな話をしているのかはわかる。人質、とか言っていたから、イソラの重要な立場にいる人間だろう。

「——ゼアノス！」

話しの途切れに聞こえた、俺を呼ぶ声。特に意味はないが、歪の回廊で廊下へ移動する。

ノリとか演出って大事だと思うんだ、俺。

「何だ？」

「シユミネリア。此奴が御主の世話役だ。今まで世話をしていた侍女も付けるが、我のいない時は此奴に従え」

シユミネリアとは、俺も一度だけ会ったイソラの王女だ。

ん？ ということは俺が王女の世話役？ ……………。

「…………それが俺の仕事か、ハイシエラ？ まあいい。また会ったな、姫よ。よろしく」
ただでさえ魔族の人質になるというだけでも恐ろしいのに、その世話役は魔族の中でも上位の存在である、魔神。シユミネリアの顔は、かなり青白い。

「当面は私の側にいることを許す。我に学ぶというのなら、好きなだけ学ぶがよい」
「は、はい…………。よろしく、お願いいたします」

冴えない表情で、俺たちに頭を下げてくる。ハイシエラが言うには自ら覚悟して人質になつたらしいが、望んだわけではないはず。だからだろう。

頭を下げたシユミネリアに下がれとハイシエラは言うが、直後にまた彼女の名を呼ん

だ。

無礼をしたのかと怯えるシユミネリアだが、ハイシエラは違うと言つてシユタイフエに合図を送る。そしてどこからともなく一枚の布切れを取り出した。

それを見てシユミネリアの動きが止まる。聞くと、これは彼女が彼女の夫との連絡役の体の一部だそうだ。

シユミネリアの夫はマーズテリアに仕えている勇者らしく、居場所を知らされずに使命を果たすために各地を飛び回っているらしい。なので、手紙など連絡の便を図るため、神殿から連絡役として神官が派遣されている……とのこと。

その連絡役の神官は、ハイシエラ曰く、殺したくても逃げられた、らしい。

いくらマーズテリアの信仰者とはいえ、人間がハイシエラから逃げ切るとは、素直にすごいと思える。

……その代わりに体の一部を、具体的には軍神の指輪が付いた指を斬られたらしいが。

それに加えてハイシエラが一つ二つ質問をしたあと、今度こそ下がらせた。俺は世話役とやらにされてしまったので、その後ろをついていく。というかハイシエラ。同盟者を他国の姫の世話役に任命するの、世界広しと言えどもお前くらいだぞ。たぶん。

「……あ、あの。私はこれから、どうなるのでしょうか」

姫の寝室に着いてからの第一声はこれだった。今日はもう夜が近いので、明日ターペ
Ⅱエトフへ帰ることにした。じゃないとシユミネリアの体力が持たない。人間だもの。

歪の回廊を使ってもいいかもしれないが、こんな憔悴している精神では絶対に駄目
だ。

『歪み』に飲み込まれて狂つちまうから。

「そうだな……とりあえず、俺は基本的には何もしない。お前がこちらに攻撃したり、逃
げたりしようとしれない限りは、だけどな」

「え……そう、なのですか？」

「俺は、な。ハイシエラが何かを命ずれば、誰かがお前にその何かをするだろう。が、俺
からは何もしない」

「……貴方は、本当に魔神、ですか？」

「なんだ、殺されたいのか？ それとも犯されたいのか？ それを望むのなら、いくらで
もやってやるぞ」

そう言うのと、顔の色を変化させて否定した。だがさすがにそれは同盟相手の許可がな
ければできないことだ。下手をすればハイシエラの立場や計画が水の泡になる。

俺はそんなことは全く気にしないし、あいつも多少の誤差は気にしないだろうが、今
のあいつの姿は、未来のセリカだ。もう悪印象だらけだが、それを最小限にまで留めて

おきたい。

とにかくこれでイソラへの侵攻は終わった。シユミネリアが手紙を神殿に出したと、正直に語ったおかげで、早いうちにマーズテリアの戦士が来ることは明白になった。

姫の夫である勇者も来るということも、わかりきっていることだ。

ハイシエラはこれから、ナベリウスのいる冥き途。そしてエルフ族がいるトライスメイルという名の森に行くらしい。イソラを含めたその三つの箇所を陣取れば、アムドシアスの拠点の周囲を囲むことができ、外に出られなくなるようにするのが目的だと言っていた。

ナベリウスもエルフ族も協力はしないだろうが、戦闘に干渉しないことを確認するだけでも大分違う。戦略も変わるため、それを確かめに行くという理由もあるそうだ。

アムドシアスはナベリウスと同じく、ソロモン72柱の魔神だ。それ繋がりで協力し合わないとは、確信を持っていうことは出来ないし、トライスメイルには封じられた魔物が多い。そしてその森に、アムドシアスが何度も足を踏み入れていることが確認されている。封印を解き、何かをするつもりなのだろう。

「そんなに怯えるな、ただの冗談だ」

「えっと、冗談……ですか？」

「そこまで恐ろしく感じたのなら謝ろう。すまなかつたな、いつもハイシエラを相手に

している所為か、悪質な事を言うのが当たり前になってしまっていた。許せ」

俺がそう言うのと、シユミネリアは安堵の顔をしてから、笑顔になった。笑顔とは言っても、無理をしている笑い方だ。

「それなら、よかったです。本当にされてしまったらどうしましうかと、本気で考えていました。ですが……あの、お名前はゼアノス様、でしたよね？」

「ああ、そうだ。それで？」

「改めて言わせていただきますが、ゼアノス様は魔神なのですか？　ハイシエラ様や、話に聞いていた魔神とは違うので……」

「それを言われんのは何回目だ……。ああ、変わっているかもしれないが、俺は確かに魔神だ。だが、こういうのは俺だけではないぞ。魔族も人間族と同じく、例外がある。俺はその例外の一部だ。闇夜の眷属という奴等がいるんだが、そいつらも人間族とあまり変わらない生活をしている」

「そうなのですか……やはり、自分の目と耳で知ることが大事、なのでしょうか」

「それは人によるな。それが向いているやつと、向いていないやつがいる。お前がどうなのかは知らない。だが幸か不幸か、俺の近くにはハイシエラがいる。あいつから王としての在り方を学ぶのも、一つの手だ」

そんな俺の言葉に、シユミネリアは考え込んだ。ハイシエラが彼女をどう扱うのかは

わからないが、酷くはならないようにしておこう。

賢王の子が賢いとは限らないし、愚王の娘が愚者とは限らない。

それと同じで彼女の父は優れた王ではなかったが、この娘はどうなるのか。そこんところが個人的に、かなり興味が出てきたからな。

—緊迫の会談—

イソラの攻略が一瞬で終わってしまった日から数日。シユミネリアを連れてターペ
|| エトフに戻っていた俺たちは、次はどこに行くかを決める小会議を行った。

候補は二つ。一つは冥き途で、もう一つはトライスメール。ナベリウスがいる地獄の
門か、エルフ族のいる森のどちらかだ。

何度も言うがナベリウスは、アムドシアスと同じソロモン72柱の魔神。ゆえに協力
し合う可能性もゼロではない。なので放っておくわけにはいかないが、トライスメール
ではアムドシアスの姿が目撃されているので、こちらも野放しにはできない。

「ゼアノスよ、御主であれば、まずどちらに向かう？」

「迷うまでもないな。冥き途だ」

「ほう、何故じゃ？」

「そっちのほうが多いから」

「……」

なんだよハイシエラ、その目は。聞かれたから答えてやったんだろうが。もし俺が歪の回廊を使えない魔神だったら、絶対に遠い場所から行くぞ。後が面倒だからな。

「何だ？」

「何でもないだの。では我は、ゼアノスの言つた冥き途へ行くとするかの。御主はどうする。我に付いて来るか？」

「いや、俺はシユミネリアと話をしてるよ」

ハイシエラは俺のこの返答を予想していたのか、小さく笑つてから城を出て行つた。

あいつは思い立つたらすぐに動く性格だ。このタイミングで外に出たという事は、早速冥き途へ行つたのだろう。

「もう行くとは……まったく、気が早いというか、せっかちというか……そこそこ、お前はと思う？」

「たしかに早いとは思いますが、決して欠点ではないと思います。早い内に事を決めなければならぬ時もありますから。考えるために決定を遅くしても、民は納得しないでしょうから」

「なるほど。だが早すぎても駄目だろう。例えば今お前が言つた『早い内に事を決めなければならぬ時』つてのは、ハイシエラに侵攻された時とかが最たるものだ。お前はあのとときに人質となることを即了承したが、民は納得していないぞ」

「その通りかもしれませんが。ですが返答が遅ければ、私はもちろんのこと、イソラに住んでいた人々は死んでいたかもしれません。ならば納得されなくとも、救うことができれば最善でした」

ハイシエラが出かけてからすぐに、俺はシユミネリアと話をしていた。やはりこの娘は、あの国王よりも賢い。それも遙かに。

あの王が愚かというわけではないが、優れているわけでもなかった。平凡だった。それと比べてみれば、シユミネリアは遙かに賢い娘だ。今でこれなら、もつとハイシエラの下で学べばさらに輝くだろう。

「あの、紅茶でも飲もうと思ったのですが、一緒にどうですか？」

「紅茶？」

「はい。侍女の淹れてくれる紅茶は、とても美味しいのです。それとも、他のお飲物の方がよろしいですか？」

シユミネリアは少し前まで、一国の王女だった。なので毎日世話をしてもらっていたわけだ。そしてそんな彼女が、人質の身となったというだけで自分自身の世話をするようになるわけがない。いや、するしない以前に、できない。

そして俺は男で、ハイシエラの次か、もしくは同じくらいの地位を、ハイシエラから認められている。そんな俺が、いくら世話役だとしても、全ての世話をするはずがない。

ハイシエラは、ここでは王であり、俺もそれと同等の立場。

人質の全ての世話をする王がいるか？ 答えは否だ。惚れた、等の理由がないかぎり、しない。理由なく世話をする王がいたとしたら、そいつは王を辞めた方がいい。

「紅茶か……そうだな、たまには飲んでみようか」

俺の肯定の言葉を聞いて、シユミネリアは笑顔を見せた。ここに連れてこられた当初は元気がなかったが、自然に接していたら段々と顔色も良くなってきたのだ。

しかし最後に飲んだのはいつだったっけ。セリカを見にマクルに行つたときは酒しか飲んでないし、それ以前は水しか飲んでなかった気がする。となると最後に紅茶を飲んだのって、まさかこの世界に来る前か？

……そりゃ懐かしく思うはずだ。というか懐かしいの範疇を超えている。

と、そこで運ばれてきた紅茶を手に取り、一口だけ飲む。味なんてずっと昔に忘れていたが、やはり美味しいものは美味かった。これが王族が飲むものだからというのもあるだろうが、美味しいことに変わりはない。

それから数日後、ハイシエラが帰つてきた。冥き途に行つただけの割には遅かったのだ、何かあったのかを聞いてみた。すると呆れたことに、ここに帰つてくる前についてとしてトライスメールにも赴いたらしい。

エルフ族の住んでいる森であるトライスメールには、数多の魔獣や魔物が封じられて

いた。それを見に行くのが目的だったらしいが、いざ行ってみると封印は壊されていて、最終的には封じられていた魔神と戦ったという。どうやらアムドシアスが結界を壊したらしい。

「魔神と戦ったのか。……俺も付いていけばよかった。最近は骨のあるやつと戦ってないからなあ。あ、とはいえハイシエラ、お前と戦う気はないからな」

「そうか、それは残念だね」

ちっとも残念には見えない顔でそう言うハイシエラ。俺がこいつと戦う気がないなんて、もう五十余年言い続けている。だからそんなのは、わかりきっているのだろう。

「それで、だ。ゼアノス。御主、アムドシアスとの戦いには参加するののか?」

「非常に不本意だが、あいつはソロモン72柱が一柱だ。魔神でありながら、古神でもある。そして彼女はお前と敵対しているとはいえ、俺自身と敵対しているわけではない。つまり……」

「なるほどの。不参加、ということか」

その言葉に頷いて肯定する。

凶腕と凶腕に連なる者は、基本的には古神と戦わない。何故かというと、古神にとって凶腕は英雄扱いだ。なので一部を除いて、凶腕のシンボルであるあのフードを着る者とは戦おうとしない。あのアムドシアスも試合はしてみたいと言ったが、死合をしよう

とはしなかった。

凶腕は戦いを挑まれたり、拠点や住処を侵されたりしない限りは戦わない。それを利用する魔族がたまに現れるが、それらは部下に始末させている。

……気分次第でちよつかいを出すこともあるが、命に関わるような傷は負わせてない。

「ご愛嬌、というやつだ。ちよつかいをされた方からしたら堪ったものではないだろうが。」



「おお、ゼアノス！」

「……………」

これは……どうすればいいのだろうか。今俺の名前を呼んだのは、ハイシエラによって下着姿になってしている一柱の魔神。言うまでもなく、アムドシアスだ。使い魔にしたのだと、ハイシエラから聞いている。

「どうしたのだ、黙り込んで」

「いや、なんでもない。それよりもアムドシアス。やっぱりハイシエラに負けたのか？」

「ぐっ……御主が私の所に来ていれば、負けはしなかったのだぞ！」

それはどうかね。アムドシアスと一緒にいても、俺は多分戦わなかった。となればどちらにしろ負けは決定済み。うん、ハイシエラにしておいて正解だったな。

「さて、ゼアノス。シユミネリアに続き、こやつ世話も頼む」

「突拍子もなく現れたのは良いとしてだ。何で俺が？ お前の使い魔だろう」

「なに、我よりも御主の方が言うことを聞くだろうと思っただけよ」

「……まあ、構わない。だが一つ条件がある」

「条件？」

顔をしかめたハイシエラの耳元に口を近づけ、とあることを言う。その条件を考える素振りを見せ、いいだろうと受諾した。

そんなこんなでアムドシアスの今後も決まり、今は謁見の間にいる。シユタイフェの報告によれば、近くにある湾、フレイシア湾にマーズテリアの騎士団が集合しており、そこへ使者を送ったとのこと。その使者が、そろそろ戻って来るそうだ。

戻って来るのを待っていると、ふとした気配を城内で感じた。ハイシエラはアムドシアスが何か小細工をしたのだと察した。俺も彼女の動きを感じたので、間違いないだろう。だが、ハイシエラは放っておくことに決めたようだ。

そんな会話を少しだけした後、送っていた使者が戻って来た。ハイシエラは事前

に、マーズテリアの神官らに会談の提案をしていて、その返事を聞いてきたのだ。その返答は、承諾。なので取引材料としても使えるシュミネリア。相手への牽制にもなる、魔神である俺とアムドシアスを連れて行くらしい。

会談の場として選ばれたのは、フレイシア湾の近くにある建物。そこで待ち受けていたのは、落ち着いた物腰の神官と、殺気を放つ勇者だった。神官ロコパウルト、イソラ王国とも縁の深いヴィルトという勇者だ。

話し合いではハイシエラが一方的に捲し立てるので、ヴィルトとやらは殺気立っている。それは、何をしてくるかわからないから警戒しているようだった。

だがその警戒も、シュミネリアの声で少しだけ鎮まる。俺たちが彼女を悪く扱わなかったことを、告白したためだ。俺はあいつに全く手を出していないし。

それを聞いて、ロコパウルトは進言した。姫を返し、その対価としてこの地への不干渉とイソラの和平——和平とは言ってもそれは言葉だけで、実際には従属に等しいが——を。

だがその程度でハイシエラが納得するはずがなく、勇者ヴィルトとこの地に参集され

た約五百の兵士。それらも寄せと言ったのだ。

つまりはイソラという小国の従属、マーズテリアの不干渉、勇者と軍の献上。この三つと、シユミネリア一人を交換すると言っているのだ。もちろんそんなことができるわけもなく、否定される。

拒否するロコパウルに、ハイシエラは言葉を続けた。何故兵を集めるのかと。元来ならケレースやセアール地方の東は、人では容易に踏み込めぬ未開の地。マーズテリアのように、巨大化した神殿だからこそ、このような地に軍を動かすのは難しい。その疑問点を問い詰めた。

その答えは、オメールの遺跡の封印が解かれるまではこの地を騒がして古の技に触れてはならない、というものだ。

オメール山は、かつてハイシエラの拠点があった場所。かなり驚いているようだ。五十年ほど昔の事だと言っていたので、知らないのも無理はない。

「アムドシアスにゼアノス、知っておったか？」

「当然であるな。我は顔が広い故」

「俺も知っている。というかアムドシアスから聞いていた」

「何故言わぬ」

「貴様も美に目覚めたならば、交友が広がり、そのような噂も耳に入ろう」

「いらぬ世話じや。ゼアノス、御主は？」

「すでにアムドシアスから聞いているものだと思っていた」

「そうであつたか」

ニヤリと笑うと、彼女は再び相手と向き合う。オメールの遺跡の事を聞くと、ロコパウルは重点を省いて遺跡の地図があるとだけ答えた。つまりはそれも交換の一つとして、言外に条件に出してきたのだ。明確には答えられないのが、巨大な組織の欠点だな。「ほう、地図か。……あははははははははは！ 話にもならぬな！ この我を侮るのもほどほどにせい！ 勇者と兵五百の代わりが描きかけの古い地図一枚とは。人間族の価値観は摩訶不思議なものよ」

少し考えたハイシエラからの答えは、否だった。俺からしてもその価値観は分からないので、そこは否定しない。

「そのような意味では……」

「姫は返さぬ。会談は終わりよ。欲しければ力で奪え」

ハイシエラが席から立ち、俺もつまらないと思いつつ踵を返そうとした、その時だった。

「待て！」

勇者ヴィルトが、劍の柄に手をかけながら立ち上がったのは。

「ヴィルト・テルカ。ここにマーズテリア勇者の名と称号を捨て、貴様に決闘を申し込む！ これは、私個人の戦。ただ姫を取り返したいが為の戦いです。マーズテリアとは無関係」

前半の言葉はハイシエラ。後半の言葉はロコパウルに、それぞれ言い放った。俺はその言葉を聞いて、無意識に口元がにやけた。

この男はこう言った。『マーズテリア勇者の名と称号を捨てる』と。それはつまり……

「魔神ハイシエラ、この決闘受けて立て！」

ハイシエラがそれに返事を返す前に、俺は二人の間に立った。怪訝そうな顔で見てるが、知ったことか。

「その決闘、ハイシエラに代わって俺が受けよう。俺は魔神ゼアノス、シュミネリアの世話をしていたものだ。色々と、な」

「何だと!？」

笑いながら『色々と』の部分を強調して挑発したら、案の定、怒りで顔を赤くしてすぐさま乗ってきた。

「俺が負ければ、シュミネリアは返すと約束しよう。凶腕の名に誓う」

この服の事は、マーズテリア神殿の者ならばわかっているだろう。それを前提にし

て、この言葉を放った。こうすれば嘘だとは思われないはずだ。

「……どういうつもりじゃ？」

「最近暇ばかりしていたから、丁度いいと思っただけだ。幸い、こいつはマーズテリア勇者の名と称号を捨てると言った。ならば、俺が戦っても問題ないという事だ」

渋々といった感じだが、これで一応は納得してくれたハイシエラ。渋々なのはあいつ自身も戦いたいという思いがあるからだと思うので、後で戦ってやるとも言うておく。その途端にあつさりという思いが許可した。なんとも現金な奴だ。

「ヴィルトとやらもそれでいいか？」

「私は姫が戻るのなら、貴様でも構わぬ！」

「それは重畳だ。だが決闘と言うからには、死を覚悟しているのだろうか？」

「貴様とて我が剣の錆となっても後悔はあるまい」

「口は達者だな。だが、余りにも力の差があり過ぎては面白くない。同志がいれば手組め。お前の望む場所で相対してやる」

「この場での一対一で構わん！」

「一対一？ ならばこの皆ごと消滅させても問題ないか？ 確実に、ここにいる全ての

人間族は消え去るぞ？」

言い終わると同時に、身体の内より魔力を発する。それを感じたのか、神官ロコパウ

ルや、近くにいる魔術師は顔を青ざめた。自身が魔力を扱うからこそ、この魔力の恐ろしさを理解してしまうのだろう。

「……心得た。決闘の場と隊を整える。戦闘の開始は太陽が頂点に辿り着いた時。場所は、フレイシア湾の畔」

「いいだろう。精々体調も整えておくことだ。具合が悪いと言つても、手加減は一切しないぞ」

後ろ向くと、シユミネリア、そしてなぜかアムドシアスの顔が青くなっている。シユミネリアの場合は我が身と引き換えに、ヴィルトの死が定まったのと同義だからな。

アムドシアスは……何か謀はかりごとをしていたようだし、俺が戦うことが予想外だった、てな感じかな。

青ざめているシユミネリアに、ヴィルトに声を掛けることを許すとハイシエラが言っている。彼女はハイシエラに一礼し、ヴィルトの所へ歩いて行った。

「ゼアノス、なにやらアムドシアスが仕込んでいた。おそらくこれに関係するものだろう」

「感づいている。が、そのの方が多少は面白くなるつてもものだ。お前であつても、そう思うだろ？ 違うか？」

「くくく、その通りだの。随分と戦わぬ奴だと思えば、いや、やはり御主も魔神じゃな」

「何を当たり前の事を言っている」

互いに笑い合い、岩から外に出る。どうやらハイシエラは時間まで寝て、俺の戦いを見るらしい。

そうだな、俺も便乗して眠るとしますか。どうせしばらくの間は暇なのだし。

——決闘。そして……——

心地よい風が吹いているのは、フレイシア湾。俺はそこでハイシエラと共に、ヴィルトとの決闘の時間まで昼寝をしている。

俺は夢を見ている。ハッキリと鮮明なので現実と区別がつきにくいだが、これは夢だと断言できる。なにせ目の前に、人間の方のフェミリンスがいるのだ。あいつはもう寿命で死んでいるはず。そもそも俺はあいつの子孫である姫神とも戦った。だから夢だと判断できた。

……これは、いつかまたフェミリンスの系譜と出会うという前兆か？

「ハイシエラ様にゼアノス様、刻限でございますよ」

「む、シユタイフェか。我は夢を……」

「お前もか……俺も夢を見た」

「夢？ あたしとしたことが、悪い時に起こしちゃいましたかねえ」

ハイシエラが俺と同様に、何らかの夢を見たらしい。何を見たのかは知らないし、聞

くつもりもないが。

フエミリンスの末裔らに会えるのを楽しみに思いながら、起こしに来たシュタイフェと見学する気満々のハイシエラを連れて、フレイシア湾の畔へ向かう。

迎えるのは決闘の相手ヴィルトと十数名の戦士。更にその背にある湾より、水竜らしき生き物。かつてセリカ達が戦っていた水竜よりは小さい。

勇者ヴィルトが、何かを懐から取り出した。俺の記憶が間違っていないければ、あれはかつてアムドシアスが見せてきた、インドリト王の形見の華美な指輪だ。それを媒介にして、ヴィルトにアムドシアスの力が宿っていくのを感じる。

……アムドシアスめ、あの指輪に自分の強化魔力を付与させたな。ハイシエラと戦わせる気だったからか？　だがまあ、そのおかげで退屈はしなさそうだ。

「さあ、持てる力、全てを使って俺を倒してみろ」

「言われるまでもない。魔神ゼアノスよ、覚悟！」

その言葉を合図に、段々と進んでくる十数名の戦士達。その動きが落ち着いたところで、俺はゆっくりと立ち上がる。

「今更だが準備はいいな？」

「その余裕、すぐに後悔することになる。我らマーズテリアの力を甘く見るな！」

いいや、マーズテリアの強さはここにいる誰よりも、俺が一番良く知っているぞ。殺

し合いをした仲だからな。甘く見たことなど、一度たりとてない。

「ロコパウエル殿、よろしいですね？」

「ええ、こうなつてはいたしかたありません……光に連なる偉大なる軍神、マーズテリアの戦士よ。凶悪なる魔神を下し、大いなる武勲を挙げよ！」

雑兵数人が、俺に向かって光の剣を構える。

どうでもいいけど、ヴィルトはマーズテリア勇者の名と称号は捨てたんだよな？ それなら俺は全く構わないが……まあいい。

「行くぞ」

手に持つ双剣を、大きく振るう。それで発生した飛ぶ斬撃と風圧で、俺に近づいてきた数人が一斉に吹き飛ぶ。まるで嵐の中のゴミのように。それでも怯まずに突っ込んでくるその姿は、勇敢なのか蛮勇なのかいまいち区別がつかない。

祝福を受けた戦士や豪華な鎧の騎士が束になって斬りかかって来ても、二つの大剣を叩きつけたことで発する衝撃波で、何度でも吹き飛ばされる。魔術師が放ってくる魔術には、こちらも魔術で対抗。

「そら喰らえ！ イオールーン！」

純粹魔術の中でも比較的低威力だが、この程度の相手になら無問題。中範囲に爆発を起こし、攻撃してくる魔術師と、近くにいた戦士が倒れる。

「隙ありだ！」

魔術を使った後の俺の背後から、光剣で斬りかかって来る騎士。だが、

「それはどうかな？ 速魔弾ルオナ！」

【速魔弾ルオナ】。一応これも純粹魔術に該当されるもので、無駄に長い詠唱を必要とせずに放てるのが特徴だ。現に俺も、後方へ手を翳して放つただけ。だがそれだけで、騎士は崩れ落ちる。

「はあ、つまらない。もっと強い奴はいないのか？」

あえて手加減もしているのに、誰も俺に近づけない。あつちは死ぬ気でもこつちは殺す気はない。誰一人として殺していないし。

「くっ……これが、魔神の力なのか……だが、民のために……姫のために……決して引くわけにはいかん！」

「ヴィルト殿！ こうなつてはやむを得ません……魔神に一打浴びせるため、私も助太刀を。聞けばこの魔神は凶腕の部下、魔神の中でも上位のはずです！」

「それはなりません。ロコパウル殿には戦いの結果を神殿に伝える責務が残っております。私は既にマーズテリアの意思に背いた身……後このことはお任せいたします」

「……心得ました」

ヴィルトとロコパウルの話が終わると、先程構えた剣をこちらに向ける。その目に

は、これだけの力の差を見せつけられたにも拘らず、敵意や戦意は全く衰えていない。伊達に酔狂で魔神相手に決闘を申し込んだわけではないようだ。

「他と比べて、それなりに楽しめそうだ」

「楽しむ間など与えるものか！ 貴様は、命に代えても私が倒す！」

俺にそう言い放つて水竜に跨り、持っている剣——神剣テウリナを振るう。俺はそれを避けずに、敢えて片方の剣で受け止める。同時に控えていた2人の騎士も、俺に剣を振り下ろす。

「残念、ほれ」

剣を持っていない左手を、握りこぶしから開く状態にする。すると、左手の中に溜まっていた魔力が解放され、衝撃が迸る。ヴィルトはそれをギリギリで避け、水竜のアクアブレスをしてくるが……俺には意味が無い。

「見よう見真似だが……円舞剣！」

セリカの使っていた剣技、飛燕剣。その技の一つにこんなのがあった。遠目で見ていただけだから合っているかは微妙だが、かつてダークマターと戦わせた際に、船の上で直線状にいたダークマターを斬り刻んだ技だ。

その剣圧はアクブレスを切り裂き、ヴィルトと水竜にまで到達。手加減していたことと初めて使ったということが相まって、それは斬撃よりも打撃に近く、鎧が軽く凹むだ

けで済んだ。だがこれで、ヴィルトは満足に動けないだろう。

「がはっ！ が、ぐっ……ううっ、く……。おのれ、せめて、ひと……太刀……」

決闘だと、ヴィルトは最初に言った。この世界で魔神を相手に決闘するという事は、負ければその命を差し出すのと同じだ。いや、例え決闘ではなくとも魔神を相手に戦いを挑んだのなら、負け＝死、だ。

俺はヴィルトの前まで歩き、剣を振り上げ、そして……

「ゼアノス様……お待ちを！」

俺とヴィルトの間に、シユミネリアが無謀にも割って入った。

「お待ちを……どうぞ、ご容赦ください……どうぞ……」

「姫っ、危険です……お下がりにください！」

「いやよ、いや、下がらないわ……目の前で死んでゆくなんて……いや……」

「姫……私は決闘の最中です、お下がりを……ぐっ！ げほっ、がほっ！」

「うっ……ううっ、いやよあなた……いやあ……。ああああっ……」

人目を憚らずに、シユミネリアは泣き始めた。

飛び込んできたこの娘は……彼女は、王女。王女とは、高貴なる者。心の内を悟られまいと、今まで必死に耐えていたにも対し、夫が死ぬ間際になつて耐えきれなくなつたようだ。王女という仮面を投げ捨てて、一人の女として泣いている。

ふとハイシエラを見ると、目を瞑っている。どうやらこの判断は俺に任せようだが、俺は敢えてハイシエラに声を掛けた。

「ハイシエラ。俺が戦っていたのはたしか、元勇者であり、王女の夫である男だよな？」

「……そうじゃが、それがどうかしたか？」

ハイシエラもそうだがここにいる全員、戦士も騎士も魔術師も神官も、そして目の前で泣いている王女と勇者も、俺の言いたいことが予想できないらしく、頭に疑問符を浮かせている。

「女の為に勇者の名を捨て、今度は一人の男の為に王女の威厳を捨てている女がいる。……俺が戦っていたのは、“誇り高い王女”を守ろうとしていた男だ。王女の威厳を捨て去るような、“脆弱な女”を守ろうとする男では、断じてない」

目前で抱き合っている男女は、片方は泣きながら。片方は傷だらけであっても、意思のある目でこちらを見ている。俺の言葉を聞きながら。どういう意味なのかを考えながら。

「遠回しに話すのは御主の悪い癖だの。つまりは何が言いたいのだ？」

「興醒めだ。こいつらは俺の剣の露になる資格すらない。お前が俺の立場なら、お前もそう思ったはずだ。違うか？」

「……ああ、そうだの。実際に我も同じく、興醒めしたところよ」

「魔神ゼアノス……魔神、ハイシエラ……」

俺とハイシエラの名を口にして、元勇者。俺はそいつと、そいつに抱きついていてる女にも向けて言い放つ。

「ヴィルト、だったな。その鬱陶しい女を連れて、さっさと消え失せろ」

「あ、あ……ありがとうございます……」

「くっ……かたじけない」

再び泣き出したシユミネリアを抱きながら、俺達に一度頭を下げ、視界から消えて行った。それから数年後。イソラ王国は大きい復旧を実現させるが、それはまだ遠い未来で、俺もまだ知らないこと。

「それでロコパウル、どうする。魔神である俺らを前にして撤退となれば、責めを受けるだろう」

「マーズテリアはいたずらに戦火の拡大を望んではおりません。二人が無事助かったのであれば」

ロコパウルはそこで口と目を閉じ、しっかりと目を二柱の魔神に向けて、言葉を発した。

「いいえ、民の願いを受け、姫奪還を果たしたのです。私の役目は終えたも同じ」

「正直ではない男よ」

いつの間にか近くに来ていたハイシエラが、顔をにやけながらロコパウルにそう言った。

だがすぐに振り返り、参謀に向き合う。

「シユタイフェ！ 次の目標が定まった！ 次に向かうはオメール山に封じられていた遺跡！ その全てを暴いて見せようぞ！」

それに呼応し、控えていた兵から歓声が上がった。どうにも魔族とやらは、こういうノリが好きであるらしい。……人間と何も変わらない気がする。

「シユタイフェ、まずは宴よ。華鏡の畔で兵を労い、今しばらく飲み明かそうぞ。我もオメールに向かう。兵はターペⅡエトフで万全の準備を整えよ」

「ハイシエラ様、もしやお一人オメールに向かうのですかい!？」

驚くシユタイフェに、ハイシエラは笑った。その際に何か見つけたらしく、足元から何かを拾う。あれは……アムドシアスがシユミネリア経由でヴィルトに渡した、インドリト王の指輪だ。もう既に効果はないだろうが……俺が貰うか。

「ハイシエラ、それくれ」

「む、これか？ 良いぞ、我にとつてはガラクタよ。それとゼアノス、アムドシアスをオメールへ連れて行く。御主も来るか？」

当然力を貸すであろう？ という視線をハイシエラがアムドシアスに向ける。そん

な視線に、彼女は小さく舌打ちした。俺にも行くかどうか聞いてくるが、拒否しておく。あそこは何か、嫌な予感がする。

「このハイシエラが遺跡の仕掛け程度に手を煩わすと思つてか。貴様は黙つて眠つておれ」

「突然どうした。……セリカ・シルフィル、か?」

何の前触れもなく呟いたハイシエラに、俺は詰め寄る。

「ああ、先から胸の奥で、チリチリと痛むものがある。まるであやつが遺跡に近づくと、警告しているようだな。何を心配しているのやら」

特に気にしないように振る舞っているハイシエラだが、俺はかなり気にしていた。オメールの遺跡には、何か重大なものがあつた。この時期に関しての知識はもう無いから、少し不安だ。しかし……そういえば……

「遺跡といえ、五十年以上前だつたな。ラヴィーネを復活させたのは」

最近は全然会つてないな……セリカがアストライアの身体を取り戻したら、会いに行くか。それがいつなのかは、全く覚えてないけどな。

そしてそんな俺と勇者ヴィルトの、決闘とはとても呼べなさそうな戦いの後日。

俺達はアムドシアスの拠点だつた華鏡カキョウの畔で宴会をした。俺はそこまで熱くなれなかつたが、あの状況を言葉にするなら……そう、酒池肉林という言葉が適切だろう。

さらにその宴会の終わった翌日の朝。つまり今なのだが、ハイシエラはアムドシアス
を連れ、オメール山の遺跡へ向かった。俺は付いていかなかったものの、興味がない訳
ではない。ばれないようにコツソリと尾行……しようと思っただが、遺跡の内部は狭
いが隠れる場所が無く、しょうがないので外で待つことにした。

そして、二人を待つこと数時間が経った頃だった。遺跡から、とてつもない魔力と光
が噴出したのは。

—渡る為の話し合い—

空気が震えた振動と、人間なら目が見えなくなるほどの膨大な光。一瞬しか感じなかったが、これは魔力によって出たものだ。周囲にいた獣や魔物は、それらを感じずたことらと逃げた。その代わりに、夜になるころには新しく、そして珍しい人物が現れたが。

「あなたが……地の魔神の盟友、ゼアノスですね？」

「ハイシエラに聞いたのか……ああ、そうだ。俺もお前のこと知ってるぞ。白銀公だな？」

白銀公。ターペ^{トリスメル}エトフやオメール山の近くにある珊瑚森のエルフの長だ。

「そちらも、魔神ハイシエラより聞いたようですね。何故ここに？」

「ハイシエラが……いや、神殺しがこの中へ入って行ったからだ」

「……凶腕の命による監視……ですか？」

「いいや、自分の意思だ。そう言うお前は何故？」

「神殺し」を封印しに、です」

詳しく聞くと、二つの理由があった。

白銀公は何らかの方法で、この遺跡の中で起こった事を視ていたらしい。その内部を視るに、セリカ・シルフィルは復活した。が、極度の魔力不足にある。もしこのまま世界に解き放てば間違いなく、諸国の生ある者が息絶えるまで精気を喰らい続けるから。これが一つ目。眠り続ければ、永い時間は必要だが魔力を得ていくらしい。警告を無視して遺跡に入った者や、引きつけられた魔物からも得られる。だから過剰な心配はいらないとのこと。

二つ目の理由は、誰にも触れないようにする事でセリカを守る、というものだ。

肉体的に守るだけでなく、何者かに操られて“兵器”として利用されることを、未然に防ぐ為でもある。真の意味で女神の力を守り通せるのは、“セリカ”自身より他にならぬ。最悪の場合、世界を滅ぼす存在になってしまふことも想定できる。

もしそうなたら凶腕として俺があいつを元に戻すから問題ないだろうが……セリカの悪名は増してしまう。だから俺はこの案に賛成した。

「ん？ 御主、ゼアノスか？」

セリカの身体を封印するために遺跡に入った白銀公を待っていると、その声が聞こえた。ここ五十余年は聞いていない声と見なかつた体だが、その魔力と魂が同じだった為

すぐに気が付いた。

「やつと来たか、ハイシエラ。ああ、白銀公も一緒か」

地の魔神と共に出てきたのは、女魔神とトライスメイルの長。そして数人の術者だ。セリカを封印するために来たエルフだろう。

「うむ、まさかここに御主がいるとは思わなかったがの。さて、御主達もようやく、我から離れることができたの」

ハイシエラはその手に持つ三つの石に語りかける。召喚石にだ。セリカの魔力を使わせないためか、ハイシエラは残り少ないだろう魔力を石に送る。するとその召喚に応じ、ペルルとリ・クティナ、リタが現れる。

「長きに渡って我に力を貸してくれたこと、礼を言おう」

「えええっ!? おれいーっ!」

「御主の口からそのような言葉が出るとは思わなんだな」

ハイシエラの礼の言葉に、ペルルとリ・クティナは驚きを隠そうともしない。その一般的に失礼な反応に、ハイシエラは少しだけ気分を害したようだが、彼女らには“それなり”に感謝しているらしい。

ハイシエラが感謝……だと……。

「……なんだの、ゼアノス。その視線は」

「ハイシエラ、現神に頼るのはお前のプライドが許さないだろうが、今すぐイーリユンの神殿へ行つてこい。あの失礼な反応で機嫌を悪くしないお前なんてお前じゃない」

「御主が一番失礼だの!!」

ブンツッ! と、大きく剣を薙いできた。今のあいつは魔力がすつからかんなのだが、アレを受けたら常人なら即死だ。でも俺は魔神。そんな一撃をまともにくらうことは無く、剣で受け止める。

俺が変な挑発をして、ハイシエラが攻撃してきて、俺が防御。ここ数十年繰り返した、軽いスキンシップだ。

「ちい、こいつめ……まあ良い。それで、御主らはどうするつもりじゃ」

召喚されたセリカの使い魔達に、これからどうするかを聞くハイシエラ。答えは聞くまでもなく、ここに残つてセリカを守る、だった。答えを言い切つた三者は、それぞれ笑みを浮かべて姿を消してゆく。セリカは世界からは嫌われているが、何人かからは好かれているようだ。

「貴女はこれよりどうするのですか?」

白銀公のその問いに、ハイシエラは少しの間世話になると答えた。その期限は、今寝ているアムドシアスが目覚めるまで。平和なだけな森はつまらないと言っていた。何とも彼女らしい。

次に、俺にも同じ質問をしてきた。これからどうするのか。そんなものは決まっていないが、定まっていることが一つある。

「取り敢えず、ハイシエラとは別行動だ。俺達の同盟期間は『セリカ・シルフィルが女神の身体を取り戻すまで』だからな」

つまり、トライスマイルにも行かないという事だ。これからは敵同士。敵と敵が同じ陣地にいるわけにもいかない。ハイシエラもそれには好戦的な笑顔で答えてくれた。

「魔神ゼアノス、最後に聞きたいことがあります。貴方は一体どのような種類の魔神なのか、自身で存じていますか？」

「魔神の種類だと？」

「そうです。例えば前に魔神ハイシエラと私が共闘し、倒したトライスマイルの魔神、バーティガヌ。あれは、植物や木に関する魔族や魔獣。その類の魔神でした」

魔神とは結局の所、神格位を得た魔族。人間が神格位を得れば神格者となるのと同じだ。しかし魔族には、人間とは違って多くの種族がいる。その種族の数だけ、魔神の種類もある。ならば俺の種族は何なのだろうか。白銀公の言いたいことはそういうことだ。

そう言われてみれば、確かにそうかもしれない。深凌の楔魔の仲間であるゼフィラは、どう見ても睡魔族だ。パイモンやラーシエナは墮天使という、元々は天使の特例だ

が、ザハーニウだって巨人の神格位持ちなのかもしれないな。カフアルーも馬型魔獣の、だ。

……他の多数はさっぱしわからんが。

……じゃあ、俺は？

「考えたこともないな……だが何でそれを知りたがる？」

「精霊の声によれば、貴方は害の少ない魔神だと聞き及んでいます。ですが貴方と同じ種族の全てが、我々にとっても害の少ない魔族なのか、分からないからです」

「なるほどな。なら取引をしよう。俺は自分の種族を探し、それをお前に教える。その対価として、俺は一時だけトライスメイルへ入っても良い。そういう許可をくれ」

「我々は他種族と関わり過ぎることを是としませんが、その知識と引き換えならば、多少の事柄であれば大目に見ましよう。我が神ルリエンも、黙認されています」

微笑むように白銀公は頷き、昇っている朝日を背にトライスメイルへ向けて歩き始めた。

ハイシエラも、それに続くように歩く。アムドシアスは未だに目覚めず、ハイシエラに背負われている。何とも丸くなったものだ。以前のあいつなら引きずっているだろうに、セリカの影響でも受けたのだろうか。

俺はここから少し離れる。具体的には、遺跡を守っているセリカの使い魔達に見つか

らない場所。そこまで移動し、周囲に“水”が無いことを念のために確認。そして、指をパチンと鳴らす。呼び寄せるためだ。俺の配下の墮天使を。ノワールは忙しそうなので、今は呼ばない。

「この遺跡の周辺に警戒態勢を敷いておくよう、ノワールに付いている者以外に伝えろ。エルフが来るかもしれないが、不干渉を貫け。あとは鳥人の娘、ナーガの女、霊体の少女もいるが、彼女らには俺の指示だと言っておけ」

「はっー」

すぐに出現した墮天使は、俺の言葉が終わると同時に飛翔していった。

こんな指示を出したのは、“得体の知れないモノ”が来てしまった際、セリカの使い魔である彼女らだけでは、とても対処することは出来ないと思ったからだ。

一応、エルフの住んでいるトライスメールには、俺の配下の墮天使や合成魔獣を見張りとして配置することを通知しておく。何が原因で戦いに発展するか分からないからな。

こんなことでエルフの信仰する現神、ルリエンと争いになるなんて御免だ。

……バリハルト相手にはかなりおちやらけてたけど、あれはご愛嬌だ。俺ってばあいつが嫌いだから、ついやってしまった。後悔はしてないけど。

こんなことを思い出しながら、俺は帰ることにした。俺の本拠地であり、数多くの部

下と仲間が集っている場所——デージェネール地方へ。そして今回の遺跡のように、古い時代の遺跡の発掘もさせてみようと思つた瞬間でもある。

魔導鎧に魔導銃、それに創造体。他にも悪魔族を調達しよう。

だがそれら以上に、大きな課題が出来た。そう、俺の魔族としての種族。それを探すのも、これまた面白い一興だ。しばらくは面白味がないが……その後が楽しみだ。

S i d e ・ ト ラ イ ス メ イ ル

ゼアノスがデージェネール地方へ帰還したのと同時刻。

ハイシエラとアムドシアスは、白銀公に別れの挨拶もなく、風のように去っていった。その後もゼアノスの使者を名乗る墮天使が通達してきたが、その墮天使と騒がしい二柱の魔神が去つたことで、森は今や穏やかな風と、清らかな水の流れる音しか聞こえない。白銀公が流れる水へ足を進めると、水の精霊を通じて、かの地にある巫女の声が響く。レウイニア神権国の首都、プレイア。都を見下ろす丘の上にそびえ立つ、白亜の城。そのもつとも奥にある聖地に、水の巫女はいた。

白銀公と水の巫女は、今回の“神殺し”のことで話し合っている。

“神殺し”は厄災の種。ソレは忌むべき存在。しかしその種がどのような実を熟す

のかは、セリカ・シルフィルによる。ならば悪しき実りとならぬように、導こうと。

水の巫女が“神殺し”へ祈りの言葉を口にし、辺りを光がつつんだ。その光の中で、水の精霊を通じた言葉はゆったりと溶けて消えていった。

だから白銀公は水の巫女の、この言葉を聞くことは出来なかつた。

「狭間の魔神、凶腕のゼアノス。貴方の存在が、セリカへどのような影響を与えるのか。……そして貴方は、何を望むのですか」

水の巫女は再び祈る。“凶腕”という川が、“神殺し”という川と混ざり、全てを呑み込み破壊する、濁流と化さないことを。

—120年を経て—

セリカが封印されてから、どれほどの年月が流れただろうか。100年は経ったと思う。人が一生を終えるには充分な時間だが、俺などの魔神にとっては大したことはない。アイドスも未だに起きないし。だがそれは原因が分かっているから無問題。

セリカが復活するまでは、国の戦力を高めておこうと思ひ、様々な魔族を徴集している。

もちろん魔族だけでなく、創造体も集めている。

魔族で言えば、文字通り下級の悪魔であるレッサーデーモン。

基本の暗黒属性は当たり前として、地脈、氷結、火炎、電撃の四種の下級悪魔もいる。その逆の上級を意味するグレーターデーモンも、五種全部が俺の配下にいる。

それと、卵鞘悪魔の異名を持つオーウムデーモンもいる。オーウムデーモンは卵を抱え込んでいる悪魔族で、その卵からは属性に適した“デーモン”が産まれる。レッサーデーモンが最も高確率だが、稀にグレーターデーモンすらも産む。場合によってはオー

ウムデーモン自体が産まれることも、少なくともはない。こいつも属性が五種類に分かれている。

それと偶然に見つけた生物も、俺は手に入れることができた。名前をラーグスネールという魔獣(?)なのだが、その姿は巨大な蝸牛^{カタツムリ}。

たつた一体のこいつが歩くだけで、小さな国1つを壊滅させることができる。そのぐらいデカイ。頭だけでも巨人3人分はある。しかも蝸牛なので、身体の多くは硬い貝殻で覆われている。だから物理攻撃などは効き難い。全体の動きを封じるなりしなければ、並の魔神であっても倒せない。

こんな凄まじい移動型戦略生物だが、俺は5体も見つけた。一体目は大陸の西方にある広大な洞窟内を、自由に歩き回っているところを捕まえた。二体目はそこから北方の国の地下迷宮の中で、魔神に捕らえられて餌になりかけていたのを助け、配下に加えた。他3体は適当に旅をしていたら見つけたので、詳しくは覚えてない。

そして重要なのが、ラーグスネールを食べようとしていた魔神だ。そいつの見た目は大きな鴉で、名をハルフアスという。ソロモン72柱の序列38番だ。

古神にも分類される古い魔神で、アムドシアスやナベリウス、パイモンの元仲間である。

そんなすごい魔神(戦力)を俺が放っておくわけもなく、こいつもまた仲間入りした。

ソロモン72柱。また出会えたら真つ先に勧誘しておこう。九割方がぐれ魔神だから見つけるのが面倒だけど。

……しかし悲しきかな、天使の数が圧倒的に少ない。ここにいる天使は古神側とはいえ、魔族とは元々相容れない存在だ。一応光陣營のための居場所を用意したが、幸先不安だ。

創造体に関しては、ソルガツシユとかいう物体を見つけた。これもラーグスネールと同じ、戦略的な存在だ。これは設置型だけど、こいつが放つ光分子砲をまともに受ければ消し飛ぶ。魔神であっても、障壁を張っていないと消滅するかもしれない。

魔族も創造体も他にこれら以外にいるが……とりあえずは一旦閑話休題。

俺の本拠地は、ディージェネール地方にある。だから他の国は、滅多な事では見つかることができない。ディージェネールは亜人間領域とも呼ばれているし、魔族や闇夜の眷属の量が多く、質も高い。人間にとっては未開の地であり、ケレース地方以上に恐怖の地なのだ。

なので俺は凶腕の名を使い、ディージェネールにて建国したことを世に広めた。この地なら人間族にとって不利なことがないし、むしろ好き勝手に暴れるディージェネールの魔族らを統一するのだから、人間にとっても嫌な事ばかりではない。

俺個人どころか国規模での戦力を増やしているから警戒はされるだろうが、コソコソ

と裏で隠れながら何かをするよりは警戒されないだろう。攻撃を仕掛けてくる馬鹿も少ないだろうし。

建立した国の名は、デイストピア帝国。そして驚くなかれ、領土はデイジエネール地方の全域。つまり、ラウルバーシユ大陸最大の国となった。

アストライアの聖域である勅封の斜宮を護るためにも、この処置は必要だった。故に、セリカが封印される前にリ・クティナと話は済ませ、ナーガ族の領域も領土にすることを認めさせている。

現神側からのコンタクトはもちろんあった。複数の神殿からの使者がデイジエネールの近くまで来て、“凶腕”ではなく“ゼアノス”が対応した。

こちらの意見は、昔から何も変わっていない。『やられたらやり返す』それだけ。過剰ともいえる戦力は、万が一にも現神が凶腕を殺そうとした場合に備えてのことだ。

そう説明し、納得はできていないのだろうが、本当のことなので早々に帰ってもらった。

闇陣営の神殿は、どうにかして同盟を組もうと躍起になっていた。だがそうすると光陣営側から何を言われるのか分からないので、中立の神以外と組むつもりはないと答えておいた。

使者は大勢いたが、その中で一人、目が離せない存在がいた。気になるというわけで

はなく。俺が知っている人間だったからだ。

それは、マーズテリア神殿の聖女ルナークリア。

薄れている知識の中で数少なく覚えている、重要な人物の一人。懐かしさも感じる女。

しかしその事を本人が知っているはずもなく、今は顔合わせ程度しか面識はない。だが彼女がいるという事は、間もなくセリカの封印が解けるのではないか。

「ゼアノス様、よろしいでしょうか？」

考え事をしている最中に俺に話しかけたのは、雑兵の悪魔族。俺の正体は凶腕だというのを知っているのは、俺が信用した者だけ。だから俺は周囲から、凶腕への連絡役だと思われる。凶腕の顔を知りたがる馬鹿が、時々俺のことを殺そうとしてくるが……リミッターを外すまでもなく処分した。

「ん？ ああ、いいぞ。また凶腕との面談希望か？」

「いえ、今回はゼアノス様に御用がある様子です。ハイシエラ、と申しております」
「ハイシエラだと？ あいつが今頃何でここに……分かった。下がっていいぞ」

一礼し、俺のいる部屋からそいつが出ていく気配を感じる。

それを再度確認し、歪の回廊で客間まで移動する。

「む？ ゼアノスか。久しぶりだの」

「久しぶりだな、ハイシエラ。……それにアムドシアス、俺のことは覚えているか？」
「頭に霞が掛かっているようにハッキリとはせんが……我は御主のことを知っておるぞ」

アムドシアスはオメールの遺跡で、機工戦姫によって一時的に記憶を消されたらしい。

機工戦姫とは機工女神の劣化版のような物で、装備した者を生贄にして稼働する兵器だ。俺も何機か所持しているが、身体にその鎧を纏ってしまえば、記憶を消去され、機工兵器に変えられてしまう。

もし彼女が魔神でなかったなら、全ての記憶を消されていたかもしれない。

「どんな形でも覚えてくれていたなら重畳。ほれ、こいつをやる」
「一体何を……これは……なんと美しい」

今俺が彼女に渡したのは、インドリトの指輪だ。かつて勇者ヴィルトと戦った際に、アムドシアスがハイシエラを倒すために使い、回りまわって俺のものになった。あの時の事は覚えていないようだし、喜んでくれるなら何よりだ。元々渡すために手に入れたのだから。

「指輪に魅入っている一角公は放っておくとして、本題に入るとしようか。凶腕ではなく俺に用とは、一体何があった？」

「なに、言葉一つで済む出来事が起きたただけだの。……セリカ・シルフィルが起きたぞ」
やはりそうだったか。ルナークリアが聖女だという事は、セリカも起きると思つていた。それは間違いではなかったようだ。

「そうか」

「……」まで驚かないことに、逆に我が驚いたぞ」

「そろそろだな、という予感が前からあつた。だからだ。で、それを伝えるためだけにここに来たのか？」

「うむ。御主にはあの転移があるから、我はもう行くぞ。ほれアムドシアス、いつまで指輪なんぞを見ておる。急ぐぞ！」

「ま、待てハイシエラ！ この指輪の価値が分からぬのか!? ……!!」

後半の声が全く聞こえなくなつたが、気にしない。あいつの美を愛する考えは病的だ。気にしたら負け。

とりあえず、急いでケレース地方へ戻ろうとするハイシエラを呼び止めて、歪の回廊でケレースまで送つておいた。しかしハイシエラめ、折角なんだから、出した茶くらい飲んでいけよ。



客であるハイシエラに出したが飲んでくれなかった紅茶を俺が飲み、歪の回廊を使用。転移した先は、レウイニア神権国の首都、プレイアの城の中の庭園。水の巫女のいる聖域だ。1対1で話がしたいらしく、ハイシエラが帰ってからすぐにレウイニアからの使者が来たのだ。

彼女と俺は、所謂ギブ&テイクの関係を結んでいる。

今回は俺がああ〃得体の知れないモノ〃の討伐に手を貸す代わりに、俺がこれからやることをいくつか黙認してもらうことになった。

あいつは今もおセリカを追っている。アイドスは抜き取ったので、アレにアイドスの意思は無い。それなのに何故追うのか。あいつの今の正体を知りたいが、そちらを探る必要もありそうだ。

水の巫女の話によれば、セリカは魔術城砦カラータに向かっているらしい。

同行者としてシャマラー・クルツプという人間がおり、レウイニアの騎士の1人であるレクシユミが付いて行ったと聞いた。

歪の回廊で先回りし、外には見張りがいたので、またしても回廊で中に侵入する。

ここ最近、この城砦付近で行方不明者が続出しているので、できれば原因を突き止めて欲しいとも言われている。非常に面倒な仕掛けを解除して奥に進むと、城砦にある転

移門とは気配の違う大きな転移門を発見。周囲には、衣服の切れ端や装飾品が散らばっている。行方不明になった人間の遺品だろう。

しかしこの転移門を発動させるには、魔力が足りていないようだ。詳しく調査するために、お馴染みの『腕』を伸ばして……

「それにしても、ここに来るまで全然魔物を見かけませんね」

「だが魔物の死体がいくつもあった。何者かが無断で侵入しているかもしれない」

『腕』を引っ込めた。複数の人間が、すぐ近くの違う転移門から転移してきたからだ。

そこと俺のいる場所は直線状であるため、紅い鎧の騎士の目と俺の目が合う。一瞬だけ驚く表情を見せたが、一秒が経過するよりも早く戦士の顔になり、剣を抜いた。そしてそれは、一緒にいた人間ともう一人……セリカ・シルフィルも同じだった。

見た目からして騎士姿の女がレクシユミで、盗賊のような女がシャマーラだろう。

「私はレウイニアの騎士、レクシユミ・パラムベル。そこで何をしている？ その散乱している物は、お前が何かをしたからなのか？」

どうやら俺が行方不明事件の犯人に疑われてしまったようだ。

「二つ目の質問の答えなら、違うと答えておこう。一つ目の答えは、この転移門を調べている。それだけだ」

「ここは本来立ち入り禁止のはずだが？　そもそも、お前は何者だ」

「俺の名はゼアノス。デイストピアの魔神だ」

「!!」

デイストピアの魔神。これを聞いて驚かない者は滅多にいないだろう。デイジエ
ネール地方の全てを統治している国。その国の王は、誰でも知っている凶腕だ。

つまりは凶腕の国の者、それも魔神がいるのだ。

「……かの国の魔神が、レウイニアに何用だ」

「何用も何も、我らの国に水の巫女が直接依頼してきたから俺はここにいる」

「な、何だと！ 巫女様が!？」

「そうだ。……にしても俺を見て反応しないとは、記憶を失ったというのは本当らしい
な、セリカ?」

驚いているレクシユミからセリカに視線を変えて、言葉を放つ。今まで始終無表情
だったが、それを聞いて目が少し見開いた。

「お前は、俺を知っているのか?」

「ああ、知っているさ。お前の使い魔であるリ・クティナ、リタ・セミフ、ペルル、パズ
モ・ネメシスに聞いてみたらどうだ? パズモは答えてくれるかどうか、分からないけ
どな」

セリカは早速、三つの召喚石を取り出した。少しの間その石に集中し、顔を上げた。

「確かに三人とも、お前のことを知っていると知っている。それに俺も……知っている、気がする」

「……ゼアノスと言ったな。先の言葉は、凶腕に懸けて誓えるか?」

「誓える。後で水の巫女に聞いてみたらいい。あの神とは利害が一致すれば、その度に依頼を受けたり、逆にこちらから依頼をしたりしている。凶腕と水の巫女は、昔からの知り合いらしいのでね」

「デイストピアの魔神が凶腕に懸けて誓うというのは、レウイニアでなら水の巫女に懸けているのと同じ。言うなれば、『神に懸けて誓う』ってやつだ。」

自分の国のトップに懸けたのだから、これは嘘ではないのかと、レクシユミは考えているのだろう。その反面、俺は自分で魔神だといった。魔神の言葉を完全に信じるのは……という思いもあるはずだ。

だからなのか、彼女はさつきから何かを悩むような表情をしている。そして何かを思いついたのか、セリカとシャマラーの二人に耳打ちをする。セリカはすぐに了承し、シャマラーは少し悩んだ後に、「セリカがいいなら、私もいいです」と言った。どうするのかが決まったらしい。

「魔神ゼアノス。その言葉が真実であるのかどうか、自分の目で確かめる。我らと行動を共にしてくれないか?」

「なるほど。お前もこの調査に来たのだから、監視を兼ねてというわけか？」

「そうだ。彼らを巻き込んでしまうのは申し訳ないが、お前を完全には信じられない」

どうであろうとも、俺に不利なことは一切ない。そもそも下心があるわけでも、悪事を考えているわけでもないの、ハッキリ言えばどうでもいい。

「別に構わない」

俺の返答にレクシユミは頷き、セリカとシャマラを連れてこちらに近づいた。

シャマラはかなり緊張しているようだが、無理もない。魔神など、一生の内に一回出会っただけで、不幸自慢ができる。普通は会わないからな。

あと五百年も経てば、デイズエネール地方で当り前のように見られるようになるだろうけど。いや、それはそれで嫌だな……止めておこう。

俺はレクシユミに、行方不明者はこの転移門の先へ連れて行かれていますという予測を伝える。城砦のもっと奥にも、危なっかしそうな亡霊の気配がするが……これは雑魚だ。

ノワールに心話でこの事を教え、解決させておく。残るは転移門から異所へ行くだけなのだが、魔力が足りてないせいで転移ができない。

仕方ないので、面倒だが周囲に無数に存在する死霊や魔霊の魔力を奪い、そのまま転移門に無理矢理流し入れる。

「これでこの先へ行ける。準備は出来たか？」

俺の言葉に、一同は頷く。若干一名震えながらだったが、みんなはそれを敢えて気づかない振り。それを確認し、陣の上に乗る。

そして俺達は転移するのだが、俺は気が付いた。この先には、あの“得体の知れないモノ”の気配がする。さらには、俺の知っている魔神の気配も感じる。

……中々に楽しくなりそうだ。

—冥き途にて—

あの転移門を使用するのは、どうやらかなり無理があつたらしい。それが分かったのは、ここ〝冥き途〟へ繋がっていたことから判明した。

冥き途は冥府への入口。本来なら死んだ者しか来ることができない場所。いくら転移門が多い魔術城砦でも、ここに繋がっているとというのは些かおかしい。

「……もの見事に不死体だらけだ。あの群れに飲み込まれないように注意しろ」
「言われなくても、あんな所へ行こうなんて思わないわよ！」

シヤマールに軽く注意すると、彼女は魔神である俺に普通に接してきた。相当適応力があるようだ。その精神力は感心できる。

「霊体も数多くいるが……ここではあのように漂っているのが正常なのか？」

「いいや、違う。俺は来たことはないが、知り合いが来たことがある。その際に聞いたが、それと比べるとあの霊たちは迷っているように見える」

正面を向くと、霊は視界いっぱいに入ってくる。様々な方向へ、規則性なく彷徨って

いる。番人がしつかりしていれば、このような事態にはなるはずがない。となれば、ナベリウスに何か異常が起きているのかもしれない。

「とにかく、先に進まないことには何もわからないな。行くぞ」

「ね、ねえセリカ。本当にこの先に行くつもり？ 魔神もいるんだし、あの人に任せておけばいいんじゃないの？」

「……誰かが、俺を呼んでいる気がするんだ」

進むことに否定的な意見を言ったシャマラーに、セリカはそう言った。誰かに呼ばれている。それが“誰”なのかまでは推理できる。三通りしかない。

魔神ナベリウスか、“得体の知れないモノ”。もしくはその両方。

瞬間、凄まじい重圧が俺達を襲う。それはまるで、全てを憎み恨むかのような圧力。魔神である俺と女神の身体を持つセリカには大した問題にはならないのだが、人間であるシャマラーとレクシユミには大問題だ。最悪の場合、精神を持っていかれる。

この感覚を俺は知っている。精神を……感情を、心を奪われるかのような、この感覚を。

「きゃあー！」

「シャマラー！」

やはりあいつは、近くまで来ていたらしい。俺が奥へ続く扉を開けたと同時に、一番

後ろにいたシャマールが宙吊りになっている。「あいつ」の触手によって。

「はあ……」

触手に女が吊られているこの光景ってエロくね？ とかいうふざけたものは心の隅に追いやって（追いやるだけで消しはしない）、左手に魔力を溜める。そして放とうとしたが、思いもしなかったことが起こった。俺ではない違う誰かが、魔弾を放つたのだ。それも、シャマールを助けることが目的で。

誰が助けてくれたのかと俺以外の三人は困惑しているが、そうしている内にも、アレは再生している。

「お前たちは先に行け。俺はこいつを何とかしておく」

「だが、大丈夫なのか？ 今も再生しているが……倒せる、のか？」

「完全に倒すのは無理だろうが、足止めならできる。また捕まらない内に早く行け」

「……分かった。行くぞ」

「え、セリカ!? ちょっと待ってよ!」

誰よりも早くセリカが駆け出し、シャマールがそれを追いかける。大方、使い魔達の誰かに何か言われたんだろう。

「で、お前は行かないのか？」

「……健闘を祈る」

最後まで残っていたレクシユミが、そう言つて去つた。だけどき、それ、死亡フラグ建たせてねえか？ まあそれくらいで死ぬ俺じゃないけどさ。ところで、

「いつまで隠れているつもりだ、ハイシエラ？ ふんっ！」

近くにいるであろうハイシエラに呼びかけ、すぐさま襲いかかつて来る触手をぶつた切る。斬つても斬つても死なない敵つてのは、本当に面倒だ。本気を出せば殺せるだろうが……それでは何の意味もない。

「ふむ、やはり気付いておつたか。助けはいるか？」

「いるように見えたのなら、目を取り換えることをお勧めする」

斬つていた間に溜めていた魔力を解き放ち、再生が追いつく前に、バラバラになつた肉塊を歪の回廊で転移させる。どうせここにいたのは分身体だろう。仮にも古神に属しているだろうあいつが、あんなに弱い訳がない。

ついでに、周囲に湧いている不死体や霊体を屠る。目障りだ。

「流石だのゼアノス。それでこそ我の宿敵よ」

カラカラと笑いながら近づいてくるハイシエラ。命のやり取りを滅多にしてはいないが、それでも宿敵と言えるのか……まあ本人がそう言つてるんだし、別にいつか。

にしても、確かに俺は二柱の魔神をケレースに転移させた。だけど、まさかここでまた会うとは思わなかつた。

ハイシエラはここにいるであろうナベリウスの古い知り合いだと言っていたし、一緒にいるアムドシアスは、ナベリウスと同じソロモン72柱。異変を感じて心配になったのかもしれない。

とりあえずセリカに追いつくため、二柱の魔神と一緒に奥へ進む。すると予想通りに、そこには先に行った三人の他に、対峙している小柄な少女がいる。

「アムドシアス、あれがナベリウスか？」

「そうだ。我と同じく、ソロモン72柱が一柱だ」

俺は直接会ったことは無いので、同門だったはずのアムドシアスに聞く。答えは分かりきっているが、顔は覚えていなかったので丁度良かった。

「あの見た目に反して、ものすごい魔力だな……魔力だけなら、お前ら以上にあるな」

「その通りじゃが、その分、見た目通りにナベリウスは膂力がない。それを補っているのが……ほれ、出てきたぞ」

ハイシエラが指さすと、さらに三つ首の大型の犬が現れた。地獄の番犬とも言われる、犬型の魔獣ケルベロスだ。

それとハイシエラが『ナベリウスは膂力がない』と言っていたが、それはあくまで魔力に比べて、だ。そこらの人間よりは遙かに強い。

「……女神の身体だとはいえ、目覚めたばかりのセリカに人間が二人。対する相手は、古

神に連なる魔神にケルベロス。使い魔がいても分が悪いな」

セリカなら大丈夫だと思うが……念には念を入れる。つい最近、デイストピアの仲間になったあいつを、転移魔術を使って転移させるように、ノワールに命じる。

答が返ってくるよりも早く、こいつは転移されて来た。誰なのかというと、

「な!? き、貴様はハルフアス!」

「ん? おお! 久しぶりだな一角の! かつかつか!」

魔神ハルフアス。四つの腕を持つ巨大な鴉姿の魔神。アムドシアスやナベリウスと同じく、ソロモン72柱だ。

特徴：声が非常に大きくて喧しい。

「それじゃハルフアス、あの人間達を助けてやってくれないか? 殺さずに戦闘不能にしてくれればいい」

「お安い御用じゃわい!」

コケーツ! と、まるで鶏のような奇声を上げて、魔神は突撃していく。俺が助けに行っても良かったのだが、俺はハイシエラとアムドシアスに聞きたいことがあった。ハイシエラは助ける気はなさそうなので、俺もここに残ったって訳だ。

……奥の方から『何なのよこのでつかい鳥は!』とか、『その姿は魔族だな。貴様も我らの敵となるか!』とか、『またしても懐かしい顔を見た! 久しぶりじゃのおちつこい

の！ かつかつか！』とか、『……アムドシアスより……うるさいのが……来た』など、セリカ以外の声が聞こえてくるが、無視。

「……ゼアノス、あれは何だの」

「ソロモン72柱。つまりはアムドシアスの仲間だ」

「この我をあの醜い鴉と一括りにするな！」

ハイシエラの疑問に正しい答で返すが、アムドシアスに泣きそうな目で睨まれる。確かに、あいつはお世辞にも美しくも綺麗にも見えないが……醜い鴉は言い過ぎだと思ふ。涎が垂れ流しだけど。一応奥さんと子供がいるみたいだぞ？ 詳しくは知らんが。

「まあそれは置いといて。ハイシエラ、少し話がある」

「置くなー」

アムドシアスを無視し、話すのは“得体の知れないモノ”のこと。あれはアイドスの精神に負の感情が集まり、生まれてしまったモノ。あれは女神アストライアの妹神が変容したものだ、ということ。

ハイシエラはその情報に対し、どこか納得したように頷いた。聞いてみると、セリカが封印されていたオメールの遺跡に何回か現れたらしい。何故なのか不思議に思っていたが、今のを聞いて納得できたようだ。

配下の墮天使からの連絡で、“得体の知れないモノ”の代わりにハイシエラを何回か

見たと聞かされていたが、そう言う訳かと俺も納得した。

そして今の情報の対価という訳でもないが、“得体の知れないモノ”の詳細を教えてください。ここ百年で最もアレと関わったのは、ハイシエラだろうから。

アレのことを詳しく聞き、自分の知識に当てはめていく。この世界の知識と、前世の知識を合わせて。

俺はそこで、アレのことで一つの仮説を立ててみる。アイトスの精神から剥がれ落ちた、負の感情の集合体の、その正体を。原作のままならば『邪神アイトス』なのだが、アレは……。

「む？ おい、ゼアノス」

「……これまた面倒な」

考え事をしているときに俺達が見たのは、霊体に不死体などの亡者の群れ。それも、俺達に向かってくるのではなく、その先いるのはセリカ達。

「しょうがない、俺も行く。またな」

どうせ戦いに参加しない二人の女魔神に手を振り、駆けた。

アムドシアスはナベリウスを救うために動きたいだろうが、主であるハイシエラがそれを許可しないだろう。あいつは、今回は基本的に傍観するようだから。

「せいっ！」

勢いづけ、ハルファスが翻弄させている犬に目掛けて、とび蹴りを喰らわす。ケルベロスは非常にデカいが、見事に横っ腹に命中し、吹っ飛んだ。

ぞろぞろと這ってくる亡者の群れをハルファスに任せ、今度は俺がケルベロスの相手しよう、魔力を手中に溜める。理性と本能を併せ持つこの番犬ならば、刃向うようなことはしないだろう。恐ろしくて、動くに動けないはずだ。

しばらく睨み合いをしていると、近くから聞こえていた戦闘音が消えた。ナベリウスを負かしたようだ。主を守るために奮闘していたケルベロスは、安心したかのような表情で倒れ込んだ。まあ、あのハルファスと戦ったのだからしょうがない。気絶はしていないようだが、それだけでも充分にすごい。

セリカとナベリウスが少し話し合っていたが、突如、かなりの邪気を持った人間が現れた。呪術を用いてナベリウスを無理矢理使い魔にし、セリカを呼び寄せた張本人である魔術師だった。

その魔術師を見て真っ先に頭に思い浮かんだのは、ブレアード・カツサレ。あの人間の魂はブレアードと酷似している。恐らく彼がアビルース・カツサレだろう。以前、ペルルがカツサレ家のアビルースの使い魔だったことを、ターペⅡエトフで聞いていたことは記憶に新しい。話を聞いたのは100年以上前だが。

アビルースはセリカのことを『女神』と呼び、その身体と力を欲している。

あの子の事を簡単に結果だけ説明するならば、ナベリウスはセリカの使い魔となった。ナベリウスはアビルースの呪いに縛られ、しかし逆らった。戒めとして苦しんだナベリウスを、セリカは性魔術を行使し、呪縛から解放した。つまり、『主』という存在の上書きで呪縛を断ったということだ。

ナベリウスは今回の件で助けてくれた人に、俺を含めて全員にお礼の言葉を口にした。

ま、俺はお礼とは別に、『……もう……ハルファスは……呼ばないで』と言われてしまったが。アムドシアスなどの、うるさい輩は基本的に嫌いなのだそうだ。

……アムドシアスは、『煩い魔神』としてハルファスと一括りにされているぞ。ちなみにそのハルファスは、アビルースが出てきた時点でデイストピアへ転移させてある。

そしてこれは監視を頼んでいたアスタロトから聞いたことだが、セリカはレウイニアの周辺を巡り、メルキア王国へ向かったらしい。俺が水の巫女に今回のことを伝えている間に行ってしまったそうさ。

何故アスタロトが気付かれていなかったのかというと、魔術で姿を隠していたからだ。あいつは魔術も得意なタイプだから大丈夫だと思っていたのだが、やはりその通りだったので安心した。

—女神、初の対峙—

セリカがメルキア王国へ向かったと聞いて、俺はそこへ行こうと思っていた。だがどうにもきな臭くなってきたので、一度デイストピアへ戻った後、ニース地方へと向かった。別名を竜領域とも言い、竜の棲むリブリール山脈のある地方だ。

なぜそこへ向かったのかというと、汚染されている存在の気配を感じたからだ。だから勤に従ったのだが、その判断は間違っていないなかった。溪谷の谷間の奥から、山並みの大ききの水精が見えたのだ。

それを討伐するためか、セリカやレクシユミ、白銀公の姿もあった。しかも……あれは空の勇士か？　「アレ」に狂わされている物だと思っていたが……正気に戻ったか。

「ゼアノスか。なぜここにいる？」

「ん？　ああ、セリカか。何か嫌なことが起こりそうだと思つて来ただけだ。幸か不幸か、その勤は的中したらしいが。あの水精が何なのか、分かるか？」

「あれは、腐海の大魔術師と名乗っていた魔術師の作つた精霊らしいわ。混沌アーライナの女神の力を使って、本能で不浄を喰らうように合成してみた。ヴァリエルフが何人か、自ら

進んで生贄になってたわ。話を聞いていたら、騙されたとか言っていたわよ」

俺の質問に答えたのは、もう俺に慣れたらしいシャマーラ。順応力が高いな。

「……水の巫女でも創れると思っていたのかね」

近年のメルキアには瘴気が蔓延している。川の水でも飲んだのなら、狂うか死ぬかのどちらかしかない。メルキアを救いたいという気持ちに付け込まれたのかもな。不浄を喰らうように合成したのなら、国を救えると唆されて。

ちなみにヴァリエルフとは、ダークエルフだと思えばいい。

あ、それと空の勇士のことだが、やはりセリカが助けたらしい。聞いてみたら一部始終を詳しく教えてくれた。

まあそれはともかく、セリカ等は問題の水精を谷の合間に閉じ込める為、様々な個所に結界装置を設置する予定らしい。ここは竜領域と言われるだけあって、竜族の亜人間ドラゴニユートや、水や風の悪魔があちこちにいる。

よくよく見てみれば、それらの魔物の死体があちこちに散乱している。そこにかすかに残っているのは、ハイシエラの魔力。セリカのためなのか、またしても先回りして倒していたようだ。

「ゼアノス、一つ頼まれて欲しいのだが」

「何だ？」

「できればあの水精のことで、協力してほしい」

「……あれを？」

聞くと、頷いて肯定を示すセリカ。結果装置を仕掛けているが、戦闘になるのかならないのか、まだ分かっていない。だから戦闘になった際は、共に戦ってほしい。ということらしい。

「全く問題ない、引き受けよう」

そしてそれは中々に面白そうだったので、俺は嬉々として肯定。

ここ100年近くは魔導鎧やら創造体などの機工関係を弄っていたので、戦うという事柄が全くなかった。だから少し欲求不満なわけだ。

途中、セリカの使い魔とのイベントが少しあった。

ペルルには懐かしがられて抱きつかれ、リ・クティナとは勅封の斜宮について話し合い、リタ・セミフとは……特に何もなかった。残念。

ただ、空の勇士からは最大限の警戒の視線を受けた。彼女と俺は初めて会うという事もあるし、俺は魔神だ。信じられないというのも納得できるのだが、空気が重くなってしまうって居心地が悪い。

ペルルが必要以上に、リ・クティナもそれなりに弁護してくれたが、あまり意味がない。結果的には、セリカが大丈夫だと言った事で落ち着いた。

そして最後の装置を設置し終わるとほぼ同時に、例の水精は完全に姿を現した。狂った水精を見たセリカからは、当然のことながら戦闘態勢に入る。水精はとても鈍重にのそのそと、しかし確実にこちらへ近づいて来る。

そして、ようやくと結界装置の中心へと迫り着く。その瞬間に結界が発動して、水精は身動きがとれなくなった。結界の圧力に耐え切れなかったようで分裂してしまつたが、感じる邪気は変わらない。

ノロノロと複数の水精らが蠢き、セリカは飛燕剣の態勢に入る。

そして技の射程内に入ったらしい狂った水精に、セリカが攻撃を仕掛ける。それに続くように、使い魔達が技や魔術を一斉に繰り出していく。

セリカ・シルフィルの、一直線状の敵を切り刻む高速剣【沙綾円舞剣】

パズモ・ネメシスの、天から無数の光弾を敵に浴びせる【爆裂光弾】

ペルルの、虚を突いて自ら回転攻撃を与える高速技【恐怖の逆ごころ】。

リタ・セミフの、地を這う衝撃波を周囲に放つ範囲攻撃【玄武の鎌撃】

ナベリウスの、闇世界へ引き込んで闇魔力の打撃を与える【テイルワンの闇界】

空の勇士の、一時的に竜に変身して純粹系のブレスを放つ【メルトブレス】

その全てが強大な威力を持っており、水精の周辺にいた魔物は即座に消え失せた。

唯一、ペルルの技の名前が頼りないような印象を受けるが、その実とんでもない威力

を誇っている。悔ると痛い目に合う。

「……中々やるな。流星は神殺しとその使い魔だ、とても言うべきか？」

「うわ、やっぱりみんな凄いな……よし！ 私も！」

「つて聞いてねえし……うわ、怖っ！」

みんなに続いて突っ込もうとするシャマーラだが、見ていて非常に怖い。何が怖いって、あの娘は普通の人間だ。その人間が、ひよいひよいと魔物の攻撃を避けながら水精へと向かっているのだ。傍から見ればいつ当たってしまうのかヒヤヒヤする。そういう意味で怖い。

そしてさつきセリカに協力するという約束をした事を思い出して、今にもシャマーラへ襲い掛かりそうな水精へ狙いを定める。

—アウエラの裁き—

高純粋の物質破壊球が、一体の狂った水精に命中し、巨大な穴が開いたその水精は地に伏した。それに気付いたらしいシャマーラが、驚いたような表情でこちらを見る。

視線を一瞬だけセリカの方へ向けて、もう一度シャマーラと目を合わせる。つまり速く向こうへ行けというメッセージを送ったわけだ。

それはしつかりと伝わったようで、笑顔で頭を下げて、またしても走って行った。なんと元気なやつだ。

ついでに、万が一でも水精に他の場所へ移動されないように、特殊な結界を張る。

俺以外では、外側と内側のどちらからだろうと通り抜けられぬ結界だ。これでこの水精共を作ったヴァリⅡエルフの残党がいたとしても邪魔されることはないし、水精も付近から遠くへは行けなくなった、という訳だ。

元は巨躯だったが結界によって小さく分離していた、狂った水精。その存在は、セリ力が今まさに剣を振り下ろそうとしているのが、最後の一体となっている。

一体一体の質がとて高く、分離していたせいで数も多かったので時間が掛かっていが、ようやく終わらせることができた。

……と、一同が安堵の態勢を見せた、その時だった。

「具現せよ、美しき力よー」

どこからともなく声が響き、同時に邪気が現れた。それも、水精を閉じ込めていた結界の中に。元々結界の内側にいたのか、あいつらは結界の中にいる。

それはともかく、邪気を発しているのは、今までに何回も見たあいつだ。相変わらず、今でもセリ力を追っているらしい。

ヤツは突然どこからともなく湧き出て、俺達が倒した水精の残骸を、上から覆うようにして食べ始めた。それを見ている大半の人物は、邪気に当てられて、恐怖で動きが止

まっってしまった。

「この結界は嬉しい誤算でした。おかげで、最低限の邪魔者で貴女を手に入れられる！」
アレと一緒にいる魔術師、アビルースの声がまたしても聞こえる。どうやら俺は今回、偶然にもあいつらの手助けをってしまったようだ。まあこれぐらいなら大丈夫だと思っただけ反省はそんなにしないけど。

どうやらアビルースは、欲望を餌にして操られているらしい。アレはセリカの居場所を探り当てることができ、彼は利用されているのだと、セリカと白銀公が話している。

生贄により大地の毒素を取り込んだ水精。それを、元はアイドスだった邪気の塊は餌として喰らった。これによって、水精が持つていた力や知識、知恵が加わってしまったことが予想できる。その証拠に、アレは言葉を発している。

「アア…体、を…おとおおん怨、怨…我に…合う…から、だ…」

『我に合う身体』だと？

…ああ、そうか。あいつはアイドスから発生した存在。そしてセリカは、基になったアイドスの神器…「ウツワ」を身体に宿している。しかも肉体自体は古神で、アイドスの姉神のものだ。これ以上ない、最上の身体ということか。

暗く穿った双眸が、セリカを捕らえた。セリカは魔術で抵抗するが、じわじわとソレは近づいていく。無数の邪悪な触手を絡み付け、取り込まんとさらに這い寄る。

「ははは！ やった！ やりました！ ついに女神を捕まえた！」

「セリカっ、セリカっ、セリカっ！ やだっ、どこ？ どこにいるのっ、セリカあつっ！」
アビルースの歓喜とシャマーラの悲鳴が、そこら中に響き渡る。

そんな時に俺が何をしていたのかというと、何も傍観していたわけではない。先ほど俺が作った結界のせいで、こちらに来ようとしていた誰かさんが来られなかつたらしい。だから、それを壊しているのだ。これは俺じゃないと壊せないから。

そして、パリンっ、という音が聞こえた。結界が割れた音だ。それを確認した、こちらに来ようとしていた誰かさん……ハイシエラは、セリカの下へと跳ぶ。

「目を覚ますのじゃ！ セリカ・シルフィール！」

ハイシエラが攻撃し、その衝撃でセリカは絡められていた腕から逃れた。そのままハイシエラに抱きしめられ、引きずり出される。その隙を狙ってアビルースが魔術を放とうとするも、共にいたアムドシアスが魔力を放ち、逆に弾き飛ばされた。

それを見て、俺はアムドシアスの所へと向かう。

「アムドシアス、お前がハイシエラを助けるとはな……かなり意外だ」

「勘違いするな、我はそやつを助けたのではない！ オメールの遺跡にて、神殺しには助けてもらった恩がある。その借りを返したまでのこと！ 我はもう手を貸さん！」

「ふっん」

「……御主、信じておらぬな？」

「いやいや、お前がそう言うならそうなんだろうさ。信じるよ」

「そうか、ならば良い」

うん、嘘だけど。どうせ、何かあつたらまた助けるんだろうな。

「ハイシエラ。おかげで助かった、感謝する」

「その言葉で、前にオメールの遺跡で我から逃げたことは許そう！　そして、見よ！　奴はまだあそこでのたうつておる！」

俺とアムドシアスが話しているその隣では、セリカとハイシエラがこういう会話をしていた。オメール遺跡でセリカと一度会つたらしいが、その際にセリカは逃げてしまつたらしい。それを今の謝罪の言葉で許す、と言っている。

そしてハイシエラが指を向けた先では、

「おおおお、怨、怨、おおお怨……」

「ああ、私の女神よ……どこへ行くのです……くつ、セリカ、貴女はひとつになるべき存在だ。どこにしようとも分かりませんからね！」

そんな声と共に、アレが嘆きの声を上げながら地中に染み込んでいった。アビルースもその後を追うように、捨て台詞を吐きながら転移魔術で消えていく。

そして俺は一人、“得体の知れないモノ”について考える。

「アイドスから生まれただけあって、その性質は古神。怒り、憎しみといった負の感情で力を増幅し、周囲に撒き散らして狂気を呼ぶモノ。そんな存在に一つだけ心当たりがあるが……。だがこれは推測、いや、憶測にすぎないが……」

ありえないと思うが、それしか思いつかなくなり、俺は思わずアレの名前を言い放つ。

「まさかアレは……古神【アンリ・マユ】か……？」

— 決戦前 —

「お前のことも思い出した。何度か助けてもらったな、ゼアノス」

目が覚めて仲間と何度か言葉を交わしたセリカが、俺を見てそう言った。

先程アレに取り込まれかけて、精神攻撃を受けた際に大体のことを思い出したらしい。

「それは重畳。無理矢理思い出させてやろうかと思ってもいたのだが、それ以上の刺激で思い出すとは皮肉だ。……全部思い出したのか？」

「いや、いくつか……姉さんがいたのは覚えてるが、名前までは……」

「そうか……」

悲しそうな声だが、その顔に感情はほとんど含まれていない。注意しなければわからないほどに、その顔には変化がない。感情までは戻らなかったようだ。

セリカの記憶の一部が戻った、その日の夕方。俺らのいる遺絃の溪谷にルナークリア

と、その御供らしい寡黙な騎士が来た。騎士の名は、ゾノ・ジというらしい。

「お久しぶりですね、魔神ゼアノス」

「ああ、久しぶりだな、聖女殿。デイストピア以来だ」

何本かの石柱で支えられている宮殿の内部で、俺達は再開の挨拶をする。

ふと周りを見渡せば、ここにはルナークリア、ハイシエラ、アムドシアス、空の勇士、白銀公、レクシユミ。そしてセリカとその使い魔達がいる。一つの場合に、他種族がここまで揃うのも珍しい。立場や種の違いを考えれば、殺し合いを始めてもおかしくない。

現に、空の勇士は俺の少し後ろから、監視しているが如く見てくる。未だに、俺を警戒しているらしい。まあそれが妥当だな。俺の事を知らないわけだし。

むしろ俺としては、ここにいる九割と知り合いだからと、問答無用で連れてこられたのだがそれが怖い。こいつら不用心すぎるだろ。

ちなみにシャマールは、泣き疲れて眠っている。セリカのとあることで、大泣きしてしまったのだ。

「ゼアノス、貴方に聞きたいことがあります。あの邪神のことを詳しく知りたいのですが、教えてはくれませんか？ 古神アイドスから生まれ出たという事までは調べがついていますが、それ以外で不明な点が多いのです」

「……現神のしもべであるお前が、何故俺に聞く？」

「かの凶腕が統治せしディストピアであれば知っていても不思議ではなく、そして貴方は今までの経緯から、其の国の重鎮だと推測できます。だからです」

その推測は、あながち間違つてはいない。確かに俺はディストピアの重鎮……つてか、王だからな。見れば、この場にいるセリカ以外もそう思っているようだし。

「それで、どうなのだ？ 御主は知っておるのか？」

隣にいるハイシエラが聞いてくる。気が付けば、周囲の目は全て俺に向けられていた。

秘密にする事でもないし、俺は話し出す。邪気をばらまく古神、アンリ・マユのことを。

「とは言っても、昔にそういう存在がいたから、この考えになっただけだ。あれが偽物つて訳ではないが、本物は既にいらない。三神戦争で対立神と共に消えた。もしかしたら、その残留思念がアイドスに憑りついたのかもしれないが」

「そうでしたか、そのような古神が……」

ルナークリアは目を閉じ、俺からセリカへと向き直つた。

「セリカ……貴方はどうしますか？」

「どうする、とは？ お前は、俺を殺しに来たのではないのか？」

「ええ、神殺しという存在を認めることは出来ない。でも……私は貴方、セリカ・シル

フィルの話をしているのよ。それにそれを言うならば、凶腕の存在は神殺し以上に認めることは出来ない」

そう言うのと、チラツと俺を見て、視線をセリカに戻す。

「マーズテリアの教義は絶対です。しかし、もののあり方はひとつではないの。私には私の、貴方には貴方の役目があります。」

「……例えばセリカが死を選んでも、か？」

「いいえ、セリカは決して死を選ばない。どれほど絶望の淵に落ちてても」

俺の質問にそう返すと、『そうでしょう？』と言いたげな目で、ルナ＝クリアはセリカと視線を合わせる。

「……そうだな、選べない。それがサティアとの、約束だ」

セリカとアストライアの、約束。それは、『生きて』という、アストライアの願い。

「古神アンリ・マユと決着をつける場所ですが——ゼアノス。もうひとつ、貴方に頼みたいことがあります。私ではなく、我が神から凶腕への、です。その仲介をお願いしたいのです」

「へえ、内容は？」

「マーズテリアが提案した決戦の場は、“狭間の宮殿”。その地への進入の許可です」

「ああ、そういうことか。なるほどな」

思わず、ニヤリと笑ってしまふ。狭間の宮殿。あそこは史実通りであるならば、現神の許可がなければ誰であろうと入れぬ場所。

だが俺は古神の友人達に、“狭間の魔神”と謂われてきた。だからその名に懸けて、能力をフルに活用し、俺の私有地にしたのだ。

つまり、あの地に行くには現神の許可ではなく、凶腕の許可を得るのが必須だ。

「神々の牢獄にして処刑の場。神と名づく者が入れれば、二度と出ることのできない宮殿。それは女神の身体を持つセリカも同じ。……神殺しと邪神を同時に“処刑”できるから、だな？」

「その考えがないとは言いません。しかし運が良ければ、邪神のみを討伐し、セリカは無事に戻るでしょう」

「分かっている。まったくもってマーズテリアらしい。許可については、まあそういう目的なら大丈夫だろう」

「そうですか……それでは、お願いします」

「お願いも何も、最初からOKだけどさ。“処刑”した後に、復元するのが面倒だけど。」



決戦についての話し合いをしたその後、俺は白銀公に呼ばれた。何だと思ってみれば、白銀公だけでなく、ルナークリアまでそこにいた。

「呼ばれたから来たが……何の用だ？」

「隠すことではないので、単刀直入に言います。貴方の種族についてです」

……あ、そういえばそんな話題、120年くらい前に聞かれた記憶がある。調べ終わったらすッキリして、今まで忘れてたよ。というか何でルナークリアまで？

「初めは直接聞こうと思っていたのですが、マーズテリア神殿も同じことを調査していたとのことでした」

だからいるわけね。別に不利になるわけじゃないからいいけどさ。

「で、マーズテリア神殿は分かったのか？」

「ええ。とは言えこれはあくまで、今までの貴方の戦闘方法や性格を纏めた結果の推測、いえ、憶測にすぎませんが……」

そこで一旦言葉を区切り、その憶測とやらを話し出した。

まず戦闘についてだが、多用している魔術は暗黒や純粹系統。そして転移魔術。近接でも遠距離でも、転移してからの攻撃などが非常に多い。とのこと。

性格に関しては一言で済まされた。曰く、快樂主義。自覚しているが、敢えて言わせて貰おう。ほっとけ。

というかよくそんなデータがあったな。と聞けば、過去にフレイシア湾で勇者と戦った際の資料らしい。ロコパウル司祭が纏めていたとか。そういえばいたな。

あの勇者は、『テルカ』とかいう家系だったはずだが……また会う気がする。その時が楽しみだ。

もちろんそれだけではなく、俺を偶然見かけた人の感想なども加え、共通点を合わせて結果を導き出したらしい。答に関しては憶測の域を出ないらしいが、当たっている気がする。

「結構頑張ってるんだな、神殿の連中。まあいい、それで答えは？」

「はい。貴方は……」歪魔、ではないのですか？」

歪魔。それは上級悪魔よりもさらに上の、貴族悪魔。下位の歪魔ですら上級悪魔と同等の力を持ち、上位となれば神格者並みの力を有している。そしてそれは、

「……大正解」

俺の種族でもある。ちなみに俺は、『手』を使って調べた。だから一瞬で分かったの
で、必死に考えた神殿にはお疲れ様、としか言いようがない。いやマジですごいと思っ
た。自力でそこまでやるってどんだけだよ。

「しっかし、何でマーズテリア神殿がわざわざ俺のことを調べたんだ？」

「……それは、半分は白銀公殿と同じ理由です。もう半分は光の神殿の全てが、貴方が

デイストピアの二番目の脅威だと認識しているからです」

「……………あく、あれか。動きすぎて危険視されたのか。現神は俺が凶腕だと知っているけど、神殿の奴らは知らない。そして現神は教えることができない。」

「だから情報は少しでもあつた方がいいもんな、バカした。でも後悔はしない。」

「そういうことか。白銀公、悪いが歪魔は、他の魔族よりも己の欲望に忠実だ。だから、お前らに害を与えないとは言い切れん」

「どうやら、そのようですね。非常に残念でなりません」

「だが歪魔だからこそ、俺は昔から転移魔術が得意だったのかもしれない。こんな性格になつたのも、よくよく考えれば魔神になつてからだし。」

「それで、だ。ルナ＝クリア、一つ取引をしないか？」

「取引……………ですか？」

「そう。今言つた通り、歪魔は欲望に忠実だ。だが他の魔族と同じ様に、自分より強い者の命令には従う。もちろん従うのは闇の陣営に、ほとんど限定されるがな」

「……………」

「俺が何を言いたいのかわからないらしく、じつと黙っている。」

「そこで、デイストピアに歪魔を集めようと思つている。場合によっては魔神級に強いのもいるから、人間の国の危機も減ってくる。どうだ、結構いい案だろ？」

「確かに、それによって安全にはなりますが……そちらが出す要求は？」

「簡単な事だ。集める連中も、いきなり住む場所を変えろと言っても困るだろう。だから場合によっては、『土地ごとデイストピアに移動させる』というものだ。もちろん、人間が住んでいゝる所は移動させない。どうだ？」

「なっ!? ……そのようなことが、本当にできると?」

「一応できるぞ。俺の転移魔術と凶腕の術。そして現地の歪魔の総力を使えばな」

「……」

ルナークリアが考える中で、白銀公は口を挟まない。俺が言っていることを聞いてはいたが、彼女は基本的には外に干渉しないエルフだ。何か思うことはあっても、口に出すことはしないだろう。

それと、その歪魔が住んでいる地だが、実は既に目星はいくつかある。デイストピアに転移するのに協力してくれるように頼んであるし、転移のための術式は展開済み。後は少量の魔力を込めれば、デイストピアに転移される。

なので、現神が領けば万事解決だ。用意はしていたのに、すっかり忘れてたよ。

「本当に、人が住んでいる土地には手を出さないのでですか?」

「無論だ。元々人間が住んでいた場所を襲撃し、誰もいなくなつて無人にしてから移動させる、という事も絶対にしない。現神と凶腕の約束に反するしな」

そう。人間が、『住んでいる』場所はね。

「私だけでは、さすがに答は出せません。一度神殿へ戻ってから、各神殿と神々の意思を聞いておきます」

「こちらはそれで構わない。明日はアンリ・マユとの決戦の日だ。お前も休んでおけ」
一度後ろを振り向き、二人と目を合わせ、すぐに目線を外して外に出る。

夜の暗い世界を見てアンリ・マユを思い出す。そこから派生して、アイドスとまた会えるのはいつだろうと、柄にもなく、そんなことを思ってしまった。

そしてそんな日の翌日、セリカに訪れるものがあつた。それは、シャマラーとの別れ。記憶を取り戻し、神との戦いを控えるセリカ。そんなやつと、一般人……とは言わないかもしれないが、ただの人間であるシャマラー。彼女は渋つたが、セリカの説得により、最終的には別離することになった。

涙を流しながら、名残惜しそうにセリカを見つめる。だがそれでも踵を返し、セリカと以前に関わつたらしいドワーフと共に去つた。

俺は知っている。あいつらの絆は、ここで途切れたわけではないことを。500年もしない内に、魂が再び巡り合うことを。

—狭間の宮殿・起—

アンリ・マユを狭間の宮殿へ向かわせるために、宮殿を中心とした三カ所に結界を成す。その役目を引き受けたのが、白銀公、ルナークリア、レクシユミの三人だ。

それぞれがブリイー、ル山脈、腐海の地、ニース紅河へ行き、アンリ・マユを閉じ込める結界を形成させたのだ。

ハイシエラとセリカは、紅き月神殿へ決闘をしに行った。アンリ・マユを倒すのなら、より強い者が女神の身体を使う方が良いという、ハイシエラの提案によって。

そして俺は、集合地点である狭間の宮殿の内部にいた。俺の使い魔達と共に。

それはそうと、セリカの使い魔となっているナベリウスに、デイストピアへ来ないかと口説いてみたら見事に振られた。

『興味……ない……』だとさ。いや俺もロリは興味ないけど。

ソロモンの魔神。あいつらは魔神の中でも古神に該当される程で、非常に強い。

だからすべて仲間にしたかったんだが……二桁突破する前に失敗した。

——洗脳ルートが解禁されました。ただしセリカが敵になります。——
ん？　なんか文字が頭の中を通り過ぎた気がしたんだけど……気のせいだな、気のせい。
うん、絶対にそうだ。

あ、でもアムドシアスは仲間になった。

かつてハイシエラがアストライアの身体を使っていた時に、アムドシアスはハイシエラに負けたことがある。その時のあいつの世話役が俺だった訳だが、その役目を受ける際に条件を出していた。それが、アムドシアスを俺に譲ること。

優秀な上級魔族の配下を複数体渡すことが交換条件だったが、今のあいつは国を持つていないのであやふやになり、貰うだけになった。

アムドシアス自身も、芸術の分からないハイシエラよりも俺の方が良いと言ったので、俺の使い魔になることに遺憾はなく、事はスムーズに進んだ。

ちなみに他にいる俺の使い魔は、まずハルフアスにアスタロト。更に、つい最近仲間になった魔神ロノウエ。もちろんロノウエもソロモンの魔神だ。最近まではぐれ魔神だったのだが、デリストピアへ入国してきたらしい。

ラテンニールも俺の使い魔だが、今は召喚していない。

更にこの使い魔の中でも、俺の正体を知らないのはアムドシアスだけだ。

理由？　口が軽そうだったから、と言う他ないな。それにアムドシアスはともかく、俺の正体を教えてもしないと、他の連中は俺に仕えないだろうし。

「……全員石に戻れ。どうやら来たようだ」

ここでアムドシアス以外の皆を召喚石に戻し、近づいて来る気配を待つ。

「もう、来ていたのですね」

「ルナークリアか。既に扉は開かれている。だが、解放し続けるには神の力が必要だ。それについてはお前に任せる」

「確かに、任せました」

ここに、狭間の宮殿は俺のものだ。だから出入りも自由なのだが、それはあくまで俺限定の話だ。他の者も入るのならば、俺が中に入っている間にも扉を開き続けてもらわなければ、俺以外が出られなくなる。

いや、出られるには出られるのだが、そうすると俺の正体がばれることになる。それはまだ望んでいない。

ルナークリアと共に、騎士であるゾノ・ジも来る。ルナークリアは祈るように目を閉じ、綺麗な姿勢で起立している。祈るように、というより、実際に祈っているのだろう。それからしばらくして、セリカらが現れた。やはり、ハイシエラにはちゃんと勝てたようだ。セリカの手にある剣から、膨大な魔力が発せられている。どうやら剣に封じら

れているらしい。

「セリカか。どうやら勝つたらしいな。……その魔剣、まさかハイシエラか？」

「ああ、そうだ」

（今思えば、セリカと戦う前にゼアノスとの決着をつけておけばよかつただの）

ん？ 今の、ハイシエラの心話か？ セリカと繋がりがああるわけじゃないから、普通は聞こえないはずなんだが……相性でもいいのか？ まあいい、聞こえない振りでもしておこう。あいつの相手をすると延々と続きそうだし。

「ここから先は、現神ですら恐れる処刑場と言つても過言ではない。それ相応の覚悟はできているか？」

「ああ。どうであろうと、俺は進む」

俺の問いに、セリカは少しも迷わず即答した。彼の使い魔達や、白銀公やレクシユミに視線を向けても、同じような答が返ってくるであろう顔をしていた。

「我がマーズテリアはアンリ・マユを倒すという一点に対し、神殺しである貴方の存在をお認めになった。魔神ゼアノスが言つた通り、この先は神の処刑台です。踏み込めば、二度と戻つてこられない」

「分かつている。だが聖女、貴方はそれでいいのか？ 俺が戻ってきたとしたら、何れ俺達は戦うことになるのではないか？」

「ええ、きつと……敵になるでしょう。それでも今は貴方の手で、邪神アンリ・マユとの決着をつけなければなりません」

アンリ・マユ。あいつは今でもセリカの身体を求め、彷徨っている。かつて使っていたアイドスの身体に似ている、アストラライアの身体を。更には言えばセリカの魂はアイドスの神核と融合してしまっている。それも原因の一つだろう。

セリカとルナークリアの会話が終わり、ルナークリアが背を向け、俺の方を向いた。「ではこれより、マーズテリアの御力で門を開放し続けます」

「了解だ。後は頼むぞ」

俺は『許可』を出す。凶腕として、狭間の宮殿に立ち入ることの許可を。

そしてマーズテリアが、門の開閉をすることを許すという事の許可を。

マーズテリアの騎士であるゾノ・ジがルナークリアに頼み込んだのは、丁度門が完全に開き切った時だった。

「聖女様、恐れながら、お願いがございます。神殺しの終始を我がマーズテリアにお伝えしたく、同行することをお許し頂きたく思います」

つまり、神殺しがこの世界に戻ることができれば、如何なる理由で存在するかを見定めたい。ゾノ・ジはそう言っているのだ。

「彼はマーズテリアの騎士。共に戦うことは出来ません。ですが貴方が許すならば

……

「……そこに存在する理由が生まれる」

ルナークリアの笑みに、セリカは頷き返した。

そしてルナークリアが神聖術を発動する。これにより、ルナークリアとゾノ・ジの視覚と聴覚が繋がった。

「ゾノ・ジ。貴方の命、私が貰い受けました」

「御意」

その言葉を最後に、俺達は前へ歩き始めた。ルナークリアの横を通り、宮殿の内部へと進入するために、長い橋を渡って。

宮殿内部は、漆黒の闇に包まれていた。だがセリカの女神、エルフの神、レクシユミに宿っている水の巫女の力によって、光が走る。

永い眠りについていた宮殿が、目を覚ました。

道は細くて進み難いが、真下は神の墓場。少しでも踏み外せば、神の加護が一切効かない場所へと、落ちることになる。

進んでいくと、迷路のようにジグザグとした道に辿り着いた。特殊な門が構えてあり、そこを通過する度に背景と構造が変化する。

白い背景と黒い背景の2つに変わるのだが、同時に迷宮の構造も変わる。しつかり考

えて進まなければ、何度も同じ道を往復するハメになる。

(まったく、一々面倒だの。セリカ、ゼアノスの得意な転移術で、一気に奥に進めぬのか聞いてみよ)

「ゼアノス。お前の得意な転移で奥へ行くことはできないのか？」

「そういえば、貴方は歪魔でしたね。歪魔は空間の『歪み』を利用して転移すると聞きましたが、どうなのですか？ この宮殿ならば、歪みは多くあると思うのですが」

ハイシエラと白銀公、君ら良い点を突くね。

確かにそれで行くことはできる。その『歪み』も、ここは現世と異界を繋いでいる特殊な場所だけあって、かなり多い。

だけど……

「無理だな。いや、一応はできるが、歪みが多すぎる。足場のない空間に転移しても良いのなら送ってやるが、どうする？」

「勿論嘘だ。歪みが多すぎると転移しにくいのが、下級歪魔ならともかく、俺なら問題ない。」

でも、今このタイミングで奥まで転移したら『あいつら』と会えない。あいつらとは、このまま行けば途中のフロアで会うことになるようだし。

「そうか。ならば遠慮しておく」

「そうしましょう」

(まったく、ここぞという時に使えん奴だの)

黙れハイシエラ。その剣の真中をへし折るぞ。

この宮殿はアンリ・マユを確実に処刑するため、後々神の墓場へ落とす予定だ。だからこそ、この宮殿と現世を繋いでいる橋を壊す必要がある。

現世に帰る時は崩れる橋を急いで渡らなければいけないが、こればかりは仕方ない。

その橋は三つの柱に支えられているので、ルナークリアの案内で三カ所を回るためにいくつかの道を渡り、邪神からの精神攻撃を受けながらも、道を遮る数々の魔物と戦い抜いて本殿への扉が開いた矢先。奴は現れた。

「み、見つけた……私の、私が捜していた女神だああ……」

邪神に魅入られた腐海の大魔術師。かつて俺を召喚した、ブレード・カツサレの子孫の成れの果て、アビルス・カツサレだ。というかブレードに子供なんかいたか？

ちなみに先程『あいつら』と言ったが、その内の一人だ。

ペルルが必死に話し掛けているが、アビルースは使い魔であったはずの彼女のことを『鳥もどき』と呼び、相手になろうとすらしない。セリカのことでも頭が一杯の様だ。

「邪神の影響を受けたためなのか、それともセリカの……女神の肉体が原因なのかね。こんなにも歪んでいるとは」

（ゼアノスの言葉は尤もだが、存外、これがあ奴の本質だったのかもしれない。セリカ、御主が気に病むことではないぞ）

ハイシエラの励ましとも取れる言葉にセリカは軽く反応し、ペルルに話しかける。

「腐海の大魔術師……ペルル、お前の主だった者だな」

「そうだよ、思い出した!? 僕たちフノー口で一緒に暮らしていたんだよ」

「くっ……断片的な記憶はあるが、やはり名や顔は、思い出せない……」

「例えセリカと過去に繋がりがあったのだとしても、奴がインヴェディアやリエンスの水源で行ったことは……帳消しにすることなどできぬ!」

セリカが無くした記憶を思い出そうとしている中、レクシユミはそう言つて剣を構える。

それを見たからなのか、アビルースも戦闘態勢を取つてきた。

それにしても、アビルースがインヴェディアやリエンスの水源でやった事……

ああ。あの狂った水精の所為で、川の水が汚染された事か。

「抵抗するか……抵抗するんですね！ いいでしょう、貴女の世界を覆すほどの力を、私のものにして見せます！ 何百年だろうと追い続け、この私のものになる者。いいですよ……力づくでその女神の身体、奪ってあげましょう！」

その言葉と同時にまず召喚されたのは、戦士の死霊魂や魂の狩人という高位の死霊。他にも睡魔族を統率するリリエールや、上級悪魔までいる。

しかもその上級悪魔は、見た目はグレートターデーモンに近いが普通のそれではなかった。呪われた哭離生物に寄生されていて、遥かにパワーアップしている。名前をつけるならエクスグレーター、つてところか。

主人であるはずのアビルスよりも存在感があり、実力が高い。

哭離生物というのは、呪われている異世界に存在する生物だ。

寄生されると莫大な力を得るが、理性を失ったり属性が変化したりする。武器に付属されることもあるが、大概が呪われた装備品になる。だがその分、性能は抜群だ。

「さて、俺はあの図体がデカイ魔族と戦っておく。何か異質だし、セリカはアビルスと戦わせた方がいいだろうからな」

「それで大丈夫なのですか？ 貴方が負けるとは思えませんが、1人では……」

「大丈夫だ、問題ない。異質な上級悪魔であろうとも所詮は魔族。魔神の敵ではない」
人、それを受けフラグと言う。

「それに有象無象より、こっちの方が面白そうだからな」

「……やはり、貴方も魔神なのですね。戦いに楽しみを覚える魔神ハイシエラと、今の貴方はよく似ています」

白銀公の言葉に、失敬なと思いつつも笑い返し、その悪魔を見る。

さて、先ほどの負けフラグを回収しないように頑張ろうか！

—狭間の宮殿・承—

俺の相手は、哭離生物に寄生された異質な上級悪魔。上級悪魔の中でも上位に達するであろうその魔力は、下級の魔神に匹敵している。凶腕の力を封印している今では、少し苦戦するかもしれないが……油断はせずに戦おう。

と、頭の片隅で考えてはいたのだが……。

戦闘開始から、一分以上五分未満。

「悲しいけど、これって戦争……ですらないな」

現実はやはり強者に甘く、弱者に厳しいようです。種族の壁は大きかったらしい。

特に何も活躍することは無く、消えてしまった。俺が負ける要素が一つもなかった事に、ちよつと罪悪感を覚える。折角あんなに強くなったのになあ。

……配下にすればよかったって？ 俺、哭離生物に寄生された魔物には興味ないんだ。

純粹系統の魔術は全くと言っていいほど効かなかつたけど、殴り合つてたら勝った。体格はあちらの方がデカいけど、魔神がそんな差で負けるわけもなかった。

アビルースに目を向けてみれば、負ける直前だった。相手が悪すぎる。

女神の身体を持つセリカに、アムドシアスも今はあちらにいるので、ソロモンの魔神が二柱。それだけでも充分な戦力だというのに、竜族の戦士にエルフの長までいるのだ。それに加えてセリカの他の使い魔達も、一人一人の質が高い。俺ですら、今の状態では敵にしたくない。小国なら簡単に落とせるんじゃないか？

「何故だ……何故、私のものにならないのです」

アビルースは叫ぶ。国を創り支配する神に成ることが出来るのに、セリカはその力を使わず、人目を忍んで逃げ回る。だからこそ私が使うのだ、と。

だがそれに対するように、耳を貸す必要はないとハイシエラが言い放つ。

（国が欲しければ自ら興せばよからう。女神の身体が必要ならば、正々堂々戦って奪う。負ければ命を明け渡す。その覚悟無きまま他の力を利用し逃亡を繰り返した者に、情けは無用じゃ）

何とも厳しいお言葉だ。今あいつが言ったことは、全て自分がやってきたことでもあるから説得力がある。だがそれは人間にとつては難しすぎることばかりだ。

……魔神にとつても簡単という訳ではないが。討伐される可能性がある分、難易度は同じくらいか？

セリカはアビルースに問う。お前の目的は、女神の肉体だけなのか、と。そして奴は

それに肯定する。それ以外に何があるのだと。

だが今度は、それに否定する者がいた。ペルルだ。

「違うよ……お師範様の本当の願い。神の力や、平和な国が欲しかったのも嘘じゃない……けど……でも本当は、セリカに振り向いてほしかったんだ。セリカと一緒に、フノー口で魔術の研究をしながら……暮らしたかっただけなんだ。そうなんですよ？」

「ずつとセリカと一緒にいたかった。その気持ちがいっしょか妄執に変わり、気持ちを利用され、ここまでになってしまった。ペルルの言葉を聞けば、そういう事なのだろう。」

しかしその心からの声も、狂った魔術師にはもはや届かなかった。

「ペルル、もういい。」

セリカが、一歩近づく。この身体はサティアの願いと共に預かった、大切な身体。だから譲り渡すことは出来ない。そう言いながら。

最早、共に生きることができない。だから、死という終わりを与える。

剣を手にしたセリカが一歩進めば、しわがれた老魔術師は一歩後ずさる。

だがその直ぐ後ろは……。

「ひいい、あああ、ああああああ……」

宮殿の、足場のない亀裂だ。

俺の生まれた場所であり、一部の例外を除いた“神”と名の付く者の力が消える場所

へと、呻き声を上げながら落ちていった。

「異界の狭間に落ちて行ったのか？」

「ええ……奈落の底へと……」

レクシユミと白銀公が、その穴を見ながら話している。真下にある神の墓場は、異界の狭間とも言われる。落ちた者は今までに帰ってきたことがない、誰も知らぬ異界の奈落の亀裂。だからこそ、そう呼ばれてもいる。

「速く行こう。今はあいつの生死を確認しているほど暇じゃない」

「その魔神の言う通りだ。我々がこの地を彷徨っている間、アンリ・マユは宮殿の深い場所までにまで入り込んでいる」

俺が言った後にルナークリアからの知らせがあったのか、ゾノ・ジがそう続けた。その言葉を聞き、皆は先へと進み始める。

「……お師範……様……さようなら……」

ペルルは俯き、変わってしまったかつての主人へ別れを告げる。

だが直ぐに目に溜まった涙を羽根で拭い、セリカの後ろへと羽ばたいた。まだ傷付いているだろうに、強い娘だ。

「アムドシアス、一つ聞きたいことがある。ソロモンが死んだとき、お前らはペルルのようになつたか？」

「さて、な。嘆き悲しんだ奴がおれば、泣き喚いていた輩もいた。我を除けば71も数がいた故に全ての反応を覚えているわけではないが……皆、悲しんでいたことは事実だ」
「……それはお前もか？」

「なっ!!? そ、そんな訳がないだろう!!」

「そっか」

その反応じゃバレバレだが……黙っておこう。絶対に認めないだろうし。だけど、ということのはあのパイモンや、ひたすら無関心なナベリウスも悲しんだのかね。

アムドシアスの話ではパイモンとナベリウスの事は知らないが、泣きはしなかったものの、最も悲しそうだったのはハアゲンティという奴らしい。どこにいるのか知らないが、いつかそいつにも会ってみたいものだ。

「危ない、避けるー」

考え事をしていると、マーズテリアの騎士、ゾノ・ジが叫んだ。突如響いた声にしかし誰もが、もちろん俺も思考を停止して反応した。

何が、すらも考えず、一瞬すら経たない内に、それぞれが咄嗟に左右のどちらかに動く。もちろん俺も、すぐさま大きく横へ跳躍した。

それと同時に振り下ろされるのは、腐蝕した腕。

さつきまで邪気を感じていたのに……違うことを考えていたからか、潜んでいたの

か、もしくは忽然と出てきたのかすら分からなかった。

「ちつ、不覚を取った。ゾノ・ジ、よく気づいたな」

「いや、こいつに気配はない。聖女様の御力を受け、マーズテリアの知らせを受けた」

よく見れば、こいつには気配というものが無い。気付かなかったのも道理かもしれないが、マーズテリアのおかげで助かるとは……一つの貸しにしておこう。

「久しぶりだね……セリカ。それに、ゼアノスも」

腐蝕した腕を振り下ろしてきた存在は無形だったが、変化している。

その姿は昔に出会い、話をした者と非常に似通っている。まあ、それも当たり前だが。「あやつのこと、御主らは何か知っておるのか？」

奴の言葉を聞いた空の勇士が、『御主ら』という単語を使いつつ、俺のみに聞いてくる。一部分が戻ったとはいえ、セリカの記憶が当てにならない事が分かっているからだろう。

「ああ、知っている。……久しぶりだな、セリカ・シルファイル」

「ふふ、僕は……セリカじゃないよ？」

俺達の会話に、一同が混乱する。まあこいつを細かく説明するならば、『神殺しの記憶と感情』という、『セリカ・シルファイルの断片』だ。それが、アンリ・マユの力によって、具現化した存在。

「いいや。自分でどう思っているのか知らないが、お前は『セリカ・シルファイル』だよ。あの日、セリカが置き忘れた人間の部分だ」

「ツ、そうか、セリカの記憶と感情が、形となって蘇ったか!? こやつも邪神と同様に精神攻撃を仕掛けてくるぞ。警戒せよ!」

白銀公と並んで比較的多い知識を持つ空の勇士がこいつの正体に気付き、警告する。

彼女の言う通り、人間とあまり変わらないその身体からは精神を揺さぶる波動が伝わってくる。特に、セリカを指して。

この変異体の目的は、セリカと一つにな戻ること。

『神殺しセリカ・シルファイル』には、記憶を含めた『過去』がない。

『変異体セリカ・シルファイル』には、その反対で『未来』がない。

「ねえ、セリカ。酷いよ……ダルノスを殺したこと、カヤが死んだこと。忘れちゃったの? 嫌な事を全部僕に押し付けて……哀しい事を忘れて……」

だから、完全な『セリカ・シルファイル』になろうとしている。

セリカはまともに精神攻撃を喰らってしまったのか、ゆつくりと変異体に近づいてゆく。

「覚めろ」

ブンツ! と、双剣の片割れをセリカの進行方向に振り下ろす。

「くっ！……俺は……」

ついでに放った殺気で、セリカは我に返った。というか剣を振った意味が無い気がする。

ただ殺気を放つショック療法だけでよかったかもしれない。

周りを見ると、意外にもゾノ・ジは精神攻撃に耐えていた。というよりも冷や汗があるだけで、一番平気そうな顔をしている。聖女とマーズテリアの加護のおかげか？

それ以外の者は、それぞれが苦悶の表情を浮かべている。だがそれでも、変異体に立ち向かう姿勢を見せている。

「……みんな」

皆の準備ができ、戦意が高まった途端に、セリカがポツリと呟く。

「どうかしたか？」

「コレは……もう一人の俺だ。あの時に俺が、置き捨ててしまったもの。だから……頼む、俺に力を貸してくれ」

そう、セリカは決意を込めた言葉を言い放った。

「言われるまでもない、当たり前前だ」

俺の言葉に同意するように、セリカの使い魔もそれぞれの思いを口に出す。

何を今更……などと言っている奴もいた。

「先程の精神攻撃は変異体に同調した者からきており、この変異体は操られているだけだ。倒してしまえば、同調した意識も手を出せない」

ルナークリアからの言葉なのか、ゾノ・ジが助言する。

「そうか、ならばこの変異体を倒す」

セリカのこの言葉が引き金となったのか、皆が一斉に動き始めた。

片手剣で、槍で、双剣で、鉤爪で、弓矢で、連接剣で、魔術で。

先程のアビルス以上の邪気を放つ存在に、様々な攻撃が向かって行く。

だが、それらが変異体に届くことは無かった。

「貴様ら……どういうつもりじゃ！」

なぜなら俺とアムドシアスが彼らの攻撃に対して攻撃し、相殺しきれなかった攻撃を、またしても俺達はその身で受けたからだ。

だが勘違いしないでほしいのは、これは俺にとっても想定外の出来事だという事だ。

俺も確かに攻撃したが、それは変異体に向かった。なのに、何で俺達はその変異体を守るようにして、セリカ達と相対しているのか。

「ふふ、ねえ、ゼアノス……これに見覚えはない？」

すつ、と変異体が見せてきたのは……影詠の腕輪か！

セリカがまだ人間だった頃、俺が渡した召喚効果のある腕輪だ。

※【星月が舞う夜の出来事】を参照。

そう言えば回収してなかった気がするが……うん、してないな。

「そうか……お前が持つていても不思議ではない、か」

そしてアムドシアスは俺の使い魔だから、こつち側にいるのだろう。他の使い魔達を出さないで置いてよかった。魔神がこれ以上増えたら、いくらセリカでも危なすぎる。

「つたく……セリカ、こいつの持つてる腕輪が見えるか？ それを壊せ。あれはお前がまだ人間だった頃に俺が渡した物で、一時的に俺を召喚・使役できるようにする。壊せば問題ないが……こればかりは素直に謝る。すまん」

忘れてた事もあり、この事は完全に俺に非があるので、アムドシアスを含めた皆に頭を下げる。しかし、頭を上げた時の俺の顔は恐らく……笑っていただろう。

「とはいえ、だ。ここまで楽しそうな戦いは、滅多にないだろう。だから相手がお前らだとしても……本気でいくぞ」

さすがに凶腕状態の本気ではないが、魔神ゼアノスとしての本気。

いざとなったら俺が変異体を攻撃すればいいのだが、あいつは今の俺の主になっているので、それだと俺の身体に激痛が走り、最悪死ぬ。たぶん蘇ることは可能だろうが、そんな愚は犯したくない。

状態を理解したのか、各々が戦闘態勢をとる。

俺と相對するのは、白銀公、レクシユミ、リタ、ペルル、リ・クティナ、空の勇士。アムドシアスには、ナベリウスのみ。

肝心の変異体には、セリカとパズモだ。

「俺だけ数が多い気がするが、ウォーミングアップ……あー、邪神との本番前の肩慣らしで怪我するなよ？」

「ふん、その言葉、そのまま御主に返してやろう。儂だけならばともかく、勢いが過ぎれば……怪我どころではなく、死ぬぞ？」

俺と空の勇士が、互いに言葉で牽制し合う。

「……本気で……行く……」

「全く、我は乗り気ではないのだが……こうなってしまうては致し方なし、か。……所で、何故そんなにもやる気に満ちているのだ？」

煩い魔神（ナベリウスの一癖嫌いなタイプ）を本気で倒す心算で構える一方で、もう片方は困惑しながらも構える。

「ふふ、行くよ？」

「こちらの台詞だ！」

変異体と神殺し。両方のセリカが剣を振るい合い、高い金属音の音が響く。

俺も既に駆け出しており、相對した敵全体に向けて……

「そら、受けてみる」

—— 紅燐劍 ——

ブウン！ と、劍を振るう。それに対するように、リタとレクシユミが同時に技を放ってくる。

「魔槍のリタ、参ります！」

「はあっ！」

—— 玄武の鎌撃 ——

彼女らの技は、俺が使った技よりも威力が高い。あちらは一撃の重さを重視し、こちらは複数の斬撃を劍圧にのせた、セリカも扱う飛燕劍だ。見様見真似だったが、最近になってほとんど覚えた。ハイシエラも使ってたし、50年も見れば覚える。

話しを戻すが、そんな重い技、しかもそれが二つもあつては、俺の分が悪い。もしも、俺が普通の人間だったのなら。だが残念、俺は魔神だ。つまり、

「つぐう……」

「流石、ですな……」

素の力が強い俺が勝つ。まあ当然の結果だ。二人は圧に負けて吹き飛んだ。……と、そこで何を思ったのか、突然後ろにジャンプする二人。

リタは霊体だからジャンプしないだろうって？ 比喩表現だから気にしたら負けだ。

「竜骨砕きいいいい!!」

「超ねこぱんち!!」

「接続剣伸長!!」

鉤爪を装備している空の勇士とペルル、そして接続剣を振るうり・クティナが、奥から突っ込んできた。しかもよく見ると、強化魔術が掛かっている。奥にいる白銀公の仕業だろう。しかしペルルの動きが若干遅いのは何故だろうか。

ペルルはともかく、空の勇士の技は受けたらヤバイ。彼女の使う技の中に「延髄砕き」という技があるのだが、その上位技がこの「竜骨砕き」なのだ。

それに引き替え、ペルルの「超ねこぱんち」。これは博打技だ。低確率で極大の威力を発揮するが、そうでない場合はプテット……つまり最弱の魔物ですら倒せない。

「接続剣伸長」は、名の通り接続剣を伸長させる技。一直線にしか伸びないので、反応できれば簡単に避けられる。

という事なので、取り敢えず双剣でガードして空の勇士の拳を止める。そしてペルルを迎え撃とうするが、後退したはずのレクシユミとリタが左右からそれぞれの武器で攻撃してきたので、思わず避ける。結果的には接続剣も避けられた。

……そして、背後から寒気を感じた。

「——っ!! 沙綾円舞剣!」

直線状に走る斬撃を、迷わず背後へ放つ。そこには予想外な事に、ペルルがいた。変わらぬ態勢のまま、俺に向かって突進している最中だ。

そして打撃と斬撃はぶつかり、相殺し合って衝撃波を生み出した。その衝撃波にペルルが弾かれたのが見える。

「うわわっ!」

「はあ、運が良いのか悪いのか……」

無意識に溜め息が出た。俺は今の一撃には、かなりの力を入れた。それこそ、上級悪魔程度なら屠れるほどに。そしてそれと相殺した、ペルルの技。つまり今回は低確率の『当たり』を見事に引いた訳だ。

俺に当たらなくて良かった、と安心すればいいのか。それとも俺との戦いで『当たり』を引くとは運が悪い、と落ち込めばいいのか……まあ、前者を選ぶが。

だが、面白かった。これなら、もう少し本気を出してもいいかもしれない。一時的とはいえ今の仲間を案じすぎて、本気と言っておきながら本気を出せていなかった。

……そのことは、心の中で謝るとしよう。

「さて、いくか……」

雰囲気丸つきり変わった俺に警戒する彼女ら。だがそれではあまりにも……

「遅すぎないぞ!」

上空から俺を見下ろしている、空の勇士——もう面倒だから勇士でいいか——に向かつて跳躍。かなり高い位置にいるが問題なく、一瞬で辿り着き、剣を振り下ろす。

「なんだとっ!? くっ!」

咄嗟に腕を交差してガードしてくるが、それは想定内。飛燕剣の基本技の【身妖舞】でその交差している腕をほどく。ガードが解かれて、彼女は無防備。俺はそのまま、

「ふんっ!」

「ぐあー!」

腹を蹴りつけた。空中とはいえ、この体勢だと踏みつけに近い。

呻き声を漏らしていることは気にせず、足元に向かって落ちることを利用して連続で、両足で交互に蹴りつける。

「そらそらそらそらそらそら!! そっ……らあああああつ!!!」

何度も何度も蹴り落とし、足元にストレスの場所で彼女の身体を両足で同時に踏んで、最後にジャンプ。両足での踏み込みによる蹴りは、竜族でもきつい筈だ。

「空の勇士殿!!」

「だ、大丈夫!?!」

「か、はっ! く……皆の者、気を付けよ。こやつ、かつて儂と戦いし魔神ハイシエラ以上強いぞ」

レクシユミとペルルの肩を借りて、空の勇士は何とか立てる、という状態だ。

白銀公は、今の俺によって下がってしまった戦意を上げる魔術を。リ・クティナは勇士を回復させるため、治癒魔術を使っている。

「有名な竜族の戦士にそこまで言われるとは……嬉しい限りだ」

「私達が今まで見てきた、散々ふざけていた姿は演技か……この道化め」

真面目な顔で言うと、満身創痍といった様子の勇士を治癒しているリ・クティナが、そう返してきた。勇士が瞬間回復等を使えればもつと早く治るだろうが、治癒魔術はそこまで万能ではない。いや、完治する魔術は一応あるが、彼女は回復がメインではないので、まだ覚えてないのだろう。

「演技ではないな。その時も今も、いかなる時も俺は演技などしたことがない」

「なるほど……いかにも歪魔、ということですか……」

白銀公の呟きに、他の一同は疑問の表情を向ける。あまり有名ではないからな、歪魔は。

「ただ白銀公は、歪魔のことをよく調べていたようだ。」

「まあ演技はしないと云っても、凶腕の時は別だけだな。」

「まあ、お喋りはこれくらいにして……行くぞ?」

「そう言い、剣を振って今回お馴染みの形、飛燕剣を構える。その飛燕剣の中でも複合

高速剣とも呼ばれる、身妖舞。更にその身妖舞の高等技に、複合高速剣最大の奥義と言われる技が存在する。その名も……

— 枢孔身妖舞 —

何度も剣を振るうために命中精度の高い高速剣の、そのまた奥義。

誰が、どうやって受け止める？

—狭間の宮殿・転—

【枢孔身妖舞】の構えから技を放つ瞬間、パリン、という音が聞こえた。

非常に小さく、俺以外は気が付いていないようだったが、俺は気付いた。その音の原因を理解して技を出すのを止めようとするが、振り下ろす直前で、もう間に合わない。

気合で止める、という考えも浮かぶが、無論却下。ならどうするか。

「ふんっ！」

幸いにも、振っている腕はまだ右腕のみ。だから左脚を使つて、右手を蹴りつける。何も考えず咄嗟に足を上げたので、膝が右手首に命中した。

「つつ……痛つてえ……」

高速剣とも呼ばれる程に速く斬撃を出すには、それ相応の速さで腕を振るう必要がある。そんな高速で動く腕を、動いている最中に止めるのは、とてもしクが高かった。

丁度逆方向になる場所から止めたのだから、尚更だ。

おかげで血がダラッダラだよこんちくしょう。

「己の手を痛めてまで、何故攻撃を止めた？」

暗黒魔術の治癒術である「闇の息吹」で手首を治していると、完治とまではいかないが、傷が目立たない程度にまで回復した勇士が聞いてくる。

「お前らと戦う理由が無くなったからだよ、ほれ」

俺は後方に指を向ける。指し示す先にあるのを見れば、変異体の持つていた腕輪が地面に、それも真つ二つになって落ちていた。セリカが斬ったのだろう。

「そういうことか……待っておれ、セリカ。今行くぞー」

「さて、アムド……シ、アス……？」

勇士たちがいなくなったので、俺と一緒に一時的に敵対していたアムドシアスに、もう戦う必要はない事を教えようと思ひ、顔を向ける。

そして見えたのは、召喚したのかケルベロスに乗りながら魔術を放つナベリウスと、俺があげた魔導鎧を身に付けながら戦うアムドシアスだった。

乗り気ではないとか言っていた気がするが、すごく激しく動きながら攻撃している。派手さで言えば一番だろう。

片方は番犬の爪牙やブレス、本人の暗黒魔術が目立ち、もう片方は弓矢や砲撃が飛び、時々電撃魔術で牽制している。実力差はあまりないようで、勝負がつく様子がない。

「しょうがないな……円舞斬！」

直線状に進む、威力を重視した斬撃。万が一のことを考えて最弱の技にしたけどそれ

は杞憂に終わり、二人の間を通った。

余所から攻撃されたことで二人がこちらを向くが、俺は何も言わずにセリカの方へ走る。こうすれば、俺が何で攻撃したのか理解するだろう。



俺を含めた3柱の魔神が加勢しようとセリカの所へ向かったが、結果的に言えば意味が無かった。到着した頃には決着が着いており、変異体は消滅し始めていたのだ。

あいつはセリカの記憶と技を持っていたが、邪気によつて身体を作っていた精神体に過ぎなかった。決意を持っていれば、過去の自分だろうが勝つのは難しくないだろう。

それに、あいつが持っていた影詠の腕輪。あれにはちよつとした副作用がある。

通常の召喚や使役なら、召喚もしくは使役の魔術を使った時だけ魔力を消費する。だがあの腕輪は、召喚・使役し続けている間、ずっと消費し続けるという効果があった。仮にも俺を使うのだから、これくらいの副作用があつてもいいだろう。

何でそんなことを言っているのかというと、

「なるほど。だから思っていた以上に弱かったのか」

戦い終わった後のセリカが、変異体が弱く感じたと言ったので種明かしをした訳だ。

それでもって、今回俺が敵に利用されたのは俺が腕輪を渡したことが原因だから罰を受ける、ということになった。

……何で？

「待て待て待て、待ちたまえ。確かに悪いとは思いますが、もしセリカに渡してなかったら、セリカはもう死んでいたのかも知れないんだぞ!？」

「ふむ、そうか……なら、先程受けた貴様の攻撃のお返しを儂がするでしょう。悪いと思っておるのなら、甘んじて受けるがいい」

いくら俺でも罰を受けるのは嫌だ。俺はM（マゾ）じゃない。だから反論するが、勇士が違うことを理由に殴らせろと言ってきた。

「いや、お前に関しては悪いなんて欠片も思っていない」

「ない。そう言おうとする俺の言葉を遮る者がいた。」

「超ねこばんちー!」

「へぶあ!!」

技名で分かるだろうが、ペルルだ。横から顔を殴ってきた。

というか見事にクリーンヒットしたんだが。2回連続で大当たりとかふざけんな。

「おいこら、何しやが……」

「延髄砕き!」

「ぐあぶっ!!」

今度は空の勇士だ。こいつは顔面にパンチしてきた。今のは延髄じゃなくて【顔面砕き】の間違いだろ。砕けてないけど。

「さて、行くか」

「……………うん……」

セリカとナベリウスを初め、俺を全く気にしないで先に進もうとする面々。

「えっと、大丈夫……………ですか?」

「ゼアノス、無事か?」

「……………ああ、大事ない」

リタとアムドシアスだけは気にかけてくれた。優しいね二人とも。

アムドシアスは元とはいえ同門と戦わせちゃったし、リタとはさっきまで殺し合いとは言っても過言ではない程の戦闘をしたのに……………って、だから他の奴らは気にしないで先に進んだのか。殴られたことも納得はしてないけど、まあいいや。

それにしても今のがギャグ補正か。不意打ちとはいえ俺が避けられないとは……………。

とりま、回復が先か。

「闇の息吹、つと。……………待たせた、行くこう」

言うのと、二人とも返事をしてくれた。

アムドシアスはともかく、リタは別にいいのに、と言ったら笑顔で『主をずっと守ってくれていた方ですから』という返しを貰った。

何て優しいんだ。アカン、惚れてまうやろおおー！！



そんな笑えない冗談はさておき、奈落に落ちないように注意しながら走ると、セリカ達にはすぐに追いついた。何故か動きが止まっている。

「ゼアノスカ、速かったな」

「急いだからな。で、どういう状況だ？」

「それがだな……」

話を聞けば、もうすぐで宮殿の最深部に着くのだが、その入口に下半身が蛇のような天使がいて、セリカ達と話している、という事だった。

天使とはこの場所に来る途中にも、何度か遭遇している。第九位のリエトに第八位のグラキエルや、第七位タージエル。そして、第六位のヘルテ等に。

そして下半身が蛇みたいな天使といえ、第六位天使のヘルテかミカーニアが思い当たる。

迷宮にいる神聖種は、こいつらが最強の座を占めているからだ。

ふと前を見ると、たしかにそんな姿の天使がいる。見た目、そして感じる魔力からして、やはり、第六の位を冠する能天使だろう。だがあれば、ヘルテやミカーニアではない。

神聖を表す頭上の光輪に、神官が着る物よりも神々しさのある法衣。そしてピンク色の長い髪と天使特有の翼は、動くたびに靡いている。たとえ蛇のような尾があっても、【綺麗】という言葉がとてもよく当て嵌まる容姿だ。

そいつと、視線が交差した。一瞬だけ驚いたような表情になり、俺の所に飛んで来る。「久しぶりね、ゼアノス。それとも、始めましての方が合ってるかしら？」

小さく笑いながら言うその顔は、悪戯が成功したお姉さんのような雰囲気を出している。

ただの俺の想像に過ぎないが。

俺はこの能天使に会ったことはない。なのに、どうして『久しぶり』なのか。

「……………誰だ？」

「やはり覚えてないのね。貴方達と別れた時に『次に会う時があるとしても、お前らのことを俺は恐らく忘れてる』と言っていたけれど……………本当に忘れてるなんて。私の名前は……………私のことを思い出したら、答え合わせで教えるわ」

微笑むその顔からは、企み等は一切感じない。本心しか語つてないのか？

だとしても俺は会つた覚えはないし、かつて会つたことがあるのかも知れないが、どれだけ考えても思い出せない。じっくりしないが答えが出ないので、何故こんな所にいるのかを聞いてみると、邪神を討ちに來たそう。たぶん、俺達は橋を落とすために柱を壊していたから、その間にここまで來たのだろう。

だがどう見ても自分よりも強いセリカとその仲間を見て、邪神を倒せる確率の低い自分ではなく、セリカ達がやると言いだしてきたので、話をしていたらとのこと。

それで結局、セリカに譲つたらしい。

「なるほどね。んで、これからどうするんだ？」

「そこはまだ決めていなかったのだけれど……貴方に会つて、デイストピアに移住しようかと考えているのよ。あそこには天使もいると、聞いたことがあるしね」

こいつには俺がデイストピアと関係があることは教えていないはずだが……昔に俺が話したのか？ あ、服装で分かつたのか？

「……それはそれは、何で俺と会つてデイストピアに行こうと思つたんだ？」

「ふふつ、何故かしらね？」

睨めつけて聞いてみるが、そんな言葉で流される。

「ゼアノス、話は済んだか？」

いい加減待ちくたびれたのか、セリカが聞いてきた。そう言えばあと少しだったか。「聞きたいことはまだあるが……時間が無い。またいつか俺が思い出したら。もしくは……そうだな、デイストピアで会えたら、その時に話そう」

暗に、俺はデイストピアと関係あると伝える。分かっているのだろうか敢えて教えた。

案の定、目の前の能天使は頷く。俺の言葉に対する肯定と、『分かっている』と言う意味を含めた首肯だろう。

宙を飛んで今度はセリカの所へ行き、頭を下げた。

「どんな理由があったとしても、私がしようとしていたことを、貴方に押し付けてしまう形になってしまったわね。ごめんなさい」

「構わない。これは元々、俺が片を付ける問題だからな」

セリカの言葉に『ありがとう』と言い、彼女はこちら側に再び飛翔する。このまま出口まで行くのだろうかと思い、俺は前に進む。

互いにすれ違う際、この能天使は、俺だけに聞こえるような小さい声で、言った。

「お願いね、凶腕さん？」

その言葉に反応し、思わず振り返る。俺から言わせれば、天使は別段速く飛ぶわけはない。それにあいつは見るからに魔術型だったから、特別速い個体でもないだろう。

現に、まだ近くにいます。だから勇士と戦った時と同じ速さで追えば、すぐに追いつける。

……そう考えたが、これから彼女はデイストピアへ行くと言っていた。ならば今は気にせず、終わってから詳しく聞くことにしよう。

俺が凶腕だと知ってたから、デイストピアに行くことを考え付いたのかもしれない。「ねえねえ」

思考の海から帰ると、俺の少し前にいるベルルが俺を呼んでいることに気付く。

「何だ？」

「デイストピア、僕も行っていい？」

「……何で俺に聞くんだ？」

「今の天使と会話しているのを見て思い出したんだけど、ゼアノスはデイストピアの魔神なんですよ？ 僕、闇夜の眷属が住める場所を探しているから丁度良いと思ったんだ。これは僕だけじゃなくて、お師範様の願いでもあったから……」

アビルースの事を思い出したのか、少し涙目になりながらもそう語った。

無論、断る理由はない。基本的に、来るものは拒まないからな。

「そうだな。じゃあ、この戦いが終わったら案内しよう」

「ほんと!? やったあー！」

これから邪神との死闘が始まるとは思えない程に、ペルルがはしゃいでいる。さつき殴られた腹いせに意地悪でもしてやろうかと思ったが、アレは俺に非があるから止めた。

仲間内には優しいんだよ、俺は。

大きな入口を潜った、その先は宮殿の最深部。

狭間の宮殿の、その本殿にあたる神の処刑台がある場所。

その最奥に、奴は……邪神アンリ・マユは、いた。

「我の、身体を……新たな器をおお……怨、おおおおおおおお怨……」

生きとし生ける物の心を吸い取り、憎しみを己の糧とし、邪気をばらまく邪神。

かつて、慈悲の大女神は邪悪な心を集めていた。人々が争わぬように、必死になって。

だがそれはうまくいかず、その邪悪な心に蝕まれ、自身が邪気を放つ存在へとなってしまった。

本来なら慈悲の大女神、アイドスが邪神化して、ここで戦うはずだったのだろう。

だがそれは俺のエゴによって変わり、より強大な邪神となった。

そのことに後悔は皆無だ。俺は正義の味方ではないし、英雄や勇者でもない。その逆

の存在だ。

とまあ長々とシリアス感を出した訳だが、今回ばかりは結構真面目にやる。本当に危なくなったら、凶腕になるのも考えてるくらいに相手だ。

「死ぬつもりはないが、命を賭して戦う」

決意の表情で、俺の隣にいるセリカが言う。自分に言い聞かせているのかもしれない。

（我は死ぬつもりなんぞないが、セリカ、御主とは運命共同体じゃ。この世が面白くないことになるのあれば、未来に懸けようぞ）

この二人に続き、他の皆も己の決意を言葉にした。たった一言にも意志が宿り、それがそれぞれの力となってゆく。

（くくくつ、ゼアノスを見てみるがよい、この状況でも笑っておるぞ）

ハイシエラの言葉で、セリカが俺を見た。俺も気付かなかったが、笑っていたらしい。「今この時にでも笑うのだな、ゼアノス」

「ああ、これが終わった後の事を考えるだけで楽しいし、面白くなっていく。何よりも、この戦いが楽しみだ！」

会話をしている間に、アンリ・マユは姿を変えていく。形を持った邪気が無数の触手に、牙に、尾に、腕に、手に変化する。

明らかに戦闘態勢に入ったのであろうその姿は、今までに見たどんなモノよりも汚れて邪悪なモノに見えた。

「思えば、サティアとゼアノス。この二人と出会ってから、この旅は始まった」

着々と変容する邪神を見ながらセリカが呟き、自身の胸に手を置いた。

「俺とゼアノスが手を組み、サティアは……ここに。そして、今は仲間がいる。だから、負けはしない」

「……良いこと言うじゃねーか」

俺はそう言ってニヤリと笑い、愛用の双剣——「エルサレム」の片方をセリカへ向ける。意味を理解できたのか、セリカは僅かに笑った。

そして、地の魔神が封印されている剣——「ルン・ハイシエラ」を振り、剣と剣を合わせ、キンツツという音を響かせる。

そして同時に、剣を構えて戦闘態勢に入る。それに少し遅れて、後方の仲間が構える。アンリ・マユは、完全に変化し終わっていた。窪んだ双眸から、鈍い光が見える。

（ここまで高揚するのは、もしやすれば初めてかもしれない。行くぞ、セリカツ!!）

「ああ……これで、終わらせる!」

「泣いても笑ってもこれで最後だ。お前ら死ぬなよ!!」

先頭にいる俺達二人の言葉に、『応!!』という声が遅れて聞こえる。

さて。打ち合わせ通り、最初はこれで行きますか。

「ゼアノス、行くぞ！」

「ああ、合わせろ！」

セリカと同時に飛燕剣を放つ、何気に初めての複合飛燕剣。

飛燕剣の中でも全体高速剣と呼ばれる紅燐剣の最上位技、全体高速剣最大の奥義とされる、枢孔紅燐剣。そのタイミングを合わせて、同時に放つ。その名も……

「紅燐剣舞連ッ!!」

— 狭間の宮殿・結 —

互いのことをよく知っているわけではない。息を合わせられるほどの時間を一緒にいた訳でもない。それでも、永い時を生きれば会うことがあるだろう。たとえ初対面だとしても、何故か呼吸が合う人物と。

俺にとってはセリカがそれだった。セリカにとっても、俺がそうだろう。でなければこんな複雑な複合技ができるわけない。練習していたならまだしも、していないのだから。

セリカよりもハイシエラの方が共にいた時間は長いだろうし、互いの事を知っているだろう。だけどそれでも、ハイシエラとここまでコンビネーションが良いかと聞かれれば、迷わずに『No』と答える。

「予想以上の出来栄えだな」

「ああ……俺は左に。ゼアノスは右を！」

「了解だ！」

【紅燐劍舞連】を放つと、それは無数の斬撃となり、アンリ・マユが生み出した分身を細

切れにしていく。それでも完全に滅することは出来なかった。

「おやおおお怨ッ！ おおおおおおおおおおおおおおおおお怨ッ！」

俺達が左右に分かれると、中央にいた牙の形状をした邪神の分体が、不気味な声を荒げながら後方の仲間へ突っ込んでいく。

それでも、心配は微塵もない。そこにいるのは、俺達よりも戦いの経験が多い二人だ。「我がが美しき技を喰らうがよい、大放電ッ!!」

「……ちね………」

アムドシアスは得意な電撃魔術を、ナベリウスはソロモンの力を源に放つ魔術槍である【死愛の魔槍】で、襲い来る牙に放つ。

その威力は高く、牙は霧散していったのだが……ナベリウスの幼児言葉はどうかにならないものか。何か脱力してしまう。

「下がれ!!」

上空から聞こえる、空の勇士の声。それぞれ左右で触手や人型の分体を斬っていた俺とセリカは、迷わず後退する。

「はあッ!!」

空の勇士の姿が、翼と角以外は人間と変わらない見た目が、完全な龍ドラゴンのそれになる。その姿は龍なだけがあり、猛々しい。

これは一時的に変身し、純粋系のブレスを放つ「アウエラブレス」。隅々にまでブレスは広がり、アンリ・マユの分体のいくつかが消滅した。

それでも次々に湧き出る邪気は限りない分体を作り、その数は無数と言えるほどに増え続ける。『冥き途』で湧き出る不死体を相手にしたこともあったが、こいつらは不死体よりも質が高いので苦勞する。

「ほらほらほらほらあ!!」

俺は宙に浮いて、「速魔弾ルオナ」や「闇弾」など、低威力でも詠唱時間が短い魔術を連発する。どうも勇士達と戦ってから、やたらテンションが上がるのだが……。

やっぱり、魔族の血、かねえ？

最後尾ではパズモと白銀公が治癒、強化、戦意上昇の魔術で皆を補助。

最前列では俺、セリカ、レクシユミ、リタ、ペルル、空の勇士が様々な攻撃で突破。

その二つの間で、アムドシアスとナベリウス、リ・クティナが攻撃と治癒の魔術で援護している。この舞台には結界を展開してあるため魔物が一切入ってこないのです、背後から襲撃されることは無い。正に理想的なパーティと言えるだろう。

だが相手も、黙ってやられているはずがない。

様々な属性を持った鉤爪による攻撃や、攻撃魔術。邪神の癖に本体は光の槍や神聖魔術を多用し、暗黒魔術を時々放ってくる。尾を模っている分体だけは、本体の後ろから

治癒魔術で回復させている。それもあって、倒し掛けた分体が再生し続けている。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!」

それでもなお、形勢は変わらない。少しずつ、少しずつ前進する俺達に対し、追い込まれていくアンリ・マユ。感情があるのか激昂したような声らしき音を出し、本体と分体の全てが一点に向かって魔術を放った。

目標は……俺だ。冷却、火炎、地脈、電撃、暗黒、神聖、万能。それぞれの属性を持つ魔術が、俺に襲いかかる。基本魔術だけなので一つ一つの威力は小さいが、もし当たらば魔神でも重傷は確定だろう。

「しゃらくさいわッ!!」

それに対して俺は防御の姿勢を取らず、敢えて攻撃することにした。相殺を狙っているからだ。繰り出す技は、「沙綾円舞剣」。一点突破ならこれが最適だろう。

案の定、アンリ・マユには届かなかったが、相殺しきることに成功した。

「俺を狙ったのは間違いだったな、お返しのついでに終わらせてやる」

俺はそう言って今度は双剣を背負い込み、詠唱に入る。

俺がよく使う魔術の大概は、詠唱時間をあまり必要としない。だがこれは数秒間の詠唱が必須なので、近くにいたりタに目配せする。その意味を理解してくれたのか、俺に向かってくる分体を薙ぎ払ってくれた。

「ありがとな、リタ。助かった」

礼を言うと、軽く頭を下げてきた。律儀な幽霊だな。

それはともかく、俺の準備は完了。あとは皆が離れば……と思っただけ、俺の発した魔力を感じて既に離れてた。

「決めろ！ ゼアノス！」

自らに襲い来る人型を殴り飛ばしながら、空の勇士が俺に向けてそう言った。

……彼女が俺の名前を呼ぶのって初めてじゃないか？

「ゼアノス……頼む……！」

続いてセリカからも、声援を貰う。

「行くぞ……消え失せろ!!」

詠唱も終わり、莫大な力を持つ物体が、俺の魔力によって顕現された。

——豪隕石召喚——

それが、この魔術の名称だ。

万能属性、つまり純粹魔術の高位術には、【小隕石召喚】や【大隕石召喚】というものがある。だが俺が今使った魔術は、万能属性ではなく、無属性の術。

無属性。文字通り属性が無く、属性によるダメージ補正が掛からない特殊な属性だ。

無属性魔術を使える者は非常に少なく、この属性の魔術自体がとても珍しい。

「ガアアアッ!! 身体をおおお……怨、怨、怨、身体をおおお……」

俺が顕現させた無数の隕石が、再生し続ける邪神に降り注ぎ、蹂躪する。

それどころか、宮殿の一部も崩壊し始めた。だがこれは、俺の魔術の影響ではない。

という事は、これは……

「不完全燃焼になるが、死ぬよりはマシか……セリカ」

ポツリと呟いて、セリカを呼ぶ。クイクイと手を動かして、こつちに来いと伝える。

ちなみにアンリ・マユは、消滅してない。神核が見えているので、後はそれを、邪気を払うために『聖なる裁きの炎』で浄化するのが、セリカの仕事だ。狭間の宮殿での処刑は、それが失敗した際の保険。そしてあわよくば、『神殺し』も処刑しようという現神の考えによるものだ。

そして現在、宮殿は崩れ始めている。現神による処刑が始まったのだ。失敗したわけでもないのに、そこまでしてセリカを殺したいのか？

……つと、セリカが来たか。

「ゼアノス、どうかしたのか？」

「先に謝っておこう、すまない。そして、いつかまた会おう」

「何を言ってる……があっ！」

（せ、セリカっ!!）

セリカが言い切る前に、俺は自分の右手をセリカの腹に突っ込んだ。

俺の手には『腕』が絡まっている。それによって魂を弄っているの、肉体的な痛みだけでなく、精神的な痛みも加わるので、今までにない激痛に襲われているのだろう。(セリカ、しっかりするだの!!)

ハイシエラが必死に呼びかけるが……あ、痛みで気絶した。

「な……何をしている!!」

近くにいたレクシユミが、俺のしたことを見て斬り掛かって来る。俺もすべき事が一度終わったので、手を引っ込めて跳躍し、剣を避けた。

俺という支えを無くしたせい、意識のないセリカが倒れかけたが、レクシユミがそのまま自分の肩で支えた。

セリカの身を守るように、アムドシアス以外のメンバーがセリカの前に立つ。アムドシアスはどうすればいいのか分からないのか、俺とセリカの顔を交互に見ているだけ。

……俺の使い魔なんだからこっち来いよ。

「いきなり行動に移したのは悪かったが、案ずるな。セリカは気絶しただけで、俺はこれを抜き取っただけだ」

右手に持っているソレを、皆に見るように翳す。手の平に収まってしまいう程度の大きさしかないソレは、心臓のようにドクドクと鼓動している。

「それは……何ですか……?」

それを見ながら聞いてきたのは、リタだった。

俺はリ・クティナなら知ってると思っただが……知らないか。

「これはまだ穢れているが……」ウツロノウツワ【雨露の器】だ」

「ウツロノウツワ……?」

「まさか、それがそうなのか!」

ペルルが首を傾げ、リ・クティナが声を荒げる。

「そう。慈悲の大女神アイドスの神核でもある。セリカの魂と同化していたから、取っ
たってわけ」

「ならばあの荒事のような真似はしなくとも……そのせいで我々は誤解してしまったの
です!……」

「いやいや、白銀公の言う事は尤もだが、時間が無くてね。あんな荒療治でなければ、そ
れこそ間に合わなくなる」

「時間が無いじゃと?」

空の勇士が疑問を口にするが、俺が答えるよりも早く、その答えが勝手に現れた。

アンリ・マユに近い足場が、真下に落ちて行ったのだ。

「……まさか、これは!」

「そう、そのまさかだ。現神の処刑が始まった。セリカを担いでさっさと宮殿から脱出しな。アンリ・マユは、逃げないように俺が見張っておく。セリカが『聖なる裁きの炎』を使つて浄化するのが最適だが、こうなつたらもう間に合わん」

宮殿の一部が落ちたことにより、宮殿の全体が振動し始めた。そして話をしている間にも、アンリ・マユは再生している。

「く、ですがゼアノス、貴方はどうするのですか。このままでは貴方までもが、異界の狭間に落ちてしまいます」

「そ、そうだよゼアノス！ デイストピアに連れて行ってくれるって、約束したじゃないかあ!!」

「……狭間の宮殿の真下にある地は、俺の生まれた場所だね」

俺にどうするのかを聞いてきた白銀公とペルルに、神の墓場は俺の出生の地だという事を伝える。

予想通りと言うか何というか、皆の顔は驚きの一色だ。

ハイシエラは今まで全く声が聞こえなかったが、この時だけは驚きの声が聞こえた。

俺とは会話できないと思ってるから黙ってたんだらうけど。

「俺は異界に落ちると言うより、故郷に帰るだけだ、心配するな。ペルルも、その事は俺の部下に命令しておくさ……ってことだから早く行けえ！ 手遅れになる前に！」

より一層、振動が激しくなったので大声を出した。

皆が俺に礼を示したり頭を下げたりしてから駆けだすのを確認してから、アムドシアスに向かって小包を投げる。

「主としての命令だ、それを絶対にデイストピアへ持つて行け。一つも落とすなよ！」
「これは……そういうことか。引き受けたぞ、ゼアノス！」

アムドシアスに渡したのは、俺の使い魔達の召喚石だ。神の墓場に落ちるのだから、弱くなってしまうあいづらを連れて行くわけにはいかない。

ラテンニールだけは俺が持つてるけどな。何かの役に立つかもしれないし。

何か大事なことを忘れてる気がするが、時間がもう少ない。あいづらが完全に見えなくなつてから、『腕』を展開。アンリ・マユを押しさえつける。

俺の『腕』の力で、『アンリ・マユ』という存在を別の存在に変えるというのが、俺が今している事だ。だがこれは万能ではあっても全能ではないので、仮にも神の存在を変えるとすると、少し時間が掛かる。こいつの抵抗もあるし、その分余計に。

その時間を使って、眷属であるブランシエとノワール。そして使徒のイオに、ペルルのこと。ついでにアンリ・マユと戦う直前に出会った俺の正体を知っていた能天使が、新しくデイストピアに入ることを心話で伝えておく。

俺の正体を知っていた、という事実は言つてない。そのせいで余計な混乱は招きたく

ないからな。

ちなみに、今はアンリ・マユの存在を変えている最中だが、足場は既に崩れたので俺も落下している。アンリ・マユを掴んで変化させながら落ちている。

これが思ったよりも反発力が中々強く、思うようにいかない。

そして予想外な事が起きる。その反発力が最大限に強くなつた時だ。強烈な意志の力と俺の力が、衝突し合った。

こういう意志の力は、思わぬ事態を引き起こすことがある。アストライアを憎む邪神に身体を乗っ取られたセリカが、サティアを思う意志の力で我を取り戻したように。

衝突した二つの力は、どこまでも不安定なこの次元に大きな『歪み』を創つた。

俺や歪魔の使う歪みではなく、『空間』ではない『何か』を飛び越える歪みだ。

「何だ……これは……？」

先の抵抗で力尽きたのか、アンリ・マユを掌中に収めることには成功した。

そして好奇心を抑えきれず、『歪み』に近づく。ここは神の墓場と狭間の宮殿があつた場所の、丁度真中に位置する。ただの歪みのはずがない。

「……」

出来る限り解析するため、様々な術式を出して調べに入る。

こいこのはパイモンが得意なのだが、あいつは今、封印術によって石化中。俺よりも

頭の良さような使い魔は、ここにはいない。

色々試したが、頭ではなく力で解決する俺の頭では解析は不可能だった。

最後の手として、『腕』で直接触って調べてみることに。

「これって、もしかして……」

性質は何となく理解した。もし正解なら、天文学的確率よりも低い確率で、偶然と偶然が重なって出来た奇跡だ。だが問題なのは、どこに繋がっているのか、だ。

さすがにそれは、現地に行かなくては調べようがない。

あーでもない、こーでもないと思っていると、巨大な物体の影に吞まれた。何事かと上を見れば、忘れていたが宮殿が落下していた。それを見て呆気にとられていて、宮殿が全て落ちたことで、この次元の圧力が高まった事に気付くのが遅くなった。

「ん、何だ？ って、ヤバー！」

目の前にある『歪み』が収縮している。これの何がヤバいのか。

その説明の前に、「スーパノヴァ超新星」という現象を知っているだろうか？

面倒な理屈を省いてかなり簡略すれば『星が収縮して宇宙で大爆発を起こす』というものなのだが、この目の前にある『歪み』に起こっている現象も、まさにそれだ。

段々と小さくなり、巨人族でも楽々入れそうだった『歪み』は、今では人間の握り拳程までに縮んでいる。早く逃げなければ巻き込まれ……ああ、遅かったか。

あの『歪み』が、大きく広がってこちらに迫る。俺が飛ぶ速度よりも早い。これは間に合わないと言いつつ『歪み』に呑まれた俺が、最後に言ったこと。それは、

「あ、歪みの回廊で逃げればよかった」
だった。

戦女神VERITA編

—ディストピアの現状—

ラウルバーシュ大陸の中央より南寄りにある、ディージェネール地方。その地下には現在、ブレアードが創った迷宮以上の広さを持つ、巨大な迷宮があった。

ディージェネール地方の下方に存在する地下世界の名前は、「歪みの主根」。

元々はディージェネールの北西に位置していたが、かつてゼアノスがルナークリアと『歪魔が多い土地を、土地ごとディストピアに移動させる』という話をしてきた。それが了承されたので、目を付けていたその地域を即座に転移したのだ。

だが肝心のゼアノスは、約300年前から姿を消している。神殿の総意（歪魔が多い土地をディストピアに移動させるという意見に対する答）を伝えるに来たルナークリアによれば、神の墓場へ落ちてしまったという。そのことに、悲しみの感情を持った者は皆無に等しかった。

彼が凶腕であることを知っている者は、彼がその程度で死ぬとは思っていない。知らない者は死んだと思っていたが、魔族らしく『死ぬのが悪い』という考えなので、悲しまなかつた。

そしてゼアノスがいなくても準備はしてあったので、転移するのに問題は全くなかった。

だが、そのあとが問題だったのだ。

【歪みの主根】は、ディル||リフィーナが創世した時に生まれた【歪み】が集まっている土地だ。二つの世界が融合して生まれた世界の、【歪み】。それを緩衝する役割を担っている。それを知った者は、こう思ったのだ。

——世界の緩衝たる歪みをそのままに、ある一定の秩序と均衡を与えることは出来ないだろうか。歪みの大地を支配するならば、それは同時に世界を支配することにもならないだろうか——

と。

それからというもの、人間はその土地を神の力で迷宮と化し、支配しようと準備を進めていた。

そこで出てきたのが、ディストピアの魔族だ。後は神を呼び出すだけだという時に……いや、実際は呼んでいた。神が来るよりも早く、魔族が転移させてしまったのだ。

北方の霜天ツェルレアロスの盆地という場所の地方神。名を、氷結の女神、ヴァシーナ。フェミリンスと同じ、現神に属している地方神だ。

彼女の氷結の力で、歪みの圧力によって高熱を発する地下迷宮を人の行き来できる環

境へと整える。そこまで考え、実行まであと僅かという所で邪魔をされたのだ。その怒りは激しく、『了解を得ていて契約通りに人間がいらない場所だけ』を得たという大義名分があつても、治まらなかつた。治まるはずがなかつた。

それでも一時期は、争いにまで発展しなかつた。いちやもんをつけた所で、ディストピアは契約をしつかりと守っていた。ここで戦争になれば非があるのは人間側になり、凶腕が出てくるのは必至だからだ。

それでも、感情の爆発が抑えられない者が命令を無視して飛び出すのは、稀にだがあることだ。

誰もがその者の生存を諦めたが、その者は帰つてきた。傷だらけで無事とは言い難いが、それでも生きていたのだ。

凶腕が見逃すはずもないと、そこに疑問を持つ者が増えた。同時に、凶腕がないのではないかと、当りを付ける者まで現れたのだ。

神殿が調べてみれば、凶腕はここ300年もの間、一度も表に出ていない。

……それを好機と見たのは、一つの神殿だけではなかつた。大きな賭けに出たのだ。

凶腕がない事を前提に考えて、戦争を起こすことを決めたのだ。最初にその参加の意を明らかにしたのは、『歪みの主根』のことで苦汁を飲まされた、『三太陽神』の神殿だつた。次点で……とはいってもほぼ同時に参加することを決めたのは、バリハルト

神殿だった。

【三太陽神】とは、主神アークリオン。主神の息子アークパリス。主神の娘パルシ・ネイのこと。

アークパリスは騎士の神でもあり、バリハルトとは信仰者同士の仲が悪い事で有名である。それでもこの時は、三神戦争よろしく協力し合って戦争を始めた。神そのものは参戦できなかったが、それらの神格者達が徒党を組んでいた。

その結果……デイストピアの完全な敗北。

ブランシエとノワールは丁度その頃に北のレスペレントという地方にいたので、戦争に参加できず。数柱の魔神はいたものの、四つの神殿が相手では勝ち目が無く。天使はそもそも魔族とは別の場所にいたので、しかも共闘なんて出来るわけもなく、参加していなかったたので数は減っていない。

ゼアノスはいないので凶腕が戦場に出ることもなく、あつという間に勝敗は決した。ところが、神殿側にとつての利益はあまりなかった。なぜなら、【歪みの主根】が見つからなかったのだ。

もはや廃墟となったデイストピアの城を背に、戦争には勝っても目的のものが見つからないので、負けた気分で戦争の勝利者は帰って行つた。

魔族や亜人の領域であるデイジエネール地方を、統治しようとする者は皆無だつ

た。

「ディストピアが滅亡すれば、今度は魔族や亜人が我先にと新たなリーダーになるべく、争いを始めるだろう。そんなことに干渉して、兵力を減らすのはバカのことだからだ。

……。

だが、「歪みの主根」はそこにあつた。場所を変えずに、同じ所に存在していた。

戦争中に、勝ち目が無いことを悟つた者は数多くいる。それらは皆、「歪みの主根」に逃げ延びていた。そして、帰つて来たブランシエとノワールが、各々の部下に命じて特殊な結界を作り出していった。古神の配下だった魔族と天使が、上司の命令で嫌々ながらも協力して作つた結界。それは、古神の勢力がいれば感知できたもの。現神勢力には、どうあつても見つけられないようになっているものだった。

戦争で逃げていた者は意外と多く、どのくらいかと問われれば、相手が大国であつても戦争で勝てるのではないかというほどの戦力がいた。それも凶腕だけではなく、ゼアノスにも忠誠を誓っている者が過半数を占めていたのだ。もう半数は天使なので、ゼアノスに対する忠誠は無い。ブランシエに従っているのであまり変わらないが、古神の英雄たる凶腕には従う方針らしい。

ゼアノスの種族でもある、歪魔。彼と同じ種族たる歪魔が3人、階層にすれば地下50階ほどにもなる場所に集合している。

3人の中央に立ち、大剣を地面に刺して気品すら感じられる男、ゲラーシム。

その手に持つのは、暗黒剣ザウルラ。持ち主に呪いを掛けることで有名な剣だ。そんな剣を持ちながらも平然としている彼は、魔神には及ばないがそれに近い実力を持っている。遥か昔から、歪みの中心地で歪魔を統治していた実力者だ。

左側にいるのは、サーカスの時に使うような大きなボールに座っている、ミレーヌ・プロア。

見た目こそ普通的女子型の歪魔と変わらないが、その身に宿す魔力は尋常ではない。戦闘力はゲラーシム以下だが、単純な魔力量ならば超えている。武器では短剣やナイフでの攻撃を得意としているようだ。

最後に、弓矢を持った有翼の妖艶な歪魔、マーゴット。

3人の中では最弱だが、歪魔全体として見れば上位に値している。しかも魔族にしては非常に珍しく、神聖術をも扱う事が出来る。翼の形が天使や墮天使に酷似していることから、もしかしたら墮天使だったのかもしれない。

そんな3人は、「歪みの主根」の今の支配者に呼ばれていた。ゲラーシムはその存在を見つけたので、声を掛ける。

「我々に何か用かな？ ノワール殿」

「ん〜？ あ、待ってたよ。うん、ちよつと聞きたいことがあつてね」

墮天使ノワール。魔導鎧と魔導銃を扱う、超大な力を持った凶腕の眷属。その力は、単体で小国を滅ぼすことができるほど。緊張感のない喋り方をするが、一部の現神を超えた実力者。

「ミレー又達に聞きたいこと？ なになに？」

「あ、もしかしたらミレー又だけ関係ないかも、ゴメンね。いや、コイツのことなんだけどさあ」

そう言つて足元の魔法陣に魔力を放つと、巨大な物体が突然現れた。転移されたのだ。

「歪みを操る力はゼアノス並みなんだけどね。やつぱそんだけの力を秘めているからなのか、全く言う事を聞いてくれないんだよ」

「……」

「なるほど……そういうことですか……」

「あはは、確かにこれはミレー又には関係ないね〜」

転移されてきたのは、かつて【歪みの主根】を支配していた歪魔、魔神アラストール。竜の姿をした恐るべき存在で、この地下世界の覇権を争って350年ほど前に……ゼアノスが己の種族を知り、この地に目を付けた際に倒されたはずの魔神だ。

ゼアノスが確かに倒したはずなのだが、十数年経って様子を見に来た頃には【歪みの主根】の最下層で蘇っていたのだ。その完璧な復活具合は、直接見たゼアノスが『お前はラテンニールか!』と思わず突っ込んでしまったほどだという。

『どうやら理性が無いみたいでね、どうするか決めかねてたんだ。で、どうせなら同じ歪魔の君らに決めてもらおうと思って。ほら、ゼアノスがいないし。いたのなら彼の魔力供給源になったかもしれないけど……あ? そっか、それまで封印しておけばいいのか。よし決まり! さあさあ手伝って!』

「はは、りょうかい」

呼んでおきながら自己完結してしまうノワールを前に、しかし真面目とはお世辞にも言えない性格のミレーヌは、ケラケラ笑いながら了承する。

対して歪魔にしては非常に……そう、非常に珍しく比較的真面目な性格の二名は……

「クスクス」

「……ふっ」

それぞれ思う所はあるが、悩みが一切なさそうな前方の二者を見て、マーゴットは笑

い、ゲラーシムは溜息を吐きそうになるが、結局は口元を笑いの形に歪ませたのであった。



所変わって、デিজエネールの地下ではなくその逆。上空にも、地下とほぼ同等の戦力が集まっていた。

【ヴィーンゴールヴ宮殿】と呼ばれる、天空に浮かんだ古の宮殿だ。

デিজエネールと【歪みの主根】があつた場所の、丁度真ん中辺りにあつた【カドラ廃坑】という地に封印されていたのを、古神に縁があるものを探していたブランシエが偶然見つけ、解放したのだ。

【戦乙女シユベルトライト】なんて稀有な存在まで封印されているが、そこは全く手をつけていない。というより意志疎通はできたのだが、彼女の希望により封印したままの状態だ。むしろ意識が表に出ないように強めている。彼女自身が、自分が決めた主以外には従いたくないというので、万が一侵入者が来た場合に勝手に支配されないように、そのように施している。それでも膨大な魔力を持つ者が生贄にされたとしたら、復活するかもしれないが。

そしてここにも、合計で4つの人影があった。

3つの影が、1人に……熾天使たるブランシエに跪いている。

名前をそれぞれ、メヒーシャ、ルフアディエル、エリザスレインという。

順に、第七権天使・第六能天使・第五力天使である。

「よく来てくれた。特にエリザスレイン、君が来てくれたのは予想外だ。メロディアーナと共に、あちらに残ると思っていたよ」

「正直に申しますと、あの地にこれ以上滞在しすぎては無駄な介入をしまいそうでしたので……ブランシエ様に着いて行くことを決めました」

頭を垂れながら、水色の長い髪を持つ力天使は淡々と言葉を放つ。

エリザスレインは、顔を上げれば童顔という表現が正しい顔立ちをしている。しかし彼女は意外と行動派であり、更には彼女の持論からして、こちらに来たのは確かに正しいかもしれないと、ブランシエは苦笑する。

あのままでは『無駄な介入』をしてしまうのは誰が見ても分かりきったことであつたし、そんなことで凶腕がない今、いくら相手取ることは可能でも、あの大国相手と戦争になるのは避けたかつたのだ。

「私としても本当に驚きました。どう説得しようかと悩んでいたら、エリザスレイン様が自分からあの地を離れると仰つた際は」

クスリと軽く笑いながらそう言ったのは、能天使ルフアディエル。

前に一度、狭間の宮殿でゼアノスやセリカと出会った、あの天使である。

その言葉にエリザスレインが顔を上げ、むう、と頬を膨らませた。

「その言い草……私の事をどう見ていたのかがよく分かったわ、ルフアディエル」

「私以外もそうだと思いますよ？　ね、メヒーシャ？」

話を聞いていただけで突然声を掛けられた権天使の表情に、驚きの色が加わった。

「そ、そこで私に振るのですか？　ですが、まあ、そうですね……ルフアディエル様の言

葉を否定できない私がいま……」

「へえ、貴女もそう言うのね」

そう言って、半眼で2人を睨むエリザスレイン。

地下の堕天使や歪魔ほどではないが、段々と会話が軽くなっている。

それを、ノワールから『生真面目天使』とまで言われたブランシエは、『ジューツ』と凝視する。その視線に気が付いたのか、三者が同時に再び頭を下げた。

「も、申し訳ありません！　ブランシエ様！」

とはいえ、何もブランシエが特別真面目過ぎるのではない。本来、天使は基本的に真面目である。

ただ、人間と接した経験を多く持つ天使は、他の個体と比べて些か軽い傾向がある。

業務だけでなく会話をする楽しさを知っているからではないか、とはブランシエの主たるゼアノスの言だ。

故に。

「そうだな……私を会話に混ぜれば許そう」

先程のメヒーシヤの驚きが微粒子レベルに思えるほど、驚愕を顕わにする天使3名。

だがルファディエルはすぐさま切り替え、話し始めた。

「では、こんな話はどうでしょうか。ディル||リフィーナ創世以前、日本という国にいた人間の事なのですが……実はメヒーシヤと」

「お、お待ちくださいルファディエル様!! 一体何を言うおつもりですか!?!」

「いえ、言いなさいルファディエル。これは命令よ」

「エリザスレイン様に命令されたとなれば、話さない訳にもいきませんね……メヒーシヤ、お姉ちゃんって私を呼んでくれれば、そのことを忘れるかもしれないけど?」

「く、この話題はいつまで続くというのですか……っ」

「ブランシエ様も興味ありますわよね?」

「うむ。エリザスレインの言う通り、非常に興味がある」

「ブランシエ様……」

顔を真っ赤にし、手で隠してしまったメヒーシヤ。彼女とルファディエルは大昔、ゼ

アノスと殺し合った仲だという。何があったのか、詳しくは知らない。今は恨みもないようなので、気にしていない。

「そう言えば、この宮殿には戦乙女がいたようですが……大丈夫なのですか？」

「互いに種族は違えど、彼女も『神の使い』であることには変わらない。神のためにも貸して欲しいと、そう言ったら使うことを許してくれたのだ」

「なるほど。確かに私達もあの方も、『神の使い』ですね……」

こんな簡単な談話で、だが確かに『楽しい』という思いを感じたブランシエ。

これの究極は墮天だが、この程度の『楽』で墮天使になる訳もない。部下との交流を深める意味もあり、長い間話し続けた。

地下と天空で、それぞれが物事を進めていたその時。

……ディストピアだった地上に、1つの歪みが発生した。

—フエミリンスの喜と哀—

もはや原形を留めていないデイストピアだった地上に、突如発生した歪み。たった一つの歪みではあるが、その大きさが問題だった。人間を超える巨体を持つ巨人。そんな奴らが軽く10体は同時に出入りが可能となりそうな、巨大な歪み。

そこから最初に現れたのは、どこか憤りを感じる表情をしたゼアノス。

狭間の宮殿にて異質な歪みに呑み込まれた彼は、約300年振りにこの地に降り立った。だがそこにはかつての居城はなく、話に聞いて知ってはいたが、初めて見たその光景に声が出せていない。

そしてゼアノスに続いて歪みから出てくる無数の魔族と、この中で唯一の人間。金色の髪と膨大な魔力を持つ女性だ。

ゼアノスがデイストピアに来る前にとある地方へ行つた際に出会い、本人の強い望みにより連れて来たのだ。

「ゼアノス様、私はどうすれば……？」

「とりあえず、拠点の一つであるヴィーンゴールヴ宮殿に送っておく。ブランシエの報

告によれば此処の真上にあるらしいが……」

女性の言葉にそう返して上空を見上げるが、雲があるだけで他の物体は全く見えな
い。

「間違えて何も無い場所に歪みを展開させて、運悪く墜落死させちゃうかもしれない可能性もある。ブランチエに運んでもらってくれ。あと、様付けする必要はないぞ?」

「いいえ。彼女は彼女、私は私ですから。……ですが、本当にありがとうございます。私
のあんな我が儘を聞いて下さったこと、感謝いたします」

「頑固だな……だが先に言った通り、手伝うだけだ。過剰な介入はしない。俺としては
止めるのが正しいんだから、応援は一切しないぞ?」

「はい、理解しております。ですが、そうであつても私は……」

血が出るほどに拳を握りしめたその人間とゼアノスは、一つの契約をしていた。それは古の契約に反してしまう可能性がある契約だ。だがその新しい契約を言いに来たのが彼女だからこそ、ゼアノスは応じた。

「復讐、か。だがそれなら、今は力を付けろ。幸いにも向かう先は天使だらけの宮殿だ。訓練相手には困らないだろう。もう大丈夫だと思つたら、その時にこそ俺を呼べ。助けにはなつてやる」

「何から何までありがとうございます。あ……」

畏まって礼をする彼女の頭にゼアノスは手を乗せて、撫でる。かつて、あの少女にした時と同じように。

それから一分もしない内に、上空から白色が舞い降りた。光の翼にも見える純白な翼を羽ばたかせて降りてきたのは、眷属の片割れ、ブランシエ。

少し前まではゼアノスと共にいた彼女だが、できる限り被害を少なくするために、ゼアノスはゼアノスで用事があつたので、一足先にこちらへ戻つて来ていたのだ。そして案内のために再び呼び寄せた、というわけである。

人によっては扱いがひどいと思うかもしれないが、彼女の喜びは主の喜びである。他者から見れば不憫に見える事柄を命令されたとしても、その胸の内に積もるのは『主の役に立てる』という嬉しさだけ。そんな彼女にこの程度では、不満などある訳がなかった。

ブランシエに運ばれている彼女の姿を見送り、完全に見えなくなった瞬間。

笑みを浮かべていた表情は歪み、どこか遠くを睨み、唸るように言葉を発した。

「三太陽神とバリハルト……覚えてろよ、貴様らが忘れたとしても、俺はずつと覚えてるからな」

返事が聞こえるはずもなく、期待もしていなかった彼はそのまま『歪みの回廊』を開き、旧知の気配がする方向へ転移していった。

「なに……?」

(嬢ちゃん、今、何と言った?)

「だから、デイストピアは既に滅んだ。そう言ったのだ」

ブランシエによつて金髪の女性がヴィーンゴールヴ宮殿へ運ばれたのと、同時刻。デイストピア跡から遠く離れた地域、レスペレント地方の端のマータ砂漠という砂漠地帯にて流浪の旅をしている『神殺し』ことセリカ・シルフィルは、無表情ながらも驚いていた。それは彼が常に持つている剣に封印されている、相棒でもある魔神ハイシエラも同じだ。

複雑な運命の因果なのか、何故か共に旅をしているエクリア・フェミリンスという女性。何気なくデイストピアに行つてみようかと思いついたところ、彼女から告げられた事を聞き、シヨックを受けたのだ。

お世辞にも良いとは言えない自身の記憶力だが、セリカは覚えていた。

極限な危機に陥つた時に、何故か助けてくれた魔神のことを。そんな彼の住んでいたデイストピアに、闇夜の眷属が安全に暮らせる場所を探していた使い魔、ペルルが向



かったことを。ペルルと一緒に旅に出た、サティア（アストライア）の守護妖精、パズモ・ネメシスのことを。

いつもは無愛想なのに、一瞬だけとはいえ変化が起きた。偶然にもそれを見たエクリアは、僅かな表情の変化した理由を察して、素直に疑問を口にする。

「そんなことも知らないのか？　十数年前の出来事なのだが……デイストピアに、知り合いでもいたのか？」

「……ああ」

セリカの短い返答に、エクリアはもう何も言わなかった。気を利かせた訳ではなく、興味がないからだ。彼女は今、たった一つの目的のためにセリカの後を追っている。

不思議なことに全ての使い魔が女性のセリカだが、エクリアはセリカの仲間なんてものではない。

では何故、膨大な魔力を持っているものの、今は『ただの人間』であるエクリアがセリカに続いているのか。それは複雑な過程が原因の、至極単純な理由だった。

「……」

何を思ったか、前を進んでいたセリカが後方を振り返る。視線の先にいるエクリアは砂漠の熱気に意識が薄らいでいるのか、少し遅くなった速度で歩み続け、自分を見ていたセリカに気付いた。そして、

「やっと、殺してくれる気になったか……?」

「いや。その気になつたらな」

何度目か分からないその質問に、その答えもまた変わらない。幾度と繰り返されたやり取りに、これまた何度目か分からない溜息を誰かが吐きそうになつた、その時。

「見いゝつけた」

「っ!?!」

突如、どこからかそんな声が聞こえた。

永い年月で培われた戦士としての経験による賜物か、セリカは一瞬で周囲の気配を探り、抜け目なく空も見上げる。かつて地の魔神と呼ばれたハイシエラは、セリカと同じように周囲の気配を探り、上ではなく地面の下に意識を集中させた。

しかし、いくら探しても見つけることは叶わない。

「くっ、何者だ!?! どこにいる!?!」

エクリアはその内心を隠すことなく大いに焦り、怒鳴つた。なぜならば、セリカ以外の存在に殺されるわけにはいかないからだ。

かつてブレアード・カッサレによつて姫神フェミリンスにかけられた、『殺戮の魔女』の呪い。

その呪いは強力で代々に伝わり、遺伝するかのようになつてフェミリンス一族の長女全員

が、この呪いによって苦しめられてきた。エクリアもその一人だ。

この呪いの恐ろしいところは、呪が発症した張本人が死ねば、本人に子供がいなくても『フェミリンス』であれば次代の長女に呪いが受け継がれてしまう、ということだった。

——— 殺戮の魔女の呪いによる悲劇は、私で終わらせなくては。

そう考えるエクリアにとって、誰かに殺されるというのは、到底許容できるものではない。

唯一の例外が、『神殺し』たるセリカ・シルフィルだ。神を殺して身体を手に入れたという規格外な彼ならば、呪いをも断ち切ってくれるのではないか。

『凶腕』に助けを請うのも選択肢の一つだったのだが、デイストピアが滅亡していることを知った時から、何も望まなかった。そもそもフェミリンスと特別な繋がりを持つていたらしいが、それでも魔族を嫌う自分が魔族に助けを請うなどありえなかっただろう、とも思っている。

そんな想いで、エクリアはセリカに殺されようとしている。必要以上に姿なき声に過敏になるのも、無理がなかった。

「ハハハだよ、ハハハ」

真正面から聞こえた声に反応し、二人は揃って武器を構える。

セリカはハイシエラが封印されている魔神剣を。エクリアは連接剣を。

(ぬ? こやつはまさか……)

「ハイシエラ……?」

ハイシエラが何かに気が付き、セリカはどうしたのか聞こうとした。だがそれよりも早く、ソレは姿を現した。

「約300年振りになるのか? 久しぶりだな、セリカ」

空間が歪む。そこから出てきたのは、黒衣を着た強大な存在だった。

「何者だ……いや、貴様は何だ!」

ニヤニヤしてはいるが、長い紫色の髪と顔の形から、美人ではあるとエクリアは思った。

だがそれ以上に、そいつの身体から溢れ出ている魔力に怯えた。

神を想像してしまうほどに莫大な魔力量に怯えたのではない。それは目の前にいるセリカも同じだったから。慣れはしないが、恐怖はもう覚えない。

なら、一体何に怯えたのか。それは今まで相対した者の中の誰よりも、最も禍々しい質の魔力だったからだ。

「お前は……ゼアノス、か?」

(あやつ、最後に見た時と比べれば、随分と魔力の質が変化している。セリカ、一応は気

を付けておくだの)

「……」

だがそれも、ハイシエラもしくはセリカの声を聞いたからか、恐ろしいものではなくなっていく。

「あー、すまない。少しムカついた出来事があつて、機嫌が悪くなつてたみたいだ……という訳でご二人、その物騒なもんは仕舞つてくれない？」

「……わかつた」

相も変わらず表情だけはニヤニヤしており、雰囲気だけがサツパリと変わった。セリカはあっさりと構えを解くが、エクリアからすれば何を考えているか分からない相手だ。自分では敵わないと分かつてはいるが、警戒は怠らずに武器を手に持ち、魔力を張り巡らせる。

それに対してセリカにゼアノスと呼ばれたその存在は、そこでようやく表情を変えて、エクリアと目を合わせた。

「俺を警戒するのは勝手だが、俺はお前が嬉しいがるだろう事柄を教えに来ただけだ。悪いことも含めて、だけど」

「突然現れた正体不明者からの言葉を素直に聞け、と？」

「なら自己紹介でもさせてもらおうか。デイストピアの魔神が一柱、ゼアノスだ。よろ

しく」

そこでもう一度、エクリアは驚きで目を見開いた。

「デイストピアだと？　だがあそこは十数年前に……」

「ああ、国自体は滅んだと言つても過言ではない損害を受けたよ。ただし大多数の住民が、あちこちに逃げて生き延びてゐるって訳だ」

ふふんと得意げに笑つて見せるゼアノスだが、それなりの付き合いがあつたハイシエラはその態度が仮面であることを、何となく察した。飄々としているが、自分のいた国が壊されて黙つていられる性格ではないことを知つていたからだ。

（嬢ちゃん、今のこやつ相手には言葉は選んだ方がよいぞ。気楽な言動じゃが、恐らく内心はその正反対……激動に駆られておる。デイストピアの話題は避けた方が無難だの）
何よりも、ハイシエラはゼアノスのあの表情を知つていた。

魔神としては比較的安全だが、その分、怒らせた敵対者には無慈悲なまでに撃滅させていた、当時の顔と雰囲気。それらが現状で似ているのだ。

（……ああ、分かつた）

そしてエクリアはハイシエラのそんな忠告を、素直に受け止めた。一時期は『姫將軍』と呼ばれ、王族として行動していた事もあつた。腹の化かし合いが得意と言うほどでもないが、少なからず経験があつたので、察するのは容易だつた。

「無事だったのだな、ゼアノス」

そこで狙ったのか偶然か、セリカが話題を変えて話しかける。狭間の宮殿の出来事において最後の最後で気絶してしまったためか、人一倍気にしていたらしい。

「あの後いろいろあったけど、何とかな。ペルルとパズモの無事も確認した。それと、あの時は他に手がなかったとはいえ、強引過ぎた。すまなかった」

「気にしていない」

「そっか。なら俺も、もう気にしないことにする」

狭間の宮殿にてセリカを最後に気絶させたことについて謝るが、そう言い合つて互いに笑う。片や唇を大きく弧を描き、片や注視しないと分からないほどに小さく笑った。

どっちがどのような笑い方をしたのかは、言うに及ばず。

「それで、『見つけた』と言っていたが……俺を探していたのか?」

「一応は無事を伝えるために探してたけど、さつきも言ったように本命はお前じゃなくてそっち。フェミリンスの方」

「さつきも言ったが、魔神が私にだど?」

指を差されたエクリアは動揺し、再度警戒する。魔神が自分に用があるなど、フェミリンスとブレアードの因縁関係しか思いつかないからだ。

「そう、お前に。悪い報告と良い報告。二つあるけど、どっちから聞きたい? どちらも

凶腕から伝えるようになって言われてるんで、聞かないってのは無しで」

そう言ってゼアノスは、指を二本立てた。

「凶腕からフェミリンスにということは、あの伝承は本当だったということか……なら、できることなら聞きたくないが、悪い方から頼む」

「はいよ。えっと、これはメンフィル王国で流れてる噂なんだけど、セリーヌ・テシユオスが死んだらしい」

「——は？」

「どことなく後悔したようなエクリアに、全然気にしない様子のゼアノスは、それこそ天気の話をするかのように気軽な口調で、とんでもないことを口にした。

「ま、待て。一体どういうことだ!？」

「詳しくは俺も知らん。ただ、メンフィルでは今一番の話題になっている」

「そん、な……」

エクリアはそう呟いて、両手と両膝を地面に着く形で倒れてしまった。

彼女は三人姉妹の長女だった。だが殺戮の魔女の呪いに負け、少し前に末の妹を殺してしまっただけ。そして今伝えられたのは、次女の死。絶望してしまうのも当然で、精神が不安定になって立ち直れなくなりそうになった。

次の、この言葉を聞くまでは。

「んで、次にお前が……たぶん嬉しくなるような内容だ。イリーナ・マーシルンは生きて
いる」

「……っ!?!」

ピクリと身体を震わせ、下を向いていた顔が徐々に上がる。

「例の呪いのせいで殺しかけてしまったらしいが、まだ生きていた。そしてお前が去つた後にメンフィル王が凶腕に助けを求めた。あの王様もフェミリンスの血統だったらしく、古の契約によって助けた、ということらしい。ま、命一つ救ったんだし、しばらくの間はもう助けるつもりはないって本人も言ってたけど……セリカが近くにいるんだったら、凶腕に助けてもらわなくてもある意味安全かね?」

「そうか、凶腕が……そうか……」

まるで死んだような目だった瞳に、生気が宿る。

「……まあだからこそ、セリーヌ死亡の噂が余計に蔓延しちまったんだけどな。」

「そう言おうか一瞬迷ったゼアノスだが、事実にしてもそんな変なことを喋れば間違はなくセリカ（に付属してるハイシエラ）に咎められ、面倒なことになるのは間違いない。」

結局、心の中で思うだけにした。

「……」

「エクリア……?」

「そうか、と何かを納得してから何も言わなくなったエクリアは、いきなり倒れた。セリカが思わず抱き上げてみれば、気絶しているのがわかる。」

「この猛暑は人間にはキツイだろ。その肉体的疲労と、今の精神的な疲れが原因だな」
 エクリアが倒れた原因の一つであるゼアノスは無情にも淡々と述べ、どうする？ とセリカに視線で問う。正直なところ、色々と思うことがあるのでフェミリンス一族には死んで欲しくない。というのが彼の本音ではある。

(なら、嬢ちゃんが休めるように涼しい場所へ送ってもらったらどうなの)

「そうだな……ゼアノス、涼しい場所へ送ってもらえないか？」
 「今、ハイシエラが助けただろ？ あいつもあれで結構気が回るよな」

ケラケラと笑いながら手を振り、セリカの隣に『歪みの回廊』を展開する。

その際に『それは褒めてるつもりか？』など剣に封印されている魔神が何かを言っていたが、言われた本人は『ハイシエラの声は聞こえない設定』なので、無視した。

「あ、ちよい待て」

セリカが礼を言ってからエクリアを抱いて回廊に入ろうとした時、ゼアノスが待ったをかける。

「ひとつ忠告。そのフェミリンスの娘を連れてくなら聞いとけ……『深凌の楔魔』には気をつける」

「深凌の楔魔？」

「そう。かつてブレアード・カッサレという魔術師に召喚され、姫神フェミリンスに戦争を挑んだ10の魔神の総称だ。この前、フェミリンスの力を継いだその娘が敗れた。それによって、封印されていた魔神が復活した。そいつらの一部はフェミリンスを憎悪している可能性が高い」

「そいつらの強さは？」

「三柱ほど面倒なのがいるが……お前以下なのは確信を持って言える」

「なら今までと大して変わらない。少々、敵が増えるだけだ」

セリカはそう言い切り、一応は魔神であるゼアノスの展開した回廊に、迷いなく入っていく。

それを見て愉快になったのか、ゼアノスはクツクツと笑い、呟いた。

「個人的な事情で、今回ばかりは敵対するかもしれないな……その時はよろしく頼むよ、セリカ」

—砂漠にて二つの出会い—

深凌の楔魔。

それは俺を含めた10の魔神による、ひとつの組織だ。ブレアードが創造もしくは召喚した魔神の強さはピンキリだが、それでも魔神が二桁もおり、しかもそれらが手を組んでいるというのは、大国に匹敵する戦力を意味している。過去にフェミリンスと戦い、死者が一人もいないというのはその証明だろう。

いくら地方神とはいえ、『神』であることに違いはない。神を相手に互角で戦えるとなると、それこそ最低でも大国クラスの質と量の揃った戦力が必要だ。しかも敵対している神と同等以上の神か、神に並ぶ力を持つ者が必須だ。

それを考えると、ブレアードはやはり優れた術者だと思う。性格はともかく。まず魔神を創るという事自体がぶっ飛んでるし、力を抑えてた俺はともかくとしてザハーニウやパイモンを召喚したことも、驚きの一つだ。

とはいっても、彼は優れた術者だが魔神の視点から見ればそこまで強くはない。せいぜい、高評価しても中の下だ。そしてそれはもちろん深凌の楔魔も同じことが言える。

そこで突拍子もなく始めるが、そんな深凌の楔魔とブレアードについて、『今何をしているのか』と『俺からの評価』を、勝手ながら提示してみる。俺自身のことは除外して。まずは俺たち深凌の楔魔の創造主、ブレアード・カツサレ。

現状：『野望の間』というブレアード迷宮の、最深部で力を溜めている。

評価：大魔術師を自称することはあり、人間からみれば超常の存在。だが『神核』を持つ者としては、弱い部類に入る。外道で最低な性格だけど、個人的には好感が持てるタイプ。行動や過程はともかく、諦めないところとか。

でも強さを見極めるのには苦手っぼい。

続いて深凌の楔魔・序列1位、ザハーニウ。

現状：ブレアード迷宮の一つで深凌の楔魔の本拠地、『ヴェルニアの楼』の最奥にいる。どうやら、封印は解けたらしい。

評価：深凌の楔魔でもトップクラスの強者。闇夜の眷属の将来を考えられる、王の器を持つている魔神。とてつもない巨躯。

俺と同じく『神の墓場』生まれで、現世に留まるには特別な儀式が必要であることが俺との違い。

俺が敬意を払っている、数少ない人物の一人。

次は深凌の楔魔・序列2位、カフラマリア。

現状：行方不明。どこにいるのか、さっぱり分からない。

評価：ザハーニウと並ぶ、もしかしたら超えているかもしれない力を持つ魔神。

主に火炎属性の魔術を多用し、場合によっては隕石召喚すら使う。格闘戦でも炎を纏った打撃を放つなど、炎を中心とした攻撃をしてくる。

そこまで詳しいわけじゃないので、これくらいしかない。つか、何でブレアードに従っていたのか分かんなかった。

深凌の楔魔・序列3位、ラーシエナ。

現状：ザハーニウと共に封印が解け、『ヴェルニアの楼』の最奥で待機している。

評価：翼をみて推測するに、墮天する前はたぶん中級程度の天使だと思う。だがそれも魔神になって神核を得ていることから、今では上級天使くらいの強さだろう。ただ、一撃の威力は微妙。多彩な連続攻撃を得意としている。

ブレアードに召喚されたが、むしろ俺に従っていたような気がする。頭の固い生真面目な性格で、ルシファーが墮天しなければ墮天使になることはなかったと思う。

これから頼ろうと思っっているくらいに信頼しているが、ブレアードに封印されてから今までの間、俺は彼女をずっと放っておいた訳で……恨まれてないか心配。

深凌の楔魔・序列4位、グラザ。

現状：故人。彼が死ぬってことを忘れてて助けられなかった。無念。

評価：深凌の楔魔で、唯一の友人だった男。

魔力も高く、ラーシエナほどではないが強かった。だがこれから先のことには関係ないので、彼の話はこれだけにする。

深凌の楔魔・序列5位、エヴリーヌ。

現状：封印が解けてからしばらく経つが、ずっとフェミリンス神殿で暴れまわっている。

評価：見た目は子供、頭脳も子供、精神的にも子供、強さは中級魔神。心身ともに幼いのにも過剰な力を持っているためにちよい厄介。癩癩を起されると面倒になる。あと、将来的にはラーシエナに迫る実力を手に入れる潜在能力を秘めているように見えた。フェミリンスを恨んでいる一人。

俺を『お兄ちゃん』と呼んで慕ってくれた子だが、贅沢を言えばもう少し成長してから戦場に出したい。

封印されていた場所がフェミリンス神殿だったために、色々な意味で助けられなかったことを申し訳なく思う。ここ数百年、彼女を連れていたら良い意味で成長させられたはずだ。とにかく、これからに期待。俺を手伝ってくれるなら特に。

深凌の楔魔・序列6位、パイモン。

現状：つい先ほど、フェミリンス神殿でエヴリーヌと合流した。近くにイリーナが

いるためか、暴走しそうなエヴリーヌを抑えている。

評価：深凌の楔魔の中で、一番敵にしたくないタイプ。単純な戦闘力ならカフラマリアの方が上だと思うが、頭の回転が速く優秀な策で搦め手などを使ってくるので戦い辛い。

だが、前記の通り一番敵にしたくはないが一番信用している人物だ。

正直に言うと、こいつの序列が6位というのは納得いかない。まあ目立たない立ち位置にいるから、暗躍するのには動きやすいだろうけど。

深凌の楔魔・序列7位、カファル。

現状：どこかの誰かと同じく、行方不明。どこかに封印されている可能性がある。

評価：魔獣の王という肩書きが良く似合う、ザハーニウに次ぐ巨体を誇る馬の魔獣。

魔術に関しては全然ダメで、その身に纏う炎もカフラマリアには劣るなど、魔神としてはあんまり強くない部類だと思う。

身内に優しく敵には容赦なしという、そこら辺は動物とあまり変わらない性質。だが知能は人並みに高く、ラーシエナと特に仲が良い。

深凌の楔魔・序列8位、ゼフィラ。

現状：俺がいる、このマータ砂漠のどこかにいる。そこで封印されてたようだが解けたらしい。

評価：たぶん、深凌の楔魔最下位の実力者。俺の配下の歪魔ゲラーシムの方が強いんじゃない？

睡魔族のような格好をしているが、魔神らしいその傲慢な性格のせいで、ぶっちゃけもつたないことになってる。こう言つてはアレだが、最も関心が湧かなかつた。典型的な下級魔神、といったところか。所詮は俺の推測にすぎないけど。

フェミリンスを恨んでいる一人。

深凌の楔魔・序列9位、デアアーネ。

現状：メンフィル王国にいる。捕らわれの身（？）。

評価：グラザに次いで良好な関係だったが、友……ではない。

己の実力を隠してはいたが、それでも精々カファルーかエヴリーヌと同程度。彼女の必殺技である『キル・デアアーネ』は自分の名前を入れてあるだけはあるだけあり油断出来ないが、範囲が狭いので避けるのは案外簡単だ。

ちなみに、俺とグラザとデアアーネの3人はブレアードの封印から逃れた組であるのだが、こいつだけは途中で封印されてしまい、それ以降は何故か蟹が苦手になつたらしい。

フェミリンスを恨んでいる一人で、色々とゼフィラと似通っている。でも本人同士は犬猿の仲。

………。

とまあ、長々と偉そうにかつての仲間（だよな？）のことを評価していたのは、深凌の楔魔・序列10位の俺ことゼアノスです。

先述の通り、俺はマータ砂漠（にある迷宮）にいる。2時間くらい前に、倒れてしまったエクリア・フェミリンスをセリカと一緒に近くにあるダンジョン、『日陰の遺跡』に送ったばかりだ。俺が今いる所とはまた別の場所だ。

あそこには『魔獣ハグネ』という植物を取り込んだ魔獣など、ブレアードが創った合成獣が何匹か生息しているんだけども……せいぜい下級悪魔から中級悪魔程度の強さだから問題ねえだろ。

そして深凌の楔魔について何故あそこまでグダグダ語っていたのかと言うと、ほとんどのやつらがブレアードからの封印から解き放たれたからだ。懐かしい魔力が様々な場所から一斉に上がったから気付いた。何名かは何処にいるのかさえ分かってないけどね。

ただそれだけで、深い意味はありません。

ここから向かって東北にはセリカ達を送った遺跡があり、その更に北にはフェミリンス神殿がある。そのフェミリンス神殿にはさつきまで、メンフィル王国の王でありグラザの息子である半魔人の、リウイ・マーシルンがいた。彼は『幻燐の姫将軍シリーズ』の

主人公でもある。

リウイと一緒にフェミリンス一族で彼の妻であるイリーナ・マーシルンが。そして幼馴染らしい、カーリアンという闇夜の眷属の三人で、エヴリーヌが蘇った事によって起きた異変を見に行った際に対面。イリーナを見て殺そうと手下を放つも、呆気なく敗北。精神的に子供っぽいエヴリーヌは癲癲を起こして今度は自分が動くとしたが、転移してきたパイモンによって止められてしまう。

……という一部始終を、俺の命令で上空から傍観していたブランシエの目を通して見ていました。とりあえずパイモン、グツジヨブ。折角助けたのに5年も経たない内に死ぬとか勘弁してほしい。助けた時にさり気なく強化したから滅多なことでは死なないが、魔神相手なら死ねる。

「……戻ってきた、か」

セリ力達が南下している気配がして、思わず呟いた。彼らが向かう先にはパラダという街がある。

『神殺し』と『凶腕』はここ数百年間、表舞台に出ていない。だがこれから、この二つの名前は表に出るようになる。好き勝手に動く俺はともかく、セリ力は可哀想だよなあ。目立ちたくないのにさ。力ある者の宿命、つてやつか。難儀なもんだ。

「それにしても、あいつは一体どこにいるんだか……」

俺はそう独り言を呟いて、初めて訪れる迷宮内の探索を再開した。



私がいるのは、『バラダ』という街。一面を砂によつて覆われているマータ砂漠の中で、珍しくも人の住める場所だ。

幻燐戦争でカルツシャの王女は闇夜の眷属の国であるメンフィル王国に、半魔人の王、リウイ・マーシルンに敗れた。そのせいで最近ではその戦争の影響で居場所を失ってしまった亜人やら流れ者やらが何度か来ているので、治安は悪い。私は持ち前の明るさで、全く問題にならなかつたんだけど……

「はあ」

小汚い裏路地に入って、思わず溜め息をひとつ。

やるべき事が終わって暇になって、その暇を潰しにあつちにフラフラこつちにフラフラ。そして気が付いてみればバラダの街だ。

私つてば、暇だからとはいえ何でこんな所にいるんだろ。さっきのはそんな意味を込めた溜め息だ。

だがそんな考えも、この会話を聞いた途端に吹っ飛んでしまった。

「……?　どうかしたか」

「外套の中から服がちらちら覗いている。街中だと余計目立つな」

「……他に着る服など、持っていない」

「何とかしないと……お前もその格好では暑いだろうし、目立つ装飾が少しはみ出ている」

女性のような、低くはない声が二つ。何やらもう一人ほどの声が聞こえたような気がしたが、声が出た先にいたのは二人だけ。そのことを疑問に思いながらも、私は明るく笑顔でその人達に話しかけた。

「ねね、ちよつといい?」

「……俺達か?」

「こそ、君達」

少しばかり警戒している様子の赤毛の剣士に、顔や体全体を隠すかのように外套を覆っている女性。

「何か用か?」

「用というかさ、君達こそ、こんな道端でうるちよると何やってんの?　ここはそんな安全な場所じゃないよ。腰に見えるものからして剣士らしいけど、腕は立つの?」

「それなりにな」

それなりに、か。ずいぶんな謙遜だね。デイル||リフィーナ全体でも最強クラスなのに。それとも、単に目立ちたくないだけかな？

「ふくん。じゃあそつちの人は……上品な歩き方からして、どつかのお姫様かな？ 最近ではどこからか逃げてきた貴族とかも結構いるから、その独特な歩き方、覚えちゃつたよ」

あははと笑いながら指摘すると、その上品な女の人は後ろへ下がってしまった。

(この娘、ちよつとした動作で見抜きおつた。鋭い観察眼だの)

(だが私からは隙がないようには見えないぞ。まさかとは思うが、わざと……か?)

(いや、俺から見ても隙だらけだ。できればエクリアが着られる服を借りたいのだが)

口は全く動かしていないのに聞こえる三人の声。間違いない、これは心話だ。だからなのか、私に聞こえているとは思ってないらしい。でもおかげで彼女の名前が分かった。エクリアだね。セリカは前から知ってたけど……ってちよい待ち。三人の声? ここにはこの二人しかいないはずなのに……あ、そっか。魔神ハイシエラ、だっけ。まあ気にしなくてもいいか。

私が隙だらけなのは、私が彼らを警戒してないからだ。意味なく人を斬るようなやつじゃないって知ってるしさ。

「何かお困り? 私にできる事なら、少しは手伝うけど?」

「……分かった。なら少しの間でも、静かに過ごせる場所を教えてください。それと、出来れば彼女に着させられる服があれば分けて欲しい」

少しだけ考えたようだけど、どうやら頼ることを選んだみたい。

静かな場所は私が使ってる宿屋の紹介で良しとして、服は……ん？

（セリカ、よいのか？）

（ああ。だがこれ以上は関わらないつもりだ。エクリアもそれで良いか？）

（好きにしろ……）

どうやら彼の案は採用されるようです。にしても『関わらない』ときたか。

「とりあえず私が泊まってる宿に案内するよ。こっち来て」

手招きして裏路地から出るように促して、案内するために彼らよりも前を歩く。

「でもごめん、服は生憎と持ち合わせがないんだ。友達なら持つてるだろうからその娘

に聞いてみるよ」

「そうか、助かる」

案内するのは『砂猫亭』という宿屋。ここに住んで更には仕事場としても使っている、

この街唯一の友人がいるのだ。いればいいけど……

「あら、こんな時間に来るなんて珍しいわね。どうしたの？」

「あ、リンユ。よかった、君に用があったんだ」

「私に？」

私が探していた人物は、運良く丁度外から帰ってきたようだ。

彼女の名前はリンユ。結構人気のある娼婦で、街に来たばかりの私に色々世話をしてくれた、優しい心の持ち主だ。人間の中では一番好きだね。

どんな用なのかと聞いてくるリンユにセリカからの事を紹介しようとしたが、そこで思いついた。

「そういえば君らの名前、聞いてなかったね。教えてくれない？」

互いに自己紹介すらしていなかったことを。それでもし普通に紹介していたら、何故知っているのかと、不審に思われるところだった。

「そうだったな。俺はセリカ。こっちは……カヤ、だ」

少し間を空けたあとに教えてくれたが、エクリアという本名を知ってる私からしたら偽名だとバレバレだ。まあつい最近までやってた戦争の当事者で、敗戦国の王族。しかも姫將軍だもんね。

偽らなかつたら大変なことになってただろうし、と思い、突っ込まないでリンユにそのまま服のことについて頼む。

あと『カヤ』って名前、どっかで聞いたことあるような気がするんだよね。ハイシエ

ラに心話で質問されたセリカ曰く、『誰の名前なのか知らないが、ふと頭に思い浮かんだ』らしいけど。

一通りリンユに話すと、案の定彼女は快く引き受けてくれた。情勢にも鋭い彼女はエクリアのことを何となくだが察してくれたようで、深く聞かないとも言っていた。その際に、常に仏頂面だったエクリアの顔に少しの安堵が出ていたのは、恐らく全員気がついたと思う。

「さて、と。リンユ、そろそろ私も仕事に行ってくるよ。色々とありがとね」

「いいわよ。ただ本番はしなくていいから、また客寄せお願いね？」

リンユのそんな簡単な報酬に苦笑いしながらもその場を離れようすると、セリカが私を見ていた。何だろう。

「どうかしたの？」

「宿とリンユを紹介してくれた事について、まだ礼を言っていなかったと思っていな」

「あー、そっか。でも気にしなくていいよ。お礼ならリンユにね」

「そうか……そう言うのならさうしよう」

出会った当初から変わらない表情で、セリカは頷いた。

……エクリアは常時仏頂面だけど、セリカは常時無表情だな。なんて、くだらない事

を考える。

「それじゃ、良い旅を。でも、君達とはまたどこかで会うような気がするよ」

笑顔で言う私に、セリカは極僅かに表情を変えた。困ったような顔……かな？

ハイシエラが『無いだろうがの』と言ったので、それと同じ考えだったからだと思う。でもねハイシエラ。私達は必ずまたどこかで会うことになるよ。だって私は――

「私の名前は、ノワール。また会おうね、お二人さん！」

――凶腕セアの、主ノ様の眷属スなんだから。

—動き出す深凌の楔魔—

セリカとエクリアがノワールと出会う、数日前。メンフィル王国の城の中で、一組の男女が話し合いをしている。男女の話し合いといっても、色のある話ではない。

「何用だ、メンフィル国王。突然呼び出しおつて、遠路飛んでくるのも楽ではないのだ」
「少々聞きたいことがある。『深凌の楔魔』について知ってることを教えてくれ」

反抗的な言葉を放つ女は、魔神ディアーネ。もう一方の質問した男は、リウイ・マーシルン。以前は敵対していた関係だが、今ではディアーネが嫌々ながらもリウイに下っている。

「……えらく懐かしい響きだ。我や御主の父だった亡きグラザが、元はどのような関係だったのかは知っておるな？」

リウイの質問に対して目を細め、遠くを見るような表情を見せ、確認するかのよう
に尋ね返す。

無論リウイは知っており、また覚えていた。

「たしか姫神フェミリンスと戦うため、ブレアードという魔術師によって召喚されたの

だったな」

「そうじゃ。ブレアードの呼び出した魔神は、我を含めて十柱。それらこそが、『深凌の楔魔』と呼ばれておった」

「千年もの昔、姫神フェミリンスと魔術師ブレアードは覇権を掛けて三度争ったと聞いた。その際にお前たち魔神を召喚し、レスペレント地方の地下に大迷宮を構築してフェミリンスに打ち勝った」

深凌の楔魔の、フェミリンス戦争と言われる戦争の歴史をリウイは軽く紡ぐ。

「それでだ。魔神の事をもっと聞きたいが、エヴリーヌとパイモンを知っているか」

「小娘と……賢しい男だな、知っておるぞ。ゼアノスが認めているあの男はともかく、あやつが我より上位で扱われていたことは今でも不愉快だ」

「どういうことだ？ それにゼアノス、とは？」

己と他者の序列を思い出してイライラしているディアーネに、リウイは無遠慮に再度問う。

「ブレアードは呼び出した我らの力を勝手に見定め、下らぬ序列を決めて扱ったのだ。ゼアノスというのは、『深凌の楔魔の』一人だ」

「あいつらとお前、ゼアノスという魔神と俺の父……グラザの序列は？」

「エヴリーヌが序列五位、パイモンが六位で、グラザは四位。我とゼアノスは……それぞれ

れ、九位と十位だ」

所詮はブレアードが勝手に定めただけだが、と苦々しげに序列を語るディアアーネにリウイは驚いた。先程ディアアーネは、『ゼアノスが認めたパイモンならともかく』と言った。小娘と称したエヴリーヌが自分より上にいることが気に食わないのは分かったが、ゼアノスという十位の魔神が認めたからパイモンが六位でも納得しているというのは、かつて苦戦させられた魔神の発言とは思えなかったのだ。

彼女も言った通りに勝手に決められたものだとしても、己より下の序列であるはずの存在だ。

一体どのような魔神なのか。そう思ったのが分かったのかディアアーネはフン、と鼻をついた。

「奴に関しては完全にブレアードの読み違いだ。ゼアノスは序列こそ十位だが、『深凌の楔魔』の中でも最強の実力者だ。何せこの我とグラザ。両方と同時に戦い、そして勝つたのだからな」

その闘争は、フェミリンス戦争が終わって数年後の事だった。偶然レスペレント地方に訪れていたゼアノスはグラザと再会し、更にはディアアーネとも出会った。やることなく暇だったゼアノスはこれ幸いにと、魔神二柱を挑発した。グラザはその挑発に乗ってくれて、プライドが高くて沸点が低いディアアーネは言うまでもない。

三つ巴にはならなかった。生意気を言った元同僚を懲らしめ、もとい殺そうとしてゼアノスと戦闘になった。だがその結果は、ゼアノスの勝利。連携が皆無だったとはいえども、魔神が2対1で負けるなど、普通ではない。

だからこそ、その時点でデИАーネはゼアノスの認識を大きく改めた。同格の好敵手から、越えるべき目標に。フェミリンスへの恨みはあるが、そんなものは二の次だ。さもなければ王妃がフェミリンスの直系であるこの国に来るはずもない。

だがその戦闘により疲労していると運悪くブレアードに見つかり、ゼアノスとグラザを除いた他の深凌の楔魔と同じように封印されてしまったというのは、完全な蛇足である。

「恐るべき驚異的な戦闘力だな……そのゼアノスは今どこにいる」

「知らぬ」

「そうか……しかし何故、今頃になって奴らは現われたのだ？」

「先の大戦でフェミリンスの力が弱まったせいであろう。裏切ったブレアードの魔力だけでなく、フェミリンスも封印の媒介にしていたからな」

先の大戦。すなわち幻燐戦争の最後は、フェミリンスの力を宿したエクリアとの戦いだった。その勝利によって今度は魔神を起してしまったらしい。リウイはそう思考しながら、質問を続ける。

「奴らの目的は何だ。エヴリーヌとパイモンは共に行動しているようだったが」

「我が知っているわけが無かるう。これはゼアノスにも言える事じやが、召喚された時は契約によって縛られていた。だが今となつては勝手に動いていよう」

「かつてのお前のように、か」

「ディアーネはグルーノ魔族国という国を建て、様々な国を脅かしていた時がある。リウイの言った『かつて』とは、その時の話だ。それが分かつたらしいディアーネは肯定した。」

「領土を魔神に好き勝手されてはたまらん。連中の目的を知る必要があるな……」

「目的のう……パイモンは何を企んでいるか常に分からぬ男。エヴリーヌは気分のままで大して考えておらぬ。が、もし奴が目覚めているなら、何かを目指して動いているかもしれない」

「誰のことだ」

「名をザハーニウ。序列は一位……『深凌の楔魔』を束ねし魔神だ」

「恐ろしげに魔神の名前を紡ぐディアーネだったが、その声に震えはない。」

「敵対するのであれば精々気をつけるがいい。奴はゼアノスに次いで格が違うぞ」

「憶えておこう。さし当たつては拠点や居場所を突き止めるため、動きを掴みたいところだが……」

「ならばフェミリンス直系の……いや、フェミリンスに憎しみを抱いているのは性格的にゼフィラくらいか」

何か提案を出そうとしていたデИАーネだったが、言い切る前に自分で否定した。今でこそフェミリンスをどうでもいい存在だと割り切っているデИАーネだが、それは前にゼアノスと戦ったからである。もし戦わずにいたら、自分もフェミリンスを憎んでいたらままだ。

故にこそこの提案だが、よく考えれば己以外でフェミリンスを憎むといったらゼフィラしか思いつかない。エヴリーヌは微妙だが、アレはフェミリンスではなく光側を嫌っているだけだ。

「ゼアノスに感謝せねば。奴がおらんだったら、ゼフィラと同程度になっていたのか……」

「……ゼフィラとやらも、『深凌の楔魔』か？」

感謝という単語を暴虐デイアーネの女魔神が使ったことに驚きながら新しく出た名前について聞くと……その魔神は肩を震わせ始めた。

「奴の序列は八位じゃが……エヴリーヌ以上に、こやつよりも我が下位であることが何よりも気に食わん！」

怒声が発せられた途端、デИАーネから威圧と魔力が嵐の如く周囲に放たれる。リウ

イは間近でそれを受けて一瞬だけ怯み、思った。

このディアアーネをして『格が違う』と言わしめた、ゼアノスとザハーニウ。敵になるとしたらどれほどの障害となるのだろうか——と。

「……そのゼフィラじゃが、警戒はしておくのだな。運が悪ければフェミリンス求めてこの城まですつ飛んでくるぞ」

「なるほど……では当面は放っておく。ゼフィラとゼアノスについては不明だが、他の魔神はザハーニウとやらが目覚めているのであれば、しばらくは動かないだろうしな」
苛立ちも少しは収まって冷静になったディアアーネから警告を聞くも、深凌の楔魔に対しては動かないという態勢を取った。

「ほう、何故そう思う」

「少し聞いただけでも、『深凌の楔魔』が個性的な魔神の集まりだというのは理解できる。自分を除いて九柱であり、自分以上の強者もいる。そんな連中を束ねていた者が慎重ではないはずがない」

「……」

リウイの答えにディアアーネは何も言わないが、その表情で正解だと分かる。

「そう思うのならば、御主の好きにするのだな。では我はそろそろ帰るぞ。これ以上ここにいては、嫌な『匂い』が鼻に染みついてかなわぬ」

返事を聞かずにそのまま飛び立とうと翼を広げるが、何かを思い出したかのように振り返った。

それを見て、リウイは嫌な予感がした。デイアーネがニヤニヤと笑っているからだ。「ゼフィラの件じゃが、襲撃してきたのなら手籠めてみればよかろう。奴はグラザに惚れておったからな」



マータ砂漠にある、『肅鎖の岩塩坑』。そこは知る者こそ少ないがブレアード迷宮と呼ばれる大迷宮の一つで、『深凌の楔魔』が一柱、流砂の魔神ゼフィラが本拠地として扱い、その結果封印されてしまった場所でもある。

その最深部たる砂鏡の間には、三柱の魔神が集っていた。

「私だけでなく、ザハーニウやエヴリーヌにラーシエナさんも復活しましたので、彼女にも合流してもらおうと思っていたのですが……」

「来てみればこうなっていた、と?」

「いえ、先客がいたようでした。フェミリンズの子孫を捕らえて力を取り込もうとしていたらしいのですが、その望みは叶うことなく、その者にゼフィラさんは負けてしまっ

たようです」

三つの影の内、話しているのは二つのみ。もう一人の魔神は、地面に突っ伏して気絶している。

『『ようです』って……どうせお前、その戦闘は見てたんだろ?』

「あ、さすがはゼアノス様。やはり分かりましたか」

「俺じゃなくても分かるぞ、パイモン」

それしてもようやく見つけたと思ったらこれかよ、と、苦笑するパイモンに向き合う。

ゼアノスはゼフィラを探してこの迷宮を何日も訪れたのに、何故か毎回ゼフィラは外出しており、一度も会えなかったのだ。

「で? ゼフィラを倒したのは、どんなのだった?」

「赤毛の凄腕剣士でした。魔術も使うようでしたが、その魔力は神に匹敵どころか神に並ぶほど。常に無表情であったものの、まさしく女神のような顔立ち……以上が、私が見た特徴です」

(……ああ、セリカか。となると、捕まったのはエクリアかな?)

パイモンが口にする情報に、ゼアノスは心の中で答えを出した。パイモンは封印から解かれた直後なため、『神殺し』という存在をまだ知らないのだ。

「だけどそんなやつに、何でゼフィラは攻撃したわけ? 魔神としてのプライド、なんて

言ったらそれまでだけど」

「それもあるでしょうし、フェミリンスの娘を捕らえていたので高揚していました。そして何よりも……相手が人間だから、でしょうね。魔力の感知もしていなかったようですし」

「ハッ、なるほどねえ……『人間だから』と侮ったか」

クツクツと軽く笑い、しかし目は笑っていないゼアノスを見て、パイモンは寒気を感じた。

『笑う』という行動は、威嚇から派生している。つまり『目が笑っていない笑顔』は、威嚇という行動と大差ない。

凶腕の威嚇。これで恐れない存在は、果たしてどれほどいるのだろうか。

怒りの感情で魔族の本能が表に出た、なんてこともありえるが、それはそれで恐ろしい。

「まあ、この件は置いとこう。パイモン、お前は何でゼフィラを探してたんだっけか？」

「ええ、『ヴェルニアの楼』にて合流してもらいたかったのですが……どうしましょう」「放っておけ。このまま助けても、ゼフィラを倒した剣士とフェミリンスのことしか頭に残らないだろうよ」

「それもそうですね。ゼアノス様はどうしますか？」

「俺もやることがあつてな。後で行く、と皆には知らせておいてくれるか？」

「はい、分かりました。それでは……」

頭を下げたパイモンが、闇に溶けるように転移する。その場に残ったゼアノスは、相変わらず横たわっているゼフィラを見下ろした。

彼女の経緯を辿ると、こうなる。

1、・封印から目覚める

2、・外の世界を見に行く

3、・帰ってきたところに偶然にもセリカとエクリアが訪れる

4、・エクリアを攫う

5、・追いかけてきたセリカに倒される

それを思い出してゼアノスは、不憫だなあと頭を振った。

そもそも、ゼフィラを探していたのはグラザが死んでしまった事と、息子がいる事を教えるためだったのだ。これがデИАーネなら嫌がらせになるが、ゼアノスはかつての仲間として善意で教えようと思っていた。

想い人が既に子供がおり、しかも死んでいるという事を、今後ゼフィラは知るだろう。
人間に負けてプライド的に精神が弱っている彼女に、この悲報を起きてすぐに教えるの

はキツ過ぎる。

さてどうするか……と少し考え、何かを思いついたのか、ポンツと手を合わせた。

そして指先に魔力を込めて空中に滑らせると……その軌跡に魔力が残り、文字となった。すなわち、メッセージを魔力で空中に書いたのである。

書き終わってからゼフィラを一瞥すると、ゼアノスは『歪みの回廊』を展開し、去って行った。

その数十分後。

セリカによって気絶させられていたゼフィラは、ようやく起き上った。何故気絶していたのか思考を巡らせると、原因を思い出して怒り狂った。

ふと顔を斜め上に向けて魔力による文字を見つけ、それが旧知のものだと知り、すぐに読み始めた。

『ゼアノスだ。久しぶりだな、ゼフィラ。』

お前を探していたら、ここで倒れていたから焦ったぞ。一応、簡易な治癒術を掛けておいた』

激怒した今の頭では、余計な事を！ と思ってしまう。ここは感謝するところだ、と難

しいが心を落ち着かせる。戦争の時も、ゼアノスの治癒には世話になっていたので。『本題というか、何故お前を探していたのかの説明だな。』

お前にとっては悲報だが、それを2つ伝えるためだ。

まず1つ目だが……お前が封印されている間に、グラザが死んだ』

頭を殴られたような衝撃がゼフィラを襲う。助けられてから惚れた、あの剛毅な男が死んだ。

驚愕で頭が回らなくなるが、悲報が2つと書いてある。これと同格の悲しみがあるのか、と読み進めると……

『2つ目。肅鎖（じゆく）の岩塩坑（いんじやう）から東へ向かうと、メンフィルという国がある。

そこはリウイという男が王なのだが、その男は……グラザの息子だ』

ある意味、先の衝撃を超えた。愛した男が、仲間（ゼフィラ）が封印されている間に他の女と関係を持ち、しかも子供もいたとは！

ゼアノスの思った通り、セリカ（人）に負けてプライドがズタボロになったゼフィラには、これは酷すぎるほどの悲報だった。

崩れ落ちそうになった彼女は、最後の最後に、メッセージの一番下の一文を読んだ。

『ちなみに王妃はフェミリンス本筋の三女で、お前が攫った娘の妹だ』

瞬間、ゼフィラは風になった。

彼女の頭には、『フェミリンスの娘』『王妃』『王妃』『王の妻』『王の妻』『グラザの息子の妻』。これしかなかった。何故ゼアノスが、ゼフィラがエクリアを攫った事を知っているのか。そう考える余裕もなかった。

ゼアノスがこれを狙っていたのか、善意で教えたのか。それは本人しか知らない。

ただ……

遠方から『粛鎖の岩塩坑』を見ていた魔神が、彗星の如く飛んでいる物体を見つけて大笑いしていた事を記しておく。

—進むべき道—

「ふう……」

メンフィルの王都、ミルス。その王宮の部屋で疲れ気味に思わず息を漏らしたのは、国王たる男、リウイ・マーシルン。その原因は、つい先日触れなく襲撃していきた魔神、ゼフィラ。そして同じく魔神である、ディアーネだ。

ディアーネから『深凌の楔魔』のことを聞いてから数日後、ゼフィラと名乗る魔神が突如現れて、王宮内で暴れまわったのだ。『この国の王か王妃を出せ！』と怒鳴りながら。

だが不幸中の幸いと言うべきか、当時は偶然にもディアーネ曰く『嫌な匂い』の元であるマーズテリア神殿の使節団が来訪しており、大きな被害が出ないで済んだのだ。

しかも来ていた理由が『深凌の楔魔について』であり、光の神殿側は闇夜の眷属が王をしているメンフィルが、深凌の楔魔と繋がっていないかの確認と忠告を兼ねていた。

そこへゼフィラが強襲しに来て、丁寧にも『深凌の楔魔、ゼフィラ』と名乗り上げた。

これにより神殿側は良くも悪くもメンフィルとの協力体制を提案し、リウイはそれに賛成した。

元々、彼らの願いは『人と魔の共存』だ。深稜の楔魔が何を考えているかは不明だが、ダイアーネやゼフィラの言葉を信じるのであれば、光に歩み寄る可能性は低い。それでいて介入してくるのなら、敵対するしか道はない。

故にこの事柄は僥倖だった……のだが、何も嬉しい事ばかりではない。

現在、メンフィルと敵対している勢力は2つある。エクリアが負けたことで敗戦国となった、西部地域でのカルツシャの残党。そして東部地域に集まった、複数の悪魔族。

カルツシャの残党は『モナルカの滝』という、天使モナルカが住まう土地。その天使はかつてカルツシャと盟約を結んでいたため、それに従って残党を纏め上げている。片や悪魔族はブレアード迷宮、『海雪の間』に集っている。

天使モナルカについては、特に問題ない。訪れたマーズテリアの使節団の中には聖女ルナークリアもあり、モナルカを縛る盟約を終了させる証を受け取っていたからだ。

しかしそれは、リウイでなくても可能なこと。例えば『モナルカの滝』の指揮を任せている天魔族、ファームシルスでも無問題。王が直接動けば誠意を認めてもらえるかもしれないが、逆に不信がられるかもしれない。

そして『海雪の間』は、魔導鎧などの重武装で構成されている軍団を派遣している。こ

のままでも解決できるだろうが、確実にするためには自分で動き、相手の頭をとる方が
良いだろう。

だがそうすれば、多数の魔族や闇夜の眷属に動揺が走ることになる。『魔を蔑にして
人を鼻屑する王』という評判も付いてしまう。ただでさえゼフィラを倒したばかりなの
だから、尚更だ。ただし、神殿側からは信用も得られるようになる。

かといってどちらも動かないとなれば、優柔不断としてどちらからも信用されなくな
る。

しかもメンフィルは戦争が終わったばかり。復興を早めるためにも、早期解決が望ま
しい。

さて、ここで話を戻そう。リウイが漏らした息の原因は、ディアーネとゼフィラ。こ
れには続きがある。犠牲者が少なくなるように苦勞してゼフィラを倒したあとは、地下
牢に閉じ込めていた。

そう。閉じ込めて……いた。過去形だ。

知つての通り、ゼフィラはグラザに惚れていた。そのことから今回のような暴挙を起
こしたのだが、戦った相手に問題があつた。リウイ・マーシルンは魔神グラザの、ゼフィ
ラが恋した男の息子だ。

その姿を、仲間に指示を出しながらも立ち向かつてくる勇猛で男気溢れる瞳を見て、

ゼフィラはこれまでにない感動を覚えた。この人こそ自分が仕える主だ、と。だがそれからしばらくは、本気を出して戦った。いくらなんでも弱い主は御免だからだ。結果は予想通りで、ゼフィラはリウイに破れた。

問題はここからだ。マーズテリアの使節団が任務を終えて帰った後、リウイはゼフィラを捕らえてある地下牢へ足を運んだ。あれだけ暴れたというのにおとなしいと報告を受け、怪訝に思ったからだ。

そして会ってみれば初見とは全く違った、畏まった態度で接してくるようになっていた。

魔神とは、基本的にプライドが高い。罫に嵌める時ですら、こんな態度をとる者はいないだろう。それを良く知っていたリウイは数日掛けて、時にはイリーナも同伴させて話をした。

初対面では猛烈に突っかかっていたゼフィラだったが、リウイの素晴らしさを語る姿にイリーナは青筋を見せ、神殺し程ではないがゼフィラを超える魔力で威嚇し返して静かにさせていた。戦闘技術はともかく、魔力量だけなら姫神とほぼ同等だったので、ゼフィラは縮こまるしかなかったのだ。

その後も話し合い、結果的には仲間に加えることにした。今度はこれに猛反発したのは、デアアーネだった。リウイに恋するゼフィラは、新しい『女』がまた来たから嫉妬

しているのだと信じて疑わないが、もちろんそんなはずもない。単純に、ゼフィラがしていることが気に食わなかっただけである。

結局どうなったのかと言うと、ディアーネはメンフィルから去った。『私も好きに動かせてもらうぞ！ 我の代わりにゼフィラが入ったのだから、戦力としては問題なからう！』という言葉と共に。

以上が、リウイが息を漏らした理由である。彼としては『問題大アリだ、馬鹿者が』と言つてやりたいが、肝心の本人はいない。本人もそれが分かつて出て行き、帰つてこないのだろう。それが余計に、腹が立つ。

「お疲れのようですが……あなた、大丈夫ですか？」

背後から優しい声で語りかけてきたのは、イリーナ・マーシルン。一度は死んでしまったかと思つたが、一命を取り留めた、彼が最も愛する妻だ。その目には、薄らと涙の跡が残っている。

また、姉のことを……エクリアではなく、最近死亡の報せが届いた、セリーヌ・テシユオスのことを思い出していたのだろう。

そう思いながらも敢えてその話題を出さないようにして、リウイも口を動かした。

「ああ、どうしようかと考えていたんだ」

「……『海雪の間』と『モナルカの滝』、ですか」

身を乗り出しながら各拠点の載っている地図を見る妻をジッと見つめ、互いが抱える同じ夢を心の中で反復させる。

問題はまだ山積みである。これらだけではなく、ついこの前に新しく発見したブレアード迷宮も調べなければならぬのだから。

「となれば、こちらしかないな……イリーナ、手伝ってくれるか？ 俺達の夢のために」

「まったくもう、言われるまでもありません。断れても付いていくつもりでしたから」

死の淵から蘇ってからやけに強くなった彼女は、戦場で守られていた、か弱い姫ではない。経験はまだ足らずに危ない時もあるが、背中を任せられる最高の相棒にもなった。

夢を叶えるには、おそらくあいつらとは分かりあえないだろう。そう考えて、城内で偶然見かけた幼馴染のカーリアンにも声をかける。

こうしてリウイ、イリーナ、カーリアンの三人は……『海雪の間』へと向かう、準備を始めた。



(おい、どうするんだ？ 本当について来ているぞ)

(また会う気がするとは言っておったが、こんなにも早いとは……我は、もう会うことはないと思つていたんだがの)

(……)

エクリアとハイシエラの心話を聞いたセリカは、パラダの街から何故か同行してくるようになった人物……ノワールを見た。街から出て当てのない旅を再開しようとしたら街に帰ってきたらしい彼女と出会い、後を付いてくるようになったのは記憶に新しい。

エクリアは一族に伝わる『殺戮の魔女の呪い』を、一族にまだ子供がいなくて今の内にセリカに殺してもらおう事で断ち切ってもらおうことを望んだ。その事はセリカとハイシエラには話したが、ハイシエラが言うには子供がいなくても近い親族(エクリアの場合はイリーナやセリーヌ)に呪いが渡ってしまう可能性が高いとのこと。

セリーヌは死んでいるらしいため、新しく呪いが出るとするなら奇跡的に生きていたイリーナだ。

一度殺しかけてしまった罪悪感もあるが、それ以前に『殺戮の魔女の呪い』の効力が薄らいでいる今は、イリーナは愛する妹だ。愛する妹を呪わせたいはずがない。だが今更メンファイルに行つても、イリーナに会える以外に良い事はないだろう。

幻燐戦争で負けてから弱くなった呪いだが、いつまた表に出るかは分からない。だか

「今は答えを探す意味を含めてセリカと共に行動しているわけだが……故に、ノワールの存在が気になる。」

「危険だと何度も言っているにも関わらず、返答は全て『君達の想像以上に私は強いから大丈夫』のみ。まさしくノワールは神に匹敵する実力者だが、知るはずもない三者は三様に困っていた。」

「セリカ達からしたら、ノワールは戦闘面でも決して弱くはない。どこで手に入れたのか、貴重な魔導銃なんて代物を使つて背後から援護してくれる様は、中々頼りになる。だがそれは一般的な魔物相手だからこそだ。セリカやエクリアを狙う魔神などが相手では、どうなるか分からない。」

「……そんな一種の心配をしてもらっているノワールは、それが分かっているセリカの後ろを追っている。彼らの反応を見て楽しんでるのだ。」

「そのことを報告で聞いたどっかの誰かさんは『性格悪い』と評したが、生真面目熾天使からすれば『どっちもどっち』というのが本音だ。」

「今いるレスペレント地方から出てケレース地方へ向かっている一行だが、当たり前のように正規ルートではない。本来ならサンターフという港町の船で海を渡るのだが、ここからの行き先はマーズテリアの入植地。つまり敵地だ。なので徒歩でケレースに向かう道筋を、砂漠を南に突き進んで海峡を越えるという道を辿っている。」

（あの娘……泣き言ひとつ言わぬ。少々侮っていたか？）

砂漠の暑さは尋常ではなく、神の肉体を持つセリカですらダメージを受け、夜になれば

冷えて体力の消耗が激しい。碌な説明もせずそんなルートに行くのだから文句の一つや二つ、あつてもおかしくはない。勝手に付いて来たのだから些か理不尽だが、それが普通だ。

それでもノワールは何も言わずに、まるで追従するかのようにはセリカとエクリアの後ろを歩いていった。そこまですると暗殺者などの可能性もあつて警戒はしたが、隙を何度見せても変わらなかったの、今ではその心配はしていない。

ちなみにノワールはそれを見て楽し（ry

猛暑と極寒が交互に味わえる嬉しくない土地を渡り切り、辿り着いたのは『ケテ海峡』。悪霊や怨霊が湧いて出るほどに溢れているが、セリカとエクリアの障害には成り得ない。ノワールに至っては霊体の行動を先読みして、現れる前に魔導銃を放ち、出てきた瞬間に霧散させるといふ絶技を試みさせた。

それを間近で見たハイシエラが本格的に旅の仲間に入れるかどうか悩んでいたが、それは割愛。

強風が吹き荒れて何度か落ちそうになる道を渡り、真下が海となっていて足場が危険

な海岸線に着いた。周囲には悪霊の気配が漂っているが、水平線から現れる紅い月は美しい光景だった。

「なんか、特別強そうな魔霊の気配を感じるな……ちよつと見てくるね」

「……気をつける」

明るく言いながら来た道に戻ろうとするノワールに、技量を見ていたのでそこまで心配はしていないセリカが、一応の忠告をする。ここの霊体は少し特殊で、倒しても完全に消滅させられる訳ではない。無数の未練や残滓が霧となり、それが形作つて霊体と化しているのだ。

とはいっても倒してすぐに復活という流れではないので、一度倒せば一時期は収まる。

ノワールの姿が見えなくなつてからエクリアを見れば、紅い月の光に照らされている。しかしその顔には陰が差していた。どうしたのかとセリカが聞けば、『呪い』について考えていたのだと言う。

「フェミリンズの呪いをあなたに、『神殺し』によつて裁いてもらう事で消滅してもらおうと思つていたけど、それも叶わぬ夢。私が死ぬば折角幸せになれた妹を、イリーナを今まで以上に苦しめてしまう。それならば……」

「……」

独白を続けるエクリアに、セリカは何も言わない。ただ静かに聞いていた。

「この海峡の噂が真実であるなら私は死なず、魔霊となる。そうすれば私という身体だけが消滅し、呪いは残ったままになる。この苦しみを誰かに残すこともない。ならばこうするのが、私の最善の途……」

その瞳にあるのは、絶望ではなく決意。その意思を持ち、エクリアが歩を進めたのは岬の先端。

「よせっ!!」

セリカは思わず声を張り上げる。あと少しでも歩けば、そこにあるのは海へ落ちる崖だ。

「今までありがとう、セリカ。ノワールには謝っておいてほしい。そして……さようなら」

最後に微笑んで、迷いなくエクリアは崖下に投身した。彼女を追ったセリカも躊躇なく身を投げる。この時、セリカの頭にはノワールのことは全く考えていなかった。

単純に……嫌だったのだ。セリカは数百年間放浪し、出会いと別れが何度もあった。だがどれも、セリカ自身が望んだ別れは一切なかった。身の都合上や事故、戦闘、寿命による死別。そのどれもが、割り切れるものだ。しかし今のは、出来るわけがない。別れを告げられても手放す気には、諦める気など一切なかった。

だから空中でエクリアを抱きしめて……二人一緒に、海へと落ちて行った。

「……何か悩んでるらしかったから二人きりにしたのに、まさか自殺を図るとは予想外だよ君い。セリカも私を置いて行っちゃうしき。まあ丁度、新しい任務が入ったからいいけどね」

そう言つて手に持つ紙をヒラヒラと動かしながら崖を見下ろす、ノワール。

中々の魔力を持った霞の魔霊を難なく討伐した直後、ゼアノスの配下の歪魔が手紙を渡して来たのだ。詳しく聞けば、それには任務が書いてあるらしい。ゼアノス本人は何やら忙しいらしいので手紙を書き、配下を使つてノワールへ渡すことになっていたようだ。

「しっかし、魔霊になることで自分という存在を殺して、でも身体は残ってるから呪いも残すことができる、か。前向きなのか後ろ向きなのか、判断しにくいなあつと、それで任務内容は……うげ」

手紙の中身を見た途端に、ノワールは顔を歪ませた。よほど嫌なことか、面倒なことが書いてあるのだろう。表情を変えず、手で持ったまま魔術で燃やした。

「……で、君は誰？ 霧の中の暗殺者なの？」

「見てただけで暗殺者なんぞにするでない」

どこことなく聞いたノワールへの返答は、まさしく霧の中から現れた。頭には大きな角と、茶色のような色の長い髪。背中にあるのは灰色の翼。

「君は……魔神デИАーネ、だね？　ゼアノスから聞いてるよ」

「ふん、やはりあの男の仲間か。エクリア・フェミリスはともかく、ゼフィラの話を知ればあれが『神殺し』らしいな。噂に過ぎぬと思っていたが、実在していたとは驚きだ。しかし見つけたと思えば貴様が奴らと共にいた故、様子見しておったのだ」

ノワールはセリカやハイシエラから見ても、魔神を相手にできるとは思えない。デИАーネとて、直接対面している今でも同じだ。とても強者には見えない。だがデИАーネは油断しない。

かつてグラザと組んでゼアノスに負けて、最近ではメンフィルに負けた。後者は個人同士の戦闘ならば勝敗は分からなかったが、国としての負けもまた己の敗北と同義だ。そのどちらも、油断があった。ゼアノスとの戦いでは、2対1で負けるはずがない、と。メンフィルとの戦争では、半魔人如きに、と。

だからこそ、デИАーネは必要以上に目の前の存在を警戒していた。

これはセリカも無意識に感じていた事で、ノワールをかなり早い段階で信用していた理由でもあるのだが、何しろゼアノスと似ているのだ。雰囲気だ。

眷族なので当たり前と言えば当たり前なのだが、それを知るのは当人のみだ。

「なぜ奴らと共に動いていたのだ？ 護衛などではなからう？」

「別に理由なんてないよ。敢えて言うなら……『神殺し』をゼアノスが気にかけていてね。興味が湧いたってだけ」

「ゼアノスが？」

「ディアーネとしても、それは予想外だった。封印から解かれたあとはレスペレントで暴れていたし、セリカやゼアノスの旅に関係していなかったのだから、知らなかったのだから当然だ。セリカとゼアノスの関連に結びつくはずがない。」

「でもまあ、君が彼らと戦うのだとしても、私の名前を出さないのなら好きにすれば？ 止めはしないよ」

「……何だと。貴様はゼアノスの仲間で、そのゼアノスは『神殺し』を気にかけているのだから？ だのに、何故だ？」

「私は敵対するつもりはないけど、他者に殺されたならしょうがないというか、それまでの存在だったというか……それに、守られるほど弱い訳でもないでしょ。それじゃ、やることがあるからもう行くね」

「ディアーネの疑問に最低限で答え、言い終わると同時に堕天使の翼を出し、その際に砂漠用にと着ていた衣が落ちる。その姿を見て、ディアーネは目を細めた。彼女の元同

僚のラーシエナは重鎧という重い装備をしていたが、ノワールのはそれよりも重々しい物だったからだ。魔導鎧という、一種の兵器だ。

そんな装備をしたまま空へと飛翔し、並みの魔神では追いつけない速度で飛んでいる。

「あの姿にあの魔力、まさか……」

それを見てディアーネは眩くが、聞き取れたものは誰もいなかった。

— 一二つの邂逅 —

ノワールに任務を書いた手紙を配下経由で渡した俺が何をしているのかと言うと、とある懐かしい場所で、これまた懐かしい人物と会話していた。

「だから、契約で縛られていた昔とは違う。お前の命令を今でも聞くと思ってるなら、それは大間違いだ。お願いなら聞いてやらん事もないけどな。ほれ、言ってみろよ。『お願いします』って、頭を下げてみる」

「調子に乗るでないぞ。我に掛かれば貴様のような魔神如き、いつでも滅ぼせるのだ。我は姫神を、フェミリンスを下した存在ぞ」

禍々しく装飾された玉座に腰かけて偉そうな言葉を偉そうに見下ろしながら口にするのは、頭以外には人間に該当できる部位がない、人間だった元大魔術師。今は魔人と呼ぶに相応しい、ブレアード・カツサレだ。

場所は、百層にも及ぶ地下迷宮、『野望の間』。

「自分以外の全てを犠牲にして、の勝利だけだな。お前の魔術の腕は認めるが、単身で魔

神に勝てるとしたら下位の魔神くらいだ。『深稜の楔魔』の、誰よりもお前は劣る。それに万が一俺を殺せても、デイストピアの残存戦力に報復されるだろうが……勝てる自信あんの？」

「ぐっ……虎の威を借りるか！ 臆病な狐めっ!!」

あ、『虎の威を借る狐』だと思われたか。でも今の言い方はそう思われても仕方ないな、反省。

でもたしかに間違っていない。『デイストピア』という『虎』の威を借る、『俺』という『狐』の構図だ。ただしその『狐』は『化け狐』だけだな。

「それが言いたい訳じゃないんだけど……話が噛み合わねえなあ、もうヤダこいつ」

最初の頃の俺はブレアードに興味津津だったのに、今じゃ欠片もねえや。何でだろ。

「ったく、何だっけ？ 『フェミリンスの力を完に手に入れたいから、イリーナ・マールンもしくはエクリア・フェミリンスを連れて来い』なあ？ 自分でやれよそんなモン。自信がないからって、そんなことで心話を使ってまで俺を呼ぶな。つか、どっちが臆病者だよ」

「我を侮辱するか貴様アアアアアッ!!」

小物臭プンプンするセリフ、ありがとう。沸点低いよねこの爺さん。というより何で俺を呼んだんだろ。深稜の楔魔で一番従順だったからか？ あとさ、先に俺を侮辱した

のはそつちだろうに。

うん、自分でも分かるくらいにイラついてるよ、俺。主に、呼ばれて素直に応じちゃった自分自身に対して。八つ当たり気味にブレアードを挑発しまくったけど、まあ相手は元凶だから別にいいよね。

こんな不毛な殺し合いに発展しそうな喧嘩染みた言い合いを先ほどからしているわけだが、不意に気配を感じた。それはブレアードも同じらしく、『口撃』を互いに止めた。

「この魔力……フェミリンスか?!」

「自分から来るとはね……俺が連れて来るまでもなかったな。だがそれだけではなく、上級悪魔を超えた実力者の魔族に、グラザと似た気配を持つ者。さらにこれは……マーズテリアの加護を受けた人間、か?」

俺の言葉を聞か聞かないかの差で、ブレアードは手元にある水晶を見つめた。前にも使用していたこの水晶で、レスペレントの動向を何度も覗いていたらしい。おかげで情勢には困らないし、地方限定のことなら何でも分かるようだ。

その水晶に映り出されたのは、四つの人影。それを凝視したブレアードは、喜色に満ちた気色悪い笑みを盛大に浮かべた。

「こやつらは……カカカツ!! 餌が自ら来よったわ! ゼアノス、彼奴らに手を出すな。アレらは我の獲物だ! それで貴様の無礼は許してやる!」

「……はいはい」

どのみち、今は彼らと戦うつもりもない。そう考えた俺は素直に引き下がり、魔力と気配を完全に断ち切った。

数分後、ブレアードのもとには予想通りの四人が到着していた。

フェミリンスの魔力を持つ者、イリーナ・マーシルン。

グラザの息子、リウイ・マーシルン。

上級悪魔を超えた女剣士、カーリアン。

マーズテリアの元聖騎士、シルフィア・ルーハンス。

その誰もが常識外の戦闘力を持つ、今では大国となったメンフィルでも指折りの実力者達。魔神と戦うことになっても、このメンバーなら下手な事をしなければ快勝できるだろう。

ブレアードはリウイ達が地下百階になるこの最下層まで辿り着いたことを素直に称賛し、まさか自分達の親や先祖の創造主がこんな所で生きていたとは知らなかったリウイとカーリアンは、顔を驚愕の色に染めていた。イリーナも、姉の呪いの元凶を睨むように見つめる。

だがそこは国王たるリウイ。すぐに表情を引き締め、問う。

「深凌の楔魔らを操っているのも貴様か？」

「あのゴミどもには何の関与もしておらぬ。封が解けて調子に乗り、何ぞ企んでいるよ
うだがな」

不機嫌で唸るような声で言い放ち、それに同意するかのように両肩に生えている竜
が、甲高い声で吠えた。さっきの俺とのやり取りを思い出したのかもしれないな。

「さて、ここまで来た貴様らには褒美の一つとでも考えていたのだが……」

ブレアードはとも人間には見えない、不気味な笑みを浮かべた。その視線の先にい
るのは、あのフェミリンズの直系にしてリウイの最愛の妻——イリーナだ。

その目線に捕らわれて寒気でも感じたのか、顔を青くして自身を抱きしめている。

「そのフェミリンズの娘を我に差し出せ。さすれば貴様らに更なる力を与えてやろう。
果ての無い野望を叶えられる力……欲しかろう？ 女一人で手に入り、その光を纏う騎
士は見逃してやる。どうだ、良い取引だと思わぬか？」

まるで取引の成功が確定していると言わんばかりに笑みを深めるブレアードに、俺は
心底呆れていた。レスペレントの情勢をずっと見ていたと言う割に、リウイという人物
を全く見ていない。

闇夜の眷属だから、何が何でも力を求めるとでも思っているのだろうか。だとしたら

浅慮にも程がある。現に、リウイは全身を震わせている。無論、怒りだ。

「ふざけるな。貴様に渡すものなど存在しない！ 何よりも……貴様がイリーナに触れることすらおこがましいっ！」

「それに、私達は何もいらないわよっ！ あんたみたいなの、いけ好かないジジイからなんて！」

「私も見逃されるほど弱くはありません。それに、イリーナ様には指一本触れさせはしない！」

リウイが、カーリアンが、シルフィアが、それぞれの想いを口にする。イリーナも、キツと目線を前に向けて、ブレアードを再度睨みつけた。

「貴様らも我を侮辱するか……許さぬぞ。我こそ創造主、故に、我こそ絶対なる真理！」
ブレアードが玉座から立ち上がり、双頭の竜が威嚇するかのように咆哮する。

それを合図にしたのか、リウイとカーリアンが飛び出した。剣を振るうも、相手は魔術の扱いならば魔神を超えるかもしれないブレアード。大魔術師を自負していたのは伊達ではなく、呆気なく障壁に阻まれる。遅れてシルフィアが斬りつけるが、少しの傷を残すくらいしかダメージがない。

前衛の三人全員が前に出たことよって、必然的にイリーナが一人取り残される。その隙だと思える事態にブレアードは口元を更に歪め、食らうためにイリーナに迫るが

「全て打ち砕きますすー！」

イリーナが神聖魔術、【贖罪の光霞】を放つ。ブレアードも対抗して暗黒魔術である【ティルワンの闇界】を放った。光と闇の魔術は一瞬だけ拮抗したが、俺が強化したイリーナの魔術の方が強く、光の霞がブレアードを襲った。

「ぐ、小癩なっー！」

自慢の魔術で負けたことで余程腹が立ったのか、大きく後退して両肩の竜が【ポイズンプレス】を口から出し、本体からの【虚無の衝撃波】が各々を襲う。だけどあいつの本領は魔術でこそ発揮されるものだ。その魔術で負けたのだから、もうメンフィル勢には勝てないだろう。

衝撃波はカーリアンの強烈な連撃技、【北斗斬り】で散ることになり、プレスはイリーナの創った【防護の結界】で阻まれる。技が何一つ効いていないことに舌打ちして態勢を整えようとブレアードが構えた途端に、神聖を宿した剣撃が飛び出す。

リウイの縦一閃を貫く【エクステンケニヒ】と、シルフィアの一点を集中攻撃する【神極聖光剣】だ。リウイは魔神グラザの息子だが、母親はフェミリンスの血筋だ。だから少しは光の力を扱えるのだろう。

見事な連携を受けて、ブレアードは呻き声をあげながら消滅してゆく。

それと文章にするとかなり短いが、これまでで実際にはかなりの時間が経っているということを覚えていたいただきたい。

「お、終わったのですか……？」

「そうみたいだけど……はあ、一体何だったのよ、あれは」

「力を求め続けた男の成れの果て、か。あのようにならぬよう、気を付けないといけな
な」

「陛下ならばその心配は杞憂ですみましよう。こんなにも素晴らしい仲間がいるのです
から」

和気藹々とは言えないが、そんな会話を俺は彼らの真横方面にある瓦礫の山の頂上に
座っていた。

最初は立っていただけだったのだが、ブレアードとイリーナの魔術の応酬で崩れて山
が出来たので座った。立ちっぱなしも面倒だし。

話は変わるが、俺も魔族であることに変わりはない。戦闘意欲はあるし、破壊衝動
だつて頻繁に起こる。ハイシエラかセリカと一緒にいた時は他の楽しみもあつたから
治まっていたが、今は他の楽しみなんて、ない。

そんな俺が、目の前で繰り広げられたあの光景を見て、何を思うのか。もちろん、戦
いたい、だ。

だが三者の剣技はセリカと比べれば劣るし、強化したイリーナの魔術もナベリウスには及ばない。だからこそ俺は、今ここで戦うという選択肢を捨てられる。

「ブレアードを倒すか。期待通りだ」

声を出せば、今まで俺に気付かなかつたりウイ達がこちらを向き、武器を構えた。しかしその様子は酷く狼狽している。俺がいたことが分からなかつたからだろう。

俺は魔力と気配を断っていたけど、姿は消してない。ドラ○もんの『○ころ帽子』状態になっていたわけだ。

「貴様いつから……いや、それよりも何者だ」

「おいおい、初対面なのに貴様呼びわりかよ。まあお前からからすりや、俺は怪しいからいいけど。いつからここにいいのか、何者なのか。どっちも答えてやるから、落ちつけよ」

子供を宥めるように、笑顔で返す。光と闇の共存を願う夫婦は、話が出来ただけでも良しとしたのか、厳しめだった表情を幾分か和らげた。

「では聞くとしよう。まず、いつからこの場にいたのだ?」

「君らが来るずっと前。というか、俺とブレアードが話している最中に君らが到着したってわけ。それからはずっとここにいたよ」

「そんな……では私達は、貴方にずっと気付かなかつたということですか?」

リウイに返答すれば、今度はシルフィアが茫然としながらも聞いてきた。

「その通り。んで次の質問は、俺が誰なのか、だっけ？　俺は——」
『深凌の楔魔の一柱だよ』と続けようとした瞬間に、ガゴン！　と、迷宮全体が一瞬だけ揺れた。

ここの迷宮は地表の下にあるので、単なる地震なのか迷宮に関係するどこかで何かがあったのか。その判断がしづらいが、そこは腐っても大魔術師ブレアード。地震の影響はこの迷宮にさほど与えないように魔術式を組み込んである。

ということはつまり、この迷宮に関する何かが、どこか別の場所で発生したのだ。

「……」

近くでリウイらが騒いでいるが、気にせずには俺は視線の先を変えることで、彼らにもそこを見るように無言で促した。それはブレアードが座っていた玉座のすぐ近くにある、大きな水晶玉だ。

「これは、一体……？」

そこに映っていたのは、海の上の空中に浮かんだ巨大な宮殿だった。この世界で初めての友人ができた、思い出の場所。

かつてブレアードの魔力供給の場として使わせていた、ベルゼビュート宮殿だ。

そうか……リウイ達がブレアードを倒したから魔術が解けたのか。そのことをすっかり忘れてた。

こうしちやいられないと、歪みの回廊を展開して移動……しようとしたところで。

「おい、何をしている。まだ貴様が何者なのか聞いていないぞ」

リウイ君に止められました。ブレアードと会話してたつて言っただから、深凌の楔魔だとは思わなかったかな？ 少なくとも関係者だと考えられるだろ。

「悪いが急用ができた。今度会うことがあれば、そのときに教えてやるよ」

「なつ、待て！」

待てと言われて待つ奴はいないって言うけど、待つ人も稀にいるんじゃないか？

なんて脈絡ない事を考えながら、俺は転移した。



ゼアノスがリウイと邂逅し、宮殿の浮上であれよこれよとしている間にゼアノスがいなくなつてから、しばらく。メンフィル王国の謁見の間では、その浮上した宮殿について幾分か検討がついている事を、王国の大將軍であるファームシルスが報告していた。

ファームシルスは『飛天魔族』という貴族悪魔であり、同じ貴族悪魔たる歪魔族とは全く違う性質を持つ。誇り高く忠義に厚い面もあり、姿も相まって天使と似ている。忠誠を誓う相手が神ではなく魔神だという大きな違いはあるが。

フアーミシルスはカーリアンやシルフィアと並ぶ、メンフィルの最大戦力の一角だ。彼女ら以外にも混沌^{アーライナ}の女神神殿の神官長たるペテレーネ・セラヤ、機械化軍団団長、魔導戦姫のシェラなどがいる。中でも特に目立つのが、最近になってリウイに忠誠を誓った魔神ゼフィラだ。代わりにディアーネが（勝手に）いなくなってしまうが、メンフィルの忠臣にはディアーネを憎んでいる者もあり、実際には士気が上がっていたのは嬉しい誤算だっただろう。

そんな個人的な配下の一人の報告を一通り聞けば、ベルゼビュート宮殿がブレアード迷宮の心臓であることも判明した。

宮殿が浮上したのはメンフィル国の南にあるブレニア内海。この現象に気がついたのは自分達だけだと思うほど、リウイは自惚れてはいない。西方諸国の光の神殿や、場合によっては深凌の楔魔が介入してくることすら考えられる。

だからこそリウイは、『ベルゼビュート宮殿制圧作戦』を発動させた。

ブレアードを倒した直後に出会った魔神——宮殿を見てから突然いなくなったゼアノスも出てくるはずだと、そう思いながら。

その同時刻。

ブレニア内海の南端には『北華鏡の集落』という、名前通りの集落がある。とある事

情からマーズテリア神殿を嫌っている珍しい人々の集まりだが、その宿には4人の美男美女が並び、会話をしていた。しかしその会話の内容は、決して気楽なものではない。「貴方には私達と共に『ベルゼビュート宮殿』へと向かって貰い、そこを支配しようとする闇の者達を排除して欲しい。それが神殿からの依頼です。頼めるかしら、セリカ？」

「聞いたことがないが……ルナークリア、ベルゼビュート宮殿とは何なのだ？」

直接話し合っているのは、主にこの二人。セリカ・シルフィルとルナークリアだ。各々の後ろには、エクリアと神殿の鎧を着込んだ青年がいる。

セリカとエクリアは崖から落ちたあと、奇跡的に海を渡り生きていた。冷たい海と襲い来る悪霊や怨霊によって意識が朦朧としかけた時、どこからともかく水竜が現れ、二人を助け出したのだ。その水竜はマーズテリアの騎士が飼っている竜なのだが、セリカ達を向かいの海岸まで送っていたのだ。

エクリアを助けたために魔力が枯渇して意識がなく、女性体に近づいてしまったセリカの顔を舐めてどこかに行ってしまったので、セリカ達は何処の竜なのか見当も付いていない。

ちなみにその際、今度はエクリアがセリカを助けるために己から進んでセリカの使徒になったので、セリカの一命は取り留められた。そしてエクリアも不老になったのは言うまでもない。使徒は、^{エクリア}主と共に生きるのが運命なのだから。

「ベルゼビュート宮殿とは、最近になってオウスト内海上に突如浮上した宮殿よ。かつて古神が住んでいたとされ、今ではレスペレント地方の地下を走る大迷宮の心臓部です」

セリカは北華鏡の集落に辿り着き、のどかな風景を楽しんでいるところで、どうやって探し出したのか不明だが、ルナークリアと再開した。その際に付き人のように共にいる騎士がセリカ達を警戒していたが、当たり前行動だろう。

いくら互いを知っているとはいえ、何でもないように話しかけるルナークリアの方が一般的にはありえない。エクリアも、当初は相当警戒していたのだ。

「あの迷宮の心臓部ということは、誰かがその宮殿を支配することになれば……」

「はい。そうなれば、レスペレント地方を征したのも同じです」

ブレアード迷宮について無知であるセリカとは違う、その恐ろしさを知っているエクリアの言葉を、ルナークリアが肯定した。光の神殿も動いてはいるものの、未知で強力な魔神がいる可能性もあり、迂闊な人材を送り込む事も出来ない、彼女は言う。

そこでルナークリアは、セリカを選んだ。そんな魔神と戦える経験と実力を持つ者として。

「未知の魔神だと？」

「神殿が手をこまねくような魔神とは……」

「深凌の楔魔……御存知？」

ルナークリアの答えであり質問でもある言葉に、セリカは一瞬だけ考え……

「少し前にゼフィラという魔神と戦った。あれが自称していた気もするが、その仲間連中か」

「ええ。やはり砂漠で戦ったのは貴方達なのね。その後、何を思ったのかメンフィル王国へ強襲しようだったのだけど……」

その言葉に、思わずといった形でエクリアが声を荒げた。

「メンフィルに!？」

「偶然にも私がおおり、メンフィル王の優れた指揮も相まって奇跡的に被害は無いに等しい状態です。損害ならば、建物が幾つか崩れた程度でしょう。メンフィル王妃も無傷でした」

エクリアはイリーナも無事だと聞いて安堵し、次いで身を引き締めた。何故わざわざイリーナの事を言ったのか。それは自分が誰なのかばれている、もしくは検討をつけられていることに他ならない。

ルナークリアは確認したかっただけで他意はないのだが、初対面のエクリアに分かるはずもなく、口を閉ざしてしまう。

それからセリカとルナークリアの話は続き、セリカは手を貸すことに決めた。罨の

可能性もあるが、そこは彼女を信用したのだった。何よりも報酬が『そちらからの攻撃がない限り、マーズテリア神殿から攻撃することはない。光の神殿から攻撃されたとしても中立の立場を取る』という、セリカにとっては破格のものだったのだ。

途中から黙ってしまったエクリアに、集落の裏口で待つと言ったルナークリアが声を掛けた。

「貴方はセリカの使徒……孤独な永い旅を共にする人。安心したけれど、少し、羨ましいわ」

笑みを浮かべながらも悲しそうな表情をする聖女に、エクリアは結局何も言えなかった。

だがそれを聞いて、どんなことがあってもセリカを守ると、更に強く思うのだった。

—魔神の交流死合—

オウスト内海の上空に浮かんでいる、ベルゼビユート宮殿。魔界王子ベルゼブブが使っていただけはあり、そこに住みついている悪魔は、雑魚という言葉から程遠い存在ばかりである。中には下級悪魔レッサーデーモンや下級睡魔族スウィーティがいるものの、中心となっているのは上級悪魔グレートデーモンである。

魔神の配下として最も多いのがグレートデーモンだと言えば、その凄さが分かるだろうか。上級悪魔が下級悪魔を支配して縄張りを作るのは珍しくない。だがそれだけでも、神官戦士が動くほどだ。そんな奴らが、この宮殿ではうようよしている。それだけならまだしも、ここには竜種も複数いる。とは言えドラゴンゾンビ程度なのだが、竜であることに変わりはない。

グレートデーモンとドラゴンゾンビの群れ。いくら神官戦士でも、神格者かそれに次ぐ実力者でなければ、勝つのは非常に難しい。相当の策や見事な連携があれば勝率は変動するだろうが、相応の被害は免れないだろう。

このように、上級悪魔や竜種は難敵だ。だが先述の通り、複数のそれらを支配するの

が魔神だ。そんな魔神が、ベルゼビユート宮殿の最奥に集っていた。その数、なんと4柱。全員が深凌の楔魔であり、その半数に届きそうな数字が、本拠点ではないはずのこの場所にいた。

「なんだ、やつぱりお前らも来てたのか。久しぶりだな、パイモン以外は」

「うん、久しぶりだね、お兄ちゃん」

「ああ、久しぶりだな。パイモンから聞いていた通り元気そうで何よりだ、ゼアノス」

互いに再開の挨拶をし合っているのは、ゼアノス、エヴリーヌ、ラーシエナの三名。ゼフィラの件で既にゼアノスと顔を合わせているパイモンは、近くでいつもの笑みを浮かべている。

「さて、ゼアノス。これは我らとしては当然の疑問なのだが、何故我らの封印を解いてくれなかったのだ？ お前以外にもグラザとディアーネが無事だったら嬉しいが、ディアーネはともかくグラザがお前のどちらかが助けてくれるものだ、これでも少しは期待していたのだが」

出会い頭に突然来た、当たり前前の質問。ラーシエナの声と顔に負の色はなく、単純に疑問に思ったからこそその質問だった。罪悪感を少なからず持っていたゼアノスが危惧していたようなことにはならず、彼は密かに安堵しながら答える。

「悪いな。フェミリンス自体が封印の媒体だったから、解くに解けなかったんだよ。グ

ラザは……最初は方法を探していたけど、結婚してからは諦めたんじゃないか？」

「……いや。あの男の性格からして、そのようなことで我々を見捨てるとは思えないのだが？」

「私も、あの方に限ってそんなことはないと思いますが……」

「その嫁がフェミリンスの家系なのに、か？」

ゼアノスがそう言うと、否定的だったラーシェナとパイモンの二人はハツとした表情になる。言われてみればあり得そう所か、解かなかつた理由がそれ以外に考えられない。

他にも死ぬまで頑張っていたけど結局無理だった、などが推理できそうなものだが、そこは盲目的にゼアノスを信じてしまっている墮天使組み。ゼアノスがグラザに矛先を変えた事すら分かっておらず、グラザの行動（仮想）に渋い顔を晒している。唯一の不安要素であるエヴリーヌは何の話なのか良く分かっておらず、ただ首を傾げるだけだ。

どこからか文句が飛んできそうだが、俺は仮定を語っただけだ、というのは本人の談。それに真相は本人しか分からないのだから、確かめる術もない。とは言ってもゼアノス自身も、本当のことは知らないのだが。ついでに、ゼアノスはグラザを陥れる気もない。実際に何故グラザが深稜の楔魔を助けなかつたのかを考えると、それしか思い浮か

ばなかっただけだ。

「……この話はもう止めにしませう。何にせよ、グラザさんは既にいません。私達が今すべき事は、この宮殿を守ることです」

「ああ、その通りだ。あの方々が眠るこの宮殿を、姫神と戦っていた当時のブレアードならばともかく、奴らに渡すわけにはいかぬ」

パイモンの言葉に同意しながら、苦々しげにラーシエナは上空にある映像を見上げた。

この映像はパイモンの仕掛けた術式によって発動した、宮殿の内部を映す監視カメラのようなものである。

その映像の数は、2つ。これが意味するのは、侵入者が二組いるということに他ならない。しかも偶然か必然か、それぞれ正反対の位置から侵入してきている。片や東から空を飛べる者に運び込まれ、片や西から魔法陣を通して転移してきたのだ。

それぞれの筆頭は、東がリウイ・マーシルン。西はセリカ・シルフィール。

リウイの後ろにはイリーナ、カーリアン、シルヴィア、ファーミシルス、ペテレーネの5名が続いている。セリカにもエクリア、ルナークリア、テトリの3名が後ろにいる。

ちなみにテトリとは、ルナークリアと会う前にセリカが『北華鏡の集落』で使い魔にした木精ユイチリという種族の女の子だ。森に住んでいる、弓矢を武器として扱う、魔術が得意

など、エルフと非常に似通っている木の妖精である。違いと言えば、ユイチリの足には木の根っこが絡まっているくらいだろうか。

テトリが何故セリカの使い魔になったのかというと、両者同意の上とはいえ力の弱い地方神に乗っ取られてセリカに迫っ……これ以上は彼女の名誉のために黙秘するのが一番だろう。

ともかく侵入者は数多くいるものの、宮殿の奥に行こうとしているのは10人。対して宮殿にいる深稜の楔魔は、ゼアノス、パイモン、ラーシエナ、エヴリーヌの4柱。

戦いは数だと言えるが、こと魔神が相手では薄らいでしまう。兵士100人ではとても足りない。そんなふざけた存在が、4柱。しかし相手もまた、常識が通用しない規格外の戦闘力を持つ者達。死闘は免れないだろう。

そこで、ゼアノスとパイモンが何かに気付いた。

「ん？ 1、2、3……4柱か？」

「どうやらそのようですね。懐かしい気配もしますが、どう致しますか？」

「この気配は……はぐれ魔神、か。」

「そうみたい。くふふ、一緒に遊べるかなあ？」

少し遅れて、ラーシエナとエヴリーヌもその存在に気が付く。

どこにいるのか決まっていない、放浪し続けて自由気儘に動く魔神。一応の秩序があ

る、国の王をしている魔神（魔王とも呼ばれる者）よりも討伐優先度が高い魔神。

つい最近浮上したこの宮殿にどうやって来たのか不明だが、いるのだからしょうがない。

「でもパイモンお兄ちゃん、懐かしい気配って?」

「この宮殿内にいるはぐれ魔神の中に、ソロモンの魔神と呼ばれる者がいる。ということです。さすがに、誰なのかを特定するのは無理ですが」

懐かしげに語るパイモンのその言葉を聞いて、ゼアノスは考える。そう言えば、ナベリウス以外のソロモンの魔神は今の所勧誘に成功していたな……と。

「よし。それなら、まずはエヴリーヌの願望を叶えられますか」

「エヴリーヌの願望……? ゼアノス、何をするつもりだ?」

ゼアノスのにやけている顔を見て嫌な予感がしたラーシエナはそう聞くが、しかしその内容はむしろ彼女にとっては得意分野だった。

「ここにいる『深稜の楔魔』の数は4。対して、はぐれ魔神の数も4。さあ、ここまで言えば分かるよな?」

変わらない表情のゼアノスの言葉に、まずラーシエナの顔が喜びで引き締まった。エヴリーヌは考えを纏めるのに時間が掛かり、間を置いてからキラキラと子供が喜んだように、それでいて残酷な笑顔になった。

「それは良いな。中々に楽しめそうではないか」

「うん！　いくつばい遊べそう！」

つまり、4対4で戦おうとしているわけだ。はぐれ魔神の中にはソロモンの魔神もいるので、それだけは捕縛しようと思つてゐるのは、エヴリーヌ以外の全員が理解している。

「皆さん好戦的ですねえ。私は戦闘が苦手なので、参加は遠慮したいのですが」
「どの口がほざくか。深稜の楔魔でも、貴様は上位の実力者だろう」

苦笑いをしながら拒否の姿勢を見せるパイモンにラーシエナが、表面上は怒つてはいないが若干の怒気を込めてそう言つた。

パイモンは序列こそ6位だが、本領を發揮すればザハーニウに匹敵する力を得る。かつてのルシファー直属の部下は、伊達ではない。

戦闘は苦手と言うが、それは『強くない』という理由にはならない。パイモンは戦うよりも、考える方が得意なだけである。それでも充分強いので、油断してはいけない魔神だ。

「んじや行くぞ。良いか？」

結局同行することを承諾したパイモンを中心に、眼前の3柱の魔神をゼアノスは見渡す。新しい玩具を見つけた子供のようにはしゃぐエヴリーヌと、凜とした雰囲気放つ

ているラーシエナ。いつもと特に変わった様子の無いパイモン。

無言を肯定と捉えて、ゼアノスは歪みの回廊を展開する。

誰よりも早くエヴリーヌが突撃し、それにラーシエナが続く。戦うことは苦手だが嫌いではないパイモンも回廊に入り、最後にゼアノス自身も転移した。

ゼアノス達はその部屋から出て行った、その直後。パイモンが仕掛けた術式で発動している宮殿の内部映像には、新しい発展があった。

偶然にもセリカとリウイが同じタイミングで同じ大広間に入り、エクリアとイリーナが感動の再会を果たしていたのだ。だがそれも、転移してしまったゼアノスに分かるはずもなく。

セリカとリウイの両雄が対面している頃にはゼアノスもはぐれ魔神のいる大部屋へ行ってしまったので、気付く事はなかった。



ベルゼビュート宮殿は五階建てであり、俺が歪みの回廊を通して転移した3階の大部屋には、怪獣大決戦やら怪獣大戦争という言葉が相応しい戦場と化していた。ここに

るはぐれ魔神は、全員がラテンニール並みの巨体だったのだ。

黄色い全身から強烈な電撃を放っている魔神、アガチオン。

山羊角を生やした三つの頭を持つ恐竜型の魔神、トリグラフ。

東洋龍のような姿で石の皮膚を持つ割崖龍の魔神、ライアナス。

そして、光分子砲を放てる地獄大侯爵。ソロモンの魔神、サブナク。

転移した直後に攻撃を仕掛けたのか、エヴリーヌとラーシエナが既にその4柱の巨大魔神と戦っていたのだ。だがアガチオンとトリグラフはともかく、ライアナスとは相性が悪いらしい。

ラーシエナは侍のように大きな刀を扱うが、彼女の得意な攻撃方法は連撃だ。魔神としての膂力を発揮して行う連続攻撃は、本人の剣舞の出来の良さを含めて脅威だ。

だがラーシエナの膂力自体は、魔神としては平均的なもの。素早く刀を振るう技術は相当なものだが、それ故に単純に防御力の高い存在は、ラーシエナの天敵だ。いくら攻撃しても、一撃一撃があまり効いていないのだから。

エヴリーヌは遠距離では弓矢と魔術、近距離では鉤爪といったヒット&アウェイ戦法を中心に戦っている。だがこれもラーシエナと同じく、純粹に力が足りてない。

弓矢は魔力を多く込めれば石の皮膚とて貫けるだろう。鉤爪では、近づきながら魔力を一点に集中するなんてエヴリーヌの技量では無理なので、論外。それが分かっている

のか彼女も離れてはいるのだが、いざ魔力を込めようとすると、ブレスが飛んで来る。魔術でもそれは同様。

というわけで石の皮膚を持つライアナスには、大したダメージを与えていないようだった。

ではライアナス以上に頑丈、堅牢、堅固という単語が似合いそうで、実際に堅い巨軀を誇る魔神サブナクはというと。

「ああ、そうなのですか」

「……」

「なるほど。貴方も変わっていませんね」

「……」

「ええ、当たり前ですよ」

パイモンと会話していた。

サブナクが一切喋らないので会話で良いのか不明だが、とにかく心話か何かで語り合っているのは確かだ。ラーシエナとエヴリーヌは今も戦闘中なんだが……と、そこでパイモンが俺を見た。

「さて、ゼアノス様。サブナクに貴方のことを、凶腕であることを含めて話しました。誘ってみたのですが、貴方の下に就くのは、むしろ望んでいたらしいです」

「話が早いな……で、それだけか？ 違うんだろ？」

「無論、その通りです。一度で良いからゼアノス様と戦ってみたい——とのこと」

「分かりやすいというか、ソロモンの魔神は全員そうだったな。パイモン以外は」

「目の前でルシファー様を圧倒している姿を見れば、そんな気はなくなりません。ただでさえ私は、戦闘が苦手なものですから」

苦笑いを隠そうともしないパイモンにもう一度笑い、サブナクを見やる。やる気満々なのか、その身体から魔力が溢れ出ている。溢れる魔力によって生まれたオーラで、一部の景色が揺らいでいる程だ。

パイモンにも言ったが、ソロモンの魔神ってこういう奴が多い。仲間になるから力を知りたいとか、力を見せてみる、だとか。

「じゃあ俺はサブナクとやるから、パイモン。お前はあの魔神とやってこい。ラーシエナ達とは、見る限り相性が最悪らしい」

「そのようですね。では、失礼します」

パイモンは俺に礼儀正しく一礼し、ブレスを放とうとしているライアナスへ簡易な魔力弾を撃ち込んだ。

深凌の楔魔で最も魔術に長けている者の魔力による攻撃は、例え簡単なものであっても威力は高い。割崖龍とも呼ばれている魔神は、それを受けて大きく怯んでいた。

「まあ、あつちはあつち、こつちはこつちで……そろそろやりますか！」

凶腕ではない、歪魔の魔神としての本気。実はちと分が悪い。でも凶腕状態だと無双できる楽しみはあつても、戦い自体は楽しめない。

だから俺は、肉体を変化させた。部下の働きによつて手に入れた、歪みの主根。その最下層に存在していた魔神、アラストールに似た形態に。

倒したはずなのに未だにしぶとく生きていたのを、ノワールが事前に処置してくれていたので、立ち寄った際に吸収していたのだ。

……視界の端に、俺を見て吃驚しているのがちらほら見える。だがそこは無視！

「■■■■——ッ!!」

ドラゴン形態となり魔力を集中させた拳を振るう俺に対して、サブナクはその巨体の体重を込めた拳を振り下ろしてきた。ソロモンの魔神でも腕力ならトツプクラスであろうサブナクの一撃は、単純故に強力で、破滅的だ。

何かの本で読んだ。『巨人は頭が弱くて魔力を扱う技術も低い。だが単純に大きくて、筋力がある。故に、人間より強い』と。

身体が巨大、つまり巨躯。それだけで武器になるのだ。

ならば巨人より大きくて、岩より堅くて、竜種より重い。そんな物体が魔力と体重を込めた拳を振ったら、どんな威力になるのか。想像できない。むしろ、したくない。

ぶつかり合った二つの拳は、しかし奇跡的に拮抗していた。どうやら俺の方が、込めた魔力の量が多かったようだ。

この衝撃で、周囲に衝撃波が発生する。

それに触発されたのか、他のはぐれ魔神——アガチオン、トリグラフ、ライアナスの3柱——はこちらを振り向いて、俺達を脅威の存在だと認識したのか電撃やブレスを放ってくる。普通ならば避けるか受ける準備をするところだが、俺とサブナクは見向きもせずに……

「ガアアッ!!」

「■■ツ!!」

再度、拳をぶつけ合った。

またもや発生した衝撃波が、アガチオンのサンダーストームを、トリグラフの三属性ブレスを、ライアナスのストーンブレスを掻き消した。

そして、その隙を逃す奴らではない。

ラーシエナはアガチオンに「十六夜 破」を放ち、首に風穴を空け。

エヴリーヌはトリグラフに「リウ・ネール」で、一直線上にあった首を全て穿ち。

パイモンはライアナスに「審判の轟雷」を落とす、弱点属性を突いて丸焦げにした。

ちなみに、

【十六夜 破】は複数の斬撃を一点に纏め、斬り刻む技。

【リウ・ネール】は闘気と魔力を弓矢に集中させ、一直線に貫く技。

【審判の轟雷】は雷神とも思えるほどの雷を、中範囲に発生させる魔術だ。

先程の衝撃のせいで距離が開いていた俺とサブナクはそれらを見た後に向かい合い、同時に口を開けて……

俺の口からは、無属性最強のブレスである、「ディオルブレス」を。

サブナクの口からは、万能属性で戦略級の威力がある「光分子砲」を。

——互いを狙い合って、放った。

一集結一

ゼアノス達が最奥の部屋から、はぐれ魔神と戦うために転移したのと、ほぼ同時刻。五階建ての宮殿の二階の大広間に、対となったふたつ入口から、それぞれの勢力が同じタイムミングで進入した。

片方は半魔人の王リウイ・マーシルンが率いる、メンフィル王国の精鋭組。

もう片方は神殺しセリカ・シルフィルを筆頭とした、種族の共通性が少ない一組。

「イリーナ！」

「え、エクリアお姉さま！」

どちらも互いに驚いて歩みを止めるその中で、走り出した人物がいた。エクリアとイリーナ。殺し殺された関係の姉妹であったが、それはフェミリンスに掛けられブレアードの呪いによるもの。神殺しの使徒となり呪いが治まっている今では、何の問題もない。

「イリーナ……本当に良かった。生きていてくれて、ありがとう。そして、ごめんなさい。ずっと謝りたかった。私は貴方を、貴方を……」

「それは、もう良いのです。私も、お姉さまがご無事で良かったです……」

大広間の中心で涙を流しながら抱きしめ合う姉妹を見て、足を止めていた二組は歩み寄る。こんな簡単に歩み寄れたのは、リウイとルナークリアに面識があることも幸いしているだろう。

「エクリアの様子とあの娘から、メンフィル王と見受けるが……」

「ああ、リウイ・マーシルンだ。だがお前は……エクリアとはどのような関係だ？」

「俺はセリカ・シルフィル。エクリアは俺の使徒だ」

「その名……『神殺し』か。だが、エクリアが使徒だど？」

警戒しながら近づき、一応の自己紹介を済ませる。ルナークリアはともかくセリカとテトリは、メンフィル国の人物を一切知らないのだから。相手側からしても、セリカは伝説上の人物。戦士としての誇りを持つファームシルスと、剣士であるカーリアンは興味津々だ。

元マーズテリアの聖騎士であるシルフィアと、マーズテリアの聖女ルナークリアは平和的に話が出来よう会話の懸け橋となり。テトリとペテレーネはオドオドしつつ、自分の主と話を合わせていた。

姉妹の会話にセリカとリウイも加わり、エクリアが追放されてからどのようになっているのかを報告し合う。

リウイとイリーナは、機密情報は無理だが、メンフィルの一般的に知られている情勢や、最近の話題。特に魔神デイナーネや魔神ゼフィラについてのことを話した。何度かリウイが止めようとしていたが、天気の話をするかのような気軽さでイリーナが姉に情報を語るの、リウイは気が気ではなかった。

さすがに魔神の話題ではルナークリアも話に参加したが、ゼフィラの件については特に何も言わなかった。秩序ある環境の下で生活し、リウイの命令を聴くのであれば、あとはもう国の問題であるためだ。細かく介入するのを、ルナークリア自身は是としな

い。

セリカとエクリアは、主に放浪していた最中の出来事を話した。

どの道筋でどこに行ったのか。その途中で出会った、ゼアノスという魔神からセリーヌの噂を聞いたこと。ノワールという女性と途中まで共にいたことなど。

ゼアノスの名前が出た際にリウイとルナークリアが反応していたのだが、思ったことは違っていた。リウイはデイナーネから聞いていた事を思い出し、ルナークリアはゼアノスが生きていた事を知って、複雑な気持ちになっていた。

瞬間。

「——ッ!?!」

「この気配は……!?!」

莫大な魔力の波動が、宮殿の全域を襲った。発生地点はセリカ達がいる場所より上の階層であることに、この場にいた全員が気付いた。

「魔神だな。しかも、一柱や二柱では済まない数だ」

「どうやら争っているようだな。深稜の楔魔か、はぐれ魔神か、宮殿を守護している魔神なのか……そこは判断の付けようがないが」

荒ぶっている魔力と気配を上から感じたセリカとリウイが、それぞれ述べる。そこで透かさず、ルナークリアがリウイに提案した。

「陛下、これから先はどのような事が起こるか分かりません。ここは、一時期協力し合いませんか？ もしかすれば、この他にも魔神や神に連なる者が出る可能性があります」

「俺もその事については同意だ。その可能性が無いと断言できない以上、少なくとも魔神がこれだけいるとなれば、ここから進むのは難しいだろう。負けるつもりはないが、確実に勝てるとも言えん」

ルナークリアの言葉に、是と答えているのと変わらない返答をリウイは返す。自分の腕にそれなりの自信を持ち、仲間も強く滅多な事でも負けないと信じているリウイだが、魔神がどれほどいるか分からない場所に行くような馬鹿ではない。

「では、陛下」

「ああ、この場限りのものとなるだろうが、協定を結ぶとしよう」

「ありがとうございます。セリカ、貴方抜きで話を進めてしまったけれど、貴方もよろしいでしょうか」

セリカは断らないと確信しているのか、質問というよりは確認の言葉だった。セリカとしても異論があるはずもなく、構わないと肯定し、だが唯一の不安な点を聞いた。

「エクリア、お前はどうか？」

イリーナと話を終えてからは、まるで借りてきた猫のように委縮してしまったエクリアを見て、セリカが尋ねる。彼女が共にいたくないと言うのなら、強制するつもりはないからだ。

エクリアがこうなってしまったのは、妹のイリーナやリウイといったメンフィルの関係者に対する罪悪感が原因だった。イリーナにとっては自分を、リウイにとっては最愛の妻を、エクリア本人にとっては妹を殺しかけてしまった、というものだ。

本人から許しの言葉は聞いているし、何よりあれは呪いのせいである。だからといって完全に割り切れるほど、エクリアは凶太くない。

「私は構いません。ですがその、私が一緒にいても……良いのですか？」

だからエクリアは、自分が一番傷つけてしまっただろう人物に……リウイに聞いた。それが自己満足だと分かっているが、それでも聞かないなんて選択肢は、エクリアの中には無かった。

「イリーナはお前を許し、お前もまた、国外追放の罰を受けた。ならばこれ以上、とやかく言う必要はないだろう」

「あなた……」

「……ありがとうございます」

リウイの決断にイリーナは安心し、エクリアは頭を下げた。特にイリーナの安心感は非常に大きい。夫と姉、どちらも大切な存在だ。どちらかがどちらかを殺す光景なんて、見たくはないのだから。

ズガアン!!

だがそこで、その折角の感動が消えてしまう出来事が起きた。なんと上の階層から、轟音と共に衝撃が飛んで来たのだ。

「くっー!」

「ぐう……」

しかもそれだけでは終わらず、

ドゴオン!!

少し間を開けて、またしても轟音と衝撃が響き渡る。空気が振動し、浮遊している宮殿の中にもいるのにも関わらず、地震が起きているかのような感覚に陥っている。

「ちよ、なんなのよ、もう!!」

「皆様、お怪我はありませんか？」

カーリアンが悪態をつき、ペテレーネが皆の心配をする。

セリカやリウイにそれぞれ追従していた、マーズテリア神殿の神官戦士やメンフィル王国の騎士の中には、あまりの勢いに倒れてしまった者までいたからだ。

怪我をした者は一人もおらず、ペテレーネやルナークリアの心配は杞憂に終わる。

しかしこれだけでは終わらずに、強大な魔力や闘気を皆が感知し、その後すぐに魔神三柱分の気配が消滅した。

「上層ではどうやら、勝敗が決したようだな。何者なのかが一切不明だが」

「そうねえ……ねえ、どうせなら今すぐ上つちやいませうよ。魔神が複数いても、今の

で決着がついたのなら弱ってるのは確かだろうし、被害が少なく済むんじゃない？ ま

あ、個人的には気に入らないんだけどね」

「ですが、その案には賛成します。この宮殿を攻略するならば、被害を最小限に留める事が最低条件でしょう」

セリカの呟きにカーリアンが同意しながらも提案を出し、シルフィアが賛成した。

ちなみにカーリアンは自己紹介する前から同じ剣士としてセリカを興味の目で見ており、今では既に仲良く(?)なっている。

「セリカ」と呼び、この事柄が終わった後に剣の打ち合いの約束を取り付けるくらいに

は。

カーリアンとシルフィアの言葉を聞いて、彼女らの意見に賛成する者が増える。イリーナとエクリア、ペテレーネとテトリ、ルナークリアとファームシルス。

ファームシルスは提案を出したカーリアンと同じく、個人的には反対だ。武人として己の力を試したい、正々堂々と一対一で勝負したい。そういう願望を、二人とも持つているためだろう。

だが仲間の、国のことを考えるのなら、それは決して許されるものではない。特にファームシルスには大將軍という立場もあるので、自重することも必要だ。

「そうだな。ではここで隊の編成を行い、迅速な行動を心掛け——」

リウイのその後の言葉は、周囲はもちろんのこと、本人にすら聞こえなかった。

先程二回も聞こえた轟音を越える、宮殿全体が揺れるほどの爆音がしたからだ。

爆音が響く、なんて言葉では物足りない音であった。

永い時を生きているハイシエラでも、これほどの爆音を聞いたのは三神戦争くらいだろう。人間や魔族の戦争でも、こんな音はしない。まさしく、神同士の争いで起こる音だ。

セリカ達はこの爆音の原因が、ゼアノスとサブノクの激突であることを、まだ知らない。

古神に連なるソロモンの魔神と、手加減しているとはいえ凶腕の魔神である。その二柱の、必ず殺す技同士の衝突だったのだ。そう、「光子砲」と「ディオルプレス」だ。あまりにも強大なエネルギーの波が襲い掛かり、ほぼ全員がその場で膝をついてしまふ。だが天井を見上げていたセリカが、いつもでは想像がつかない大声で突如叫んだ。

「離れろー！」

全くと言っていいほどに感情の揺れが見えないセリカの大声に、本能的に察したのか全員が従った。離れると言ってもどこから離れればいいのか分からないものだが、皆は広間の中心から離れて行った。

それは長い戦闘経験の賜物といったところか。散開したその直後、天井が砕けて五つの巨体が落ちてきたのだ。広間の中心に近ければ近いほど命の危機は高かったが、セリカの警告のおかげで、飛び散った石の欠片が肌を掠める程度の怪我しか出なかった。

(次から次へと、この宮殿は忙しいのう。じゃがここまで魔神が集っているのなら、我も表に出たいものなのだ)

(……戦いたいのか?)

(まあ。上層で戦っていた魔神の影響で、今は周囲に魔力が満ちている。これならば、限られた時間ではあるが真の姿に……む)

何か落ちてきた衝撃で、広間には煙や粉塵が舞っていた。だがそれも時間が経過したことで徐々に消え始め、セリカとハイシエラは心話を中断した。

煙が晴れて彼らが見たのは、五つの巨体だった。

首に穴が空いている、黄色い体表の巨体。

三つの首の全てが穿たれている、恐竜型の巨体。

身体の隅々まで黒焦げになった、長蛇型の巨体。

全身がポロポロになっているが、岩石を思わせる超重量の巨体。

唯一の無傷で、青白く光る魔力を体中から発光している、竜型の巨体。

もちろんのこと、最後の一柱がゼアノスだとは誰も思っていない。

しかも現れたのはそれらだけではなく、更に三つの影が舞い降りた。その大きさは最初に落ちてきたのとは違って、人間と大差ない。

その影の内、リウイは二人知っていた。少し前に喧嘩を吹っかけてきた魔神……そう、深稜の楔魔だったからだ。

「エヴリーヌにパイモン、やはり来ていたのか」

「これはこれはリウイ陛下、お元氣そうで何よりです」

「フェミリンスの匂いが増えている……」

リウイの言葉にパイモンはわざとらしく律儀に一礼し、エヴリーヌはリウイではなく

フエミリンズの血筋であるイリーナとエクリアを憎らしく睨んだ。その時点で過保護な神殺しが、エヴリーヌを敵として見た事は蛇足だろうか。

「なるほど、やはりグラザの息子か。どこか面影がある」

漆黒の翼を優雅に使って滞空している女魔神は、ラーシエナリウイを見てそう一言。誰だトリウイが聞けば武士の心得を持つラーシエナは、堂々と答えた。

「我はラーシエナ。深稜の楔魔、序列3位だ」

「あのパイモンとエヴリーヌがいることから、もしかしたらとは思ったが……やはり深稜の楔魔だったか。いや、父を知っているのだから当たり前か」

予想が的中していたらしいリウイは、瞬時に他の落下してきた者達を見渡す。

まだ接点は非常に少ないが、彼女らの事をリウイは少なからず理解しかけていた。何を考えているのか分からないパイモンは除外だが。

エヴリーヌは、戦闘力は目を見張るものがある。だが精神的には見た目通りで、幼い。ラーシエナは雰囲気ファームシルスと似ており、武人としての誇りを大事にしている。おそらく、すぐに激昂するような性格ではない。ただし一度熱が入ると冷めにくいタイプだ。

その二人の様子を見て、リウイは思わず舌打ちをしそうになる。

エヴリーヌとラーシエナらは見るからに、魔神としては珍しい分類だが仲間を大切に

する性格だろう。そんな彼女らが、明らかに事切れている魔神に見向きもしていない。つまり、今死んだ魔神の中には、深稜の楔魔はいないということだ。

魔神が敵意を露わにしている様子から、和解は最早不可能。ならば敵対するしか道はなく、それなら少しでも数が減った方が、メンファイルにとつては有利になる。だが現実には甘くなく、深稜の楔魔の被害は実質ゼロだった。

(パイモン、ラーシエナ。はぐれ魔神の死体やサブナクをあそこに運んでくれないか？
こいつらの相手は俺とエヴリーヌが引き受ける)

ラーシエナの自己紹介が終わった当たりで、巨大な竜型の魔神——セリカやリウイは知らないが、それはゼアノスである。ゼアノスが心話を飛ばした。混乱しないよう、エヴリーヌにも聞こえるようにしている。

その提案に驚く二人だが、盲目的にゼアノスを敬っている彼らは質問すらも無駄だと言わんばかりに揃って恭しく頭を下げ……言われた事を迅速に行動し、去って行った。

それは、10秒にも至っていない。

ラーシエナが簡易な術を発動させることで小規模の爆発を発生させ、はぐれ魔神の死体を唯一死んでいなかったサブナクの近くへ無理矢理動かす、その間にパイモンが用意していた転移術で転移する。

……というものだったのだが、その速さはまさしく、神業だった。

「……構えろ」

彼らの突然の行動で唾然とするリウイ達に、セリカが静かに警告する。彼らを見ている巨竜がゼアノスだと今の内に知っていたのなら、セリカは剣を抜かなかっただろう。だがゼアノスは、今回ばかりは本気で戦い合うという思いがあった。凶腕は最終手段として、この場所から実力で追い出そうと思っていたのだ。それならば、相手が本気で斬りかかって来た方が、こちらも躊躇&遠慮なく拳を振るう事が出来ると考えたのだ。だから、正体を明かしてない。

「パイモンとラーシエナの行動から深稜の楔魔だと推測できる正体不明の魔神。それに加えてエヴリーヌか。一時的なものとはいえ、『神殺し』や貴女達と協定を結べたのは僥倖だったようだ。聖女殿、先程の提案に感謝する」

「いえ、こちらとしても、御国の方々と手を結べたのは幸いでした」
「……お別れは済んだ？」

リウイの言葉にルナークリアが返して、皆が武器を構え直したのと同時に、エヴリーヌの指からパチンと音が響く。

笑みを深くしたエヴリーヌが指を鳴らして出現させたのは、両手の代わりに甲殻類の大鍬を持った魔族。ベルデーモンと呼ばれる、上級悪魔の一種だ。貴族悪魔には及ばないが、上級悪魔の中位程度の戦闘能力を持っている。

「感謝してよ。退屈なお話の間、私とお兄ちゃんが態々待ってあげたんだから。じゃ、みんなみんな、特にフェミリンスは……死んじやってよ！」

高らかに叫んだエヴリーヌが、呼び出した何体ものベルデーモンを追従させて飛翔した。

その先にいるのは、エクリアとイリーナ。フェミリンスの血筋を真つ先に殺そうと、力を込めた矢を放ち……

「させんっ！」

「そこですー！」

リウイの魔法剣とシルファイアの神聖剣に阻まれる。

続いてベルデーモンが大剣を振り下ろしたり魔術の暗黒槍を放ったりで、エヴリーヌに命令された通りにフェミリンス姉妹を殺そうとする。

「私を甘く見ないでください！」

だがそれはイリーナ本人の神聖魔術、「防護の結界」によって防がれる。

前に凶腕ゼナスによって蘇ってから、彼女は魔神級の強さを得た。深稜の楔魔が相手ならば負ける可能性もあるが、中位の上級悪魔程度の攻撃ならば絶対に通さない。

そして。

「甘い！ 隙は見逃しません！」

エクリアの冷却魔術である「氷垢螺の吹雪」を受け、数体のベルデーモンが氷漬けになる。

それに続くようにカーリアン、ペテレーネ、ファームシルスが剣技や魔術で撃退しているのだが、次から次へと際限なくベルデーモンが現れる。それだけでなく、いつの間にか下級悪魔の群れも現れていた。

「くふふ、そろそろ死んじやええば？　どんどん出てくるよう？」

「誰がー！」

「諦めるわけないでしょー！」

いくら幼くとも魔神は魔神。エヴリーヌの多彩な攻撃に、リウイ達は苦戦する。エヴリーヌの精神が不安定であったならまだ楽だっただろうが、ゼアノスがいることで安定しながらも激しく動くという行動を可能にしている。だがその動きが原因で、多数の悪魔を召喚するなど出来はしない。

では、ベルデーモンや下級悪魔の群れはどこから出現しているのか。それを発見したのは、遠距離から補助と攻撃を同時に行っていた木精コナチリのテトリだった。

「ご主人様！　あの魔神の足元を見てください！」

テトリが示すのは、巨大な竜型の魔神ゼアノスの両前足。両足の真下には、それぞれ魔法陣が描かれている。片方からはベルデーモンが少しずつ出現し、もう片方からはレッサー

デーモンが次々に湧き出ていた。

「あいつを倒すしかない、か。」

群がる悪魔を幾重もの剣圧で斬り倒したセリカが呟く。倒すことによつてハイシエラを通して魔力を補充できるので肉体的には常に万全だが、他の皆はそうはいかない。

「セリカ様、ご無事ですか？」

呼ぶ声が聞こえてセリカがふと横を見れば、そこにはエクリアとルナークリアがいた。

「ほぼ無傷のようですね……セリカ、頼みがあります。あの魔神を倒す協力をお願いします。このようですね。エクリアという魔神はリウイ陛下が引き受けてくださいました。湧水のように現れる魔族を討ち、何もかもが分からない魔神と対峙することになります。……」

ルナークリアはゼアノスのことを、『何もかもが分からない魔神』と称した。何故ならその姿と、深稜の楔魔であること以外が本当に分からないからだ。

エクリアが『お兄ちゃん』と言っていたので、名前は不明。

何故か攻撃してこないのか、どんな攻撃をしてくるのか不明。

そもそも攻撃してこない理由が不明。

どんな能力を持っているか不明。

など、挙げればキリがない。しかし良く見れば、落ちてきた直後と比べて魔力量が上昇している。待機して休むことで、少なくなつた魔力を増やしていたのかもしれない。だがセリカは、リウイと協定を結んだ時と同じように了承した。どの道やろうとしていた事なので、拒否する理由も見つからなかつたからだ。それに未知なる敵と戦うのは、神殺したるセリカにとっては珍しくないことであつた。

「ありがとうございます」

「氣にするな。……ハイシエラ」

（うむ、我も御主と共に行くぞ！ 『神殺し』と『地の魔神』、初の共闘ぞ！）

ルナークリアの礼に対して無愛想に返し、持つている魔剣に話しかける。ハイシエラがそれに応えると同時に魔剣が光り、光が治まると、そこには青く長い髪と膨大な魔力を持つ美女が——ハイシエラが、肉体を得て現世に実体化した。

ハイシエラはまるで眠っていた獣のように手足を伸ばし、確かめるように指先を動かした。そして瞬き一つののち、巨竜を見つめる。

「血肉を得たのは久々だ……手加減できぬが、あつさり死ぬでないぞ！」

セリカの横に並んだハイシエラがセリカと同じ——飛燕剣を放つ構えになる。

突然の事にエクリアとルナークリアは驚いたが、エクリアはハイシエラの事を僅かながら聞いており、ルナークリアは既に知っていたのですぐに落ち着きを取り戻し、ゼア

ノスに対峙する。遅れてテトリも到着し、セリカ一行全員が揃った。リウイ一行は、既にエヴリーヌと戦闘を始めている。

他のマーズテリア戦士やメンフィル軍は、遙か後方にて悪魔の駆除をしている。レッサーデーモンはともかくベルデーモンなんて強敵が数多くいるので、重傷の怪我人が続出しているが、気にしている暇はない。

ゼアノスも、内心で笑いながら戦闘態勢になる。セリカと本気で戦ってみたかった彼としても、遠慮なく戦えるこの機会を嬉しがっていたのだ。

「まずはあの召喚魔法陣を壊しましょう。魔神は二の次です」
「分かっている！」

「不満はあるが、従ってやるだの！」

飛び出すセリカとハイシエラに、ゼアノスも今度ばかりは動いた。両前足で押し潰そうと、その四つん這いの巨体の上半身を大きく起こして……

「雷光——」

「地龍——」

「滅綱斬!!」

セリカとハイシエラも負けじと、電撃属性と地脈属性をそれぞれ組み合わせた一列に飛ぶ、威力重視の斬撃を放った。

—始まる死闘—

「雷光——」

「地龍——」

「滅綱斬!!」

■^オ■^オ■^オ■^オ■^オツ!!
 「滅綱斬!!」

俺へ目掛けて飛んでくる二つの斬撃に合わせ、俺は両前足を振り下ろす。

相殺しようとする魔力を込めたソレは、しかし僅かに拮抗しただけで威力負けしてしまっ
た。

手を斬り裂かれて痛みが走り、そこでようやく思い出した。【滅綱斬】は装甲の厚い、つまりゴーレムやサブナクなど、とにかく堅い存在に対して真価を発揮する技だ。俺自身も飛燕剣を使うから、よく知ってる。今まで忘れてたけど。今この技を思い出したけど。

そんな【滅綱斬】に、セリカとハイシエラがそれぞれ得意な属性を付加させているの

だ。先程サブナクが放った「光分子砲」程ではないが、それに準ずるくらいの破壊力があつた。魔力で包み込んでいなければ、消し飛んでいたかもしれない。

「並みの魔神であれば、今の方がついていたのだがな！ この程度で済むとは、余程強大な力を持つておる魔神だの！」

早くも血を流してしまった俺だが、そこまで酷い怪我ではない。走っていた子供が転んで、両手を地面についたらガラスの欠片が落ちていて、怪我をする。そのくらいの傷だ。

……充分に酷い怪我の部類だな、これ。でも魔神にとつては軽傷で済むくらいである。特に俺には「超再生」なんてスキルもあるので、時間が経てば掠り傷程度に目立たなくなるだろうな。

そして高揚して叫んでいるハイシエラから、異常な速度でこちらに走って来るセリカへと視線を移す。既に足元にまで近づいていたセリカは、大きく跳躍して俺の顔面にその手に持つ剣を下ろした。

セリカが今持つている剣は当然ながらいつも使っている、魔神を封じた剣ではない。

天使階級第五位の力天使が封印されている、『ヴァーチャーズ』という名の聖剣である。『地の魔神を封じた剣《ルン・ハイシエラ》』には劣るが、騎士にとつては憧れの名剣の一つだ。

魔族に対して聖剣は有効だが、それは所詮、魔神ではない奴らに限る。魔神には聖剣など、上級の騎士が持つ剣よりは斬れる、程度の認識でしかない。斬られても大して問題ないだろう。

相手が相手ならばまず避けず、構えようともしなかつたはずだ。だが今回の聖剣はそれなりの代物であり、何よりも使い手が世界最高峰の剣士だ。振りかぶってきた剣を防がない、なんて選択肢は存在し得ない。なので竜化して厚く鋭くなった剛爪で受け止める。

この爪は無属性で「豪鋭爪」というのだが、それこそルン・ハイシエラすら上回る頑強さがある。俺の両前足を斬り裂いたあの二つの斬撃も、この豪鋭爪なら受け止めきれたかもしれないと軽く後悔。

「我がいる事を忘れるでないぞー！」

ハイシエラが嬉々とした表情で『ジエリアの隷属剣』と呼ばれる地属性の魔剣から、複数の剣圧を放ってきた。俺も良く使う技であり広範囲を斬り刻む、飛燕剣の奥義の一つ、【枢孔紅燐剣】だ。

セリカの攻撃を止めているのは右手であり、空いている左手の豪鋭爪を薙ぐことでハイシエラの技を相殺しようとしたのだが……

「やいせませんー！」

「そこですー！」

エクリアの純粹魔術【エルリアウエラ】と、テトリの地脈魔術【歪み地響き】。

両者からそれぞれ放たれた強力な魔術によって大爆発が起き、左手は大きくそり返される事になった。

【歪み地響き】は空間に発生する歪みに魔力を組み込ませることで、空中に地響きを発生させる魔術だ。通常の地脈魔術は空中にいる者には当たらないのだが、この魔術を使えば当てる事が出来るようになる、画期的な魔術だ。かなり高ランクであるこの魔術を使えるとは、流石はセリカの使い魔と言ったところか。と、内心でテトリの評価を上げる。さて。この両者によってハイシエラの斬撃を防ぐ手立てがなくなり、俺に迫ってきているわけだが、被害に遭うのは俺だけではない。

俺の前足部分には、二つの召喚魔法陣がある。下級悪魔と、エヴリーヌ直属のベルデーモンを出す為の魔法陣だ。そいつらは今も出現中なのだが、出てきた瞬間に無残にも塵芥と化してしまった。加えて俺にも命中し、思わず仰け反ってしまう。

「マーズテリアよ、御力をー！」

その隙を見逃す甘い女ではない聖女が、天から落ちる神聖魔術を繰り出してくる。

それは俺を狙ったわけではなく、召喚魔法陣に落ち……バリンと嫌な音が響いたと思えば、粉々になって消えかけている魔方陣の残滓があった。ベルデーモンの大剣が一

緒に落ちている様が、無駄に虚しさを感じる。

「これで、第一関門は突破しました」

「後はコヤツを倒すだけ、か。我としてはこちらの方が好みだの。チマチマと小賢しく動くのは性に合わん」

ルナークリアの確認したような報告にハイシエラが文句を垂れるが、獲物に襲い掛かる肉食動物の如く鋭い目で俺を見ている。戦略としての作戦ならともかく戦術の作戦なんて、ハイシエラには苦痛なのかもしれないな。

だがそんなハイシエラに否定的な意見を言う人物がいた。ちよつと驚いたのだが、それは、予想外にもエクリアだ。

「ですがどのような策を使おうとも、先に進むためにもこの魔神を出来る限り早く倒すに越したことはありません。深稜の楔魔が最低でもあと二柱、この宮殿に來ていることは確定しています。彼らに宮殿の支配権を取られでもすれば、レスペレント地方にどんな惨事が引き起こされるか……」

ベルゼビュート宮殿はレスペレント地方の地下に広がる大迷宮たるブレアード迷宮に、魔力を供給している装置の役目を果たしている。まあ、俺が繋げたワケだが。

それが何なのかと思うかもしれないが、簡単に説明すれば、この宮殿を手に入れる事が出来れば、ブレアード迷宮を思うが儘に操作（支配）することが可能になる。

そしてブレアード迷宮はレスペレント地方、すなわちリウイやイリーナ達が住むメンフィル王国やその他諸外国の要だ。今は主にメンフィルが管理・利用しているが、戦争が勃発しそうな深稜の楔魔に取りられれば、大打撃を受けるのは確定だ。

……と、エクリアは考えているんだと思う。ブレアード迷宮の恐ろしさは、身を以つて知っているだろうし。

そしてその予想は……実は、ほぼ正解だ。

とある事柄から、メンフィル相手に戦う理由ができた。『彼女』の願いは、復讐。その悲願を叶えてやるためには、王国を潰す必要があるかもしれないんだよね、これが。

もう九割ほど原作知識は記憶から飛び立っているが、残っている知識も、もう役に立たないだろう。

だが闇夜の眷属が統治する国とはいえ、凶腕が直々に国を攻撃できるはずもない。下手すれば、光側の現神から無駄に疑われる可能性がある。だからこそ深稜の楔魔として、俺はここにいるわけだ。表面上は深稜の楔魔として、実際はデイストピア（滅亡しかけ）の魔神として。

これで現神を誤魔化せるとは欠片も思っていない。だが凶腕の正体を一部以外に秘密にしている今ならば、こういつた言い訳をすることができる。屁理屈かもしれないが、こういうのも大事だ。

「隙ありですー！」

「カ ア ア ア ツ!!」

俺が思考に耽った事を察したのか、テトリは魔力の籠った矢を放ってくる。とは言え当たるはずもなく、ブレスで吹き飛ばした。

「そこだのー！」

— エルIIアウエラ —

ブレスを終えた俺に、ハイシエラが即座に純粹魔術をぶち込んでくる。

メギドの炎と同等の純粹爆発と言われるその威力は、使用者が魔神ハイシエラの魔力であるために、通常のソレよりも上だ。

まず、この魔術を使える人間自体が少ない。使えるのは宮廷魔術師などのエリートで、魔術大国と呼ばれる国でさえ、十人もいないだろう。

そんな魔術を惜しみなくバンバン放ってくるハイシエラは、流石と言わざるを得ない。

生前の俺は彼女を、ソロモンの魔神に匹敵する強大な魔神だと思っていた。たぶんその評価は正しかったのだと、連続して繰り出される魔術を受け、今更ながらそう思う。

視界の端には、仰け反った俺を見て好機と悟ったらしいエクリアもいた。同じ純粹魔術で、物質破壊球とも称される「アウエラの裁き」を発生させている。

だが俺は、それらを甘んじて受け続ける馬鹿^{マソ}ではない。

— ケールⅡファセット —

— 破滅のヴィクティム —

— 深淵の暗礁壁 —

機工重力と術者の魔力を反応させる、槍型の暗黒魔術〔ケールⅡファセット〕。

身体を崩壊させてしまう、漆黒の霧で包み込む暗黒魔術〔破滅のヴィクティム〕。

封印^{ソロモン}王の力を根源とした、暗礁壁という閉鎖空間に閉じ込めて持続打撃を与える暗黒魔

術〔深淵の暗礁壁〕。

最上位の暗黒魔術三つを、同時に前方へ展開する。上位純粹魔術である〔アウエラの裁き〕や〔エルⅡアウエラ〕では、弱めることはできても相殺することはできない。

純粹魔術を掻き消して少し弱くなったとはいえ、それでも上位暗黒魔術となんら謙遜のない魔力が、ハイシエラとエクリアを襲う。

「く、間に合って……!」

「お二人とも!」

すかさず、ルナⅡクリアとテトリがそれぞれ〔防護の結界〕と〔岩の抗体〕を発動させる。物理的にも魔力的にも防御力を高める神聖魔術に、毒や精神攻撃を受けにくくする地脈魔術である。

ハイシエラが闇魔力の槍に貫かれ、エクリアと一緒に漆黒の霧に覆われ、暗黒の暗礁が追撃する。その直前に二人が一瞬だけ光って見えたので、間に合っているのだろう。

彼女らを守ろうとしているのなら、【防護の結界】はともかく【岩の抗体】では特に意味はない。良くて気休め程度だろう。もっと良い上位の魔術も使えるはずだが、詠唱が間に合わないかと判断したのかもしれない。

とはいっても、ハイシエラは上位に値する魔神だ。恐らくあのくらいでは、重傷にすらなっていないと思う。でもエクリアは……

「無事かの、嬢ちゃん」

「はい、何とか……大丈夫です」

無事らしい。無傷とは言えないが、大きな怪我、というのではない。ハイシエラと比べれば。

攻撃を受けながらエクリアを引っ張っていたのか、彼女を抱き締めて自身の魔力で包んでいる。そのせいかハイシエラ自身はダメージを受けたようだ。まあ大事ではなさそうだが。

「ハアッ！」

— 黒ゼレフの電撃 —

いつもと比べて表情が険しいセリカが、珍しく声にも覇気を込めて電撃魔術を放って

くる。高電圧で融解させる、黒い電撃。はぐれ魔神にパイモンが放った【審判の轟雷】に、少し劣る程度の威力だろう。

ハイシエラとエクリアが危険に晒されて、いつもは出ない感情が爆発したのか。普通の人間だったらこの十倍は激昂してらるだろうけど。

こちららも魔術で相殺しようとして……何かが顔にぶつかり、魔術にも当たってしまった。

「きばやんー！」

悲鳴を上げて宮殿の床に落ちた物体は、エヴリーヌだ。物ではなく者だが、それは些細な事だろう。飛んで来た方を見れば、それなりに傷ついているリウイ一行がこちらを見ている。

何となく理解できた。

最初はエヴリーヌが善戦していたが、決着がつかずイライラし始めて集中力が途切れて隙が出来た所に反撃を受けた……ということころだろう。

「く、うう……」

どうやら一度ではなく、何度も攻撃を受けたらしい。ハイシエラ以上の怪我をしている。

「総攻撃だー！」

リウイの掛け声で、セリカを除いた全員が一斉に構える。一瞬の間の後、剣を持つ者が構えを解く。それから一秒にも満たない間に魔術の奔流が生み出された。

高威力の剣圧が。鋭い突きの斬撃が。剣による幾重もの連撃が。聖なる光剣の一閃が。電撃を纏った接続剣の回転斬りが。

一点に集中した純粹魔術が。光で浄化させる神聖魔術が。神の力を顕現させた暗黒魔術が。地脈の力を得た矢の豪雨が。

その全てが、エヴリーヌと俺に迫る。力を溜めていただけはあり、大したものである。そのひとつひとつが、上級悪魔なら容易く消しされるだろう威力。それらが波となって襲い掛かってくる様は、恐ろしくも美しい。

……そろそろ現実逃避は止めよう。こんなものを受けてしまったら、エヴリーヌはもちろん俺でもヤバイ。

さてどうしようかとほんの少しだけ迷い……

エヴリーヌを手で掴み、歪みの回廊で転移させる。同時に響き渡る爆音。あいつらの攻撃の全てが俺に当たった音だ。

「ゴオオオオオッ!!」

意識していないのだが、苦痛の音が漏れてしまう。いくら俺でも、コレは痛いどころではない。激痛が全身を走っている。

「これで……終わりだっ！」

— 枢孔飛燕劍 —

総攻撃に唯一参加していなかったセリカが、飛燕劍の極意を集約した最強の劍技を放ち。

意識が、黒く染まっていた。

☆

ズシインと、その巨体が倒れる。竜型の魔神のその姿を見て、一同が安堵の溜息を零した。

全体から少しずつ魔力がポツポツと立ち昇り、それが空中で見えなくなっていくので、魔神の身体が消滅しかけているのだと判断できる。身体中の傷痕を見て、タフな奴だったとハイシエラは思った。はぐれ魔神との戦いに勝利し、そのまま自分達との連戦。体力が全快していて、それでいて一対一であったなら、勝敗は分からなかった。とも思う。

ちなみにハイシエラが（つまり魔神が）いることで一悶着起こりかけたが、既にエクリアがイリーナに説明しており、そのイリーナがリウイを（強制的に）納得させた。

「勝てたか……」

「結局、この魔神は何だったのよ……」

肩で息をしながら、リウイとカーリアンがそれぞれの思いを口にする。二人のこの言葉は、ある意味、この場の全員が思っていた事だった。深稜の楔魔であることは確実だが、逆に言えばそれ以外の事は何も分からなかったのだ。

「奴らの言葉を信じるならば……ラーシエナ、グラザ、エヴリーヌ、パイモン、ゼフィラ。そして、デИАーネではない。となると候補は残っている、序列1位のザハーニウ、2位のカフラマリア、7位のカファルー、10位のゼアノス。この4柱だ」

事前にゼフィラから聞いていた深稜の楔魔の各自の名前を、リウイは惜しみなく晒した。

何にせよ、深稜の楔魔とは敵対してしまったのだから。少しでも勝率を上げるためには、例えそれがマーズテリア神殿の聖女であろうと情報を提供した方が良いと判断したからだ。

だが、ここでちよつとした誤算があった。

セリカとエクリアが、ゼアノスから『セリーヌの死の噂』を聞いたことは、イリーナとの会話で知っていた。しかし『ゼアノスが深稜の楔魔であることをセリカが知らない』ということは、知るはずもなかった。

「何……ゼアノスが、深稜の楔魔だと？」

「陛下、それは本当なのですか？」

訝しげな表情をリウイに見せる、セリカとルナークリア。セリカとルナークリアが知っているゼアノスは『深稜の楔魔』ではなく、『デリストピアの魔神』としてだけだからだ。しかもあの強さで序列が10位というのにも、納得していない。

「俺はそう聞いた。そちらの方が知っているものと思っていたが……どうやら、互いの持つ情報にはかなりの違いがあるようだ」

お互いに知っている『ゼアノス像』が違っていることに気付き、軽い情報交換を行う。リウイが知っているのは、深稜の楔魔としての序列と、当事者から聞いた強さ。セリカ達が知っていたのは、デリストピアの魔神だということと、実際の強さ。更には容姿と性格。

「つてことはあの時に現れた、いけ好かないアイツが魔神ゼアノスだったってこと？」
「話を聞く限り、その可能性が最も高いだろう」

カーリアンとリウイが話しているのは、前にブレアード迷宮の『野望の間』にてブレアードを倒した直後に現れた、紫色の髪をした人物のことだ。正しく言えば倒した直後に現れたのではなく、最初からいたのだが、細かいところは気にしない。

「ではこの魔神は、魔神ゼアノスではない、ということでしょうか」

「そうなるな。聖女殿と神殺しが語った姿とは違いすぎる。見た目は人間と大差ないらしいが、これはどう見ても人間には見えん」

「ならばザハーニウかカフアールのどちらかになりますか……神殿の資料には、カフアールは『魔獣の王』とされる姿をしているとされ、ザハーニウは巨軀だということ以外は記されていませんでした」

「それは……どちらにも捉える事が出来るな……」

ドラゴンならば『魔獣の王』と称されても不思議ではなく、ドラゴンであるが故に今のゼアノスは巨大なので、判断し辛い。

この二つの候補でこの強さならば、序列が1位のザハーニウではないかという意見がすぐに出始め、そうかもしれないと皆が納得しかけた……その時だった。

「いや、そのどちらでもない。これはゼアノスだの」

会話の途中で話題の魔神をずっと見続けたハイシエラが、意見を一蹴した。

「何故、そう思う？」

自分以外の全員が呆気に取られる中、セリカは極めて冷静に尋ねる。この面子でゼアノスと最も永い時間を共に過ごしたのは、他でもないハイシエラである事をセリカは知っている。だからハイシエラが『これはゼアノスだ』と言った時から、セリカはその言葉を信じた。

「一見すればこの魔神から魔力が消えていくように見えるが……感知してみるが良い。肉体は薄くなっているが、魔力の質が全く変わっておらぬ。転移が得意な奴のことじゃ、魔力のみを移動させているのだろう。この部屋にはまだこやつ……ゼアノスの気配が残っておる」

ハイシエラが言い切つて、倒れている魔神を睨めつける。

それに反応するかのように、もしくは観念したかのように立ち昇っていた魔力は巨軀を覆い尽くすかのように渦を巻いた。

その魔力の渦が人の形を成し、そこには……

「全く……相変わらざるの観察眼だこと。嫌だ嫌だ」

「貴様と一度でも戦った事のある奴は、こう思う事じゃろう。『何があっても、こいつとの戦闘では一瞬たりとも油断できぬ』とな！」

ハイシエラに向かつて不敵に笑う、血まみれのゼアノスがいた。

—死闘の決着—

「ゼアノス……お前は、深稜の楔魔だったのだな」

「『深稜の楔魔には注意しろ』と言っていた本人が……」

「まあ、あの時は言ってなかったがその通りだ。にしても一瞬とはいえ、意識が飛んだぞ。死ぬかと思った」

どことなく悲哀の感情の籠った声でセリカが問い、エクリアも驚きを口にして、ゼアノスはいつもと変わらぬ雰囲気で何気なく答える。

そして、ゼアノスの事で最も複雑な思いを胸に抱いている人物が、一步前に入る。

「この事態を、凶腕はどう捉えているのですか？ 深稜の楔魔としてであっても、貴方の行動は現神と凶腕の『約束』に、大きく関わってしまいます」

ルナークリアの言葉を聞いて、ゼアノスはニヤリと笑う。ゼアノスからしたら、自身は宮殿の所有者で、侵入者を排除するだけなのだから。だが全身が傷だらけで大量に出血しているゼアノスが笑った事で、数人が引き攣る。それほどに不気味だった。

ふと、ゼアノスは背後を見た。戦闘の余波で崩れたのか、宮殿の壁が大きく空いてい

る。そこからは外の景色が一望でき、いつの間にか夜になっていたのか、月が出ていた。かつてゼアノスが、イオやリユーシオンの力を借りて創り上げた【黄色の月】だ。

※【戦力強化、むしろ増加】を参照。

「なあ、お前ら。月は各々で、何かしらの祝福を与えるってことは知ってるよな？」

「無論だ。赤き月は獣人族に力を与え、さらには種族・信仰関係なく性魔術での恩恵を受ける事が出来る。青き月は穢れを浄化させる祝福を与え、死者に安らぎを与えることで不死者や霊体を鎮める事が出来る。呪いを解くことも可能だ」

ルナークリアの言葉を丸つきり無視したゼアノスの突拍子の無い質問にリウイが答えるが、この知識はラウルバーシユ大陸で生きている者ならば、ほとんどが知っている常識だ。だが、逆に言えばこれしか知らない。赤と青の月は誰もが知っているが、ディルリリフイーナこの世界には他にも月がある。

それは、闇の月と鏡の月。それぞれアルタヌーとナフカスという現神が司っているらしいが、ラウルバーシユ大陸にはこの二つの月は見ることが出来ないで、どのような祝福を齎もたらすのか、どんな月なのかすら、知る者はいない。

そしてゼアノスが創った『黄色の月』は、ラウルバーシユ大陸で見えることはできるが、誰もその祝福の効果を知らない。研究している者も数多くいるが、解明には至っていない。

「なら、さ。この『黄色の月』が齋す祝福はどうだ？ 説明できるか？」

「知らん、が……貴様はどうなのだ。説明できるとでも？」

自分の後ろにある月を指で示すゼアノスに、リウイはせめてもの反攻として答えが確定している質問をする。あの月の謎は誰も知らない。だから答えられる訳がないのだ。ただし。

創った本人以外は、という言葉が付加される。

「ああ、知っているとも」

「何だっ!?」

だからこそゼアノスは知っており、一同は驚きを隠せない。

教えてやる。そう不敵にゼアノスは笑って背を向けて、黄色の月を正面にして見上げながら両手を掲げた。

「次があるのなら気を付けろ。この月の祝福は……」

——古神勢力の、自己選択での狂戦士化だ。

「——っ!？」

「感じるか？ 月の力を……!」

瞬間、ゼアノスから莫大な魔力と闘気が溢れ出る。俗に【高揚】と言われる状態異常の一つであり、一切の防御能力を失う代わりに異常なまでの攻撃能力を得ることができ

る、主に狂戦士が自ら進んで成る状態だ。

「オオオオオオオオオオオッ!!」

月の光を身に纏ったゼアノスが空中に浮かび、咆哮が波動となつて周囲を襲う。

「全テ消工去レッツ!!」

理性を欠片ほどしか感じられない瞳になったゼアノスは、セリカが今まで見てきたゼアノスの剣の扱い方とはまるで異なり、荒々しく豪快に剣を振り下ろしている。

走りながら剣を何度も振り下ろして敵対者へと向かうゼアノスに、この場の全員は防御よりも回避を選んだ。何せゼアノスが剣を振り下ろして床に当たる毎に、小規模ながら衝撃波が爆発を起こしているのだ。

剣を振つて衝撃波や斬撃を飛ばすことは、彼らにとつては見慣れた光景だ。だがそれが爆発を起こすなんて、見た事がなかった。

「ザアアッ!!」

「チイツー!」

「危なっ!」

獣の如き咆哮を上げながら突進斬りをするゼアノスを、リウイとカーリアンが何とか避ける。速すぎて掠^{かす}ってしまったリウイは舌打ちをするが、これで終わりではなかった。突進した後の軌跡とゼアノスを中心に、四方に斬撃の余波が散つたのだ。

「まずいつー！」

余波とはいえ、爆発を起こすほどの斬撃の余波だ。食らえばタダでは済まない。最悪の場合、細切れになる可能性もある。そう判断したハイシエラは叫んだが、避けられずに当たってしまった者がいた。

イリーナだ。

「——っ！」

「イリーナ!？」

「イリーナアアツ!!」

声にならない悲鳴を上げるイリーナに、エクリアとリウイが叫ぶ。当たる直前に防護の魔術を使っていたらしく、死ぬほどの怪我はしていない。だがそれでも、重症である事には変わりなかった。

「き、貴様……！…… よくもイリーナを！」

最初にエクリアが慌ててイリーナの近くへ走り、回復の魔術が使えるペテレーネとトリが我に返ってからエクリアの後に続き、リウイは激昂してゼアノスを睨みつける。イリーナの下へ行かなかったのは、自分がそこへ行っても何もできないと分かったからだろう。それに、あの場所にあれ以上の数が増えれば、むしろ治療の邪魔になる。そう判断できたからだ。

「ん？ あー、まさかイリーナ姫に当たっちゃった？ 彼女を狙うつもりはなかったんだけどなあ……」

まるで悪びれた様子が見えないゼアノスだが、あの状態のときは理性なんて欠片程度にしか残っていないので、実は内心では結構気にしていた。様々な事情からイリーナを殺める気は本当にないので、あれで死んでしまったら元も子もない。

なら何で狂戦士化したし、という疑問の答えは単純。そうでもしないと、今のゼアノスではセリカ達にポロ負けするからだ。ついでに、大暴れしたいという欲求があったから。

だがその内心を知る由もない彼女等からしてみれば、その態度と言葉は堪忍袋の緒を切るのに、必要以上の役目を果たしていた。

— アウエラの裁き —

— フェヒテンケンヒ —

エクリアの物質破壊球魔術とリウイの高速突きが、開き直って再び狂戦士と化すために、黄色い月に手を掲げているゼアノスを襲う。

——が、怒りで威力が上がってもコントロールしきれない魔術と技では、ゼアノスを倒すどころか、傷つけることすら到底不可能だ。

— エルⅡアウエラ —

一秒程度で既に「高揚」状態になっていたゼアノスは、先程ハイシエラも使った純粹爆発の魔術を放つ。状態異常の「高揚」は物理的だけでなく、魔術的な意味でも多大なパワーアップ（攻撃力）とパワーダウン（防御力）を得るので、ゼアノスのこの魔術は通常時よりも遥かに高威力となっており、エクリアとリウイの術と技を相殺どころか掻き消して、近接技を放っていたリウイは吹き飛ばされ、ダメージを受けてしまった。

「リウイ！」

「陛下！」

「ご主人様！」

メンフィルの精鋭達の叫び声が、リウイの身体が重傷だと、周囲に嫌でも察知させてしまう。いくら魔神の血が混じっている半魔人だとしても、狂戦士と化したゼアノスの魔術を受けて無事であるはずが無く、しばらくは動けそうにない。

メンフィル組はそのことに呆気を取られて動けなかったが、まだ冷静に行動に移していた者達があった。セリカとハイシエラだ。エクリアも吹き飛ばされていたらどうなっていたか分からないが、魔術を発した隙を逃さずに属性を付加した飛燕剣を振るった。

— 雷光紅燐剣 —

— 地龍紅燐剣 —

電気属性と地脈属性を纏う無数の剣圧がゼアノスに向かうが、狙ったのか偶然なの

か、彼もまた属性を付加した飛燕剣を放っていた。

— 闇界紅燐劍 —

暗黒属性を込めた紅燐劍が放たれるが、いくら今のゼアノスとはいえ、相手は神殺しと地の魔神。規格外の力を持つ二人の技に対抗できるはずもなく、少し拮抗しただけで終わってしまう。

「ぐうっ!」

もうお忘れかもしれないが、ゼアノスはドラゴン形態でサブナクと戦い、まともに休んでいないままにセリカ達と戦い、そして現在に至る。実質、今は三連戦目なのだ。特に二回戦目は理由があつたにせよ、全身に攻撃を受けて気絶するまでのダメージを受けたのだ。その状態で、更には「高揚」の副作用で防御力が著しく低下しているゼアノスにとって、二種類の「紅燐劍」は過剰攻撃だった。

どれほど過剰な攻撃なのかと言うと、魔神ラテンニールが一般人に本気の一撃を食らわせるくらい。なのだが。

「ガアアアアアアッ!!!」

理性を失い、痛覚すら残らない状態であるゼアノスは、まだ倒れない。攻撃を受けながらも双剣を振り回し、自分目掛けて飛んで来る魔術や剣撃を斬り刻みながら突撃している。

その様は圧巻の一言に尽きるが、そんなゼアノスを見たハイシエラは呟いた。

「ゼアノスめ。何だの、あの無様な姿は……!」

その戦い方は、ハイシエラの（好敵手的な意味で）好きなゼアノスではなかった。

ヘラヘラと笑いながらも転移や暗黒・純粹魔術、飛燕剣を使ったトリッキーな戦術で、正直言つてハイシエラの好きな戦い方ではない。だが、ゼアノス自身の性格が素直に出ていたのだ。それには好感が持てた。

だが、今のコレは何だ？

その度合いは桁外れだが、戦い方自体は人間の狂戦士と変わりの無い、まさしく詰まらない戦い方だ。たしかにゼアノスは強くなっているのだろう。だが。

「今のお前には、負ける気がしない」

ハイシエラが思った事と全く同じ言葉を、セリカが言い放つ。

何もかもを破壊しつくしてしまいそうな程に破滅的な、しかし荒々しいゼアノスの剣撃を、セリカは流れるような動きで受け流す。

元より飛燕剣は『柔』の剣。いくら狂化した魔神の力で振るわれたのだとしても、理性なき剛剣は容易く流される。千年近くの永い時を戦い続けてきたセリカにとっては、簡単なことだった。

次第に、戦況の優劣が逆転していく。圧倒的な破壊力を振り回すゼアノスが、セリカ

やハイシエラにルナⅡクリアといった歴戦の面々によって、傷を増やしていく。肉体的損傷で必然的に弱々しくなり、更に――

― 北斗斬り ―

― 暗礁電撃剣 ―

― 神極聖光剣 ―

― テイルワンの闇界 ―

カーリアンの連撃が、ファームシルスの接続剣が、シルファイアの聖剣が、ペテレーネの暗黒魔術が同時に放たれる。リウイとイリーナの応急処置程度でしかない治療を何とか終わらせ、怒りによって威力が上がった技を惜しみなく繰り出したのだ。

だがそれすらも、ゼアノスは斬り捨てる。威力が上がったとはいえ、魔神であるゼアノスからしてみれば中途半端な技や術は、足止めにしかない。

「――そこだッ！」

だが、セリカにとってはそれで充分だった。

煌めく白銀の一閃が、ゼアノスの右腕に命中し、右腕と右肩が別れる。次いでルナⅡクリアとハイシエラが練りに練った魔力で発動した魔術が襲う。

― ティアクラーナ ―

― ベーセⅡファセット ―

それぞれが最上級の神聖魔術と地脈魔術であり、二人が放てる最強の魔術でもあった。

片腕を斬り飛ばされたゼアノスがそれを防ぐ手立てではなく、魔術の波に吞まれていった。

意識が戻ったら腕が片方しかなくて、しかも全身が死にそうなくらいに痛い。

やばいな、これ死ぬんじゃないやね？ いや、死ぬなこれ。ちよつとしたちよつかいのつもりが、遊びすぎた結果がコレか。笑えねえ。

さて、現状確認でもするか。

俺の身体は……うん、やっぱり片腕だ。右腕がない、というかちよい離れた所に落ちてる。あと俺は地面に仰向けで倒れてる状態か。

——と、そんな思考する俺の胸元に、誰かが鋭い剣の切っ先を突き出しているのが見えた。魔神は神核を壊せば死ぬので、それを狙っているのだろう。剣を構えているのは、俺ほどではないがかなりの重傷の……リウイだ。痣^{アザ}が見えてキツそうに見えるイリーナと、互いを支え合って立っているようだ。

まさしく夫婦らしい、良い光景だ。少し妬ましい。

「まだ生きているな？　今、止めを刺してやる」

言葉が終わると同時に剣を引いて、迷いなく突いてくるリウイ。ふと、セリカやハイシエラが微妙な表情をしているのが見える。長い付き合いだから、何かを想ってくれているのかもしれない。そうだったとしたら嬉しい。

リウイの剣が俺の胸を貫く直前に、付近の空間を歪ませる。それにより剣は宮殿の床に当たり、酷い金属音が響く。

そういえば、ここって建物の中なんだよな……今までの戦闘でよく壊れなかったな。流石は魔王の宮殿だ、とても言うべきか。

ガキイーン！　という高い音と、予想していたものと違う感触に、リウイは驚く。その隙について俺は、

「ふんッ！」

立ち上がり、残っている左手でリウイを殴り飛ばした。

イリーナには当たらずに、リウイだけが吹き飛ぶ。だがリウイという支えを失ったイリーナも倒れる。

「リウイ！」

「イリーナ！」

離れていたのか、少々奥にいる面々から悲鳴が上がる。殴り飛ばされたリウイはともかく、俺の近くに倒れてしまったイリーナへの声が、絶望で満ちている。

イリーナも恐怖の表情で俺を見上げるが……俺は無視して懐からある物を取り出し、セリカに投げる。

「これは……ッ！」

受け取ったセリカは不思議そうな顔で見に来るが、直後に少し目を見開いた。俺の全身から、魔力がポツポツと湧き出しているからだ。

ドラゴン形態の時は意図して行っていたが、これは完全に意識の外だ。確かに神核を壊せば魔神は死ぬが、身体と魔力が限界を越えても死んでしまう。まさしく、今の俺がその状態だ。

「俺を倒した褒美だよ、セリカ。お前が真の危機に陥った際に、助けるようにと伝えた。本当に危ない時に限るが、ある程度は言う事も聞いてくれるだろう」

渡したのは、二つの召喚石。つい最近使い魔になったやつらだ。どちらもセリカに強い興味を持っているので、ヤバい時にはセリカを助けるという条件を付けて、共に行動できるようにしてあげたのだ。

だから、『理性を無くして戦うとは、あいつが死んだらどうする!!』と、二人の内の一人に怒られた。

……理性を失った俺がセリカを殺してしまうかもしれない可能性なんて、全く考えてませんでした。すぐには負けたくないってのと、セリカと戦ってみたいという欲求で一杯でした。

「あと最後に殴って悪かったね、リウイ・マーシルン。セリカに今のを渡す為に、あの時に死ぬ訳にはいかなかったんだよ」

「……ふん。謝る割に、神殺しとは違って褒美も謝礼もないようだな」

強がりも含んでいるのだらうけど、皮肉気味にそう言うリウイ。

「そうだな……なら今回の事であの前借りを打ち消させてもらおう。これで貸し借りゼロだ」

「前借り、だと?」

何の事だか分からないという表情をする、リウイを初めとするメンフィル国の精鋭達。イリーナも、俺が彼女に害する気が無いと分かったのか、既に自力でリウイのもとへ駆け寄っている。

そんな彼らに、笑って俺は言ってる。

「メンフィル国の戦力と士気を上昇させてやったんだよ。リウイとイリーナの関係を中心にメンフィルのことを、魔神グラザを好いていたゼフィラに教えてやったんだから」

「っ! あれは貴様の仕業か!」

そう言つて今にも飛びかかつて……来たリウイの目の前に、歪みの回廊を展開させて回避させてもらった。憎々しげに睨めつけて来るリウイから、俺は笑いながら視線を外し、セリカを見やる。もう、この身体はもたないだろう。既に、様々な個所が消えている。早く言わなければ。

「そいつらは、お前が本当に危ない時にしか力を貸さないだろう。だがそれは、逆に言えばその危機を乗り越える事の出来る力の持ち主という訳だ。だから精々、愛想を尽かされないように気をつけな」

「ゼアノス、御主は何故……」

そんなことをするのか。と続けようとしていたのだろうが、そのハイシエラの言葉は途中で途切れた。俺の身体の一部が霧散してしまったからだ。

「何故と聞かれたら答えは……二つあるな。一つは、友人との約束のため。そしてもう一つは……セリカも、俺の数少ない友人だからな。出来れば死なないでほしいんだよ。今日は魔神の本能に従いすぎて、本気で不味いと思つたけどな」

ケラケラと、前から変わらない笑みを浮かべる。俺の言葉にルナークリアが何かを言いたそうな顔をしているが、まあ聞くのも答えるのも無理だろう。

「じゃあな、お前ら。取り敢えず……俺の撃破、おめでとぅ」

言いつ終ると同時に、身体中の全ての魔力が散っていくのを感じた。

—白銀との対峙—

暴れるだけ暴れまわり、やりたい事だけをして、呆気なく消えていった魔神ゼアノス。消えた際に周囲に溢れ出た魔力を吸収しながら、ハイシエラは口を動かした。

「……奴の気配が完全に消えておる。どうやら、今度こそ消滅したようだの」

吸収した魔力によって、まだしばらくは現世に留まっていられる。それを確認したハイシエラは、セリカに視線を向ける。これからどうするのか、という意味を込めている。

「小休憩を挟み、それから動くのが最善だと思うが……それでどうだ、メンフィル王」

「ああ。そうでもしなければ、この先どうなるか分からん。あの傍迷惑な魔神のせいだな」

憎々しげにリウイは言葉を紡ぐが、それも仕方が無い。今までに二回しかまだ会っていないが、どちらもマイナスの印象しか与えられていないのだから。特にゼフィラの一件は確かにプラスになったが、その経過を見ればマイナスの方が大きいだろう。

そして普段は表情が変わらない無表情面のセリカだが、今のセリカは誰が見ても気落ちしているのが丸分りである。小休憩を挟むことを提案したのも、無意識の内に落ち着

く時間が欲しかったからだ。

女神の肉体は、セリカという人間の魂には過ぎた入れ物（器）である。維持し続けるには、一定以上の魔力が必要で、だがその程度の代償で完全に保てるわけでもない。少しずつ、というよりもほんの微量にだが、肉体に耐え切れずに魂が消えていつてしまうのだ。その魂の消滅を防ぐため、セリカは魂の代わりに記憶を無くし続けている。

その儂い記憶の中で、ゼアノスは数少ない、思い出に残る友人だったのだ。

どんな理由にせよ、そんな友の一人を失ってしまったのだから、気落ちしてしまうのは仕方ない事だろう。

セリカがゼアノスと斬り合った剣を何気なく見れば、随分とボロボロになっていた。これでは下級ならともかく、上級の悪魔族すら斬る事は叶わないだろう。

気持ちを切り替えて、さてどうするかと思考を始めた直後に、ハイシエラの声が響いた。

「流石はゼアノスと言うべきか。かなり強力な魔剣だの」

その手に持つのは、ゼアノスが「エルサレム」と呼び、愛用していた双剣だった。

「ほれ、我と御主で使ってやろうではないか。奴の遺品だの」

「……すまないな」

セリカを少しでも慰めようとしているのか、ハイシエラはいつもと変わらない笑みを

浮かべながら、エルサレム双剣の片割れをセリカに渡した。その意図が分かったのか謝るセリカに、ハイシエラは気にすると言わんばかりに背を向け、双剣の片割れを振り始めた。その剣に慣れるためだろう。

セリカもそれに倣って剣を振るう。

剣にはゼアノスの魔力が込められており、ちよつとやそつとでは壊れない。狂戦士と化したゼアノスが頻繁に床に叩きつけていたが、それでも罅一つないのが良い例だろう。

何度か振るい続けていると、突如異変が起こった。

「なに……い……！」

「セリカ!!」

「セリカ様! ハイシエラ様!」

セリカとハイシエラが持っていた剣が、発光し始めたのだ。

二つの剣が、部屋全体を覆うほどの光を放っている。ルナークリアとエクリアやテトリは、近づきながらも叫ぶ事しかできず……

「これは、一体……い……！」

その光は静かに収まり、何も変わりのない二人が佇んでいた。メンフィル組も、そんな不可思議な現象を見て、結局は一か所に集結する。

セリカ自体には何も変化が無かったが、ただ一つだけ変わっていた事があった。それは……

「うわ、何よこの剣っ！ 聖剣……どころか神剣の類じゃない!? ここまで強いと私には毒なんだけど!？」

「確かに……私の持つこの聖剣を軽く凌駕する神聖な力を感じます」

カーリアンとシルフィアの言葉は、正し克的を射ていた。だが正しい知識を持つ者はこの場には当然おらず、その神剣が何なのかは分からない。

ただその神剣は黄金色で、十字架を模した天秤の形をしていた。

「む、この神気、どこかで……しかし我が持っていたのは何処へ行ったのだ」

「……」

唯一ハイシエラだけは何やら覚えがある様子だがいつの間になくなっていった剣を探し、セリカは何か思う所があるのか、ジィツと凝視している。

そこに。

—— コツ、コツ

「—— ツー！」

部屋の奥から足音が聞こえ、全員が一斉に戦闘態勢となる。

そこはちやうど、セリカやリウイが通った道ではない……つまり、宮殿の最奥へ続く

道だ。

ということとはゼアノスと同じく、深稜の楔魔かデイストピア勢力のどちらか、もしくは新しい勢力なのか。

皆は緊張で動かず、件の足音しか聞こえない。

そして見えた姿は――

「ゼアノスが倒されるとは……手加減でもしたのか？」

白銀の女だった。

その髪も、肌も、鎧も、剣さえも。

その存在のあらゆる個所から、何もかもが、白銀の輝きを放っている。

「ぐ……ッ！」

ズシンツッ！ と、空気が重くなる。

その白銀が放つ威圧感は、先程倒したゼアノスを越えていたから。

凶腕としてのゼアノスならば、それすらも越える威圧感を持つが、ゼアノスが『凶腕』だという事実を知らない面々は、そう認識するしかない。

白銀の女は足を止め、その場にいる全員を見渡す。必然的にセリカ達も彼女を見ることになり、先の台詞から味方側ではない事を悟り、言動の一つ一つを警戒する。

そこでセリカの視線が、ある一点に集中する。それは相手が持つ白銀の剣で、セリカ

の手の中で変化した黄金の神剣と、似たような神気を感じ取ったからだ。

「ほう、覚醒していたのか」

凜とした雰囲気と、それを裏切らない声、セリカに向かって放たれる。

いつの間にか彼女の視線は、セリカで止まっていた。

「覚醒、だと？」

「そうだ。その神剣を呼び出せるという事は、貴様が覚醒したことに他ならない。まあ自覚は無いようだが、それはゼアノスの呪いだ。気付くはずもないか」

「……待て。ゼアノスがセリカに、呪いを掛けていただと!？」

怒鳴るハイシエラに、その視線はゆっくりと向く。

「呪いと言っても、悪い事ではない。神殺しの魂が女神の肉体に馴染み易くするという呪いだ。そうでもしなければ、神殺しの魂は少しずつはいえ消耗されていく。それはゼアノスにとって、良い事ではない。神殺しは彼の数少ない友人らしいからな」

ハイシエラに向かっていた視線が、再びセリカへと向かう。だが、メンフィル勢には欠片も興味が無いのか、見ようともしない。

「ついでに解説しておくが、神殺しが持つその神剣の名は……リブラクルース。もしくは、【天秤の十字架】と呼ばれる——女神アストライアの神器だ」

「何ッ!？」

驚くのはセリカだけではない。ハイシエラやルナークリアはもちろんのこと、古神のことを良くは知らないとはいえ、神器だと言われれば、誰でも驚くだろう。

「なら、それは……!?!」

セリカが聞くのは、アストライアの神器だという神剣と雰囲気酷似している白銀の神剣のことだ。

「ああ、これは……詳しくは話せないが、『天秤リブラの十字架クルス』の姉妹剣だと認識しておけば良いだろう。『ステイルヴァールの神剣』という名だ。地の魔神が先程持っていた剣でもあるが、こればかりは渡すわけにはいかぬのでな、返してもらおう」

「ステイル、ヴァール……」

その名に覚えがあるのか、それとも無意識なのか、セリカの顔色が悪くなっていく。それも仕方が無いのかもしれない。ステイルヴァールはかつて、セリカが『神殺し』と呼ばれるようになった原因でもあるのだから。

「……はあ。まあ、そんなことはどうでもいい」

彼女は溜息をついて、そう呟く。そのどうでもいい発言に何人かが反応するが……顔を引き締めた。現れた時とは比較にならない威圧を放っているからだ。

「主の許可もなく宮殿に立ち入り、その一切の支配力を得ようなど……愚劣に極まる、見るに堪えん！ 決して、絶対に、断じて許されん行為だ！」

「お待ちください！ 主の許可とは、一体!?」

怒りによるものなのか、その鋭い眼光を向けて来る白銀に、ルナークリアが代表して必死に呼びかける。ゼアノスが仲間だと仄めかす様な発言をしているから想像できなくもないが、本人からの言葉で確証を得るためだ。

「もう分かっていないのではなにか? この宮殿は我が主の、貴様らが『凶腕』と呼ぶ御方の宮殿だ! あの御方が友人から譲り受けたこの宮殿に、薄汚い侵入者をいつまでも生かしておくわけにはいかん!!」

そう怒鳴る白銀は、剣を持っていない方の手（左手）を掲げ、背中からこれまた白銀の翼を現出させた。

「天使、だと!」

「しかもあれは序列一位……神に次ぐ力を持つ天使、熾天使という厄介な奴だの! まさか凶腕 にとはいえ魔神に従っている固体がいるとは! なぜ墮天しておらぬのだ!」

「主に仕えている天使など、腐るほどいる。主は古神にとつての英雄。故に未だ古神に忠誠を誓っている天使にとつても憧れ——否、崇拜すべき御方! 私はその偉大なる主に仕える者、熾天使ブランシエ。宮殿の侵入者を裁く存在。本来ならばこれはゼアノスが務めていたのだが……どうやら遊びすぎていたようだから、代わりに私が裁いてや

膨大な力を得るために魔人となり、人間とはとても言えない体躯をしているブレアドは、その巨体の半分以上が消え去っている。それを、セリカ達は茫然と見ることにできない。

「言つただろう、薄汚い侵入者をいつまでも生かしておくわけにはいかんと。それは貴様の事だ、ブレアド・カツサレ。堂々と挑みに来た神殺しやメンフィル一行はともかく、何もしないで漁夫の利を得ようなど、おこがましいにも程があるとは思わないか？ 貴様が離れた所から、機会を窺っていたのは最初から分かつていた。だからゼアノスの配下である歪魔に協力してもらい、あの瞬間あの場所に貴様を転移させたのだ。疑問は解けたか？」

得意そうな顔すらせず、淡々としたセリカ並みの無表情で、ブランシエは語る。

「ぐっ！ いくら凶腕の部下とはいえ、天使が悪魔と協力するとはッ!!」

「貴様の……この世の常識をディストピアに当て嵌める事が間違いだ。だが、まだ喋る事が出来るくらいには元気があるようだな。ならば——」

ブランシエはスティルヴァールを異空間へ仕舞い込み、新たに二つの剣を取り出した。

そのどちらともが、激しい雷を帯びている。「リッツリンガー」と「ヴェイグディザス」という、特殊な魔法剣である。ゼアノスの命令でバリハルトの部下として動いている時

に使っている剣でもある。

何を思ったか、彼女は雷を纏った二振りを構える。だがその時には既に、ブレアードの身体は半分近くが再生しているところだった。

「カカカツ！ 儂はかつてゼアノスに、圧倒的な再生力を得られる禁術を契約によって習得させたのだ！ 驚きはしたが、身体はすぐに戻るだろう！」

深稜の楔魔としての契約で縛られていた（と思い込んでいる）ゼアノスによって得た力は、ゼアノス程ではないがその再生力は相当なものである。前にリウイと戦った際にはその術を使っていなかったが、今は使っている。故に、負けは無い。

何をされてもすぐに再生するので、熾天使が疲れ果てた折に殺し、その力を吸収してやろう。そう意気込んでいた。

だが気がつけば。

「――」

ブランシエは、いつの間にかブレアードの背後にいた。

そしてブレアードの身体には、全身に電撃が走っている。斬られたかのような傷跡が二か所ほど見え、目に見えないほどの速さでブランシエが斬りつけたのだと判断できる。だがブレアードは平然としているので、大したダメージを与えた訳ではないようだ。

「フハハハッ！ 儂の目に見えぬ速さで儂の身体を二回も傷つけたその速度と、あれほどの神聖魔術は確かに脅威だ。だが貴様は、貴様の剣の腕では儂の身体を裂く事は出来ぬようだな！」

「……」

勝利を確信したかのように、ブレアードは嗤う。神聖魔術の威力には、恐怖を感じたと認めてやっても良い。だがあれほどの魔術は何度も放てないはずで、しかもここまで近くにいれば何て事はない。魔術を撃たれる前に攻撃すれば良いだけだからだ。

沈黙したブランシエに、ブレアードの笑みは更に深まる。

自分は凶腕の部下を、それも幹部のような存在を追い詰める程の実力を得ているのだ。そう思ってしまうのは当然のことであった。

しかし、そこに待ったを掛ける者がいた。ブランシエだ。

「それ以上は喋るな、そして動くな。少ない寿命を一気に縮めるぞ」

「クカカツ！ 訳の分からぬ事をほざくな、負け惜しみは見苦しいぞ。貴様を食い、儂は更なる力をえぶ」

更なる力を得る。そう言おうとした口は、しかし言い切る直前に幾つもの亀裂が走った。

それは口だけでなく、頭の先から人間とは思えない下半身の一番下まで、つまり全身

に亀裂が走っている。

「惜しいな。私が斬ったのは二回ではない。二百回だ。『二』という数字だけは正解だったから忠告したが……真に受けるはずもない、か」

ブランシエの宣言が終わるか終わらないかの間に、ブレアードの身体に刻まれた二百の斬れ筋は開き、体内で燻っていた電撃が体表に飛び出ることとなり、一瞬で炭化してしまった。

その光景に驚いたのは、かつてブレアードに辛勝し、今回はブレアードの勝利だと思っていたリウイ達であった。エクリアやテトリもブランシエの本領は魔術だと思い、あのような結果になるとは微塵も思っていなかったもので、驚愕している。

「……やはり貴様らは、他の有象無象とは一味違うらしいな。『神殺し』と『地の魔神』は」
「驚いてはいるが、お前が勝つとは分かっていた」

だがセリカとハイシエラだけは、ブランシエの勝利を確信していた。何せセリカは、飛燕剣を使えば同じような事が出来る。だがブランシエは技ではなく、気軽に剣を振るうだけであのような惨事を引き起こしたのだ。セリカとハイシエラが驚いているのはそこである。

「私の剣が見えたとは、流石は主が興味を持つわけだ。特にセリカ・シルフィル。お前は、いずれ私に届き得る可能性を持っているな」

ブランシエの表情に、怒り以外の色が初めて浮かんだ瞬間でもあった。セリカに向けるその顔色は、微笑み。男女間にあるものではなく、まるで母が子に向ける表情だ。

だがセリカ以外に顔を向けた途端に、色は消えてしまった。

「セリカ・シルフィルの可能性に免じて、貴様らが侵入した罪は問わないで置いてやるが」

「……が、つて何よ。が、つて」

わざとらしく言葉を止めたブランシエに、一同は不安を隠せない。カーリアンの一言はまさに的を射ていた。

「どんな理由であれゼアノスを殺し、私を攻撃したこと。忘れてはいないな？」

飛ぶのを止めて床に降り立ち、ブランシエは靴で床を叩いてカツンと音を出す。

嫌な予感的中したと全員が悟るが、床全体に巨大な魔法陣が浮かび上がる。元々は侵入者を迎撃するための罠なのだが、その改造バージョンである。

その効果は、あのパイモンが冷や汗をかく程の代物だ。智略を得意とする魔神が太鼓判を押すのだから、相当なのだろう。

「天使の私が言うのもおかしいが、真の恐怖を知るのだな」

ブランシエが口にしたように、彼女はどんな理由があつたにせよ、ゼアノスを倒した者達のことを良く思っていない。期待は一切しないが、誰かが間違いで死なないかな、

と思うほどにはイラついていた。

能面の如き無表情は、その怒りで構築されていたのだった。

—真の、本当の恐怖—

ドサリと、大広間に集っていた者達が倒れた。

セリカ、ハイシエラ、エクリア、イリーナ、シルフィア、リウイ。

誰もが魔神と同等どころか、一部は並みの魔神を超越している力を持つ者達だ。それ以下の実力者はしようがないとしても、彼らまでもが一人残らず倒れてしまうのは、考えられない事であった。

「……神殺しまで眠ったか。どうやら成功した模様です、主様」

唯一倒れていないブランシエが、虚空へ報告する。返事はなかったが、どこか満足げな表情になり、眠っている面々を見下ろした。

セリカ達は、倒れはしたが死んだわけではない。ただ眠っているだけだ。

その魔法陣を作動させた人物が選定した者以外を強制的に一定時間眠らせる。あれはそういう罠だったのだ。これのどこが、パイモンが恐れるほどの罠なのか。そう疑問に思う者もいるだろうが、これは非常に凶悪だ。

迷宮などで見かける罠と言えば、体力や魔力を多大に消耗させられたり吸収されたり

するものが有名だ。他には魔物や守護者が出てくることもある。中には迷宮の外部へ転移させるものも存在する。

だがこれらの罫では、場合によっては不利になる事もある。

転移ならば不利にはならないが、問題を先延ばしにただけだ。いずれ攻略されるのを待つだけになる。このベルゼビウト宮殿のような場所なら空中に転移させて侵入者を排除するのに最適かもしれないが、相手が空を飛べたら意味が無い。

体力や魔力を減らすにしても、『猫を噛む窮鼠』になられたら、不利になるだろう。

だがその効果が、『強制的に一定時間眠らせる』ならばどうだろうか。

魔術的要素で眠らせたのならば、目が覚めやすい者でも起きる事はない。そうなれば、あとはどうにでもなる。殺すことも、人質にすることもできる。眠り過ぎれば死ぬだろうが、そこは大きな問題ではない。

ただひとつの不安要素が魔神以上の存在に通用するかどうかだったが、セリカに効いたので問題はなかったのだろう。

「申し訳ありません！ 遅くなりました〜！」

セリカ達を見下ろしていたブランシェの耳にそんな声と、羽ばたいている音が届いた。視線を向ければ、四人の翼を持つ女性が飛来していた。声を出したのは、先頭にいる白い髪と翼を持つ少女だ。

「いや、遅くはない。むしろ良いタイミングだ」

「ほら、だからもう少し遅くても問題ないって言ったのに……」

「ええと、もう少し遅ければそれこそ遅刻していたと思うのですよ……?」

「……」

ブランシエの言葉に誰よりも早く反応したのは、その四人の中で最も無気力な顔をしている少女だった。紫色の髪（ツインテール）に黒い翼をしている。その次は薄い紫色の短髪とコウモリのような翼の少女。始終沈黙しているのは、金色の長髪と美しい黄色の翼を持つ女性。

この四人は、全員がどこからともなくゼアノスがヴィーンゴールヴ宮殿に連れてきた、特別な力を持つ天使である。

「ゼアノスが言っていたが……メイド天使、だったな?」

ゼアノスが自信満々に説明している姿を思い出しながら、ブランシエは彼女らに質問する。彼女らに向けるその視線には、しかし棘がある。ゼアノスが説明にとはいえあそこまで夢中になるのは滅多にないので、自覚は無いが嫉妬しているのだ。

ちなみにゼアノスが夢中になったもうひとつはセリカである。

「はい、その通りです。凶腕様、もといゼアノス様をご主人様として仕えています」

「っ!?!」

先程は神殺し一行を驚かせていたブランシエだが、今度は本人が驚く番だった。ゼアノスが凶腕だと知っているのは、デイストピアでも極めて少ない。

ブランシエとノワールは当たり前として、他に知っているのは魔神ラテンニールや古神、そしてゼアノスがなぜか心を許している一部の天使だけ。

外部では第一級の現神を除けば、水の巫女しかいない。

「知っているのか……？」

「はい。ご主人様から教えて頂きました。ですからブランシエ様も、ご主人様のことを無理して呼び捨てにしなくても大丈夫ですよ？」

「そうか。そういうえばお前は……白エウ娘、だったか？」

ゼアノスの説明を再度思い出し、名前を尋ねる。当たり前だったらしく、白エウ娘と呼ばれたメイド天使は頷いた。

「ご主人様から頂いたニツクネームですが、今ではそう名乗っています。それでもご主人様は『白エウ』と、更に省略してお呼びになられますけど」

「まったく、何のためのニツクネームなのでしょうね。略称を更に省略するなんて。ご主人様の考えは分からないわ……」

「どことなくゼアノスを馬鹿にしているような発言をしているのは、黒エウ娘もしくは黒エウと呼ばれているメイド天使である。」

他にもメイド天使見習いのアナスタシアと、メイド天使長のエウクレイアさんがいる。

アナスタシアは『あわあわ』とオロオロしているし、エウクレイアさんは極度の恥ずかしがり屋なため、声が非常に小さいので何を言っているのか分かりにくい。

ちなみに。

エウクレイアさんは、『エウクレイア』さんではなく【エウクレイアさん】が本名なので、そこを間違えてはいけない。

それはともかく
閑話休題。

黒エウの発言に青筋を出しかけたブランシエだが、極めて冷静に努めて、メイド天使達に本題を語った。

「遠回りをしすぎたが……ここで眠っている彼らを、ある場所へと連れて行ってほしいのだ。私がやっても良いのだが、私だけでは文字通り手が足りないので君らに頼みたい。雑用のような仕事で申し訳ないが、主が完全に信用している者でなければ頼めないのだな」

転移魔法で運ぶという選択肢は無い。なぜなら今から行くのは、扉から以外では入れない、外部から完全に遮断された、異空間と化している部屋だからだ。

「おお、それが私達の初仕事なのですね！ 頑張っちゃいますよ〜！」

「どんな仕事でも、全力でやってやるです〜！」

「……」

張り切る白エウとアナスタシア。それを慈愛の微笑みで見つめるエウクレイアさん。
そして

「何でそんな仕事をしないといけないのよ……？」

無気力方向に全力思考の黒エウ。ブランシエは思わずステイルヴァアールで斬り掛かりそうになったが、そこでゼアノスから教えてもらった魔法の言葉を紡いだ。

「一つの仕事が終わる度に、報酬として『カッププメン』を10個贈呈しよう」

「さて、どこへ運べばいいのかしら？　ぐずぐずしてないで早く行くわよ」

魔法の言葉を言い終える直前には、この世の誰よりもやる気に満ちた表情でセリカとルナークリア、エクリアとハイシエラを担ぐ黒エウがいた。

黒エウは何よりもカッププメンが大好きで、カッププメンのためなら世界が滅んでも構わないと豪語しているほどだ。それをゼアノスは知っていたので魔法の言葉としてブランシエに伝えたが、そんな表情を見た事が無いメイド天使とブランシエは戦慄した。

デイルリリフィーナには、カップ麺など存在しないのだ。次元や世界の狭間で稀に見つかる程度で、見つける事が出来ればそれは幸運だろう。だがゼアノスには関係ないので、こんな取引が出来るのだ。

そして、ブランシエは思う。

黒エウの働かせ方が分かった、と。



「く、なん、だ？ こころは……？」

最初に眠りから目覚めたのは、セリカだった。寝起きのために一瞬だけ隙だらけな姿になったが、気を失って（眠って）いたことを理解してすぐさま態勢を整え、周囲を見渡す。

「俺だけではないのか……」

セリカの視界には、今まで一緒に戦っていた面々が、先程の自分と同じように床で眠っている姿が見えている。しかしここは敵地だと思い直し、皆を起こす前に周囲がどうなっているのか、何故寝てしまったのかと考えを巡らせようとしたところ……

「ああ、起きたのか」

「——っ!？」

今まで感じた事の無い、暴力的で破滅的な威圧感に襲われた。

この宮殿で、セリカは過去最大の敵と戦ってきたと言っても過言ではない。かつてこ

ことはまた違った宮殿にて邪神アンリ・マユと戦ったが、セリカにとつてはゼアノスとの戦いの方が苦しかった。精神的にも、肉体的にも。

ブランシエとはそもそも戦いにこそならなかったが、その存在はゼアノスを越えていた。

世界でも指折りの強者が存在したベルゼビウト宮殿。ここでセリカは、三度目の正直を迎える事となる。

寝ていたその場所から、階段が伸びていた。その階段をセリカの視線は上っていき、視界に入ってようやく『ソレら』を認識できた。

王が座するには飾り気がなく無骨とも言えるが、大きく、堅牢に見える玉座。

玉座の前方・左方・右方にいる、強大な存在である三者。

ひと際高い位置にある玉座に座る、顔の見えない四つの腕を生やした魔の神。凶腕と、その側近だ。

「お前、が……凶腕、だな」

それは質問ではなく、確認だった。一目見ただけで、凶腕だと判断できたのだ。

この広い世の中には、馬鹿とも阿呆とも言える者が少なからず存在する。単に腕が四つある魔神が凶腕を自称し、セリカと戦った事もある。良くも悪くも魔神である事に変わりはないので中々強く、実力を隠しているのかもという考えも浮かぶので、本物かどうかは戦うまで分からないのだ。

だが今回は一瞬で理解した。

なるほど、比べる事すらおこがましい存在感だ。と、セリカは思う。

玉座に座っている凶腕以外にも、その場には今のセリカを越えている力を持つ強者がいる。

向かって左側に、先までセリカ達と相對していた熾天使、ブランシエ。

反対である右側には、黒いフードで隠しているために顔が見えない、重そうな鎧を着ている存在。

最後に凶腕の正面であり、高い位置にある玉座よりも低い場所に佇んでいる……角や翼、尻尾などが生えている女性。

ブランシエは言うまでもなく、フードを被った鎧はノワールだ。セリカ達に顔を見られないようにしているため、そんなフードを被っている。任務中だったが、何かお面白そうな事が起きてそうだと第六感が働き、仕事を放って来たのだ。凶腕は呆れたが、結

局は認めている。

そして最後の女性は、凶腕ゼアノスの三人目の眷属である。以前ゼアノスは、天使でもなく悪魔でもない、中庸の眷属を創ろうかと悩んでいた。その結果が彼女だ。

名は、リアン。

『絆』、『繋がり』を意味する名前を持つ、竜族の姿をした戦士である。前にセリカの仲間になった『空の勇士』を、より大人らしく、妖艶にしたらこうなるのでは、という姿をしている。

そんな三者だが、セリカの目にしっかりと映っているのは凶腕のみ。

それなりに大きな星でも、太陽の近くにあるのでは見ることはできない。太陽の輝きで他の星の光を覆ってしまうからだ。

「確かに、我は凶腕と呼ばれている。して、神殺しよ。この宮殿に何用だ？」

凶腕の顔はノワールと同じく、色こそ違うもののフードによって覆われ、どんな顔なのか分からない。しかし声は透き通っており、言葉の一つ一つをセリカは慎重に聞き取る。

凶腕の質問に対してセリカは、出来る限り答えた。非常に珍しい事だが、長々と語った。

この宮殿が突然出現した事で、深稜の楔魔の脅威を考えたマーズテリア神殿に頼まれて協力していること。メンフィル王国については先程出会ったばかりだから詳しい事情は知らないが、似たような事情であるはずだということ。ゆえに、凶腕と敵対するつもりはないということ。

セリカは、保身のために一気に語った訳ではない。必要な事を全て話す必要性を感じ、そのために言い終わるまでが長くなっただけである。

「なるほど……我と争うつもりはない、か」

そして凶腕はセリカの話をも、最後まで聞き入れる。『侵入された、なら殺そう』などという短絡的な考えは持っていないのだから。

だがそこで、二人の会話に横槍が入る。ブランシエだ。両膝と右手を床につけて左手を右胸に当てるといふ、騎士として最上の礼を見せている。

「主様。水を差してしまい申し訳ありませんが、どうか一つ、許可していただきたい事がございいます」

「我は別段気にしないのだが……」

「……私は気にします。これは、貴方様への無礼です。私は主様の忠臣を自負しているが故、見過ごすことは出来ません」

許可を貰いたいと言いなながらも引き下がらないブランシエに、またしても横槍を入れ

る存在がいた。デイストピアの中でも新参者でありながら、大幹部の一人であるリアンだ。

「……忠臣、ね。それは自分で言うことではなく、凶腕そいつは気にしていないのだから、それで良いと思うが？」というより、それはお前の自己満足だろう」

「何だと？」

「何か？」

立ち上がって凶腕の隣から見下ろして睨めつけるブランシエと、下段からだが無表情で見上げるリアン。そのことに、凶腕を含めた三者は少し驚く。普段のリアンはもっと物静かで、セリカ並みに無口で無表情な女だからだ。

そしてリアンは今、凶腕のことを『そいつ』と呼称した。

それは、凶腕に忠誠を誓っていないから……という訳ではない。戦闘力でも、ブランシエやノワールと同格だ。

だがその特性上、実は唯一凶腕を倒せる可能性を持つ存在であり、心苦しさを感じた凶腕が対等に話し合えるように創ったのである。

ブランシエもそれを分かっているために、凶腕を『そいつ』呼ばわりした事とやかく言うつもりはない。だが、己の忠誠を馬鹿にしたようなその言葉だけは許せなかったらしい。

「いいだろう。そこで狸寝入りしている劣等共より、まずお前を血祭りにしてやる」
「私を舐めるな」

進言していたはずなのに主の目の前で喧嘩に発展した部下二人を見て溜息を吐きそうになる凶腕の事などいざ知らず、それぞれが武器を取り出した。

ブランシエは雷撃の双剣を。リアンは拳に鉤爪型の武器を。

瞬間、武器同士が交じり、激突した音が響き合った。

「……」

「……」

そして、蚊帳の外になってしまった凶腕と神殺しは、互いを見て沈黙してしまう。

片方は何をどう言えればいいのか考えてしまい、もう片方は話が再開されるのを待つていたからだ。

ちなみに前者が凶腕で後者が神殺しである。

「取り敢えず、起きたらどうだ？」

沈黙を破ったのは、以外にもセリカだった。それはもちろん仲間達に向けてのものだ。

ブランシエが『狸寝入りしている劣等共』と言ったことから、全員かどうかは分からないが、何人かは眠りから覚めていると判断したのだ。

「ああ、そうするとしよう」

その判断は正しく、半ば予想通りだったのだが、リウイの言葉と共に全員が起き上った。

彼らはセリカよりも遅れたが、意識がはつきりとしたと同時に何人かは立ち上がろうとした。だがセリカと誰かの話し声が聞こえ、相手が凶腕だと分かったので敢えて横になつていたので。下手に刺激を与えてはまずいと、誰もが分かつていたので。

戦闘が大好きなハイシエラも、その例に漏れない。彼女は勝ち目が薄くとも最後まで諦めないが、絶対に敵わないと分かる敵に突っ込む馬鹿でもない。

ブランシエが言葉を発した際には誰もが冷や汗をかくか、かきそうになった。

仲間割れでもしたのか、言い合いをしてから戦闘に発展したため、少しは気持ち的に楽にはなった。

まあその分、顔を上げればブランシエに匹敵するのが最低でもあと二人（ノワールとリアン）。その三人を確実に超えている超越者（凶腕）がいるため、安心できる要素は皆無であったが。

「さて、ではどうしようか……」

全員が立ち上がったのを見計らい、凶腕は話し出す。

「神殺しの話によれば、お前達はどうやら私の所有物と知らずにここへ来たらしいな。

しかもその理由は、ブレアード迷宮に魔力を供給していたからだと言う。ふむ。それならば自国の危機がありえるのだから、来るのはむしろ当然か。深稜の楔魔と争いが起こったのも、どこぞの神殿が動くのも必然か」

淡々と語る凶腕に、リウイとルナークリアは何度目かの安堵の息を漏らしそうになる。魔神とは傲慢だ。雑魚の魔族よりも理性的で理知的だが、その多くは破壊や蹂躪などを楽しむためのものであり、敵対している可能性のある者の声に耳を傾ける者は稀だ。力があればある程に、その傾向は強い。

だが凶腕は世界最強と言われているにも関わらず、相手の都合すら考えた。

これならば最善は望めなくても、次善の結果は残せるかもしれない。この宮殿の支配権やその他諸々を神殿かメンフィル国が得るのが最善で、ブレアード迷宮への一切の干渉を止めてもらう上でお咎めなし、という次善だ。

ベルゼビュート宮殿からブレアード迷宮に魔力を供給しなくても、今ならば問題無い。迷宮内の魔物や魔族を倒せば勝手に供給されるし、そうでなくても魔術師に頼めば必要最低限の魔力は得られるのだから。

なぜブレアード迷宮に魔力を供給していたのか、等の疑問は残るが、ここで下手に聞いて、機嫌を損ねてしまうのは避けたいので、聞けない。ゼアノスが深稜の楔魔にいた理由も聞けない。

聞かないではなく、聞けない。

それでも安堵の表情を隠しているつもりだろうが、偶然にも凶腕からは見えてしまった。

そして発されるその言葉は……

「だがこちらにも、ゼアノスを失っている。これはどうするかな……?」

「~~~~~っ!」

絶望しかけるのには十分な威力を持っていた。

「し、しかし! 魔神ゼアノスはろくな説明もなく——」

「——この時代、侵入者に対して丁寧の説明する馬鹿がいるのなら見てみたいものだな。そもそも、説明を求めたか?」

「それは……」

リウイの言葉を遮った凶腕の発言に、一同は黙るしかない。聞こえてくるのはブランシェとリアンの、剣と拳が幾度となくぶつかり合う音だけ。

侵入者は問答無用で処刑されてもしょうがないし、彼らは説明を求めてもいない。ルナークリアが質問をしていたが、あれは宮殿に関係する質問ではなかった。

そもそも国王や教皇に次ぐ地位にある聖女ならば、『ゼアノスはデイストピアの魔神』との情報を得ていたのだから、ドラゴン形態の時とはともかく、ゼアノス本人だと分かっ

た時点で気が付くべきだった。もしくは、察するべきだった。この宮殿が、ディストピアの関係している場所であることを。

「故にだ、選択肢を与えよう。ブレアード迷宮の全てを我に譲るか……もしくは、この中から誰か一人、贄として我に差し出すか。どちらか選べ」

当たり前だが、どちらを選ぼうとも凶腕側にしかメリットがない選択である。

しかもそのうち片方は神殿ではなく、メンフィル国に対しての被害が大きすぎるのだ。

「ふざけるな」

リウイにとつては、悪夢でしかない。

前者は国と国民を、後者は大切な仲間を奪われるのだから。

贄になるのは神殿の人間かもしれないし、セリカの仲間かもしれない。

だがそんな簡易な事すら、今までの事柄で限界を超え、激昂しているリウイの頭では思いつく事が出来なかった。

「貴様に、貴様なんか俺の大切な国を、民を、仲間を奪わせたなりなぞするものかッ!!」

よりにもよって最強凶腕に対して『貴様なんか』などと言いつち、剣の切っ先を向けたりウイの覇気に、セリカやハイシェラ含めた面々は目を見開く。そして、小さく笑う。

「我とした事が、こんな若造に気付かされるとは……今も未熟だということかの」

「そうかもしれないな。俺も、お前も」

「諦めたら、そこで何もかも終わってしまう。可能性の芽を摘むってしまうのは、私としても本意ではありません」

ハイシエラが、セリカが、エクリアが、武器をその手に持ち、リウイに倣って武器を向ける。それを見たカーリアンを初めとしたメンフィルの精鋭も、笑みを浮かべて武器を向ける。

だが唯一、ルナークリアだけはそれができない。だが彼女を責めるのは酷だろう。

現神と凶腕の『約束』が彼女を縛る。今回の戦闘で聖女たる彼女が動けば、それだけで戦争が起きてしまう可能性があるのだ。戦争となれば、闇の現神の全てが凶腕に味方するだろう。そう考えると、とても動けなかったのだ。

「聖女殿、貴女は動かなくても良い。これは俺達の都合であり、俺としてもそちらの立場は分かっているつもりだ」

「ルナークリア、俺も理解している。だから、お前はお前に出来る事をしてくれ」

「私に、できること……。分かりました、ご武運を」

リウイとセリカに言われ、ルナークリアは思考し、この玉座の間の扉へと駆けだした。ここに連れてこられていない、メンフィル国の兵士や神殿の騎士を助けるために。

「それで良い……」

セリカはポツリと眩き、今までの会話でも一度も目を離さなかつた存在を、凶腕の動作に警戒する。だが予想に反して、凶腕は動く気配も見せない。

「随分と優しいのだな」

「我としても戦争は避けたい、ただそれだけのことだ。光側ならともかく、闇側とはそんな『約束』はしていないうえ、奴らは光側以上に我と争いたくはないだろうからな」

それは言外に、闇の現神の神官であるペテレーネですら殺す事が出来るといふ宣言だった。

闇の神は光の神よりも、凶腕と戦う事を恐れているのだから。

「さて、我と争う道を選ぶか。ならば我はこう言おう。これはブランシエが言っていたことだと思うが、その真意を教えてやろう。真の恐怖を知れ」

合計四つの掌に、魔法陣が一つずつ展開される。

あの罨の本当の恐怖は、眠らされることではない。

眠ってしまえば、凶腕との直面が待っている。それこそがあの罨の本質だったのだ。